國譯禪學大成

第二十三卷

國譯禪學大成第二十三卷凡例

一、本大成第二十三卷に收載する所の書は、大覺禪師坐禪論一卷と夢窓國師語錄三卷との二部四卷なり。

一、以上の書中、大覺禪師坐禪論は、鎌倉建長寺の開山、勅諡大覺禪師蘭溪道隆和尚の著にして、我が國、禪法流傳の最初に於ける撰述に係る。本書は一小冊子に過ぎずと雖も、參禪學道者のために、其の用心を說くこと頗る懇切にして、曹洞宗の道元禪師著の普勸坐禪儀に相對して、臨濟禪徒のために日用進修の警策として、實に貴重なる書なり。卷末には大覺禪師省行文、大慧禪師發願文及び中峯和尚の坐禪論の三篇を附して學者の參考に資せり。而して本書の舊版は殆んど存するものなく、纔かに德川時代寛永二十年秋に刊行せられたるもの一種あるのみ。而も其の書すら坊間に傳ふること極めて稀なり。故に今次、國譯するに就いては、只だ此の寛永の刊本のみに依據せり。

一、夢窓國師語錄は具には『夢窓正覺心宗普濟國師語錄』といひ、京都天龍寺開山、夢窓國師疎石禪師一代の語要を收錄したるものにして、上卷には京都南禪寺、鎌倉淨智寺同建長寺、再住南禪寺、洛の天龍寺、再住天龍寺等の住山語錄を載せ、下卷には陞座、

拈香、小佛事、佛祖贊、自贊、偈頌等を收め、附錄一卷には西山夜話、臨川家訓、偈頌の拾遺・祭文、疏、法語、發願文等を收錄せり。是れ國師在世中、門人等が編輯せる者にして、上下二卷は足利時代貞治四年、藤原德叟居士が初めて之を印行せり。德川時代に至りては、慶安三年、以上貞治本を基として附錄一卷を添へて刊行せり。其の後、元祿十三年、之に拾遺、年譜などを加へて四卷本として開板せり。今次、國譯するに際しては、慶安の板本に據れり。

一、以上の中、大覺禪師坐禪論は臨濟風の坐禪を知るには好箇の指南車たるべく、夢窓國師語錄は佛光、佛國の語錄と共に、佛光派の面目を窺ふには、是れに過ぎたるものはなく、且つ當時の史料としても亦貴重すべきものなり。

昭和五年九月

編者　黃楊道人識す

國譯禪學大成 第二十三卷

目次

國譯大覺禪師坐禪論

解題

大覺禪師坐禪論一卷は、來朝僧たる鎌倉建長寺の開山、勅諡大覺禪師蘭溪道隆和尚の撰述にして、禪師が來朝後、參禪學道者のために、坐禪の目的、その方法及び用心などに就いて丁寧に說示せられたるものなり。猶ほ卷末に、大覺禪師の省行文、大慧禪師の發願文及び中峯和尚の坐禪論等を添へたるは、後年、本書の開板者が老婆心の餘りに出でたるものにして、之を彼此相對照せば、其の得る所も亦尠からざるべし。而して古來、坐禪に關して說示したる書は頗る多し。例へば長蘆宗の坐禪儀、佛心才の坐禪儀、宏智の坐禪箴、道元の坐禪箴及び普勸坐禪儀、瑩山の坐禪用心記などの如き是なり。就中、蘭溪の坐禪論は、いはゆる臨濟風の坐禪を論じたるものにして、凡て問答體に記し、而も其の所說[illegible]、參禪者初入の參考としては甚だ便なるものなり。

傳を案ずるに、師諱は道隆、蘭溪と號す。支那西蜀涪江（今の四川省西川道綿陽縣）の人なり。俗姓は冉氏、南宋の寧宗皇帝、嘉定六年（我が順德天皇の建保元年、皇紀一八七三）を以て生る。天性邁倫、年方に十三にして成都の大慈寺に投じて得度し、諸方に遊歷して講席に侍す。後、江を下りて浙に

入り、無準師範、癡絶道冲、北礀居簡等に謁し、日々に參請すれども都て契入する所なし。乃ち錫を杖ついて陽山（湖南省にあり）に至り、無明慧性禪師に依る。一日、性の「東山の牛牕櫺を過ぎる」の話を擧するを聞いて、忽然として開悟す。辭して明州の天童山に寓す。偶々我が入宋僧の日本の敎界を語りて、敎法のみ繁榮して禪宗の未だ振はざるを嘆ずるを聞き、深く東渡の志を懷く。淳祐六年、我が國の商船、來遠亭にあるや、師往いて之を觀、遊志頗る動き、遂に意を決して、弟子義翁・龍江等の數輩を率ゐて博多に著す。時に我が後嵯峨天皇の寛元四年にして、師年三十三歲なり。

師始め博多の圓覺寺に留り、尋いで京都に上り、泉涌寺の來迎院に寓す。時に鎌倉壽福寺に大歇了心のあるを聞いて、之に赴き、錫を席下に掛く。執權北條時賴、師の來化を聞いて大いに喜び、迎へて常樂寺に居らしめ、政務の餘暇、常に其の室に入つて法要を問ふ。遂に一大伽藍を山の內の地に營構し、建長五年成る。巨福山建長興國禪寺と號し、師を請じて開山始祖となす。師乃ち常樂寺七年の居を去つて建長寺に入り、四來の大衆を接得して、大いに宗風を擧揚せり。同七年、時賴更に千人に募緣して巨鐘を鑄る、師之が銘を作る。正元元年、師年四十六、請に應じて京都の建仁寺に移り、開山明庵禪師の忌齋を行ふ。時に東福寺に聖一國師在り、都下の禪風大いに興る。後嵯峨上皇師の道譽を聞き、詔して宮中に召し、宗要を問ふ。師一偈を進めて曰く、「夙緣深厚到㆓扶桑㆒、忝主㆓精藍㆒十五霜、大國八宗今鼎盛、建㆓禪門麼㆒仰㆓賢王㆒」と。上皇、師の護宗の志の篤きを感ず。師、建仁に住する

こと三年、席を義翁に讓り、去つて鎌倉に歸り、再び建長寺に住す。時に衆中に背逆の輩あり、事によつて幕府に讒す。師これがために甲州に謫せられ、州の東光寺に居る。甲の官民競うて歸仰す。師曰く、「我れ法の爲に海を踰えて此の國に入る、而も僅かに皇畿を周旋することを得るのみ、未だ遐陬に誘導するに遑あらず。今讒に因つて此に至る、天龍豈に斯に意あるか」と。乃ち樂然として處す。居ること三年、再び歸つて建長寺に就く。而も謗議未だ已まず、復た甲州に移る。幾もなくして事判明し、時賴使を遣はして師を迎へ、鎌倉壽福寺に居らしむ。弘安元年五月、建長寺に旋り、秋七月の初、微疾を示す。同二十四日、沐浴して衣を更へ、偈を書して曰く、「用二翳睛術一三十餘年、打二飜筋斗一地轉天旋」と。筆を置いて衆に辭して寂す。年六十六。衆徒、荼毘して靈骨を建長寺の東南に收めて塔を樹て、西來庵といふ。翌弘安二年、北條時宗、朝廷に奏して大覺禪師と謚す。蓋し本朝、禪師號の嚆矢なり。法を嗣ぐもの、義翁、葦航、無及、宏辯、約翁、林叟、月峯、桑田等二十四人あり。著作は本書の外、語錄三卷、同拾遺一卷あり。皆世に行はる。

國譯大覺禪師坐禪論

夫れ(イ)坐禪は(ロ)大解脱の(ハ)法門なり。諸法是れより流出し、萬行是れより通達す。(ニ)神通智惠の德、此の內より起り、人天性命の道、此の內より開く。諸佛已に此の門より出入し、菩薩行じて卽ち此の門に入る。(ホ)二乘は猶は半途にあり、外道行ずと雖も正路に入らず。(ヘ)顯密の諸宗、此の法を行ぜずして、佛道を成ずるものあらざるなり。

問うて曰く、「坐禪は諸法の根源たりと、意志如何。」

答へて曰く、「禪は佛の內心なり、(ト)律は佛の外相なり、敎は佛の言語なり、念佛は佛の名號なり。是れ皆佛心より出づ、是の故に根本とするなり。」

問うて曰く、「禪法は無相無念にして、靈德露れず、(チ)見性もまた證據なし、何を以てか之を信ずべき。」

答へて曰く、「自心と佛心と一味、豈に靈德にあらずや。我が心我れ知らずんば、誰を喚んでか證據とせん。(リ)卽心卽佛の外、何の證據をか求めん。」

(イ)坐禪。六祖壇經に曰く「外一切の善惡の境界に於て心念起らざるを名けて坐となし、內自性を見て動ぜざるを名けて禪となす」と。

(ロ)解脱。煩惱の繫縛を解き、迷界の業苦を脱すること。

(ハ)法門。法は敎法なり、門は通入の義。佛法は衆生をして生死を脱して涅槃に趣かしむるの門なるが故に、法門と云ふ。

(ニ)神通。神變不思議にして自在無礙なる作用を云ふ。天眼通、天耳通、他心通 宿命通、神足通、漏盡通を六神通と云

問うて曰く、「能く㋦一心法を修すると也た萬行萬善を修すると 功徳爭か之を比すべき。」

答へて曰く、「頓に㋸如來禪を覺了すれば、㋾六度萬行體中に圓なり。然るときんば禪の一法、一切の諸法を備へたり。豈に道ふことを見ずや、㋻三界唯一心、心外無別法、縱ひ萬行を修すとも、心法を知らずんば、悟を得べからず。若し悟を得ずして、成佛すと道はゞ、豈に其の理あらんや。」

問うて曰く、「此の法如何が修行すべき。縱ひ修行をなすとも、開悟することを得ずんば、成佛不定なり。若し不定ならば、修行をなすと雖も、何の益かあらん。」

答へて曰く、「此の宗は甚深微妙の法門なり。若し一たび其の耳を經ることあれば、長く㋕菩提の勝因となる。古人云く、『此れを聞いて信ぜざるものも、福人天に超ゆ、學んで得ざるものも、終に佛果に到る』と云云。此の法は㋵佛心宗なり。佛心本より迷悟なし、正しく如來の妙術なり。縱ひ悟を得ずと雖も、㋟一座の坐禪は、一座の佛なり、一日の坐禪は、一日の佛なり、一生の坐禪は、一生の佛なり、未來も亦是の如し。只だ是の如く信

ふ。

㋭二乘。二乘は聲聞・緣覺なり、共に小乘敎の聖者。

㋬顯密。顯敎と密敎なり、密敎とは眞言宗及び天台宗の一部を云ひ、顯敎は其の餘の諸敎宗を云ふ。

㋣律。佛の制し給へる戒律、即ち規矩法度なり。

㋠佛性。衆生本具の佛性を見徹して、一超直に佛地に入るなり。

㋷即心即佛。僧あり、馬祖に問ふ「如何なるか是れ佛」祖曰く「即心即佛」と。

㋦一心法。一心法とは見性悟道の禪法を指す。

㋸如來禪。釋迦如來より迦葉に傳へ、以後轉々相傳したる禪法。

㋾六度。度は梵語、波羅密の譯語なり、生死の此岸を度して涅槃の彼岸に到る意にして菩

するもの是れ㋹大機根の人なり。」

問うて曰く、「若し是の如くならば、我も也た修行すべし。云何が安心し、如何が用心せんや。」

答へて曰く、「佛心一切、㋞相に着することなし。相を離るゝを以て、實相とす。行住座臥、㋡四威儀の中、坐を以て安穩の義とす。以て端坐思實相と云ふ。」

問うて曰く、「端坐思實相の義、微細に之を說け。」

答へて曰く、「端坐とは如來の㋥結跏趺坐、思實相とは、所謂坐禪なり。㋤法界定印を結んで、身心動ぜず、眼半目を開き鼻端を守つて、當に一切㋶有爲の法は、夢幻泡影の如しと見るべし、念頭に繫くること莫れ。」

問うて曰く、「足を結び印を結ぶは、如來の威儀なり、半目を開き鼻端を守るは、何事ぞや。」

答へて曰く、「眼を開いて遠く見れば、紛飛の境に侵されて、心散亂し、目を塞げば又昏沈の境に落ちて、心中明かならず。眼半目を開くときんば、念㋰忩々ならずして、身心一如にして、明察なるとき、生死煩惱、近傍す

薩の修する行を云ふ。六度は布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智惠、是れなり。萬行は、よろづの善行なり、大藏一覽に云く「開いて六度となり、散じて萬行となる」と。

㋻三界唯一心。心外無別法とは森羅萬象悉く一心に外ならざるを云ふ、此の意華嚴經に詳かなり。

㋕菩提は梵語なり、智、道、覺などと譯す。佛の正覺を云ふなり。

㋵佛心宗とは禪宗を云ふ。他の諸宗の佛の言說即ち經論を所依として立教開宗せるに異なりて、直に佛心を相承するが故に斯く云ふなり。

㋟一座の坐禪は一座の佛云々。多時の坐禪修行の功を積みて、而して後、佛となるにあらず、他念を雜へず三昧に坐禪せる當體、即ち是れ佛に外

べからず。是れを名けて、立地成佛、大機大用と云ふなり。」

問うて曰く、「是の如きの事を聞くと雖も、尚ほ以て信心及び難し。經咒を讀誦して其の功を積み、㋒持齋持戒、名號を唱へて、其の德を累ねて專ら憑あり、只だ何事をもなさずして安禪せば、何の奇特かあるべきや。」

答へて曰く、「是の如く疑ふを生死の業と云ひ、是の如く疑ふを煩惱と云ふなり。一切の法を行じて所得の心なきを、名けて深甚㋼般若となす。般若は智惠なり、此の智惠能く生死の根源を切る利劍なり。善根を修して、其の果報を願ふは、凡夫の迷なり。菩薩善根を修して、其の果報を求めず、大慈大悲に向つて善根を修するが故に、菩提の資となる。果報を願つて善根を修し、人天の小果を成ずる人、定めて生死の業なり。」

問うて曰く、「善根の功德を聚めずして、爭か萬德圓滿の佛を成ずべきや。」

答へて曰く、「善根功德を聚むれば、㋨三大阿僧祇劫を經て、當に成佛すべし。㋔因果不二の法を行じては、一生に成佛す。自心を明め自性を悟る人、㋗自己本來の佛を見るなり、今始めて成佛するにあらず。」

ならざるを云ふ。

㋹機根。根は物の本となる力、機は此の力の發動する作用なり。大機根とは即ち佛道修行の大能力あること。

㋞相に着す。相はすがた、かたちなり、着は執着なり、外相に執着すること。

㋡四威儀。行住座臥のこと、威儀とは規矩禮節に合へる動作のこと。

㋧結跏趺坐。結跏趺坐は坐禪の際の座り方なり、右足を左の股の上におき、左足を右の股の上におくを云ふ、精しくは坐禪儀等を見よ。

㋤法界定印。定印とは入定の相を標する印契なり、法界定印とは、一に佛部の定印ともいひて大日如來の住定印なり。

㋶有爲。因緣によりて生じたるもの、僞作造作を有するの意なり。

問うて曰く、「見性成佛の人は、因果によらず、善根を修すべからざるか。」

答へて曰く、「見性成佛の人、善根を修して利益をなすと雖も、果報のためにせず。衆生を敎化するが故に、因果を敎ふるなり。我が身のため所得なきが故に、功德に憑らず、一切無心なり。」

問うて曰く、「無心といふは如何。若し一向に無心ならば、誰か見性し誰か悟道し、誰か又說法敎化をなすべきや。」

答へて曰く、「無心とは、一切愚痴の心なきを言ふ、邪正を辨ずる底の心なきを言ふにはあらず。我れ衆生を思はず、亦佛を望まず、又迷を思はず、悟を求めず、人の尊敬にも從はず、名利養聞をも望まず、毒害怨讎をも厭はず、一切の善惡について、差別の念を起さゞるを、無心の道人と言ふ。故に云く、『道、無心にして人に合ひ、人、無心にして道に合ふ』と云云。」

問うて曰く、「持齋持戒、經呪を讀誦し名號を唱ふる功德、勝劣ありや無や。」

答へて曰く、「持齋は食貪の欲を離れて、來生に當に大福德を得べし。持戒は又惡心をやめ善心を生ぜんがためなり。善心あるものは、人天の中に

㋰念々は急遽なり。

㋒持齋は、午後に食事せざること、持戒は佛の制し給へる戒律を守るなり、名號を唱ふは佛の名號を唱ふること。

㋼般若は梵語、譯して智慧と云ふ、此の智慧と云ふは菩提に入る智慧にして、世間普通に用ひらるゝとは其の意味を異にせり。

㋨三大阿僧祇劫。阿僧祇は梵語譯して無數とす、劫は非常に長き時間を云ふ、算數の及ばざる長年月なり。菩薩は此の長年月間、修行を積みて後成佛するなり。

㋔因果不二の法。修證不二卽ち修因と證果と別ならざるを云ふ、前に一座の坐禪は一座の佛云々と云へるは卽ち此の義なり。

㋗自己本來の佛とは衆生が本來

生れて、位尤も高し。經呪を讀むものは、佛法を護持する故に、此の人來世に當に大智惠を得べし。名號を唱ふれば、佛に歸するが故に、當來に必ず佛土に生ず。又此の無心といふは佛心なり。佛心の功德は、言語も及ぶこと能はず、思量も到るべからず、實に不可思議なり。」

問うて曰く、「此の如きの善根は、面々に其の功德疑なし。無心の功德は尙ほ以て不審なり。」

答へて曰く、「佛の威儀を學び、佛の言語を傳へ、佛の名號を唱へて功德あらば、又是れ無心の道人にも功德あるべし。若し無心に功德なしと道はば、㋳餘行も也た功德あるべからず。一切の善根功德は、天上人間の因緣なり、無心は卽ち是れ頓證菩提の道なり。功德之を㋮言ふに足らず、實に一大事因緣なり。生死煩惱も自ら消滅して、身心一如なり、卽心成佛、何の疑かあらんや。故人の云く、『三世の諸佛を供養せんより、一無心の道人を供養せんにはしかじ云云。』實に是れ㋘唯佛與佛の境界なり、凡夫二乘の測るべき處にあらざるものなり。」

問うて曰く、「諸敎には無心と說かず、又讚歎せず。何に由つてか宗門に之を貴ぶ。」

答へて曰く、「諸敎にも其の說なきにあらず。或は言語道斷と說き、或は不可說と曰ふ、或は畢竟空、

具有する佛性なり。

㋳餘行。持齋、持戒、讀經、念佛等を指す。

㋮言ふに足らず。言ひ盡す能はずの意ならん。

㋘唯佛與佛の境とは佛と佛とのみ默契領會し得る境界にして、他の窺知し能はざるもの、世語に英雄あつて英雄を知ると云ふが如し。

或は一大事因緣、或は又諸法寂滅と說く。㋐釋迦室を掩ひ、淨名口を閉づ、是れ豈に無心を示すにあらずや。㋙影響の菩薩は、已に證智するが故に、佛之を說きたまはず、二乘は及び難きが故に、佛又之を說きたまはず。故に法華經に、『無智人中、莫說此經』と云ふ、此の意なり。諸教に八萬四千の法門ありと雖ゑ、色空の二法を出でず。一切形相ある者は、皆色なり身なり。形相に顯はれざるものは皆空なり。身は形あるが故に色と云ひ、心は形なきが故に空と云ふ。一切の經は、皆此の色空の二法を離れず、是れ不可說無心の境界なり。所以に斯の事を讃歎せず、言語も及ばざるが故に、教外別傳と云ふなり。」

問うて曰く、「則ち此の身迷とすべきや、悟とすべきや、又心は是れ何物ぞ、迷悟の根本、之を知らずんばあるべからず、又心は身內にあるか、身外にあるか、何れの處よりか起る。」

答へて曰く、「㋓四大五蘊の色身、十方に遍滿して、一切衆生を根本となす。因緣和合するときんば、身體を建立す、是れを生と名け、果報遷謝するときんば、四大分散す、是れを死と名く。色相は凡聖あり、心體は迷悟なし。然りと雖も假に迷へるを衆生と名け、悟れるを諸佛と名く。迷悟は

㋐室を掩ひ口を閉づ。佛、摩訶陀國にありて室を掩ふて說法を止め、維摩、毘耶離城に文殊と對して默然たり、共に妙法の不可說を示すなり。淨名は維摩の譯名なり。

㋙影響。諸佛菩薩が形を變へて所化の衆生の姿を現じ、如來說法の會座に連りて之を助くるを云ふ。

㋓四大。地、水、火、風なり、此の四者は一切形體あるものを構成する大作用ある故に大と云ふ。五蘊とは、色、受、想、行、識なり、蘊は積集の義、有爲の一切萬法を此の五に總攝するなり。

只だ妄心に因る、眞心には迷悟なし。(テ)生佛は本一心の迷悟に因る、本性を了るときんば、畢竟して凡聖の差別あることなし。故に首楞嚴經に曰く、『妙性圓明にして、諸の名相を離れたり、本來世界衆生あることなし云云』と。」

問うて曰く、「(ヲ)心性はもと迷無しと、若し然らば迷情は、何れの處よりか起るや。」

答へて曰く、「妄念若し起れば迷隨つて來る、迷來るが故に煩惱も又生ず。妄念若し滅すれば迷則ち去る、迷去るが故に煩惱も又滅す。(サ)煩惱は生法なり、生死の種となる、菩提は滅法なり、寂滅の樂となる。迷ふときんば諸法皆煩惱、悟るときんば諸法皆菩提なり。世人此の迷悟の根本を知らず、生死の念を壓へて起さゞるを、而も(キ)一念不生と思へり。又是れを無心となす。猶ほ是れ生死の念なり、無心にあらず寂滅にあらず、念を以て念を息むるは、生死相續なり。」

問うて曰く、「(ユ)小乘は空理に墮して無心を知らず。(ヌ)大乘の菩薩は此の無心を得べきや否や。」

(テ)生佛。生は衆生なり、佛と衆生とを云ふ。

(ヲ)心性。人間の本心本性にして心性の實體は佛心なれば、迷ひあることなし。

(サ)煩惱生法菩提滅法。煩惱は是れ迷妄の基源、菩提は佛果の現實なり、故に迷妄せば諸法幻現して、一切の有情に纏綿し、佛果を證すれば、諸法頓に蒙塵しつくして如々不動なり、法は是れ生滅の主體、生滅は法の示現なり、法の示現ある時は、是れ煩惱の中にありといふべし。菩提を證する時、一切の法を蟬脫して、虛空裡に自在なり。

(キ)一念不生。煩惱は一念生ずる時に起る、一念とは法の幻示なり、卽ち一念を生ずる時法生ず、法生じて煩惱生ず、一念不生の時、法滅す、法滅して菩提を證す、一念不生とは

答へて曰く、「菩薩は十地に至りて、猶ほ惑智の二障あり、故に無心を得ず。一に惑障といふは、第七地に至つて、求法の心あるが故に障となる、第十地に至つて、覺照の心あるが故に障となる。成等正覺の時に至つて、此の無心に合ふと云々。」

問うて曰く、「菩薩だも尙ほ十地に至るまで之を知らず、初心の學人、爭か無心に合ふべき。」

答へて曰く、「大乘は不思議なり、直に一念の根源を截つて、頓悟するもの之あり。㋯敎家に㋛三賢十聖の位を立つることは、鈍根機のためなり。利根の人は初發心の時、便ち正覺を成ずといつて、直に成佛するもの之れあり。㋽十地等覺に至つて、無心に合ふと卽今見性成佛すると、無心の理は差別あることなし。」

問うて曰く、「見性成佛といふは、如何なる道ぞ、性といふは何物ぞ、見といふはいかなる見ぞや、智を以て知るべきか、目を以て見るべきか、如何。」

答へて曰く、「經論を學んで得る智は、見聞覺知の分別の智なり。此の修

三昧の狀態にして、生なく死なく願なく、色なく、一切忘我の時なり。

㋙小乘。自己一人の成佛するものをいつて小乘といひ、聲聞緣覺の如きものは所謂小乘なり。宗派でいへば、念佛宗、有部宗の如き是なり。

㋱大乘。自他共に成佛するものをいふ、佛菩薩の如きものは所謂大乘なり。宗派でいへば法相宗、天台宗の如き是なり。

㋯敎家とは禪家に對して他の佛敎諸宗派を云ふ、禪の直ちに佛心を相承するに異なりて他は佛の言敎、卽ち諸經論を所依とす、故に之を敎家と云ふ。

㋛三賢十聖。菩薩の位次階級なり、三賢は十住、十行、十回向の三位を云ひ、十聖は此の上に位する十地を指す。

行には之を用ひず。回光返照して、本有の自性を知見するを、慧眼と名く。見性の後は見聞覺知も、也た受用すべし。」

問うて曰く、「本有の自性を知見すといふは、知見は知るべし、本有の自性といふは如何。」

答へて曰く、「一切衆生本來性あるが故に、自體を扶起す。此の性無始より以來、不生不滅、無色無形、常住不變なり、是れを本有の自性と名く。此の自性は、一切諸佛と一味平等なるが故に、佛性と名く。一切の三寶、六道の衆生も、此の性を以て根本として、一切の法を成就す。」

問うて曰く、「回光返照といふは如何。」

答へて曰く、「外の諸法を照す、自己の光明を回らし返して、内の自己を照すを云ふなり。心明かなること日月の光の如く、無量無邊にして、內外一切の國土を照す。光及ばざる處は闇し、是れを㊁黑山の鬼窟と名く。一切の鬼神、其の內に住す、鬼神はよく人を害す。心法も亦復た是の如し。心性の智光は、無量無邊にして、一切の境界を照す。光及ばざる處は闇し、是れを無明の陰界と名く。一切の煩惱、其の內に住す、煩惱よく人を害す。智心は光なり、妄念は影なり。光の物を耀すを照と云ふ。心念の境界に遷らずして、本性に向ふを回光返照と言ふ、又は遍照とも言ふ。遍照の當體は、迷悟未

㊀十地等覺。等覺は菩薩の最上位にして直に佛位に次ぐ、十地は等覺に次ぐ菩薩の位なり。

㊁黑山の鬼窟。鐵圍兩山の間日月の光を見ず、餓鬼其の中に集りて宿債を償ふと。

だ露はれざる處なり。今時の人は、妄念を以て本心と思ふ、煩惱を以て樂とす。何れの時か生死を離れんや。」

問うて曰く、「㊅坐禪は一念不生を以て省要となす。念を以て念を止むれば、即ち是れ血を以て血を洗ふに似たり、如何。」

答へて曰く、「一念不生は所謂心法の本體なり。念を止むるにもあらず、又念を止めざるにもあらず、但だ是れ一念不生なり。若し此の本體に合ひぬれば、是れを法性の如來と名く。然るときんば坐禪も亦無用なり。迷もなく悟もなし、豈に念あらんや。若し此の本體を知らずんば、不生を得べからず。縱ひ念を押へて起さずと雖も、皆是れ無明なり。譬へば石の草を壓して久しからずして又生ずるが如し。綿密に工夫すべし、容易なるべからず。」

問うて曰く、「或人云ふ、『當に一念不生の處に向ふべし』と、如何。」

答へて曰く、「一念不生とは、全く生滅去來の相なきを指示する語なり。生死は念より起る、若し念の起る處を知らずんば、生死の根本を知るべからず。衆生は十二時中、煩惱の念に使はれて、本有の性に背く。若し復た妄念の雲晴れて、心性の月彰るれば、已前憎む所の念、還つて皆智惠となる。乃ち此の念を以て說法して、衆生を敎化すべし。㊆古人の云く、『諸人は十二時に使はる、我れは十二時

㊅坐禪。坐禪の方法は半結跏、兩結跏等ありと雖も、要は心頭一念何の處にありても諸慮を一所に別することに外ならざるなり。

㊆古人の云く云々。是れ趙州和尚の語なり。

を使ひ得たり』と云々。」

問ふ、「坐禪の時は、念起るも過、止むるも又過と云ふ、如何。」

答ふ、「未だ見性せざる時は、起るも止むるも皆過なり。佛經に或は不起妄念と說き、或は亦不息滅と說けるも、皆是れ本性を知らしめんがための語なり。本性を知るときんば、修行も無用なり、迷妄の病除くときんば、療治も無益なり。然りと雖も、迷情の病起るときんば、修行の療治を用ふ。念起るは病、續がざるは藥なり。」

問うて曰く、「縱ひ念起ると雖も、念には自性なし、何の過かあらんや。」

答へて曰く、「自性なしと雖も、起れば便ち過あり。猶ほ夢中の事の如し、覺めて後其の虛妄なるを知る、豈に過なしと云はんや。過を起し夢を成すは、衆生の妄見なり。一旦佛法を聞いて信心を起すは、殊勝の事なり。然りと雖も、眞實道心なき人は、工夫疎なるに由つて、心の過を知らず。偶小々の念を押せども、大々の念を知らず、若し根源を截らずんば、縱ひ結緣の分ありと雖も、生死を出離し難し。」

問うて曰く、「一切の善惡、すべて思量することなかれ云々。善惡に付いて思量することなきを、尤も坐禪の用心となす。小々大々の念と云ふは如何。」

答へて曰く、「一切の善惡、都べて思量すること莫れと云ふは、直截の語なり。坐禪の時ばかり、之

を用ふべきにあらず。若し此の㋦田地に到らば、行住坐臥皆禪なり、必ずしも坐相を執せず。㋑祖師の云く、『行も亦禪、坐も亦禪、語默動靜、體安然』と。佛經に云く、『常に其の中に在りて、㋺經行若しくは坐臥す』と云々。小々の念といふは、目前の境界に付いて俄に起る念なり。大々の念といふは、貪欲、嗔恚、愚痴、邪見、憍慢、嫉妬、名聞、利養等の念なり。坐禪の時志薄き人は、小々の念を收むと雖も、此の如きの惡念、覺えずして心中に在り。是れを大々の念と名く。此の惡念を棄捨するを、直に根源を截ると名く。直に根源を截るときんば、煩惱も菩提となり、愚痴も智惠となる。㋩三毒も㋥三聚淨戒となり、㋭無明も大智法性となる。いかに況んや小々の念をや。佛語に『若し能く物を轉せば、即ち如來と同じ』といふは此の意なり。但だ能く物を轉ずべし、物に轉せらるゝこと莫れ。」

問うて曰く、「若し能く物を轉ずれば、即ち如來と同じといふは、物とは何物ぞ、轉するとは何事ぞ。」

答へて曰く、「物とは萬物なり、轉ずるとは體脱なり、物を轉ずるとは一切の境界に就いて心を遷さず、返つて本性に向くるなり。境、心を礙へざれば、天魔鬼神、煩惱生死、便を得べからず、是れを物を轉ずと云ふ。物に於て心を遷さず用心するなり。㋬佛見法見、尚ほ以て截るべし、いかに

㋦田地は境界なり。

㋑永嘉眞覺大師なり、此の句は證道歌にあり。

㋺經行。坐禪の時睡眠を防ぐために一定の場所をめぐりあるくこと。

㋩三毒。貪慾、瞋恚、愚痴の三煩惱のこと。

㋥三聚淨戒。攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒なり、大乘一切の戒法を此の三に總攝す。

㋭無明。一切の煩惱のこと。

㋬佛見は、佛に執着すること、

況んや妄念をや。截る心も念の心に似たりと雖も、是れは正念なり。正念をば惠念と名く、是れは正見に入る智惠なり。」

問うて曰く、「煩惱も菩提も、一心より起ること分明なり。何れの處よりか起り始まるや。」

答へて曰く、「色を見、聲を聞き、香を嗅ぎ、味を嘗め、觸を覺え、法を知るは、(ト)六根の德用なり。此の境界に附いて、善惡を分ち、邪正を辨ずる底は智惠なり。此に於て人我を立し、愛憎を起すは皆妄見なり。此の妄見に依つて、着相をなすを迷と名く。此の迷より色受想行識の五蘊を起す、是れを煩惱と名く。煩惱を以て衆生の身體を建立するが故に、殺生、偸盜、邪婬、妄語等の惡行を好んで、終に(チ)三惡道に墮す。皆是れ妄念より起る。此の妄念纔かに起る時、直に妄念を轉じて本性に向へば、即ち無心となる。已に無心に安住するを得れば、五蘊の身、即ち(リ)五分法身の如來となる。是れを(ヌ)應無所住而生其心と謂ふ。是の如く用心すれば、修行の大用なり。」

問うて曰く、「久しく坐禪の功を積んで、工夫純熟する人は、煩惱邪迷の心あるべからず。始めて修行をする人、爭か煩惱を盡すべきや。」

法見は法に執着すること。

(ト)六根。眼、耳、鼻、舌、身、意なり。

(チ)三惡道。地獄、餓鬼、畜生の三道なり、此の三道は迷界の六道中に於ても特に苦患多き故に惡道と稱せらる。

(リ)五分法身とは戒身、定身、惠身、解脫身、解脫知見身を云ふ。

(ヌ)應無所住而生其心。金剛經莊嚴淨土分第十に出づ、六祖大師未だ出家せざる時、市に於て一僧の此の句を誦するを聞きて省悟すといふ。

答へて曰く、「煩惱をも厭はず、只だ心を淨むべし。古人の云く、『學道は須らく是れ㋸鐵漢なるべし、手を心頭に著けて便ち判ず、直に無上菩提に趣んで、一切の是非管すること莫れ』と。手を心頭に著けて心の邪正を批判し、心の誤りを知るべきものを智者と名く。若し㋾智惠ありて迷無くんば、譬へば昔より日月の光を入れざる闇穴に、燈を入るゝが如し。而も昔の闇、外邊に去らざれども、俄に明となる。無明煩惱の闇、智惠の光を得れば、去るを待たずして而も去るなり。夜は虛空闇し、然りと雖も、日光現ずるときは、其の虛空、晝となりて明かなり。心法も亦復た是の如し。迷は暗なり、悟は明なり。智惠の光照すときんば、煩惱の暗忽ち明となる。菩提別に二法あることなし。」

問うて曰く、「煩惱の闇を照すは、智惠の力による。智惠無うして菩提あるべからず。然るときんば爭か此の智惠を得べき。」

答ふ、「自己の智光は、自ら明々たり。然りと雖も妄想に覆はれて之れを失す。是の故に迷を起す。譬へば人の夢を見るとき、何事も眞實の相をなす、覺めて後、一事もなきが如し。夢の如くなる妄想、覺めて後之れを見れば、もとより之れなし。衆生は迷へる故に、妄を以て實となす。」

問ふ、「悟とは日比知らざることも俄に之を知り、過去未來の事も知るべきや否や。」

答ふ、「妄見皆盡くれば、大夢俄に覺めて佛性を知見す。是れを大悟大徹と名く。是れ等は思量分別

㋸鐵漢。意志の強剛なるを云ふ、漢は人に同じ。
㋾智惠。般若の正智惠にして、一切の迷惑愚痴を離れたる佛智見をいふなり。

の測らざる處なり。過去未來の事を識るは、神通力なり。其れ修行勤力に因る、大悟と謂ふべきにあらず。天魔、鬼神、外道、仙人等も、皆是れ神通あり。昔曾て難行苦行を修せし德なり。此の德ありと雖も、邪見を離れざれば、佛道に入らず。」

問ふ、「悟道得法の人、神通を具せずんば、則ち何の德用かありや。」

答ふ、「此の身は過去の愚迷を以て建立する故に、縱ひ見性成佛の人と雖も、神通露はれず。然りと雖も、悟るときんば㋻六塵を透脫し、生死を截斷す。故に自ら是れ神通妙用を具足す。是れは外道天魔の㋕有漏の神通力には非ざるものなり。豁然大悟の人、三大阿僧祇劫を歷ずして、頓に佛道を成ず。何ぞ別に神通妙用を論ぜんや。」

問ふ、「見性成佛と卽心卽佛と、差別ありや也た否や。」

答ふ、「卽心卽佛とは直に心外に佛なきを示す語なり。若し直に此の旨を承當せば、伶俐の人なり。或は亦㋵非心非佛とも之れを示す。見性成佛とは、自性を知見し、衆生の命根を截斷して、妙性圓明なることを了知す。然るときんば生死もなく煩惱もなし。故を以て假に名けて成佛となす。佛とは覺なり、從來迷はざることを覺了す。同異なしと雖も、入門差あるに似たり。是の故に兩般の語をなす。」

㋻六塵。色、聲、香、味、觸、法を云ふ、此の六は六根の對境となりて人の心神を汚し、眞性を覆ひ昏ますが故に塵と云ふ。

㋕有漏。煩惱のこと、漏は漏泄の義。

㋵非心非佛。僧あり、馬祖に問ふ、「如何なるか是れ佛、」祖曰く「卽心卽佛、」又他時一僧あり、同じく問ふ、祖答へて曰く「非心非佛」と。

問ふ、「性は常住不變にして、諸佛と衆生と一味平等なり。然りと雖も、迷へる衆生は生死の苦あり。然るときんば、一味平等と言ふべからざるものか。」

答ふ、「一味平等といふは、智惠の照す所なり、愚痴の所見にはあらず。祖師の言句は、㋑門を扣く瓦子なり。未だ門に入らざるときんば、見性成佛の語至極なり。此の門に入得すれば、一切の相を離る。故に成佛も又無得なり。」

問ふ、「顯密の諸宗、皆教理智斷行位因果の八法あり。二乘聲聞は㋺四禪八定を修して、火水風の三災の難を離れ、色受想行識を空じて、㋩無餘涅槃に入る。菩薩は三聚の淨戒を持して、慈悲萬行を修し、三賢十聖の位を經て、內外の煩惱を斷ず。若し煩惱なき處佛果ならば、何に依つてか三世の諸佛は、眞如法界を出で丶生死の欲界に來ることありや。」

答ふ、「諸佛菩薩は衆生を利益するを以て能作となす。若し衆生を利益せずんば、佛菩薩にあらず。三乘は衆生を利益せざるが故に、大乘には是れを解脫の深坑に入ると謂ふ。三賢十聖の菩薩は、修行增進して、㋥重玄門に入り、衆生を度せんがために、寂光の樂土を出で丶、五濁の惡世に來つて、菩提樹となる。譬へば高原陸地には蓮華を生ぜず、

㋑門を扣く瓦子とは方便を云ふ、門を開くためには瓦子の要あり、門開かるれば瓦子には用なきなり。

㋺四禪定とは明得定、明增定、印順定、無間定をいふなり。八定とは初禪天定、二禪天定、三禪天定、四禪天定、以上色界の四定、空處天定、識處天定、無處有處天定、非想非々想處天定、以上無色界の四定是れなり。

㋩無餘涅槃。煩惱障を斷じて得たる涅槃なり、小乘の聖者灰身滅智して此の涅槃に入る。

㋥重玄門。事々物々無礙自在なる法門。

卑濕淤泥に蓮華を生ずるが如し。又農人の稼穡を事とするが如き、淨潔乾爆の地には、苗稼を植うること能はず、卑濕淤泥に不淨の糞を置きて、米穀の種子を植ゑ、因縁時到つて、陽氣動き甘雨潤し、萌芽長じ、根莖枝葉繁榮茂盛し、稻粱穀米等成熟して、農業事終つて昇平の歌を唱ふ。諸佛の出世も亦復た是の如し。碧落青霄には佛法を建立すること能はず、五濁惡世の穢土に麁弊垢膩の衣を着けて、惡業煩惱の衆生を誘引し、應機說法して正因の種子を下す。因縁時到つて、惠日照し、慈風扇ぎ、法雨瀉ぎ、甘露降つて、道芽萠し、枝葉根莖鬱茂盛長して、菩提樹を生じ、㋤等覺の華を開き、妙覺の果を結び、化導圓滿して、涅槃常樂の妙法を唱ふ。道人も亦一株の木の血身の如し。土に六塵の糞を置き、生靈の種子を下し、色身の苗を植ゑ、性智の芽を萠し、心念の根を生じ、意想の莖を長じ、識神の枝を抽んで、情欲の葉を茂らし、樂の根株を成じ、知見の花を開き、覺悟の果を結び、道業事終へて、無心の樂を唱ふ。凡夫も亦一株の木あり。愚迷薄地にして、貪愛の糞を置き、無明の種子を下し、五蘊の苗を植ゑ、㊉業識の芽を萠し、執着の根を生じ、人我の莖を長じ、諂曲の枝を抽んで、嫉妬の葉を茂らし、煩惱の樹を成じ、妖艶の花を笑き、三毒の果を結び、名利事終へて、㋶五欲の樂を唱ふ。且く道へ、此の三株の木、還つて勝劣ありやまた無や。若

㋤等覺の華。等覺は菩薩の最上位にして直に佛位に次ぐ因地の極位なり、故に華と稱す。妙覺の果、妙覺とは自覺、覺他、覺行圓滿の佛にして、佛道修行の最後位なれば之を果と稱す。

㊉業識。第八識卽ち阿賴耶識のこと、業は動作のこと、此の識無明煩惱に動かされてよく萬有を造作するが故に、斯く名づけらる。

㋶五慾は財慾、色慾、飲食慾、

し人有つて、隻手に此の三株の木を把つて、根に和して一時に拔出して、㋰無陰陽の地に栽培して、直に㋒無影樹となして、まさに是れ大力量の人なるべし。天地と我れと同根、萬物と我れと一體なり。且く道へ、我れは是れ何物ぞ。若し喚んで佛となさば、天地遙かに隔たる。」

名慾、睡眠慾なり。

㋰無陰陽の地。絶對平等の境界なり。

㋒無影樹。菩提樹なり。

國譯大覺禪師坐禪論 終

國譯大覺禪師省行文

夫れ(イ)幻緣和合して、幻に因つて此の色身を成ず。事業修持して、事に從つて其の正理を顯す。理の顯はるゝこと事として達せずといふことなし。身の成ずること幻に由つて立す。是を以て先聖此に於て洞明す。機に應じて滯なし、(ロ)聽容の上に超え、品類の先に出づ。惟れ(ハ)悳天を動ず、遠として屆らずといふことなし。汝等此の門に入り來つて、當に自ら觀察すべし。善行積まずんば、令名豈に馳せんや。一法頓に明むれば、萬緣倶に朗なり。閒鬚髮を剃除して、佛袈裟を掛くるあり。形は僧形に似たりと雖も、志未だ俗志を捨てず、東西に奔走す、眞僞奚んぞ分たん。只だ(ニ)塵緣に隨順するを知つて、翻つて(ホ)懞憧たることをなす。虛しく信施を消して、徒に(ヘ)空門に厠はる。忽然として白首到來すれば、返つて(ト)後生に笑を取らる。憶ふ、昔上古の出家の其の形骸を勞し、其の體膚を饑す、命を盡し身を畢ふるまで、爲に斯の事を究む。所以に(チ)一日作さゞれば一日食せず。豈に今の坐なが

(イ)幻緣。色身は四大假和合の因緣によりて成立す、四大分離すれば色身破壞して、又空に歸す、恰も夢幻空華の如し、故に幻緣と云ふ。
(ロ)聽容。聽明容智の略、假令聽容なるも、是れ一の人智に過ぎざるなり。
(ハ)悳は德と同字。
(ニ)塵緣は俗事なり。
(ホ)懞憧は無知にして且つ意の定まらざるなり。
(ヘ)空門は出家のこと。
(ト)後生は後進若輩なり。
(チ)一日作さざれば一日食せず。百丈禪師の語なり。

ら愧なきに比せんや。㋷檀那㋦四事以て汝を供養す、焉にか功ある。伊が㋸救拔を望む。今生玄妙に通ぜず、來世愈牽纏せられん。宗親を負累して同じく地獄に墮せん。此の如きものは、滴水も消し難し。いかに況んや、大厦高樓をや、坐臥何ぞ穩ならん。已に一德なし、罪萬端あり。樂土未だ成らざるに、㋾阿鼻先づなる。謹んで㋻叢林の高士、學法の上人に勸む、各胸襟を攄り、細に得失を觀ぜよ。庸輩に隨つて、恣に無知を逞しうすることなかれ。猛く修行を勵み、悟を以て則となし、常に良友に咨つて、以て見聞を益し、廣く琢磨を得ば、道業成じ易し。果してよく此の如くならば、日に萬兩の黃金を消し、銀屋瓊居も分外とせず。若し是の如くならずんば、濫りに僧倫に膺り、佛法の正因、誰に憑つてか紹續せん。親を訪ひ病を問ふも、道に於て極めて妨ぐ。但だ㋕洞山を學んで、還らずんば益あらん。豈に見ずや、青蘿喬松の勢に倚つて、直に千尋に聳え、㋵紅尾㋟禹門の波に競つて、爭つて三級を超ゆ。無情の物だも猶は自ら高きを攀づ、水を弄ずる魚も㋹霄漢に騰らんと欲す。況んや人として信に篤き、豈に徹する時なからんや。但だ此の心を堅うせよ、何ぞ達せざるを患へん。

㋷檀那は梵語 布施と譯す、轉じて能く布施を行ずるものを指すに至る、今は布施者の意なり。

㋦四事。供養に用ふる四種のもの、飲食、衣服、臥具、湯藥なり。

㋸救拔。苦患を救ひ拔くなり。

㋾阿鼻は梵語、譯して無間と云ふ、八熱地獄の第八にして極苦の處たり、苦に間斷なき故に此の名あり。

㋻叢林は僧の住處を云ふ、多くは修禪の道場を指す。

㋕洞山を學ぶ。洞山出家してより故鄕に歸らず、曰く、「王祥、孟宗が孝に似んよりは、目蓮の大孝を學ばん」と。

㋵紅尾は鯉魚のこと。

㋟禹門。瀧の名、三段に分る、之を超ゆれば魚化して龍となると

㋹霄漢。大空なり。

道は外より得るにあらず、己に返つて求めよ。精微を默審して、淵奥を窮通すべし。光陰に限あり、人命存し難し。息を轉ずれば鶴髮頭に滿つ、(の)蹉跎として空しく過すべからず。心源若し濁らば、前路も復た昏からん。病忽ちに相侵せば、能く敵すべきなし。彼の時思ひ付つて悔ゆるとも已に遲々たらん。恨むらくは早く修せざらんことを。江に臨んで船なし、佛法衰替し、人我兼ね行ずる、今時より盛なるはなし。各自に努力よや。愚、海を踰え漠を越えて、緣此の朝に合ふ。古を擧げ今を明め、寧ろ慚愧なかんや。但だ諸の後學を勸めて、同じく此の心を究め、以て佛祖慈蔭の恩を報じ、共に檀那供養の德に酬ゆ、語、華飾なし、勉むるに直辭を以てす。此の如くにして行せば、自他利益せん。

(の)蹉跎。説文に曰く、「時を失する也」と。

國譯大慧禪師發願文

唯だ願はくは、某甲道心堅固にして、長遠不退、四體輕安、身心勇猛、衆病悉く除き、㋑昏散速かに消し、無難無災、無魔無障、邪路に向はず、直に正道に入つて、煩惱消滅し、智惠增長し、頓に大事を悟つて、佛の惠命を續ぎ、諸の衆生を度して、佛祖の恩を報せんことを。次に冀はくは、某甲、臨命終の時、少病少惱、七日以前に、預め死の至らんことを知つて、安住正念、末後自在に、此の身を捨て了つて、速に佛土に生じ、面り諸佛に見え、㋺正覺の記を受け、㋩法界に分身して、遍く衆生を㋥度せんことを。

十方三世一切の諸佛、諸尊菩薩、摩訶薩、摩訶般若波羅密。

㋑昏散。昏は昏沈にして心のくらく沈むこと、散は散亂にして心の靜まらざること。
㋺正覺の記。佛の懸記即ち佛より成佛の豫言を受くること。
㋩法界に分身す。神通を得て各所に分身說法するなり。
㋥度す。濟度すること。

國譯中峰和尚坐禪論

坐禪は別に用心の處なし。只だ十二時中、一切の㋑塵勞妄想の境を㋺放下して、常に自心をして虛空の如くならしめよ。毫髮許りも他念なからしむ。若し自心清淨を得れば、還つて不思善不思惡。正當與麼の時、如何なるか是れ我が父母未生以前本來の面目と、是の如く看よ。若し工夫㋩一片にならば、自然に悟入あることを得ん。何をか坐禪と名く、外一切善惡の境界に於て、心念起らざるを名けて坐となし、內自性の動ぜざるを見るを名けて禪となす。如今學道人、此の心體を悟らずして、便ち心上に於て心を生じ、外に向つて佛を求め、㋥相に着して修行す。皆是れ惡法にして、菩薩の道にあらず。

㋑塵勞。心を勞する塵の意、煩惱のこと。妄想はまことならぬ分別心、みだりなるおもひ。
㋺放下。打遣ること、打捨てゝ顧みざること。
㋩一片は他念を雜へず三昧に入ること。
㋥相に着す。外相に執着すること。

大覺禪師坐禪論

夫坐禪大解脫法門也、諸法從是流出、萬行自是通達、神通智慧德從此內起、人天性命道自此內開、諸佛已從此門出入、菩薩行卽入此門、二乘猶在半途、外道雖行不入正路、凡顯密諸宗、不行此法、不有成佛道者也、問曰、坐禪爲諸法根源、意旨如何、答曰、禪佛內心也、律佛外相也、敎佛言語也、念佛佛名號也、是皆從佛心出、是故爲根本也、問曰、禪法無相無念、靈德不露、見性也無證據、以何可信之、答曰、自心與佛心一味、豈非靈德、我心我不知、喚誰爲證據、卽心卽佛外、求何證據、問曰、能修一心法也修萬行萬善、功德爭可比之、答曰、頓覺了如來禪、六度萬行體中圓、然則禪一法、備一切諸法、豈不見道、三界唯一心、心外無別法、縱修萬行、不知心法、不可得悟、若道不得悟而成佛、豈有其理乎、問曰、此法何可修行、縱爲修行、不得開悟、成佛不定、若不定雖作修行何有益、答曰、此宗甚深微妙法門也、若有一經其耳、長成菩提勝因、古人云、此聞不信者、福超人天、學不得者、終到佛果云云、此法佛心宗也、佛心自本無迷悟、正如來妙術也、縱雖不得悟、一座坐禪一座佛也、一日坐禪一日佛也、一生坐禪一生佛也、未來亦如是、只如是信者、是大機根人也、問曰、若如是、我也可修行、云何安心、云何用心哉、答曰、佛心一切無着相、以離相爲實相、行住坐臥、四威儀中、以坐爲安穩義、以端坐思實相云也、問曰、端坐思實相義、微細說之、答曰、端坐如來結跏趺坐、思實相所謂坐禪也、結法界定印、身心不動、

眼開半目守鼻端、當見一切有爲法、如夢幻泡影、莫繫念頭、問曰、結足結印如來威儀、開半目守鼻端何事、答曰、開眼遠見、被侵紛飛境心散亂、塞目又落昏沈境、心中不明也、眼開半目則、念不忩忩、身心一如、明察時生死煩惱不可近傍、是名立地成佛、大機大用云也、問曰、雖聞如是事、尙以信心難及、讀誦經呪積其功、持齋持戒唱名號、累其德專有憑、只不爲何事安禪、可有何奇特乎、答曰、如是疑云生死業、如是疑云煩惱也、行一切法無所得心、名爲甚深般若、般若智慧也、此智慧能切生死根源利劍也、修善根願其果報、凡夫迷也、菩薩修善根不求其果報、向大慈大悲修善根故、成菩提資也、願果報修善根、成人天小果人、定生死業也、問曰、不聚善根功德、爭可成萬德圓滿佛耶、答曰、聚善根功德、歷三大阿僧祇劫當成佛也、行因果不二法、一生成佛也、明自心悟自性人、見自己本來佛也、非今始成佛、問曰、見性成佛人、不憑因果、不可修善根乎、答曰、見性成佛人、雖修善根爲利益、不爲果報、敎化衆生故、敎因果也、爲我身無所得故、不憑功德、一切無心也、問曰、無心者如何、若一向無心、誰見性誰悟道、誰又可爲說法敎化乎、答曰、無心者言無一切愚痴心也、非言無辨邪正底心也、我不思衆生亦不望佛、又不思迷不求悟、不從人尊敬、不望名利養聞、不厭毒害怨讎、付一切善惡不起差別念、言無心道人也、故云、道無心合人、人無心合道、云云、問曰、持齋持戒、讀誦經呪、唱名號功德、有勝劣無、答曰、持齋離食貪欲、來生當得大福德、持戒又爲休惡心生善心也、有善心者、生人天中、位尤高也、讀經呪者、護持佛法故、此人來世當得大智慧也、唱名號歸佛故、當來必生佛土也、又此無心佛心也、佛心功德言語不能及、思量不可到、實不可思議也、問曰、如此善根、面面其功德

無疑、無心功德倘以不審、答曰、舉佛威儀、傳佛言語、唱佛名號有功德、又是無心道人、可有功德、若道無心無功德、餘行也不可有功德也、一切善根功德、天上人間因緣也、無心卽是頓證菩提道也、功德不足言之、實一大事因緣、生死煩惱自消滅、身心一如也、卽心成佛有何疑乎、故人云、供養三世諸佛、不如供養一無心道人云云、實是唯佛與佛境界也、凡夫二乘非可測處者也、問曰、諸教不說無心、亦不讚嘆、由何宗門貴之乎、答曰、諸教不無其說、或說言語道斷、或曰不可說、或畢竟空、或一大事因緣、或又說諸法寂滅、釋迦掩室、淨名閉口、是豈非示無心乎、影嚮菩薩、已證智故、佛不說之、二乘難及故、佛又不說之、故法華經云無智人中、莫說此經、此意也、諸教雖有八萬四千法門、不出色空二法也、一切有形相者、皆色也身也、不顯形相者、皆空也、身有形故云色、心無形故云空也、一切經皆不離此色空二法、是不可說無心境界、所以不讚嘆斯事、言語不及故、云教外別傳也、問曰、則此身可爲迷乎、又可爲悟乎、又心是何物、迷悟根本、不可不知之、又心在身內耶、在心外耶、從何處起、答曰、四大五蘊色身遍滿十方、一切衆生爲根本、因緣和合則建立身體、是名生、果報遷謝則四大分散、是名死、色相有凡聖、心體無迷悟、雖然假迷名衆生、悟名諸佛、迷悟只因妄心、眞心無迷悟、生佛本因一心迷悟、了本性則畢竟無有凡聖差別、故首楞嚴經曰、妙性圓明離諸名相、無有本來世界衆生云云、問曰、心性本無迷、若然迷情從何處起、答曰、妄念若起、迷隨來、迷來故煩惱又生、妄念若滅迷則去、迷去故煩惱又滅、煩惱生法也、爲生死種、菩提滅法也、爲寂滅樂、迷則諸法皆煩惱、悟則諸法皆菩提也、世人不知此迷悟根本、壓生死念不起、而思一念不生、又是爲無心、猶是生死念也、

非無心非寂滅、以念息念、生死相續也、問曰、小乘墮空理、不知無心、大乘菩薩可得此無心否、答曰、菩薩至十地、猶有惑智二障、故不得無心、一惑障、至第七地、有求法心、故爲障、至第十地、有覺照心、故爲障、至成等正覺時、合此無心、云云、問曰、菩薩尙至十地不知之、初心學人爭可合無心、答曰、大乘不思議也、直截一念根源、頓悟者有之也、敎家立三賢十聖位、爲鈍根機也、利根人初發心時、便成正覺、直成佛者有之、至十地等覺、合無心與卽今見性成佛、無心之理無有差別、問曰、見性成佛者如何道、性者何物、見者何見、以智可知歟、以目可見歟、如何、答曰、學經論得智、見聞覺知分別智也、此修行不用之、回光返照知見本有自性、名惠眼也、見性之後、見聞覺知也可受用、問曰、知見本有自性者、知見可知、本有自性者如何、答曰、一切衆生本來有性故、扶起自體、此性從無始以來、不生不滅、無色無形、常住不變、是名本有自性、此自性與一切諸佛、一味平等故名佛性、一切三寶、六道衆生、以此性爲根本、成就一切法、問曰、回光返照者如何、答曰、照外諸法、自己光明回返、照內自己云也、心明如日月光、無量無邊、照內外一切國土、光不及處闇、是名黑山鬼窟、一切鬼神住其內、鬼神能害人、心法亦復如是、心性智光、無量無邊、照一切境界、光不及處闇、是名無明陰界、一切煩惱住其內、煩惱能害人、智心光也、妄念影也、光耀物照云、心念不遷境界、向本性言回光返照、又言遍照也、遍照當體、迷悟未露處也、今時人以妄念思本心、以煩惱爲樂、何時離生死耶、問曰、坐禪以一念不生爲省要、以念止念、卽是似以血洗血、如何、答曰、一念不生、所謂心法本體也、非止念、又非不止念、但是一念不生也、若合此本體、是名法性如來、然則坐禪亦無用也、無迷無悟豈有念乎、若不知此本

體、不可得不生、縱雖押念不起、皆是無明也、譬如石壓草不久又生、綿密可工夫、不可容易、問曰、或人云、當向一念不生處、如何、答曰、一念不生者、全無生滅去來相指示語也、生死從念起、若不知念起處、不可知生死根本、衆生十二時中、被使煩惱念、背本有性、若復妄念雲晴、心性月彰、已前所憎念、還皆成智惠、乃以此念說法、可教化衆生、古人云、諸人被使十二時、我使得十二時、云云、問、坐禪時念起過、止又過云、如何、答、未見性時、起止皆過也、佛經或說不起妄念、或說亦不忘滅治法、爲令知本性語也、知本性則修行無用也、迷妄病除則療治無益也、雖然迷情病起則用修行療治、念起病、不續藥也、問曰、縱雖念起、念無自性、有何過乎、答曰、雖無自性、起便有過、猶如夢中事、覺後知其虛妄、豈云無過乎、起過成夢衆生妄見也、一旦聞佛法起信心、殊勝事也、雖然無眞實道心人、由[illegible]、夫疎不知心過、偶押小小念不知大大念、若不截根源、縱有結緣分、難出離生死、問曰、一切善惡、都莫思量、云云、付善惡無思量、尤爲坐禪用心、小小大大念者云何、答曰、一切善惡、都莫思量云、直截語也、坐禪時計、非可用之、若到此田地、行住坐臥皆禪也、必不執坐相、祖師云、行亦禪、坐亦禪、語默動靜、體安然、佛經云、常在於其中、經行若坐臥、云云、小小念者、付目前境界俄起念也、大大念者、貪欲・嗔恚・愚痴・邪見・憍慢・嫉妬・名聞・利養等念也、坐禪時志薄人、雖收小小念、如此惡念不覺在心中、是名大大念、棄捨此惡念、直名截根源、直截根源則煩惱成菩提、愚痴成智慧、三毒成三聚淨戒、無明成大智法性、何況小小念乎、佛語若能轉物、卽同如來者此意也、但能可轉物、莫被轉於物、問曰、若能轉物、卽同如來者、物者何物、轉者何事、答曰、物者萬物也、轉者體脫也、轉物者就一切境界不遷心、返向

本性、境不礙心、天魔鬼神、煩惱生死、不可得便、是云轉物、於物不遷心用心也、佛見法見尙以可截、何況妄念、截心雖似念心是正念也、正念名慧念、是入正見智慧也、問曰、煩惱菩提從一心起分明也、自何處起始耶、答曰、見色聞聲齅香嘗味覺觸知法、六根德用也、附此境界、分善惡辨邪正底智慧也、於此立人我、起愛憎、皆妄見也、依此妄見成着相名迷、從此迷起色受想行識五蘊、是名煩惱、以煩惱建立衆生身體故、好殺生・偸盜・邪婬・妄語等惡行、終墮三惡道、皆是從妄念起、此妄念纔起時、直轉妄念向本性、卽成無心、已得安住無心、五蘊身卽成五分法身如來、是謂應無所住而生其心、如是用心、修行大用也、問曰、久積坐禪功、工夫純熟人、不可有煩惱邪迷之心、始爲修行人、爭可盡煩惱乎、答曰、不厭煩惱、只可淨心、古人云、學道須是鐵漢、着手心頭便判、直趣無上菩提、一切是非莫管、著手心頭者、批判心邪正、可知心誤名智者、若有智慧無迷、譬如自昔不入日月光闇穴入燈、而昔闇不去外邊、俄成明也、無明煩惱闇、得智慧光、不待去而去也、夜虛空闇、雖然日光現則其虛空成晝明也、心法亦復如是、迷闇也、悟明也、智慧光照則煩惱暗忽成明、菩提別無有二法、問曰、照煩惱闇依智慧力、無智慧不可有菩提、然則爭可得此智慧、答、自己智光自明明、雖然被覆妄想失之、是故起迷、譬如人見夢時何事爲眞實相、覺後無一事、如夢妄想覺後見之、從本無之、衆生迷故、以妄爲實、問、悟者日比不知事俄知之、可知過去未來事否、答、妄見皆盡、大夢俄覺、知見佛性、是名大悟大徹、是等思量分別不測處也、識過去未來事神通力、其因修行動力、非可謂大悟也、天魔鬼神、外道仙人等、皆是有神通、昔曾修難行苦行德也、雖有此德不離邪見、不入佛道、問、悟道得法人、不具神

通、則有何德用乎、答、此身以過去愚迷建立故、縱雖見性成佛人、神通不露、雖然悟則、透脫六塵、截斷生死、故自是具足神通妙用、是非外道天魔有漏通力者也、豁然大悟人、不歷三大阿僧祇劫、頓成佛道、何別論神通妙用乎、問、見性成佛與卽心卽佛、有差別也否、答、卽心卽佛者、直示心外無佛語也、若直承當此旨、伶俐人也、或亦非心非佛示之、見性成佛者、知見自性、截斷衆生命根、了知妙性圓明、然則無生死無煩惱、以故假名爲成佛、佛覺也、覺了從來不迷、雖無同異、似入門有差也、是故成兩般之語也、問、性常住不變、諸佛與衆生、一味平等也、雖然迷衆生有生死苦、然則不可言一味平等者乎、答、一味平等者、智慧所照也、非愚痴所見、祖師言句扣門瓦子也、未入門時、見性成佛語至極也、入得此門、離一切相、故成佛又無得也、問、顯密諸宗、皆有敎理智斷行位因果八法、二乘聲聞、修四禪八定、離火水風三災難、空色受想行識、入無餘涅槃、菩薩持三聚淨戒、修慈悲萬行、經三賢十聖位、斷內外煩惱、若無煩惱處、佛界依何有、三世諸佛、出眞如法界、來生死欲界乎、答、諸佛菩薩、以利益衆生爲能作、若不利益衆生、非佛菩薩、三乘不利益衆生故、大乘是謂入解脫深坑、三賢十聖菩薩、修行增進入重玄門、爲度衆生、出寂光樂土、來五濁惡世、成菩提樹、譬如高原陸地、不生蓮華、卑濕淤泥、生蓮華、又如農人事稼穡、淨潔乾爆地、不能植苗稼、卑濕淤泥置不淨糞、植米穀種子、因緣時到陽氣動、甘雨潤、萠芽長、根莖枝葉繁榮茂盛、稻粱穀米等成熟、農業事終唱昇平歌、諸佛出世亦復如是、碧落青霄不能建立佛法、五濁惡世穢土、着麁弊垢膩衣、誘引惡業煩惱衆生、應機說法下正因種子、因緣時到、慧日照、慈風扇法雨瀉、甘露降道芽萠、枝葉根莖鬱茂盛長、生菩提樹、開等

覺華、結妙覺果、化導成滿、唱涅槃常樂妙法、道人亦如一株木血身、土置六塵糞、下生靈種子、植色身苗、萠性智芽、生心念根、長意想莖、抽識神枝、茂情欲葉、成樂根株、開知見花、結覺悟果、道業事終唱無心樂、凡夫亦有一株木、愚迷薄地、置貪愛糞、下無明種子、植五蘊苗、萠業識芽、生執着根、長人我莖、抽諂曲枝、茂嫉妬葉、成煩惱樹、笑妖艶花、結三毒果、名利事終唱五欲樂、且道、斯三株木、還有勝劣也無、若有人、隻手把此三株木、和根一時拔出、栽培無陰陽地、直作無影樹、當是大力量人、天地與我同根、萬物與我一體也、且道、我是何物、若喚成佛、天地遙隔矣。

大覺禪師坐禪論 終

大覺禪師省行文

夫幻緣和合、因幻而成、此色身、事業修持、從事而顯、其正理、理之顯也無事不達、身之成也由幻而立、是以先聖於此洞明、應機無滯、超于聰睿之上、出于品類之先、惟惪動天、無遠弗届、汝等入此門來、當自觀察、善行不積、令名豈馳、一法頓明、萬緣俱朗、間有剃除鬚髮、掛佛袈裟、形雖似僧形、志未捨俗志、東西奔走、眞僞奚分、只知隨順塵緣、翻成懞憧、虛消信施、徒厠空門、忽然白首到來、返被後生取笑、憶昔上古出家之勞、其形骸、餓其體膚、盡命畢身、爲究斯事、所以一日不作一日不食、豈比今坐無愧、檀那四事以供養汝、意在於何、望伊救拔、今生不通玄妙、來世愈見牽纏、負累宗親、同墮地獄、如此之者、滴水難消、何況大厦高堂、坐臥何穩、已無一德、罪有萬端、樂土未成、阿鼻先就、謹勸叢林高士學法上人、各揣胸襟、細觀得失、莫隨庸輩、恣逞無知、猛勵修行、以悟爲則、常咨良友、以益見聞、廣得琢磨、易成道業、果能如是、日消萬兩黃金、銀屋瓊居不爲分外、若不如是、濫膺僧倫、佛法正因憑誰紹續、訪親問病、於道極妨、但學洞山不還有益、豈不見、青蘿倚喬松之勢、直聳千尋、紅尾競禹門波、爭超三級、無情之物猶自攀高、弄水魚欲騰霄漢、況人篤信、豈無徹時乎、但堅此心、何患不達、道非外得、返己而求、默審精微、窮通淵奥、光陰有限、人命難存、轉息鶴髮滿頭、不可蹉跎空過、心源若濁、前路復昏、病忽相侵、無能可敵、彼時思忖悔已遲遲、恨早不修、臨江無船、佛法衰替、人我兼行、無益今時、各自努力、

愚逾海越漢、緣合此朝、擧古明今、寧無慚愧、但勸諸後學、同究此心、以報佛祖慈蔭之恩、共酬檀那供養之德、語無華飾、勉以直辭、如此而行、自他利益矣。

大慧禪師發願文

唯願、某甲、道心堅固、長遠不退、四體輕安、身心勇猛、衆病悉除、昏散速消、無難無災、無魔無障、不向邪路、直入正道、煩惱消滅、智慧增長、頓悟大事、續佛慧命、度諸衆生、報佛祖恩、次冀、某甲、臨命終時、少病少惱、七日已前、預知死至、安住正念、末後自在、捨了此身、速生佛土、面見諸佛、受正覺記、分身法界、遍度衆生也。

中峰和尚坐禪論

坐禪別無用心處、只十二時中、放下一切塵勞妄想境、常令自心如虛空、毫髮許使無他念、若得自心淸淨、還不思善不思惡、正當與麼時、如何是我父母未生已前本來面目、如是看、若工夫一片成、自然得有悟入、何名坐禪、外於一切善惡境界、心念不起名爲坐、內見自性不動名爲禪、如今學道人、不悟此心體、便於心上生心、而向外求佛、着相修行、皆是惡法、非菩薩道。

國譯夢窓國師語錄

解題

夢窓國師疎石は德高くして詞藻豐かに、而も北條氏の末期より足利氏の初世に亘りて、諸方の大刹に住し、高く宗旨を擧揚し、幾多の龍象を打出し、且つ七朝の帝師となり、其の一派は天下到る所に彌蔓し、寔に當時禪界に於ける巨人なりき。本語錄は斯る大宗師の遺錄なれば、古來、叢林の間に盛んに愛誦せられ、貞治四年開板せられて以來、數度の開刻を重ねて今日に至れり。今其の內容の一般を考察するに、上卷の南禪寺語錄は侍者本元、慧逸等の編、淨智寺語錄は曇林の編、圓覺寺語錄は紹榮の編、再住南禪寺語錄は紹榮、懷澄、士永等の編、天龍寺語錄は宏遠、智光、彌浩等の編、再住天龍寺語錄は周澤の編、下卷の陞座以下の各篇は門人妙葩の編にして、國師の滅後十五年を經て門弟子藤原德叟居士の開板に係る。卷頭には東陵の序及び國師の自戒刊板語を掲げ、卷末には梵琦及び妙葩の跋を添ふ。各篇何れも精金美玉の言句に非ざるはなく、書中到る所、斯の禪界巨擘の風藻と其の面目とを窺ふことを得べし。附錄の西山夜話は、師が南禪寺に住せし際、應機接物、門弟子の問に答へし法話にして、臨川家訓は曆應二年、師が臨川寺を退かんとするに際し、諸門弟子を誡しめしもの、其の他、拾遺の偈頌、祭

文、疏、法語、發願文などは、後年、開板者の添附せしものなり。

傳を案ずるに、國師諱は疎石、夢窓と號す。俗姓は源氏、伊勢の人にして宇多天皇九世の孫なり。母は平氏、嗣を觀音に祈る。金色の光、口に入ると夢みて娠む。後宇多天皇の建治元年を以て生る。四歳にして母を喪ひ、弘安元年、一家擧つて甲斐に移る。九歳にして同國平鹽山の空阿上人に投じて常に法華を誦し、以て母の慈に報ず。十八歳にして祝髮し、初め名を智曜といふ。南都の戒壇院に抵り、慈觀律師を禮して具足戒を受け、顯密の教を學習す。然れども意に義解の學を嫌ひ、嘆じて曰く、「佛法は義學の詣る所に非ず」と。深く別傳の宗を慕ふ。一夕、夢に支那の疎山、石頭の二刹に遊ぶ、一人の龐眉の僧あり、達磨の像を授けて曰く、「爾、善く之を奉持せよ」と。既にして寤めて自ら謂へらく、「吾れ禪宗に因緣あり」と。因つて名を疎石と改め、衣を更へて京に上り、建仁寺に入りて無隱圓範に參ず。師意を傾けて朝參暮請、遂に寢食を忘るゝに至る。永仁三年、相州鎌倉に往き、無及德詮、葦航道然、桃溪德悟、癡鈍空性の諸師に歷參し、皆法器を以て許さる。同五年、京師に回り、再び無隱に侍す。正安元年、來朝僧たる一山一寧禪師、鎌倉建長寺に主たるや、師往いて參じ、擇木寮に在つて諸家の語要を諮決し、日々に慈解を增す。去つて奥州に遊び、松島の圓福寺に寓す。其の近地に一僧あり、止觀を講ずるを聽いて、無礙の辯才を得たり。然れども心地未だ明かならざるを以て、復た鎌倉に往き、一山に見えて問うて曰く、「己事未だ明めず、請ふ直指せよ」と。一山曰く、「我が宗に言句なく、亦一法の人に

與ふるなし」と。師曰く、「和尚、慈悲方便せよ」と。一山曰く、「也た慈悲もなく、方便もなし」と。師益々疑著す。去つて萬壽寺に往いて佛國高峯に參ず。高峯曰く、「一山何の言句かありし」と。師前話を擧す。高峯聲を勵まして曰く、「汝、奚ぞ道はざる、和尚漏逗少からずと」。師尚ほ未徹在、請に應じて再び奥州に赴く。常陸の臼庭に至つて庵居し、自ら誓つて曰く、「若し休歇を得ざれば高峯を見ず」と。嘉元元年の夏、一夕、坐久しうして起つて壁に靠らんと欲し、誤つて顚倒し、豁然として大いに悟る。乃ち偈を作つて曰く、「多年堀ㇾ地覓㆓青天㆒、添得重重礙膺物、一夜暗中颺㆓碌甎㆒、等閑擊碎虛空骨」と。直に淨智寺に抵つて高峯に呈す。高峯大いに喜び、囑して曰く、「西來の密意、汝今已に得たり。善く自ら護持せよ」と。卽ち印可を得て甲州に往き、常牧山に庵居す。高峯の建長寺に主たるや、師を招いて上野の長樂寺に住せしむ。師力め辭して、美濃の虎溪に到りて庵を卓て、又土佐の吸江庵に居す。又相模三浦の臥龍山に往き、泊船庵を營み、門を杜ぢ客を謝して專ら聖胎を長養す。後、上總に之きて退耕庵を作る。

正中二年師年五十一、此の春、洛の南禪寺席を虛しうす。後醍醐天皇、特に詔を降して師を請ず。師疾と稱して起たず、重ねて朝旨あり、上意逆ふべからず。乃ち起つて八月、南禪寺を領ず。天皇召して宮に入れ、特に錦座を賜うて法要を說かしめ、所說旨に契ふ。嘉曆元年、樞府の命を以て鎌倉に至り南芳庵に寓す。翌年二月、北條高時の强請によりて淨智寺に住す。一夏を過し、辭して南芳庵に歸る。

秋八月、錦屛山瑞泉寺を營みて移り住す。元德元年秋、圓覺寺に住し、翌年潛かに瑞泉に歸る。此の頃檀越の請に應じて、甲斐の慧林寺を開く。元弘三年、後醍醐天皇、宸翰を降して師を召す、師直に參內して天顏に咫尺し、八月勅を奉じて臨川寺に居る。天皇、特に夢窓國師靈龜山臨川寺開山初祖と賜ふ。建武元年、詔を奉じて再び南禪寺に住す。三年の春、京師大いに亂る、師南禪寺を辭して臨川寺に退居す。將軍足利尊氏、師を幕府に請じて法要を聽き、且つ弟子の禮を執る。延元四年（北朝の曆應二年）の春、攝津の太守藤原親秀、西芳敎寺を革めて禪刹となし、師を請ず。師忻然として之に赴く。此の年八月十六日、後醍醐天皇、吉野の行宮に於て登遐し給ふや、尊氏勅を奉じて、帝の冥福を薦嚴せんがため、嵯峨に靈龜山天龍資聖禪寺を建て、師を請じて開山始祖となす。貞和元年（南朝の興國六年）八月、先皇の七回忌に當つて、開堂慶讃す。實に曆應二年より貞和元年に至る六載の間にして、山門、法堂、方丈、廊廡、厨庫等悉く備はる。開堂の日、太上皇、上皇及び光明帝、百僚を率ゐて臨幸し、師陞堂說法す。翌年秋、雲居庵に退き、嗣子志玄をして天龍の席を補はしむ。天皇、師を召して宮中に入れ、師資の儀を執り、特に金襴紫衣を賜ひ、又、特に夢窓正覺國師の號を賜ふ。觀應二年（南朝の正平六年）八月十五日、再び朝旨あり、特に手詔を賜うて夢窓正覺心宗國師と加賜せらる。十六日、衆を辭して三會院に退き、次で微疾を示し、九月朔、衆に告げて曰く、「我が世緣近きにあり、疑あるものは問ふべし」と。衆競うて入室し請詢するに、機に隨つて開發す。朝廷、醫藥を賜ふも師辭して受けず。

九月十九日、太上皇親しく寺に幸して病を問ふ、師欽んで恩を謝し、ために法を説く。二十九日遺偈を書して曰く、「轉身一路、橫該豎抹、畢竟如何、彭八剌札」と。三十日に天龍、臨川の衆徒を招き、親しく面別を告げ、怡然として寂す。壽七十七、僧臘六十。著述は本語錄の外、夢中問答集三卷、夢窓國師法語一卷、夢窓國師和歌集一卷、谷響集一卷あり。皆世に行はる。嗣法の弟子は無慮一百餘、就中、春屋妙葩、無極志玄、絕海中津、龍湫周澤等は最も現はれ、實に叢林の麟鳳たり。

師は性質溫雅にして自然に人をして感ぜしむ。故に上は王公より下は匹夫に至るまで、一たび其の音容に接するものは鑽仰せざるものなし。後醍醐天皇以來、七朝の帝師と仰がれ、特に後醍醐帝よりは夢窓、光明帝よりは正覺、光嚴帝よりは心宗、後光嚴帝よりは普濟、後圓融帝よりは玄猷、後花園帝よりは佛統、後土御門帝よりは大圓などの國師號を賜はる。而も其の門派は天下到る所に繁興し、洵に我が禪界稀有の善知識なりしと謂ふべし。

天下の至大なるものは道なり、至公なるものは理なり、人能く公正にして宏大にして、道理に合するもの、尊んで且つ敬せざるは莫し。予㋑南國より東のかた㋺扶桑に來つて、惟だ夢窻國師一人を見る而已。師の道、春の大地を行くが如く、師の德、皎日の空に當るが如く、師の戒、凜として氷霜の若く、師の行、行事に見はる。㋩八たび㋥鈯斧を提げ、㋭六處の開山、㋬三朝敬を加ふ。一國咸く尊ぶ、所謂大公の道理に合ふて、自然に人皆得て尊敬すと。若し師の語言天下に滿ちて、

㋑南國。元の國を指して云ふ、漢土を喚んで江南と曰ふ。

㋺扶桑。即ち日出處を扶桑と云ふ、東海の中に在る神木、轉じて東方日出の處にある神仙の國、又日本を指していふ。

㋩八提。圓覺、南禪、淨智、惠林、臨川、天龍。而して南禪天龍は再住なり。

㋥鈯斧。鈯音突、鈍也、青原曰く、吾に箇の鈯斧子あり。

㋭六處。伊勢の善應、相模の瑞泉、甲斐の惠林、播磨の瑞光、山城の臨川、天龍なり。

㋬三朝加敬。後醍醐帝賜ふ夢窓の號、光明帝賜ふ正覺の號、光嚴帝賜ふ心宗の號。

㋣無口過。孝經に言ふ天下に滿ちて口過なしと。注に口臭也。

㋠佛光。圓覺の開山無學祖元禪師、宋人、無準に嗣ぐ。貞治二年、佛光圓滿常照國師の賜號あり。

㋷佛國。下野那須雲巖寺開山なり、高峯顯日禪師、後嵯峨帝皇子佛光に嗣ぐ、同上の年、佛國應供廣濟國師と賜ふ。

㋦龍湫。諱は周澤、夢窓に嗣ぐ、南禪・天龍・建仁等に住す。

㋸佛鑑。無準師範禪師、宋の名僧にして、佛鑑禪師と特賜號あり、破庵に嗣ぐ。

㋾翳睛。蔽す也、障ふる也。

㋻叢林。梵語は貧婆那、此には叢林と云ふ、衆多の意、大樹の叢聚する、是を名づけ林と爲す。

㋕文和。北朝後光嚴帝の年號、南朝の後村上帝正平九年。

㋵禩。祀と同じ、年也。

㋟孟。始也。

㋹東陵。永璵、元國四明の人、雲外岫に嗣法し、洞上の宗を得たり、本朝觀應二年來朝、無極玄、天龍の事を謝するに會ふて、夢窓、師を以て選補す、後詔を奉じて南禪に遷る、貞治四年五月六日安坐して化す、勅して妙應光國惠海慈濟禪師と諡す、天龍にては第三世なり。

㋞求添削。國師、門人の編錄を誡むるの語なり。

(ト)口過なしと曰ふ者なり。

國師の祖は(チ)佛光にして、(リ)佛國を師として宗旨を發揚し、後學を警訓す。珠の盤に走るが如し、自つて來ること有り。其の嗣子(ヌ)龍湫澤首座、師の語錄を出して以て余に示し、予に命じて序引を爲らしむ。予が曰く、「國師は乃ち(ル)佛鑑下の子孫にして、却つて(ヲ)翳睛の法を用ふ。此の錄を觀ん者は、自ら宜しく眼を着くべし。師の法を嗣ぐ者衆し、皆(ワ)叢林の麟鳳なり。必ず又其の家世を大いにする者あらん。」

旹(カ)文和三(ヨ)祀(タ)孟夏佛誕生之日　　四明(レ)東陵叟永璵　序

此れは是れ老僧一生の寐語なり。切に(ソ)添削を他人に求むること莫れ、矧んや刊版印施をや。

國譯夢窓正覺心宗普濟(イ)國師語錄　上

住山城州瑞龍山南禪禪寺」語錄

侍者　(ロ)本元　(ハ)慧逸　等編

(ニ)正中二年八月二十九日(ホ)入院

(ヘ)山門を指して云く「溪澗(ト)潺潺、峰巒(チ)岌岌、(リ)公門曾て內外なし、誰か言ふ拽けども入らずと。」左右を顧視して云く、(ヌ)「恠しむこと莫れ、(ル)「相揖せざることを。佛殿、(ヲ)郝老、名を聞くも也た喜ばず、(ワ)我儂、今日特に來參。」良久、「黑蜜は太だ苦く、黃連は太だ甘し。」土地堂。(カ)靈鑑(ヨ)遺すことなし、(タ)賞罰遂らず、(レ)敢て問ふ、「卽今我を覷る麽。(ソ)洎んど更

(イ)七朝國師號。夢窓、後醍醐。正覺、光明。心宗、光嚴(以上特賜)。普濟、後光嚴。玄猷、後圓融。佛統、後花園。大圓、後土御門(以上勅諡)。

(ロ)本元。南禪に住す、元翁本元、佛德禪師と諡す、高峰顯日に嗣ぐ。

(ハ)慧逸。詳かならず。

(ニ)正中。後醍醐帝の年號、師年五十一歲。

(ホ)入院。百丈淸規といふ支那の百丈といふ名僧のきめておかれたものに具さに出づ。

(ヘ)山門。三門なり、城市に對して云ふ、その制、入口三つ、三解脫門を表す。

(ト)潺潺。水聲也、水の流るること、南禪の風光を云ふ。

(チ)岌々。山の高きこと、同上の風景を述ぶ。

(リ)公門。三門は佛教の公門也。

(ヌ)莫恠。ふとどきと思はれて。

(ル)不相揖。目禮を缺く。

(ヲ)郝老。趙州諗禪師のこと、南泉の嗣、曹州郝鄉の郝氏。

に一分の飯を下せ。」

祖師堂。聯芳續燄、地に㋡朱砂なし。恐くは人の㋧訐を以つて直と爲すと、一炷の㋤兜樓、且く他を賞す。

㋶據室。横に主丈を按じて云く、㋰「摩竭の迹を師とせず、㋒少林の顰に㋼傚はず。」大衆を召して云く、「只だ㋨當頭に㋔薦取せんことを要す。㋗切に忌む故きを㋳溫ね新しきを知ることを。」喝一喝。

㋮勅黃。此れを以て㋘弊を革め、危きを持し、此れを以て㋫隱れたるを索め㋙遠きを致す。印文已に露る、見るや也た無や。㋓碧落の碑贋本なし。

山門㋢疏。㋐全褒㋚全貶、海闊く山幽かなり、㋖我を知り我を罪することは、春秋に在らず。

㋻我儂。俗に我を儂といふ。
㋕鑒鑑。神鏡の物を照す如く善惡をよくみわける。
㋵遺。とりのこす。
㋟賞罰。善惡を。
㋹敢問。ふんぎつて、りよぐわいながら。
㋞洎。及也、やがて、更に、この上との義。
㋡朱砂。丹を以て朱色の名とす、故に朱砂と呼ぶ。
㋧訐。まのあたり人を斥くに言を以てす、人のかげことをとり出して云ふ。
㋤兜樓。梵語に兜樓婆、此に香草と翻す、香のこと。
㋶據室。上二句は師家、下二句は學者にかく。方丈、室中の間に椅子・拂子・拄杖・竹篦を設け、新命、椅子に坐して侍者燒香請法、その時の法語。據は物をとらへしがみつく、はなさぬとの意。

㋰摩竭迹。釋尊が摩竭陀國に在りて、衆の爲めに說法のときの故事。
㋒少林。達磨が支那の嵩山の少林寺に寓坐して、面壁して坐す。
㋼傚。強ひて人に學ぶ也、かなはぬことをむりにまねをするなり。
㋨當頭。まつさきに、第一番の意。
㋔薦取。がてんする、してとる。
㋗切忌。きらふ也。おそるる意を兼ぬ。
㋳溫故。冷を溫むるは舊事を用ゐる也。
㋮敕黃。已下法堂の行事なり。黃は唐の高宗上元三年より、蟲のくはぬ黃紙を用ひて勅書を賜ふ、この故に勅書を勅黃と云ふ。
㋘革弊。叢林の弊風を革めし。
㋫索隱。山林に隱れ居る人を召

㋴拈衣。㋱大庾嶺頭㋯線路を通じ、㋛鷄足山裏㋽針鋒を藏す。新南禪、通も也た得ず、藏も也た得ず。衣を提起して云く、「等間に提起して虛空を覆ふ。」

法座。㋪應身は㋲茆艸に坐し、㋝法佛は㋜空裏に坐す、且く道へ、衲僧甚麽を以てか座と爲ん。法座を指して云く、「我㋑爾に隱すこと無し。」

㋺陞座。㋩拈香して云く、「此の一㋥瓣の香、爐中に爇向して、恭しく爲めに、
今上皇帝、聖躬㋭萬歲萬歲萬萬歲を㋬祝延したてまつる。㋣陛下、恭しく願はくは㋠皇圖㋷嶄新、永く㋦山呼の祝に符ひ、民物㋸康阜、咸く㋾天賦の恩に賴らんことを。
此の香、諸位尊官、文武㋻百寮の爲めに、㋕

す。

㋙致遠。遠きより召し出す。

㋓碧落之碑。支那の山西絳州の興龍宮に碧落の石像あり、背に篆文千餘言を刻す。

㋢疏。しようと引いてよむべし、條陳也、箇條を云ひ列べ、山門の兩班より、請待する四六の文章なり、境と德と諸と次第して作るが法なり。

㋐全褒。法の爲に出世すること。

㋚全貶。德のなきに長老位になること。

㋖知我。孟子の滕文公の章に、「孔子懼れて春秋を作る云云」の末に孔子曰く、「我を知る者はそれ唯春秋乎」とあり、この意をとる。

㋴拈衣。初出世の時ばかりの式なり、師承の由來を人にしらす爲め。

㋱大庾嶺。六祖慧能大師、五祖大師に傳衣し、南行す、大庾嶺に至るとき、衆みな之を奪はんとして、後を逐ひしときの故事。

㋯線路。衣の縫にて後句と對す。

㋛鷄足山。迦葉尊者、如來に傳法の後、雞足山に入り、後、滅盡定に入る。

㋽針鋒。衣の縫。

㋪應身。三身の中に有り、隨時隨處に隨趣に出現するを應といふ。

㋲茆艸。茆は、茅に作るべし。

㋝法佛。虛空を以て座と爲し、清淨法身を成じ、常寂光土に居す。

㋜坐空裏。法華法師品に曰く、如來の座は一切法空是也。

㋑無隱爾。論語述而の章に出づ。

㋺陞座。法堂の須彌壇上にのぼること。しんぞとよむ。

㋩拈香。開堂、長老、又親ら拈香することは、所得の道法、必ずよる所あり。

祿算を㋵資陪し㋟奉る。伏して願はくは㋹輔弼全功を樹て、㋞權威美德を旌さんことを。

此の香、㋡山南海北、到る處に埋藏す、未だ嘗て容易に㋧衒賣せず。價を定むること他の大商に還へす。爐中に爇向して前住相州建長、敕諡佛國禪師高峯大和尚に供養して、用て㋤法乳の恩に酬ゆ。」

索話。淸平の時節、㋶風物一新、恢いに㋰東閣を開く。誰か是れ高賓。僧問ふ、「一佛出世、地㋒金蓮を湧す、和尚出世、何の祥瑞か有る。」答へて云く、㋭「露柱燈籠、㋨手舞ひ足踏む。」進んで云く、「人天㋔交接、兩得相見。」師云く、㋗「三臺は須らく是れ㋳大家催すなるべし。」進んで云く、「詔㋮旆筵に臨み、㋘宸恩地を動ず、」祝聖の一句、願はくは指示を垂れよ。」師云く、㋫

㋥瓣香。瓣は瓜瓣也、此に似たるゆゑにいふ。
㋭萬歲。君に喜慶する所の者、みな萬歲と呼ぶ。秦漢以來なり。
㋬祝延。之を祝して長年ならしむる也。
㋣陛下。陛は階也、尊稱の第一。
㋠皇圖。圖は地圖也、國は地圖と云ふに同じ。
㋷斬新。あたらしきこと、唐人の方言。
㋦山呼。山は呼ぶ、萬歲の聲などを略していふ。
㋸康阜。康は安樂の意を兼ぬ、阜は多也、盛也。
㋾天賦。天子の恩澤を上天の命に比す。
㋻百寮。寮は僚と通ず、百官と同じ。
㋕祿は知行、算は壽算。
㋵資陪。手傳の義。
㋟奉。通用して、おんためとよむ、古來よりの傳說也、爲にし奉るとよむもよし。
㋹輔弼。たすけ、たすく。文官なり。
㋞權威。武官也、權ははかりのおもりにて、物の輕重を自由にするより云ふ。
㋡山南海北。南北に意なし、海は土佐及び相州三浦也、處處に遁るるの意。
㋧衒賣。販賣なり、押賣るの意。
㋤法乳恩。香を燒いて師の恩に酬ゆ、同衆之に依りて新命の法脈を知る、正法眼の恩乳。この式は、興化存奬禪師が臨濟先師に供養するに始まる、嗣香と云ふ。
㋶風物。風光景物の略。
㋰東閣。閤は小門、東に向つて當庭の門を避く、賓客を引く也。
㋒金蓮。如來足下より放光、金色の蓮華座に坐す。

「九天㋙玉印を擎げ、㋓四海㋢金輪に服す。」進んで云く、「恁麼ならば則ち龍峯高き處、君恩重し。」答へて云く、「須らく知るべし海嶽明主に歸することを。」進んで云く、「記得す㋐大慧禪師、㋚徑山に住する時、㋖馮侍郎問うて云く、『和尚嘗て道ふ㋴這の蟲豸と作らずと、今日甚麼と爲てか此の山に住す』と。問頭還つて具眼なりや也た否や。」答へて云く、「㋱六隻の骰子滿盤紅なり、大都只是れ頭彩を見る。」進んで云く、「大慧曰く、『盡大地是れ一箇、杲上座、儞甚の處に向つて我を看る』と、意那裏にか在る。」答へて云く、「㋯笤帚盡く㋛蛾眉。」進んで云く、「今日若し人あり、和尚に向つて恁麼に問はゞ、未審如何んが㋜祗對せん。」答へて云く、「來つて我が毬門の㋪路を攔ること莫れ。」進んで云く、「古

㋼露柱。大黑柱、自己の面目にたとへろ。

㋨手舞足蹈。孟子の離婁の章に出づ、本文の踏の字は蹈の字の誤か。

㋔交接。入れちがひ、出て合ふなり。

㋗三臺。三十拍曲の名也、酒宴を催促するまひなり。三臺の舞は一人ではまはれぬ、みなでまふ、出世もさうじや。

㋳大家。合家といふ如し。

㋮旆。使者の持せろ旗也。

㋘宸。帝居を指して宸と曰ふ、屋宇なり。

㋫九天。天に九野ありと淮南子天文訓に出づ、天からは天子の印を授け、四海の人は輪王の德に服す。

㋙玉印。天子の璽。

㋓四海。四方の如し。

㋢金輪。十善道を修する金輪王たいふ。

㋐大慧。大慧宗杲禪師、圜悟勤に嗣ぐ。

㋚徑山。支那五山の一、杭州臨安府に在り。

㋖馮侍郎。字楫、濟川居士なり、佛眼遠に嗣ぐ。

㋴這蟲豸。豸は音ち、足なき虫といふ、蟲は足ある虫といふ。

㋱六雙骰子。すごろくのさい、魏の陳思王、雙六の局た製し、さい三つたつくろ、唐の末に至つて六つとなる。

㋯笤帚。ははき。

㋛蛾眉。蛾は黃蝶に似て小虫なり、其の眉勾曲して畵の如し。

㋜祗對。本文祇に作るは誤なり、祗は敬也、もと上へ對する語、なれども常語となる、つつしみこたふ。

㋪路。路は通りつけた人でなくてはしらぬ。

人と相去ること多少ぞ。」答へて云く、「山上の路を知らんと要せば、須らく是れ往來の人なるべし。」進んで云く、「謂つべし㋲法は法に隨つて行じ、法幢隨處に建立すと。」答へて云く、㋝「天津橋上書㋜官吏を打す。」僧禮拜、

㋑師乃ち云く、「法㋺固必毋し、道㋩方偶を絶す。雙放雙收、卽默卽說、月に嘯き雲に眠る處、古渡頭邊を離れず。和泥合水の時、常に孤峯頂上に坐す。少林花開き果結ぶ。達磨未だ肯て㋥迷情を救はず、南嶽㋭烟暗く霧深し。㋬思大何ぞ曾て㋣豹變に倣はん。㋠現成の法席、誰か㋷卷き誰か舒ぶ。廣大の施門、闢くに非ず、閉づるに非ず。便ち見る物物同じく皇道㋦不言の化を揚げ、頭頭咸く祖宗㋸絕唱の猷を表することを。㋾石上座恁麼の擧唱、此れは是れ建化門中、私に車馬を通ず。也た只だ官には針をも容れざる底の如きは、又且つ如何ん、低聲低聲、㋻一字公門に入れば、㋕九牛車けども出でず。」

㋵復擧す、世尊曰く、「佛法㋟國王大臣、有力の㋹檀那に付屬す」と。拈じて云く、「釋迦老子、才を量り㋡職を補して、其の宜しきを失はず、二千餘年、遺風未だ墜さず、他の付屬底の佛法を知らんと要するや。」拂を以

㋲法隨法行。松源治父錄の語。
㋝天津橋。支那河南府の城外に在り、洛水に架す。
㋜官吏。公儀の夜の時大鼓なり。
㋑師乃云。已下提綱。
㋺固必。とりつき、滯るなり。
㋩方偶。方は四方、隅は角なり。
㋥救迷情。達磨二祖に傳法の偈にあり。
㋭烟暗。豹變に緣あり。
㋬思大。南嶽慧思禪師、支那天台の祖。
㋣豹變。易の革卦に出づ、君子豹變、善に遷るの義。
㋠現成。できあひの義に採る。
㋷卷舒。馬祖上堂、百丈との故事。
㋦不言之化。論語陽貨篇に「天何をか言ふや、四時行はれ云云」のこと。
㋸絕唱之猷。猷は道なり、法華方便品の「是法不可示言辭相寂滅」の意、不言の化に對し

て床を擊つて云く、「道(ツ)泰かにして傳へず天子の令、行人盡く唱ふ太平の歌。」

(ネ)當晚(ナ)小參。僧問ふ、(ラ)「隱さんと欲すれば彌露はる、(ム)遠く東關の舊隱を離れ、至化逃れ難し、來りて南禪の(ウ)主盟と爲る、如何なるか是れ(ヰ)不動尊。」答へて云く、「天台に(ノ)普請、南嶽に遊山。」進んで云く、「恁麽ならば則ち(オ)一點の水墨兩處に(ク)龍と爲る。」答へて云く、「靈蹤は更に猿啼の處に在り。」進んで云く、「記得す、(ヤ)德山云く、『今夜小參答話せず、問話の者は三十棒』と、未審、意那裏にか在る。」答へて云く、(マ)「此の地に金二兩なし。」進んで云く、「時に僧あり、出でゝ禮拜す、山便ち打す、還つて的當なりや也た無や。」答へて云く、(ケ)「長鞭馬腹に(フ)搆らず。」進んで云く、「今夜小參問あり答あり、

ていふ。

(ヲ)石上座。夢窓國師の諱、疎石。

(ワ)一字入公門。この十字、大慧廣錄十に出づるの語。

(カ)九牛車不出。車にてひくなり、死字を活字に用ひたるなり。

(ヨ)復擧。百丈淸規に擧古結座とありて、古則を拈提して一座の說法を結びとめるなり、此にて開堂の儀式了る。

(タ)付囑國王。仁王般若經を說き給ひて、十六大國及び波斯匿(ハシノク)王等に付囑す。

(レ)檀那。梵語なり、此には施と譯す。

(ソ)補職。役を云ひ付くるなり、補は缺けたるをおぎなふなり。

(ツ)泰。安く寬大の意を兼ぬ。

(ネ)當晚。入院の日の晚。

(ナ)小參。禪宗では詰旦升堂、之を早衆を集めて開示す、之を參といひ、日晡念誦之を晚參といひ、非時に說法する、之を小參といふ。

(ラ)欲隱彌露。楞嚴經六に此の語あり。

(ム)遠離……。この年より七年已前、土佐より關東へかへり、三浦の泊船庵に居る、三年前退耕へ移る。

(ウ)主盟。左傳の襄公九年章に、非禮何以主盟。

(ヰ)不動尊。不動尊は應身也、南禪、不動水の因緣あり。

(ノ)普請。作務、禪家の雜務をいふ。

(オ)一點水墨。支那の張僧繇の故事なり、東關南禪も天台岳も自在なり。

(ク)爲龍。一點の點にて龍をでかす也。

(ヤ)德山。宣鑑禪師、龍潭に嗣ぐ、唐僧。

(マ)此地無金。自らその無しと云

德山と是れ一か是れ二か。」答へて云く、「一に多種あり、二に兩般なし。」進んで云く、「古今異路なし、達者自ら歸を同じうす。」答へて云く、「峯轉じて路なきかと疑ひ、溪を隔てゝ別に村あり。」僧禮拜。

(コ)師乃ち云く、(エ)「山野未だ此の(テ)保社に入らざる已前、(ア)諸仁者、曾て者裏に在つて、各自に(サ)盤桓す。殿柱閣梁、人人具に見、鐘聲鼓響、箇箇親しく聞く。同一見聞、同一受用、直に得たり耳裏(キ)圓通の戶(ユ)扃を開き、眼中本分の光輝を放つことを。是れ(メ)逐旋(ミ)捏合するにあらず、亦(シ)法爾如然に非ず、直饒佛祖出興すとも、也た須らく(ヱ)拱默すべし、誰か肯へて一點も相謾せん。忽ち箇の漢ありて出で來りて道はん、此の現前の大衆、既に能く是くの如し、儞甚の長處有りてか、玆の法席に主たりと。」主丈を卓すること一下して云く、(ヒ)「意氣ある時(モ)意氣を添へ、風流ならざる處也た(セ)風流。」

復擧す、(ス)法燈和尙、衆に示して云く、「我れ本深く巖壑に隱れて、病を養ひ、時を過さんと欲す、奈んせん、先師未了底の(イ)公案あるに緣つて、出で來りて他の與に了卻することを。」時に僧あり、出でゝ問ふ、「如何なるか

ふて、人にあるを知らる。

(ケ)長鞭。擊つところに非ざるを云ふ。

(ワ)搆。正字通に牽也とあり。

(コ)師乃云。提綱。

(エ)山野。師自らをいふ。

(テ)保社。互に保護する團體なり。知識仲間。

(ア)諸仁者。大衆。

(サ)盤桓。たちもとほる、すすみがたきこと。

(キ)圓通。楞嚴經六、文殊の偈に云く、自性を聞すれば性無上道を成ず、圓通實に如是。

(ユ)扃。まど。

(メ)逐旋。せんぐりに事を、取りあつめる。

(ミ)捏合。引合せて道理を付け、造作にわたるのではない。

(シ)法爾。天然のうつり、かはりでない。

(ヱ)拱默。兩手をこまぬいて默すこと。

是れ先師未了底の公案。」法燈便ち打して云く、(ロ)「祖禰了ぜざれば殃兒孫に及ぶと。」拈じて云く、「法燈、將に謂へり(ハ)陳年の滯貨販賣時を得たりと、笑ふべし(ニ)累世の家私、自ら揚げて外に向ふことを。石上座、溪山に(ホ)醜(ヘ)拙を藏め、(ト)雲月(チ)膏肓に入る。只先師未了底の公案なきに因つて、所以に出で來りて他の與に恩を謝す、且く道へ古人と優劣ありや也た無や。」良久して云く、「是れ(リ)任公子にあらずんば、徒に釣竿を話するに勞せん。」

(ヌ)次の日、(ル)龜山聖廟の爲に藏經を看讀し奉る。上堂、「(ヲ)瞿曇(ワ)一字を說かず、諸人箇の什麼をか看閱す。(カ)趙州只だ(ヨ)半藏を轉ず、甚と爲てか(タ)功課を全うすることを得ざる。(レ)龍山、試に者裏に向つて消息を通じ去らん。」拂子を

(ヒ)有意氣時。宋白雲守端禪師の三頌を棒頌する句。
(モ)意氣。男だての氣象。
(セ)風流。はでな、だてな樣子。
(ス)法燈。淸涼泰欽法燈禪師、法眼に嗣ぐ、唐僧。
(イ)公案。公府の案牘に喩ふ、佛祖の機緣、之を目けて公案といふ。
(ロ)祖禰。父の廟を禰といふ、祖先といふに同じ。
(ハ)陳年滯貨。陳は久しき也、子のきものをうりつけたと思ふた。
(ニ)累世。先祖代代の愧をかいた。
(ホ)醜。百醜、みともない。
(ヘ)拙。不調法な。
(ト)雲月。雲は山雲、月は溪月。
(チ)膏肓。膏は心下、肓は心の上、共に針藥の及ばぬところ、醫者のさじをなげるところ。
(リ)任公子。莊子外物篇に出づる釣魚の先生。

(ヌ)次日。百丈淸規上に二三に出づ、入院の序にする佛事、建寺の檀越の爲に陞座す。
(ル)龜山。八十九代龜山天皇、南禪寺の開基本願にして離宮を改めて寺とし給ふ。
(ヲ)瞿曇。譯して純淑といふ、地最勝ともいふ。釋迦の本姓。
(ワ)不說一字。四十九年一字不說。
(カ)趙州。從諗禪師、唐の名僧。
(ヨ)半藏。一婆子あり、錢を送りて藏經を轉ぜんことを請ふの因緣古事あり。五燈會元四に出づ。
(タ)全功課。功は工夫にて、てまと譯す、課は仕事のつもり、ほどらいなり。
(レ)龍山。夢窓國師みづからを云ふ。
(ソ)諦觀。世尊一日陞座、文殊白槌して諦觀……と證明す、これは音讀するのならはせである、訓讀すると「あきらかに

擧起して云く、㋞「諦観法王法、法王法如是。」

㋡菊節、㋧兩班を謝する㋤上堂。㋶大功不宰、大化不言は㋰東西自然に轍に合ふ、左右原に逢はずといふこと靡し。大衆還つて會す麼、如し會せば、㋒菊を東籬の下に採る、會せずんば悠然として南山を見る。

㋼上堂。水㋨肅し山寒うして秋已に老ゆ。㋔現成全案人の知る沒し、人の知る沒くんば、睦州の主丈又枝を生ぜん。喝一喝して下座。

㋗開爐。上堂、秋光一變㋳小春回る。寒暑何んぞ曾て往來に㋮屬せん。奈んともせず㋘潙山千古の錯、今朝又舊爐の灰を撥ふ。

㋫上堂。主丈を拈じて云く、㋙「此れ箇の事、㋓度量を絕す。」竪起して云く、「竪に㋢三際を窮め、」横に按じて云く、「横に十方に徧し。大衆、

法王の法を観ずるに法王の法はかくの如し」と云ふ、諦観はよく注意してみろこと、法王法は佛陀の法、正法眼藏涅槃妙心とか、佛心印とか、佛さまの御說法とかである、宇宙の森羅萬象が佛の本體であると文殊が申された。

㋡菊節。九月九日重陽の日の上堂。

㋧謝兩班。兩班は禪宗の役僧の役名、前版、維那、都寺、藏主の四名役僧なり。

㋤上堂。百丈清規に、每月旦望に上堂あり、外に五參とて五日、十日、廿日、廿五日の四日あり、今九月は旦を省きて九日にする。

㋶大功不宰。宰は料理人の切刻み煮燒すること、宰は主也治也。

㋰東西自然轍に合ふ。東西は班の知事、兩班の頭首。

㋒採菊。陶淵明の詩。

㋼上堂。九月朔(一日)の上堂。

㋨肅。縮也、寒也。

㋔現成公案。睦州見㆓僧來㆒云、現成公案放㆓汝三十棒㆒。當面の問題を頓悟す。

㋗開爐。十月旦(一日)。

㋳小春。冬の日の暖きこと春の如きをいふ。

㋮屬。人の下につくと云ふことにて、我が自由にならぬ意、此は往來につかぬなれば、往來せぬなり。

㋘潙山。傳燈九に、靈祐百丈に嗣ぐ、侍立の次で問ふ、誰ぞと、師云く、靈祐、丈云く、汝爐中を撥ふて火ありや否や、と、師撥ふて云く、火なしと、百丈躬起して深く撥ふて極小の一火を得たり、擧して以て之に示す、云く、此れ是れ火にあらずやと、師發悟す。

㋫上堂。十月望(十五日)。

横磬總に相干らざる處を見んと要する麽。」卓一下して云く、㋻「曙色未だ分たず、人盡く望む。天曉に至れば也た尋常。」

㋚上堂。擧す、㋖五祖演和尚云く、「如今の禪和家、擧話も也た會せず、如何なるか是れ祖師西來意、庭前の柏樹子と、恁麽に會せば便ち不是。如何なるか是れ祖師西來意、㋴庭前の柏樹子と、恁麽に會せば便ち是と。」拈じて云く、「五祖老師、夜半に烏鷄を捉へて、隣家の睡を驚起す。未だ免れず後人を㋱賺語して、㋯顢頂の處に向つて承當することを。龍山は則ち然らず、如何なるか是れ祖師西來意、庭前の柏樹子、恁麽に會して始めて得べし。」

㋛冬至、小參。雒頭㋦篳篥を吹くときは、則ち人人恰も㋪氷を懷くに似たり。㋲律管㋝葭灰を颺ぐるときは、則ち物物皆㋜纊を挾むが如し。偉いなる哉㋑玄樞、鑽仰すべからず。德の㋺覃ぶ攸、㋩偏なく㋥黨なし。諸仁者、此に於て薦得せば、㋭皓老の布㋬裩價千金、若し也た薦せずんば、㋣洞山の果子甘うして爽かならん。有る底は與麽に道ふを聞いて、便ち道ふ、「爾許多の閒事を説いて什麽にか作す」と。㋠今年冬至月頭に在り、早く

㋙此箇事。この一箇と云ふ意。
㋓度量。度はかれをあてはかる、量はますにてはかる。
㋢三際。前際は過去、後際は未來、中際は現在世。
㋻曙色。よのあけぬ内は、何かわかつたことか、あるかと、みなながめたが、あけたれば、やはりいつもの通り。
㋚上堂。十一月旦。
㋖五祖。法演禪師、白雲端に嗣ぐ。
㋴庭前栢樹。趙州の公案、にはさきのかしのき。
㋱賺。物を買ふてかひまはろこと。
㋯顢頂。大きな面。
㋛冬至。四節上堂の一。
㋦篳篥。ひちりき。
㋪懷氷。文選廿九張茂先が詩に出づ。
㋲律管。月月の律のくだ。
㋝葭灰。あしのはひ。

須らく㋷被を賣りて牛を買ふべし。良久して云く、「嗚呼覆水收め難し。」

復擧す、㋦芭蕉和尙、衆に示して云く、「儞主丈子あらば、儞に拄杖子を與へん、儞拄杖子なくんば、儞が拄杖子を奪はん」と。拈じて云く、「芭蕉、此の一行の大㋸神咒を誦出す。古今未だ人の飜譯し得るあらず、龍山、今夜衆に對して、分明に㋾飜譯し去らん。」主丈を卓すること一下して云く、㋻「唵蘇嚕蘇嚕娑婆訶。」

冬節諸官至る、上堂。㋕一陽纔かに發生すれば、偏界㋵硬地なし。龍山、法鼓雷を轟かせば、㋟萬像㋹森羅耳を側つ。㋞雲堂の淸衆證明を作し、朝廷の㋡貴冑㋧光賁を垂る。今日㋤風雲已に㋶際會、來年の㋰氣候記するに勞せず。是是不是不是、維摩掌裏大千を㋒搏り、老胡口

㋜挾纊。纊は綿也、一陽來復するにより暖にして。

㋑玄樞。理の微妙なるを玄と曰ひ、樞は開閉を自由にするものなり。

㋺覃。及ぶ、とほくまでひろがりとどく。

㋩無偏。偏頗なり、えこなし。

㋥無黨。偏也、ひいきなし。

㋭皓老。玉泉承皓禪師、北塔廣に嗣ぐ、ふんどしに歷代の祖師の名をかく。

㋬褌。はつた、此の方の下帶。

㋣洞山果子。洞山良价禪師、雲巖晟に嗣ぐ、師泰首座と冬節菓子を喫するの故事なり。

㋠今年冬至。以下買牛までは愚庵智及び禪師の語なり。愚庵は原叟行端に嗣ぐ。

㋷被。よぎ。

㋦芭蕉、惠淸禪師、南塔湧に嗣ぐ。會元九に出づ。

㋸神咒。陀羅尼なり、秘密不飜、此の土の禁咒の如し。

㋾飜譯。梵語を轉じて漢土の語となす。

㋻唵蘇嚕蘇嚕。唯佛與佛の境界なり、甘露の水を洒がれて、よみがへりかへるを云ふ。

㋕一陽。一陽來復。

㋵硬地。陽氣同つて、いて凍るところはない。

㋟萬像。日月星辰等、天。

㋹森羅。山河草木等、地。

㋞雲堂。如來の道場、衆海雲の如く集ると華嚴疏抄にあり、この意に取る、衆の修行するところを云ふ、禪堂なり。

㋡貴冑。冑は裔なり、長なり、子孫れきれきのすぢめの人なり、華族や大名。

㋧光賁。賁音ひ、上より下への辭、垂示の類、光臨に同じ。

㋤風雲。風は虎に從ひ、雲は龍に從ふ、易文言傳に出づ。

㋶際會。時節に相遇ふを際とい

中兩㋼齒なし。

㋨臘八上堂。㋔瞿曇㋗喫し盡す氷霜の苦、㋳夏蟲に說向すれば都て知らず。㋮後二千年、㋘屈逑するに堪へたり。寒梅初めて綻ぶ兩三枝。主丈を卓して下座。

㋫上堂。㋙「居諸移り易く、歲序云に暮る、或は㋓無常迅速の㋢商量を作し、或は㋐物不遷の處に向つて領取す。且く道へ那箇か是れ正見。」良久して云く、「㋚鷸蚌㋖諍つて休まず、終に漁人の手に入る。」

㋴除夜、小參。索話、臘月三十日、參玄便宜を得、花は須らく㋱連夜に發くべし、曉風の吹くを待つこと莫れ。僧問ふ、㋯「爆竹聲の中、年已に盡く、東村の㋪王老、夜㋽錢を篩ひ、㋪覿面の一句、請ふ師直指せよ。」師云く、「分明に記取せ

ふ、よき工合の時に遇ふを會といふ。

㋰氣候。冬至は書雲の節とて、雲氣をながめ、吉凶をしろし、前廣に用心するなり、今日は君臣の出合よき故、せわいらず。

㋒搏。音は博、つかむ、とる、鳥の物を取るより轉じて人の物をとるに云ふ。

㋼兩齒。當門の齒、まへば、だるまさまの。

㋨臘八。八ははつと音をよむくせなり、十二月八日、釋尊成道の日なり。

㋔瞿曇。譯して純淑といふ、又地最勝。釋尊の舊姓なり。

㋗喫盡氷霜苦。釋迦如來が雪山に在して、日に一麻一麥を食ひ、端坐六年の御修行。

㋳夏虫。莊子秋水編に出づ。夏虫には以て氷を語るべからず、時に篤ければなり。

㋮後二千年。二千年の後、漸く遂に所念をはらしたと也。

㋘屈。苦屈、むれん。

㋫上堂。月望、十五日なり。

㋙居諸。詩經の日月章に、日居月諸。

㋓無常。雜阿含經四十七に、諸の比丘當に勤めて觀察すべし、命行きて無常迅速なること是くの如し云云。

㋢商量。商賈の量度して中平を失はずして、以て各其の意を得せしむるが如し、はかりはかるなり。

㋐物不遷。諸法住法位、世間相常住と法華にあるが、これである。

㋚鷸蚌。しぎとはまぐりなり。

㋖諍。恐らくは爭の誤か、せりあふてとけぬないつぱうの爭といふ。

㋴除夜。大晦日のばん。

㋱連夜。戌のときより寅のとき

よ。」進んで云く、㋲「路遺つるを拾はざる、眞の古道、民皆業を樂んで豐年を見る。」師云く、㋝「堯舜の君、猶㋜化に㋑稽る。」進んで云く、「舊歲今宵去り、新年明日來る底の事、還つて遷變ありや也た無しや。」師云く、「有利無利㋺行市を㋩離れず。」進んで云く、「與麼なるときんば則ち舊歲卽ち新歲、新年卽ち舊年。」師云く、㋥「米中㋭犀角を雜ふれば、鷄驚いて啄まず。」進んで云く、㋬「七十二候を㋣抹過し、㋠六十甲子を亂却して、更に乞ふ一句。」師云く、㋷「乾三連㋦坤六斷。」進んで云く、「三世の諸佛、㋸摸索不著、歷代の祖師、近傍するに門なし、㋾聻。」師云く、㋻「劒閣途險しと雖も、夜行人更に多し。」進んで云く、「萬物㋕敷榮の態を獻じ、元樞㋵煦育の功を忘れず、如何なるか是れ㋟一老一不老。」師

まで、よどほしなり。
㋯爆竹。支那人の祝ごとにはみなやる、はらふの意か。
㋛王老。唐宋の俗語にて、えらいおやぢさまといふやうなこと。
㋓師錢。恐らくは燒くか、諸書みな然り、寫誤か。
㋪覿面。したしくあふ。
㋲路不拾遺。泰平の世のけつかうな風儀なり。
㋝堯舜。聖人すら、物事自由にゆかぬ。
㋜化。敎化なり。
㋑稽。滯也、物事はかどらぬ、すててゆかぬ。
㋺行市。行はとひや、何何銀行、何何洋行といふがごとし。
㋩不離。本分をはなれぬこと。
㋥米中。此れは師家より、本分草料をあたふる、驚いてききいれぬ。
㋭犀角。抱朴子に、米をいれておく器なりとの意を出す。
㋬七十二候。暦上、清明・啓蟄等の類、數七十二あり。
㋣抹過。けしてしまへ、抹は長點をかけて字をけすこと。
㋠六十甲子。甲に子、乙に丑と、十干と十二支と合せて六十になる。
㋷乾三連。易乾卦。
㋦坤六斷。坤卦。
㋸摸索不着。俗語にいふ事の實否をさぐり、おふせぬなり。
㋾聻。さあどうじやなり、語の助なり、音儞、ものを指す貌。
㋻劒閣。連山絕險、飛閣相通ずるを云ふ。
㋕敷榮。花のひらくこと。
㋵煦育。日出て暖かにして草木の育つ。
㋟一老。會元の洞山价の章に出づ。
㋹老胡知。老胡は佛さま。
㋡以終爲始。王荊公の除日の句。

云く、「只㋹老胡の知を許して、老胡の會を許さず。」進んで云く、「老這裏に在り、不老底什麼の處にか在る。」師云く、「相隨來也。」進んで云く、「物は㋞終を以て始と爲し、人は故きより新しきを得。」師云く、㋡「江に到りて呉地盡き、岸を隔てゝ越山多し。」僧禮拜。

乃ち云く、「一年三百餘日、今宵是れ㋥結交頭、一生參學事已に畢る。自ら是れ時の人、背へて休せず、西屋東家、㋤否泰の來去を㋶品藻し、人人箇箇、日月の㋰周流を論量す。古人臘雪を將つて大衆に供し、白牛を烹て、活計を作すことを引き得たり。只飯を嚼んで兒を㋒餧ふことを知つて、覺えず好肉に贅を生ずることを。龍山與麼の告報、大衆還つて甘ふ麼、若し也た甘はずんば、今夜㋼分歲、彼此便を得ん。」

復舉す、僧㋨香林に問ふ、「如何なるか是れ㋔衲衣下の事。」林云く、「臘月火山を燒く。」頌して云く、「峯巒幽邃罕㆓游人㆒。傳說㋗壺中天地新。㋳洞口風過雲忽散。聞時富貴見時貧。」

㋮歲節上堂。僧問ふ、㋘「曆は㋫寅を以て正と爲し、風は㋙艮位より來る、正與麼の時、請ふ師祝聖。」師云く、㋓「四塞㋢狼烟絕え、九天鳳瑞新なり。」

㋡到江。弘秀集三の處默の句。
㋥結交頭。結はむすびとめ、交頭はいれかはり。
㋤否泰。否はふさがり、泰はゆきわたり。
㋶品藻。品は物の高下の次第をわけること、藻は物のあや・いろどりのあること。
㋰周流。立春から立春に至るまで一年まはりて、本へもどること、周は水の流るる樣にしばらくも止らず。
㋒餧。餧とかく、一字にて、めしを人にくはす事。
㋼分歲。除夜に先祖を祭つて、長幼祝盃をあげてうたふを云ふ。
㋨香林。香林澄遠禪師、雲門偃に嗣ぐ。
㋔衲衣。僧侶の一大事はなにぞと、衲は衣なり。
㋗壺中。後漢の費長房傳に出づる故事。

進んで云く、「記得す、僧㋐鏡清に問ふ、新年頭還つて佛法ありや也たなしや。清云く、有り。僧云く、如何なるか是れ新年頭の佛法。清云く、㋚元正㋖啓祚、萬物咸く新なり、意、邪裏に在る。」師云く、㋴「明に棧道を修し、㋱暗に陳倉を度る。」進んで云く、「僧又㋯明教に問ふ、新年頭還つて佛法ありや也たなしや。教云く、無し。僧云く、年年是れ好年、日日是れ好日、甚麼に因つて却つて無き。教云く、㋛「張公酒を喫すれば李公酔ふ、又作麼生。」師云く、㋽「羊頭を懸けて狗肉を賣る。」進んで云く、「鏡清は有と道ふ、明教は甚としてか無と道ふ。」師云く、「江南地暖かに、塞北天寒し。」進んで云く、「學人即今和尚に問ふ、新年頭還つて佛法ありや也た無しや。」師云く、「舊年曾て答へ了れり。」進んで云

㋳洞口。幽邃也、おくふかきたに。
㋮歳節。歳旦、正月の一日。
㋘暦。支那では黄帝がはじめて暦をつくる。
㋫以寅爲正。北斗の星の柄の寅の方へさす月を歳の首の月とす。
㋙艮。うしとら、東北。
㋓四塞。九州の外の夷狄なり。
㋢狼烟。狼の糞煙が直に上る、のろしに用ふ。
㋐鏡清。道怤禪師、雪峰存に嗣ぐ。
㋚元正。皇帝群臣の朝賀を受く。
㋖啓祚。ものの口をあけること、祚は福也、祿也。
㋴明修棧道。明はおもむきなり、棧道は詭道なり、手をかへ品をかへ、しれぬやうなことをする。
㋱暗度。人しれずとほる、二つともに韓信の計略なり。
㋯明教。師寛明教禪師、雲門偃に嗣ぐ。
㋛張公李公。支那の姓は張・李が最も多し、人を呼ぶに張三李四といふ、日本でなら源平藤橘などじや。
㋽懸羊頭。看板によいものを見せて、實はわるいものをうる。
㋪祇對。つつしみこたへる、本錄祇に作るはあやまり。
㋲二大老。鏡清・明教。
㋝彭八剌札。鼓の聲なり、杖鼓を打つ勢なり、三才圖會に出づ。
㋜容裕。裕は寛也、祐に作るべし。
㋑君子。君子は瑣細なることに目はかけぬ。
㋺一著。一歩を誤つての意、放過はほつておく、放任なり。
㋩元宵。正月十五日を上元・元宵・元夕といふ。
㋥有照有用。臨濟錄にあり、照

く、「恁麼の(ヒ)祇對、(モ)二大老と相去ること多少ぞ。」師云く、「傍人の度量するに一任す。」進んで云く、「上來一一指示分明、向上の一句、又作麼生。」師云く、(セ)「彭八剌札。」進んで云く、「時に應じて(ス)裕を容る、慶宜しからずといふことなし。」師云く、「(イ)君子は介視せず。」僧禮拜。師乃ち主丈を拈じて云く、「天一を得て以て淸く、地一を得て以て寧く、君王一を得て以て國を安んじ民を撫す。歲月一を得て以て舊を送り新を迎ふ。衲僧一を得る時、又且つ如何。」主丈を靠けて云く、「止みね止みね、(ロ)一著を放過すれば、第二に落在す。」

(ハ)元宵、上堂。(ニ)照あり用あり、(ホ)牛頭沒し、馬頭回る。或は明或は暗、雪中の(ヘ)粉、墨中の煤、龍山箇の閒言語を吐けば、燈籠聽き得て笑ひ腮に滿つ。笑つて三更に到れども人の會する勿し。徐々として壁に(ト)沿つて天台に上る。

(チ)雪に因つて、兩堂(リ)首座(ヌ)維那(ル)典座を謝する、上堂。雪花亂墜、空に一翳なし。人天の眼目、元來豁爾、(ヲ)前後一照、紛飛の心を起さず。(ワ)賓主歷然、寧ろ明白裏に居らんや。且つ何を以てか(カ)驗と爲す。(ヨ)克賓(タ)

は事物の觸覺、用は認識直覺の鋭敏なこと。

(ホ)牛頭。馬頭。華嚴經の意に出づることばなり、唐宋時代には流行語で、日本でならば太郎次郎とか赤鬼青鬼とか云ふやうなもの、この語は日本でならば、爺は山へ柴苅に、婆は川へ洗濯にといふ位なり。

(ヘ)粉。胡粉、おしろい。

(ト)沿。つたふて。

(チ)因雪謝。因はゆゑと譯す、どだいにする意、雪のふるなどだいにして。謝は冬制があいて兩班交代する常格なり、今はこの四人斗り退職とみえたり、夏中の功勞に對するあいさつの上堂。

(リ)首座。この四役は禪宗の役僧の重なるもの。

(ヌ)維那。此には悅衆と云ふ、梵唄を掌る役なり。

(ル)典座。大衆の齋粥を掌る役な

興化に嗣ぎ、㋹潙山㋞大智に參ず。

㋡佛涅槃、上堂。僧問ふ、㋧「娑羅樹下、㋤跋提河邊、則公案あり、年年今朝現成㋶呈露す。學人㋰上來、請ふ師㋒剖判したまへ。」師云く、「我今再三せず。」進んで云く、「口を開けば則ち喪し、口を閉づれば則ち背く、如何んが㋼通じて犯さゞらん。」師云く、㋨「一把の柳絲收むること得ず、風に和して搭在す玉欄干。」進んで云く、「人間㋔月半に天上月圓かなり、與麼の時節、喚んで㋗乃洹を唱ふると作すが則ち是、喚んで㋳法輪を轉ずと作すが則ち是。」師云く、㋮「一字畫を著けず、八字兩ノ無し。」進んで云く、㋘「胸を摩し衆に告げて、㋫行計忽忽に、㋙槨に㋓雙趺を示す、甚の㋢死急をか著たる。」師云く、㋐「喪車後に藥袋を懸く。」進んで云く、「若し我れ滅度

り。

㋾前後。前堂、後堂。

㋻賓主。兩堂の椽。

㋕驗。ためしなり、しようこと するなり。

㋵克賓。嘗つて維那なり。

㋟興化。唐の名僧、存丼禪師、臨濟に嗣ぐ。

㋹潙山。嘗つて典座たり、傳は上に出づ。

㋞大智。百丈大智禪師、唐の名僧。

㋡佛涅槃。二月十五日。

㋧娑羅樹。沙羅雙樹、此には堅固と云ふ。

㋤跋提河。阿夷羅跋提、此には金沙河と云ふ、金沙を産す。

㋶呈露。呈は出して見せろ、露はむき出し取り出したること。

㋰上來。二義あり、これまで、又堂に上り來ると云ふこと。

㋒剖判。眞中をわり、兩方へわけること、判斷也。

㋼通。開閉共に通じて。

㋨一把柳絲。類說節用の中に、徐中雅が宮詞に「内人曉起怯二春寒一、輕揚二珠簾一看二牡丹一、一把柳……欄干。」大觀珠曰く、此の二句は不犯底の涅槃の大曼荼羅なりと。

㋔月半。十五日。

㋗乃洹。乃は泥に作るべし、泥洹・泥曰・涅槃、この三名前後異出なり、楚夏音同じからず、涅槃と云ふが正なり。

㋳轉法輪。此の法を轉じて他心に度入し、彼をして得悟せしめて、六十二見を破するを云ふ。

㋮一字。珠曰く、本來無物、豈に涅拌法輪に渉らんや。

㋘摩胸。世尊が涅拌會上に胸を摩して、衆に告げての給ふの遺勅。

㋫行計。たびじたくがせはしい。

㋙槨。そとのひつぎ。

すと謂はゞ、我が弟子に非ず、若し我れ滅度せずと謂はゞ、亦我が弟子に非ず、畢竟作麼生か ㋚折合し去らん。」師云く、㋖「賊と作つて關を愼しむ。」進んで云く、「與麼なるときは則ち只箇の ㋴死屍著くる處なし、今に至つて紅爛す百花叢。」師云く、「人天衆前何んぞ ㋱蓋卻せざる。」進んで云く、㋯「五天霧慘み、雙樹煙愁ふ。人天當日 盡く悲號す、甚に因つて ㋛波旬舞袖長き。」師云く、「船上に ㋽散工なし。」進んで云く、「涅槃後 ㋪大人の相ありと、如何なるか是れ大人の相。」師云く、「尺二の眉毛頷下に生ず。」進んで云く、「上來一一指示、甚れ奈んせん、釋迦老子身を藏すに路なきことを。」師云く、「坑に臨んで人を推さず。」進んで云く、㋲「三尺と一丈六と且つ同じく手を攜へて歸る。」師云く、「春色高下なし花枝自ら短長。」僧禮拜。乃ち云く、「二千年㋝前萬化千變、二千年後 ㋜乞ふ再面なし。好箇太平の時節、波旬卻つて一雙眼を具せんや。」拂を以て床を擊つて、下座。

上堂。花柳豔を呈し、燕鶯聲を鬪はしむ。東參西扣、㋑太無厭生。主丈を卓して云く、㋺「自ら是れ歸せず、歸は便ち得てん五湖の風月、誰ありてか爭はん。」

㋓雙趺。大迦葉が至るとき、兩の足を出して示し給ふ。
㋢死急。きつう、せはしない、とんだことができたぞ。
㋐喪車後。死後藥の穿鑿は役にはたたぬ。
㋚折合。をれあひ、つばめをあはすなり。はじめとしまひとをつばめをあはす。
㋖作賊愼關。賊となる人は自家の關防をつゝしむこと常人に過ぎたり。
㋴死屍。涅拌脫體、全身。
㋱蓋卻。なぜに見えぬやう蓋をしてしまはぬぞ。
㋯五天。南北東西と中となり、天竺は印度なり、唐には月と譯す。
㋛波旬。此には惡と譯す、釋尊出世のときの魔王の名也。
㋽散工。散は閑散の散也、船の居さらうのがこなり。
㋪大人相。巍々堂々、煒々煌々。

上堂。德山の棒、臨濟の喝、雲門の㋩一字關、洞山の㋥五位㋭訣、古人各㋬韜略を擅にす。殺活擒縱、謂つべし㋣水銀地に墜つと。良久して云く、㋠「三十六路走るには如かず。」

四月八、上堂。瞿曇曾て生ぜず、甚に因つてか今日を賞す。㋷毘藍園裏、一犬虛を吠ゆれば、西天此土、千㋦猱實を㋸啀く。㋾韶陽徒に意氣を張り、㋻藥山錯を將て錯に就く。龍山今日力を盡し、㋕格を變じ㋵途を通じ去らん。主丈を卓して、下座。

㋟結夏、小參。僧問ふ、「荷錢綠を鑄、㋹梅彈金を垂る。㋞時節因緣、願はくは提唱を聞かん。」師云く、「早く上座に答へ了らる。」進んで云く、「時節既に到れば、其の理自ら彰はる、如何なるか是れ其の理。」師云く、㋡「閙市裏に㋧碌塼を颺

㋲三尺と一丈六と。如來は長に非ず、如來は短に非ず。

㋝萬化千變。如來種々に身を現じて濟度し給ふ、變じかゝろを變と云ふ、變じきりたるを萬化千變と云ふ。

㋜乞無再面。願ふても、またと再びお目にかゝられぬ。

㋑太無厭生。あきがない、あまりよくがふかい。

㋺自是。唐の崔塗が詩。

㋩一字關。雲門の極意。

㋥五位。洞山の五位。

㋭訣。祕術。

㋬韜略。兵書より時事。

㋣水銀。安排造作に渉らず。

㋠三十六路。三十六計と同じく、にぐるにしかず。

㋷毘藍園。毘藍は風の名なり、義に非ず、園は藍毘と名づく、舍衞國王の御苑也。

㋦猱。獿に作るべし、惡犬長毛也、むくいぬ。

㋸啀。音は崖、いがみあふこと。

㋾韶陽。雲門を指す、雲門寺は韶陽府に在り、我れそのかみ若し見ば一棒に打殺して、狗子に與へて喫却せしめ、貴ぶらくは天下太平を圖らんといへしを云ふ。

㋻藥山。會元五、藥山の章に灌布衲佛を浴すの因緣。

㋕變格。格は常式。

㋵通途。とほりみちをあける。

㋟結夏。春秋に乞食(頭陀)し、冬夏に坐禪す。

㋹梅彈垂金。鳥をいるはじき珠、彈は玉也。

㋞時節因緣。因緣は内と外と。

㋡閙市裏。さわがしきまち。

㋧颺碌塼。やきかはらかけをあぐるで、何ぞ打着せざることを惑へんとなり。

㋤寶扇老婆。有ゝことは自ら有り、用ふることはざるなり、自分の手にありながら、まつ

く。」進んで云く、「佛性の義又如何ん。」師云く、㋤「賣扇の老婆手日を遮る。」進んで云く、「與麼なるときは則ち㋶鏡は金殿の燭を分ち、山は月樓の鐘に答ふ。」師云く、「須らく知るべし、㋰三島の外、別に一乾坤あることを。」進んで云く、「九旬の禁足魚網に游び、物外の安身鳥籠に入る、㋒此の二途を去けて、如何が是れ衲僧行履の處。」師云く、「虚空に馬を走らしめ、陸地に船を行る。」進んで云く、「覿面全く彰はる解脫門、㋼一踏牢關㋨百雜碎。」師云く、㋔「怪力亂神。」進んで云く、「記得す、㋗龐居士云く、『十方同聚會、箇々學無爲、此は是れ㋳選佛場、心空㋮及第して歸る』と。意那裏にか在る。」師云く、㋘「紫羅帳裏に眞珠を撒す。」進んで云く、㋻「心は工伎兒の如く、㋙意は和伎者の如し。如何んが無爲を擧せん。」師云く、「火を覓めては煙に和して得、泉を擔つては㋓月を帶びて歸る。」進んで云く、「此れは是れ選佛場、那箇か是れ及第底の心。」師云く、㋢「蹉口に道著す。」進んで云く、「上來已に㋐指歸を蒙る、向上宗乘の事如何。」師云く、「雞頭の艸鞋。」僧禮拜。

乃ち云く、㋚「大圓覺を以て我が㋖伽藍と爲す、結も也た我に由り、解も也た我に由る、結するときんば則ち遍界盡く結す、若しくは凡若しくは

かはぬ、燈臺もとくらしなり。

㋶鏡分。この一聯は表は景物を詠じたるも、裏は家風にかゝり、意は心鏡明かなる故、よく邪正を見わけ、胸中虚なる故、大小根機に隨つて應接するなり、上句は眼見、下句は耳聞。

㋰三島。蓬萊、方丈、瀛洲。また此の外に一世界がある。

㋒此の二途。游網と入籠と。

㋼一踏。ひとふみにふみ付ける。

㋨百雜碎。物を散々に打ちくだくの意。

㋔怪力亂神。怪はばけもの、力は勇士のちからわざ、亂神はすぢみちの立たぬ鬼のこと。

㋗龐居士。馬祖に嗣ぐ、襄州の龐蘊、字は道玄、五燈會元三に此の頌をのす。

㋳選佛場。禪堂なり。

㋮及第。卒業の意。

聖、艸木(コ)昆蟲、同時に禁足安居、遂に我が所制に違く者あることを見ず。解するときは則ち遍界盡く解す、萬象縱横無礙、更に(メ)規繩の拘はるべきなし。便ち見る(ミ)嘉州の大像、艸鞋を(シ)緊峭して、(エ)妙喜世界に(ヒ)優遊し、(モ)陝府の鐵牛、横に(セ)楖櫟を肩つて榑桑國中を巡歴するを。只結せず解せざる時の如くんば、至竟、甚の(ス)擧措をか作す。」良久して云く、「山前麥熟するや也た未だしや。」

復擧す、百丈和尚、上堂し訖る毎に、大衆を召す、大衆首を回らす。丈云く、「是れ什麼ぞ。」拈じて云く、「君子は言浪りに發せず、發すれば必ず度に中る。且く道へ、百丈恁麼に道ふ、『意何くに在る。』(イ)吽吽。枕上三更の夢を(ロ)喚び回して、江南萬斛の愁を惹動す。」

(ケ)紫羅。居士の心底がさつばりとみえた。

(フ)心如工伎兒。楞嚴經第四にあり、心は第八識の心。

(コ)意如和伎者。意は第六識の意、歌をつけるもの。

(エ)帶月。おびるは、ひとつにいれて。

(テ)蹉口。足跌也、失口と同じ、口がすべり、いひぞこなひをするなり。

(ア)指歸。指は方角をさし示す、歸はおちつきどころ。

(サ)大圓覺。圓覺經の文。

(キ)伽藍。此には衆園といふ。

(ユ)昆蟲。昆は明也、明蟲とは陽にして生じ、陰にして藏る。

(メ)規繩。規はぶんまはし、繩はすみなは。

(ミ)嘉州大像。佛祖統記四十一に、沙門海通、嘉州大江の濱に於て石を鑿り、彌勒の像を鑄る、高さ三百六十丈、覆ふに九層の閣を以てす、其寺に扁して凌雲といふ。

(シ)緊峭。緊は絲を纏ふこと、急也といふて絲やなはのつよくよりのかゝりたること、琴の緒のしまりたるにもいふ、峭は急也と、二字にて草鞋をつよくはく也。

(エ)妙喜。維摩の見阿閦佛品にあり。

(ヒ)優遊。寛容をいふ、ゆつくらとの意、自得のこと。

(モ)陝府。陝府に鐵牛廟あり、牛頭は河南に、尾は河北に、禹以て河患を鎭す。

(セ)楖櫟。そくりつ、又はしつりつ。木の名、杖と爲すべし、ひねつた木。

(ス)擧措。珠曰く、よきはあげ、あしきはおく、いかゞさばきたらよいぞ。

(イ)吽々。牛鳴也、梵語うんうん、此に恐怖と云ふ。

次の日上堂。格外の玄機、(ハ)佇思を勞せず、甚の(ニ)克期取證、茄子瓠子とか(ホ)論せん。然も是くの如くなりと雖も、未だ免れず今日(ヘ)西天の樣に依つて(ト)葫盧を畫くことを。何が故ぞ(チ)朝四暮三、便ち歡喜す。咄。

上堂。主丈を拈じて云く、(リ)「汾陽和尙云く、『主丈子を識得せば、一生參學の事畢る』と、龍山は即ち然らず、主丈子を識得せば、更に須らく行脚し去るべし。」丈を靠けて、下座。

上堂。(ヌ)阿剌々、横該抹、鬼面神頭、二九十八、(ル)善財失脚す百城の南、笑倒す(ヲ)無邊身菩薩。主丈を卓す。

(ワ)半夏上堂。「前四十五日、既に往くをば咎めず。後四十五日、道預め諾せず、正當今日。」拂子を拈起して云く、「龍山手裏の拂子、(カ)𨁝跳

(ロ)喚回。この二句鷓鴣が杜鵑の二句ならん、珠曰く、箇の一句、百丈曰是什麼と云ふ處を拈出す。

(ハ)佇思。久立すること。

(ニ)克期取證。長期百二十日、中期百日、下期八十日と圓覺經に出づ、克期は期日を約するなり。

(ホ)論。なんのとんぢやくしやう、なんの詮義をしやう。

(ヘ)西天樣。天竺の法に。

(ト)葫盧。ものわらひ。方語に空心猶在。

(チ)朝四暮三。莊子齊物篇に出づ、名は三と四となり、實は通じて七の數也、名實未だ嘗て變ぜず云云。此れ是非の名異と雖も理の實は則ち同じきに喩ふ。

(リ)汾陽。善昭禪師、首山念に嗣ぐ。

(ヌ)阿剌々。阿は助字なり、剌々は細語不休のこと。言語多くくり返しくりかへしいふ。らつらつは急を言ふ、古來あら恐しやと云ふとあるはまちがひなり、日本のざわざわ又ばらばら。

(ル)善財。童子。文殊善財をして南方に往いて五十三の善知識に參ぜしめ、一百十城を歷る。

(ヲ)無邊身。涅槃經に出づ。

(ワ)半夏。六月一日。

(カ)𨁝跳。𨁝は諸錄みな𨁝に作るも、やはり勃の意にして、下にあるものがずつとおきて、物をおしやることなり。

(ヨ)三十三天。梵には怛唎耶、怛喇奢、こゝに三十三と云ふ。

(タ)歡喜園。三十三天王その中に入りて、巳に歡喜善歡喜の二石の上に坐し、心歡喜を受く、また極樂を受く、故に歡喜園と爲すこと、意、法苑珠林に出づ。

して㋵三十三天に登り、㋟歡喜園裏に在つて、㋹帝釋に對して深妙法を說き、諸天圍繞、默然として肅聽す。且く道へ箇の什麼の法をか說く、今朝是れ六月朔。」

㋞上堂。火雲太虛を蒸す、太虛熱からず。㋡薰風太虛を拂ふ、太虛凉しからず。若し能く恁麼に㋮領略せば、妨げず緣に應じて㋤倘佯することを。然も是くの如くなりと雖も、更に須らく向上の行履あることを知つて始めて得べし。噁、㋶佛錢を偸んで佛香を買ふ。

㋰上堂。清商、候を告げ、㋒法歲將に周らんとす。敢て問ふ、諸仁者、所作㋭已に辨ずるや不や。若し也た㋨未だ辨得せずんば、龍山須らく諸人の背後に向つて展拜すべし。何んぞ也、㋔手臂終に外に向つて曲らず。

㋗解夏小參。僧問ふ、㋳「布袋頭開けて天地寬し、㋮金風葉を翻して階前に墜つ。正與麼の時、請ふ師提唱。」師云く、「太無厭生。」進んで云く、「恁麼なるときんば、則ち溪聲長く耳に在り、山色門を離れず。」師云く、㋘「飽病醫し難し。」進んで云く、㋫「翠巖夏末に、衆に示して云く、『一夏以來、兄弟の爲に㋙說話す、看よ翠巖が㋓眉毛㋢在り麼。』是れ何んの心行ぞ。」師云

㋹帝釋。忉利天主。
㋞上堂。六月望。
㋡薰風。東南の風、なつのかぜ。
㋥領略。うけとる、のみこむ、がてんする、心得る、領。取なり、わがものにする也、略。
㋤倘佯。此二字は徜徉なるべし、徘徊なり、たちもとほる。
㋶偸佛錢云云。方語に一得一失。
㋰上堂。七月旦。商、秋氣和するときは商聲ととのふ。
㋒法歲。十五日、解制の日。
㋭已辨。無學位の人也。
㋨未辨。內外凡及び前三果也。
㋔手臂云云。方語に理合如是。
㋗解夏。七月十五日、自恣の日(盂の十五日)。
㋳布袋。布袋の頭は口なり。
㋮金風。あきのかぜ。
㋘飽病。はらのふくれた、しにくい、れうぢ。
㋫翠巖。翠巖令參禪師、雪峰存に嗣ぐ。

く、「三更(ア)孟津を過ぐ。」進んで云く、「後來(サ)保福云く、(キ)『賊と作る人心(ユ)虛る』と、意那裏にか在る。」師云く、「人を(メ)品藻することは卽ち得たり。」進んで云く、(ミ)「長慶云く、(シ)『生せり。』如何んが領略せん。」師云く、「葫蘆棚上に猪頭を掛く。」進んで云く、「雲門云く、(ヱ)『關。』又作麼生。」師云く、「崑崙鐵袴を著く。」進んで云く、(ヒ)「四大老、與麼の敲唱還つて出身の分ありや也た無や。」師云く、(モ)「艸本天下同じ。」進んで云く、「謂つべし(セ)卞氏場中に巨璞多く、(ス)孟嘗門下高賓足れりと。」師云く、「從レ貧入レ富易。從レ富入レ貧難。」進んで云く、「龍山今夏還つて人の爲に眉毛を惜しまざる底ありや。」師云く、「青山足を擧げず、日下燈を挑げず。」進んで云く、「未審古人と是れ一耶是れ二耶。」師云く、「來つて我を(イ)

(ヨ)說話。閑骨の辭じや、第二義門に下りて、佛がどうの、祖師がどうのと。

(エ)眉毛。まゆげ。佛法をあまりに、俗向きに說くと、その罰にて眉もひげも、おちてしまうと云ふ故事に基きいふ。

(テ)在麼。有麼ではない、まだついてゐるかどうかと云ふの意なり、日本人ならば頭はまだはげて居ないかどうかと云ふくらゐなり。

(ア)孟津。盟津と同じ、書經の周書にあり。

(サ)保福。雪峰に嗣ぐ、翠岩を賊と見てゐる。

(キ)作賊人心虛。泥坊をやるものに正直者はない。

(ユ)心虛。こころいつはるとよましてあれども、虛は怯也、おくびやうのことなり、ものごとに臆するなり、心虛すと、これが正當ならん。

(メ)品藻。しなさだめするなり。

(ミ)長慶。長慶慧稜禪師、雪峰に嗣ぐ。

(シ)生也。のびてゐるぞ、まだついてゐる居らぬもない。

(ヱ)關。唐宋時代の俗語である、この語は警戒を意味するに使用してゐる、そらはまるぞ、そらあぶないよ、關所じやぞ、と云ふくらゐのもの。

(ヒ)四大老。翠、保、長、雲。

(モ)艸本。本は木の誤り歟。

(セ)卞氏。卞和也、楚人、玉璞を楚山の中に得て之を厲王に獻ず、王之を玉人に相せしむ、玉人曰く、石なりと、それより武王にも獻じたるも、同じく石也として卞氏を誑かして、遂にその右足を刖り、文王位に卽く、遂に和氏の璧と曰ふに至るの故事あり。悲しいかな、寶玉にして貞士にして云云。

掩采すること莫れ。」進んで云く、「上來一々指示を蒙る、(ロ)曲終へて人見えず、江上數峯青し。」師云く、「切に別人に向つて擧ぐること莫れ。」僧禮拜。師乃ち拄杖を拈じて云く、「這の木上座、今夏者裏に在り、體上に寸絲を掛けず、口中に一粒を費さず、肯へて衆に隨つて禁足せず、亦外に向つて遊山せず、(ハ)西院(ニ)兩錯の商量を(ホ)鼻笑し、文殊(ヘ)三處の度夏を(ト)平欺す。結も也た管せず、解も也た知らず、只麽に(チ)黑粼皴地、九旬の光陰を過了す。且く道へ他を賞するが便ち是、他を罰するが便ち是、諸人若し斷ずること能はずんば、直に木上座をして自ら(リ)斷り去らしめん。」主丈を卓す。

復擧す、洞山云く、「初秋夏末、兄弟東に去り西に去る、直に須らく萬里(ヌ)無寸艸の處に向ひ

(ス)孟嘗。君名は文、姓は田氏、食客數千人、貴賤となく等一す。

(イ)掩采。人の威光を減ずる事、色采をかくす、今のことばでいへば。

(ロ)曲終人不見。唐才子傳の錢起傳に見ゆ。

(ハ)西院。西院(汝州)思明禪師、寶壽沼に嗣ぐ、臨濟玄三世なり。

(ニ)兩錯。門人と問答故事あり、傳燈十二の傳にあり。

(ホ)鼻笑。せゝらわらひのことか、無準錄上にみゆ。

(ヘ)三處度夏。文殊一月は波斯匿王の后宮に、一月は童子の學堂に住し、また一月は諸の婬女の舍に住し云云と、大方廣寶篋經に出づ。

(ト)平欺。みこなし、あなどる。

(チ)黑粼皴。拄杖を見よ、こくりんしゅんちじゃ、粼は鱗と同じ、石礫也、皴はしわ。すさまじい、手もつけられぬ。

(リ)斷。決斷なり。

(ヌ)無寸草。いかなる寸草か、具眼のものは須らく自知せよ。

(ル)作法。作ははじめてこしらへる也、左傳昭公四年に出づ。

(ヲ)涼。薄也、かろしと見るべし。

(ワ)貪。あつし也、欲ふかきこと。

(カ)弊。政道の年代久しくなりて、失態の出來ること、しくせのわろいこと。

(ヨ)將。おつゝけ、やがて。

(タ)胡孫。さる。

(レ)只可自怡悅。陶弘景が詩、事文類前集に出づ。怡はうれしうて、のんびりすること、悅はうれしうて、すくこと。

(ソ)栗棘蓬。栗はいがあり、棘はいばら、蓬はよもぎ、俱に難路なり。

(ツ)欄邊。牛の圈を欄といふ。

(ネ)蠹。さあどうじや。

(ナ)登科。支那では人を試驗する

去るべし。」石霜闇を得て云く、「門を出づれば便ちこれ艸。」指して云く、(ル)「法を(ヲ)涼きに作る、其の弊術は貧し。法を(ワ)貧きに作る、(カ)弊(ヨ)將に若何がせん。」

解夏上堂。僧問ふ、「布袋を解開して、七縱八横、無尾の(タ)胡孫、甚の快活かある。」師云く、(レ)「只自ら怡悦すべし。持して君に送るに堪へず。」進んで云く、(ソ)「栗棘蓬を呑まず、箇の什麼をか作す。」師云く、「鐵牛喫せず(ツ)欄邊の艸。」進んで云く、「點胸點肋、(ネ)聻。」師云く、「登科は他の(ナ)登科に任す、(ラ)拔萃は佗の拔萃に任す。」進んで云く、「極則の事又如何ん。」師云く、(ム)「十字街頭尺八を吹く。」進んで云く、「人天交接如何んが相見せん。」師云く、「兩眼兩眼に對す。」進んで云く、「與臆なるときんば、則ち(ウ)愁思は蟬外に(ヰ)偏に覺え、歸心は更に鴈邊に向つて多し。」師云く、「事(ノ)一向なし。」進んで云く、「者裏若し(オ)性燥の漢あつて、直に山を下り去らば、和尚還つて佗を肯はんや也た無や。」師云く、(ク)「腦後に腮を見ば與に往來すること莫れ。」進んで云く、「忽ち人ありて、夏何れの

た登科と云ふ。

(ラ)拔萃。撰拔を云ふ。

(ム)十字街頭。方語に云ふ、千人萬人聞く云云。

(ウ)愁思。今は灰にて、心もちと譯す。

(ヰ)偏。とりわけ、べつして。

(ノ)一向。一偏と同じ。

(オ)性燥。氣のいらち。

(ク)腦後見腮。つむりのうしろから、腮はほほのは、おぎと。

(ヤ)蠟人氷。蠟は臘に作るべし。年臘をいふ、氷は潔白なれば年臘の高行者。

(マ)鐵彈子。大底は大小底に、て

つのまるがせ。

(ケ)兩頭鼠糞。傳燈二十七に出づ。

(フ)囉々哩。歌うたふときのあひの手の辭。

(コ)退院上堂。嘉曆元年の偈なり、この偈大いに味ふべし。

(エ)釘々懸挂。釘々はくぎづけでも、懸挂はつるしたのでも、ていいは鳥の木にとまつて居る樣などを云ふ。

(テ)沒交涉。かゝりあひなし、らちがあかぬ、よつてもつかぬこと、古來からの譯語なれども、とつてもつかぬの意なるべし。

處に在ると問はゞ。未審如何んが祇對せん。」師云く、「私事官酬を得ず。」僧禮拜。師乃ち云く、㋳「蠟人氷を消散し、㋮鐵彈子を擘開す。㋘兩顆の鼠糞變じて金と成り、翠巖眉毛長きこと尺二、㋫囉囉哩、秋風誰か謂ふ西從り起ると。」拂を擊つて、下座。

㋙退院上堂。一片の閒雲、變態多し、龍に從つて暫く此の山頭に寄る。釘㋓釘懸挂㋢沒交涉、又秋風を逐ふて別州を過ぐ。拂子を擲下して、下座。

相州鎌倉縣金寶山㋑淨智禪寺語錄

侍者曇林編

師、㋺嘉曆二年二月十二日入院。

佛殿。㋩三人行る時、必ず一師を得、㋥三佛並坐して、何の所爲かある、休みね休みね、㋭六耳謀を同じうせず。

㋬拈帖、㋣傳箭令㋠暗號子、喚んで㋷靈山の囑と作す、都べて是れ相似す、㋦維那に付與して㋸且く例を擧づ。

㋑淨智寺。鎌倉五山の一、開山は大休正念禪師。
㋺嘉曆二年。北條高時の請による、後醍醐帝嘉曆二年卯。
㋩三人。論語の述而に出づ、この句に本尊脇立の心を暗に含めり。

法座を指す。者の一座子、建立を假らず、(ル)叵耐なり(ヲ)須彌燈王幾多の階級を安著するに、新寶山一時に坐斷し去らん。便ち登座。

香を拈じて云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して恭しく爲に

今上皇帝、陛下、聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる、恭しく願はくは

(ワ)聖謨(カ)悏悏、寶祚永く(ヨ)玄扈の高躅を踐み、(タ)淳化(レ)蕩々、世樞咸く(ソ)丹陵の古風に復せんことを。」次に香を拈じて云く、「此の香は征夷大將軍の爲に、(ツ)祿算を資陪し奉る。伏して願はくは(ネ)營門(ナ)刁斗を擊つことなし。(ラ)三軍戈を止め、官路烽烟を見ず、四塞(ム)壁を銜む。」又香を拈じて云く、「此の香は(ウ)相州太守都(ヰ)元帥の爲にし奉る。伏して願はくは(ノ)壽基福基、

(ニ)三佛。淨智寺佛殿には釋迦・彌勒・彌陀の三像を安す。

(ホ)六耳同謀。六耳は三人なれば三人は則ち謀成就せざるを云ふ。

(ヘ)拈帖。公帖をさゝげて、すなはち幕府よりの請狀なり。

(ト)傳箭令。故事あり、箭を傳へて號となし、令を出す、將軍家の帖、すなはち請狀ゆゑ、此の二件に比す。

(チ)暗號子。かくしあひづ也。

(リ)靈山囑。世尊の法は國王大臣に付囑するの意。

(ヌ)且舉例。おちついたことではなけれども、まあさうでも。

(ル)叵耐。こらへられぬ。

(ヲ)須彌燈王。維摩經不思議品に、佛身長け八萬四千由旬、師子座の高さ八萬四千由旬。

(ワ)聖謨。謨は謀なり、子孫長久の計。

(カ)悏々。大なる志なり、天下後世の思慮のふかくなること。

(ヨ)玄扈。黃帝。

(タ)淳化。淳は純也。

(レ)蕩々。平かなること、廣遠のこと。樞、本なり。

(ソ)丹陵。唐堯なり、堯の生れしところの地名。

(ツ)祿算。祿は福なり、算は壽也。

(ネ)營門。軍壘を云ふ。

(ナ)刁斗。銅を以て作る、一斗を容る、晝は飯食を炊し、夜は擊て、持し行く鐎器なり。

(ラ)三軍。五師を軍となす、一萬二千五百人、天子は六軍、諸侯は三軍。

(ム)銜璧。降參するなり、左傳僖公六年に故事が出づ。

(ウ)相州。相模守北條平高時、剃髮して崇鑑と號す。

(ヰ)元帥。征討の事を掌るを云ふ、鎌倉將軍家の執權職。

(ノ)壽基。地形。

(オ)親衞校尉。日本の將監なり、

倶に堅うして聖明を萬世に佐け、信力智力、兼具つて、正法を無窮に護らんことを。」又次に香を拈じて云く、「此の香は、本寺大檀那㋔親衞校尉大禪定門の爲にし奉る。伏して願はくは命府の㋗運數、㋳芥城を盡して餘りあり。身宮の㋮德儀㋘藥樹の如くにして、長く茂らんことを。」又香を拈じて云く、「此の香、㋫貞實にして枝葉を絕し、春に逢ふて芬を著けず、只天然些子の氣あり。他の無鼻孔の人の聞かんことを許す。爇いて以て、前住建長再住本山敕諡佛國禪師高峰大和尙に供養して、用つて法乳の恩に酬ゆ。」

座に就いて、問答罷んで乃ち云く、「大いなる哉㋙箇の事、天を覆ひ地を載す、諸相を勦絕して、而も㋓勦絕の跡を留めず、萬靈を字育して、㋢字育の功を宰らず。拈起する也、㋐吒々沙沙、放下する也、㋚綿綿密密、乃佛乃祖、皆悉く他の恩力を承けて、以て㋖蹤を接し㋴武を踊んで、利濟時を失はず。賢王賢臣、亦是れ他の恩力を承けて、以て法を護し邦を安んじて、今に至るまで間斷なし。直に得たり盡大地㋱卉木叢林、人畜艸芥箇箇他の恩力を承けて、今日金寶山裏に聚會して、共に㋯萬年歡を唱ふ。諸仁

北條師時が子將監平の宗政也、淨智寺の開基。
㋗運數。しだいにまはりてゆく數也。
㋳芥城。大智度論三十八に出づ、劫は盡きず、芥子は盡きるのたとへで、長壽の意味なり。
㋮德儀。儀は容なり、ふりといふこと。
㋘藥樹。義楚六帖十八に出づ、又耆婆の故事もあり、大樹のたとへを云ふ。
㋫貞實。法華方便品に出づ、貞は定なり、精定にして動惑せざる也。
㋙箇事。禪宗の一大事。
㋓勦絕。剿也、絕也。
㋢字育。字はやしなひ、育はそだてる、乳也、長也。
㋐吒々沙々。はらりはらりと髮のみだれぬ如く、又したづゝみしてくらふゆゑ、又米沙等の物を降下するひゞき也。

者、還つて分明に聽取することを得るや也た無や。倘し或は未だ然らずんば、更に須らく耳を側つべし。」主丈を卓すること一下。

復擧す、㋛世尊一日陞座、文殊㋽白槌して云く、「諦觀法王法、法王法如是」と。拈じて云く、「釋迦老子、等閒に㋪無孔笛を吹く、文殊、謾に㋲氈拍版を把つて㋝撃節す。且く道へ畢竟什麼の曲調をか成し得たる。噁、㋜鄭衞の門には須らく耳を掩ふべし。」

佛涅槃、上堂。僧問ふ、「胸を摩し衆に告げて、強ひて癡獃を誑す。大聖本出沒なし、什麼の處にか去來あらん。」答へて云く、「須らく知るべし、㋑三代の禮樂、乃ち是れ㋺五霸の兵器なることを。」進んで云く、「謂つべし㋩平地に骨堆を起すと。」答へて云く、「彩氣夜常に動き、精

㋚綿々密々。まわたの絲、一筋のほそくながく間のきれぬこと。

㋖接踵。前の人のきびすへ後の人の足がつき合ふなり、あとからだんだん。

㋴蹑武。前の人が一足向へよると、後の人がその足跡を半分ふまへる。

㋱卉木。草木通じて卉と云ふ、又くさ百草の總名。

㋯萬年歡。東山外集上に、「霜芥滿」園禾又熟、胡家曲調萬年歡。」

㋛世尊。佛陀の十號の一。

㋽白槌。槌といふて六角にしたる木の長さ二尺ばかりのたゝくもの、禪家に用ふ、之をならしてこの諦觀法王法の語をとなへて、出世開堂式の證明をなす。

㋪無孔笛。無孔笛も氈拍版も、どちらも無音のもの、上々根の者にあらざればならせぬ。一曲風前格調高して、如來の説法にたとへる。

㋲氈拍版。氈は牛毛をとりあつめて板をつくる、拍版は日本のようつだけ也、こゑなきを云ふ。

㋝撃節。「きやくせつ」とよむべし、奏樂の節に應じて樂器ならすより、うけこたへのことにつかふ。

㋜鄭衞。詩經集註に、鄭衞の樂はみな淫聲となすとあり、みな男が女を悦ばすは衞の樂なり、女が男を悦ばすは鄭の樂なり。

㋑三代。夏、殷、周。

㋺五霸。齊の桓、晋の文、秦の穆、宋の襄、楚の莊也、孟子の告子に出づる注をみよ。周の中ほどより亂世になり、初め二百餘年を春秋の代と云ひ、次の二百餘年を戰國と云

靈山逢ふこと少なり。」進んで云く、「二千餘年の㋥屈、和尚還つて雪め得ん麼。」答へて云く、㋭「野火焼けども盡きず、春風吹いて又生ず。」進んで云く、㋬「今日は卽ち有、明日は卽ち無、畢竟して如何んが定當せん。」答へて云く、「他の閑事を管して㋣作麼。」進んで云く、「直に得たり諸天悲泣し、波旬鼓舞することを。」答へて云く、「一家事あれば、百家忙し。」進んで云く、「春色高下なし、花枝自ら短長。」答へて云く、「脚を伸ぶることは元脚を縮むる裏に在り。」僧禮拜し下る、乃ち云く、「若し吾れ滅度すと謂はば、是れ吾が弟子にあらず、人の知らざらんことを欲せば、如かじ爲ざらんには。若し滅度せずと謂はば、亦吾が弟子に非ず、頭を改め面を換へ、東倒西擂、大衆、釋迦老子舌頭の落處を識らんと要する麼、一たび㋠潘郎に事卻して從り後、也た解す人前に羞を識らざることを。」

三月旦上堂。桃㋷萼紅を呈し、李花白を獻ず。春光敢て人を拒まず、只是れ人の領略するなし。良久して云く、㋦「積代の㋸簪纓、暫時の㋾落魄。」

㋻受昭二首座を謝する上堂。薄福の住山、㋕肚皮㋵箆を欠く。舊知の訪

ふ、春秋の代にあたりて天子の威光をあがめ、世を靜謐にしたる人五人あり、之を五霸と云ふ。

㋩平地起骨堆。大惠武庫の慈照聰禪師の章に出づ。

㋥屈。はぢ也、無質、又はむれんとも譯す、かゞむの意。

㋭野火。白氏文集に出づ。

㋬今日卽有。涅槃經後分に出づ。

㋣作麼。さあどうじや也、なににかせんと訓す。

㋠潘郎。晋書に、潘岳名は安仁、姿儀美なり、小名を檀奴と云ひたるゆゑ檀郞とも云ふ、妻から夫をよんで郞と云ふ。

㋷萼。花の萼也。

㋦積代。先祖より代々。

㋸簪纓。さんはかんむりをとめるかんざし、纓。二字にて官人のことを云ふ。

㋾落魄。ふしあはせ、おちぶれ。

㋻受昭。二人とも夢窓と同參に

ひ来ることを引き得て、彼此同じく氷雪を嚼む。未だ(タ)海月山雲を話せず、先づ(レ)百醜千拙を闘はしむ。甚に因つてか此くの如くなる、(ソ)多子塔前に曾て(ツ)落節す。

四月旦、(ホ)直歳を謝する上堂。汾陽、慈明に囑して云く、「修造は自ら人あり、且く佛法の與めに主と爲れ。」拈じて云く、「大小の汾陽、話兩(ナ)橛と成る、金峯門下修造已に人を得たり、別に佛法の說くべきなし。」大衆を召して云く、「此に於て薦得せば、僧堂(ラ)厨庫に對し、(ム)佛殿(ウ)山門に對す。若し也た未だ薦せずんば、只連夜の雨に因つて、又一年の春を過ぐ。」

佛誕生、上堂。瞿曇降生、(ヰ)大驚小怪、自ら淨裸裸地に誇る。脫體寸絲掛けず、金峯普請して佗を洗滌す。只要す赤肉も也た存せず、直に他の骨節毛竅心肝(ノ)五臟、一時に換却せんを待つて、方に許す大口を開いて、天上天下、唯我獨尊と道ふことを。然も是くの如しと雖も、明眼に看來れば、(オ)浣盆浣盆。(ク)喝一喝。

結夏小參。微塵刹界を統べて、以て我が伽藍と爲す。無邊の含靈を領じて、以て我が大衆と爲す。(ヤ)十世古今を括つて、刻期の限を立て、一切の

して、佛國國師の法嗣也、南禪の天庵妙受、萬壽の杲山宗昭。

(カ)肚皮。古人は三すぢの竹のれそを帶にして枯淡なる住山であつたに、我はそのれそ一すぢもないといふ。

(ヨ)䈂篾。篾は竹の皮也、たけのわ。

(タ)海月山雲。これは非常の美句である、宇宙の眞善美を云ふと見ておいてよい。

(レ)百醜千拙。醜はみともない。拙はぶてうほふ。

(ソ)多子塔前。世尊、摩訶迦葉に分座し給ふところ。

(ツ)落節。「らいせつ」とよむべし。本を折ふの義、ちどなり、三人とも佛國國師の法嗣なればなり。

(ホ)直歳。「しつすい」とよむべし。禪宗の役僧の名、普請奉行なり。

事業を用つて取證の行に㋮蔽づ。直に得たり穢土淨邦、處々の綠楊馬を繫ぐに堪へたり。㋘六凡㋫四聖、家家門底長安を透る。結の時、解解の時、結㋙長期延に非ず。短期促に非ず。金寶山中、㋓畬を鋤いて黍を下す。㋢占波國外に、㋐梗游㋚萍跡、更に甚麼の禁足不禁足、前安居後安居とか論ぜん。忽ち㋖伶利の漢あり、出來つて道はん。我也た別に生涯あり、爾が伽藍に居せず、爾が衆數に入らず、十世古今一切の事業、都來我が事に干らず。且く道へ、他什麼の處に向つてか行履せん。良久して云く、㋴「大海を觀る者水の爲にし難し。」

復擧す、僧趙州に問ふ、㋱「萬法一に歸す、一何れの處にか歸す。」州云く、「我れ青州に在りて一領の㋯布衫を作る、重きこと七斤。」拈じて云

㋤橛。杙也、くひぜ。
㋶厨庫。「づく」とよむべし。くり、だいどこなり。
㋰佛殿。禪宗の正殿。
㋒山門。禪宗の大門、又三門ともかく。
㋼大驚小怪。水滸傳に出づ、日本語のげうさん也。
㋨五臟。肝木心火脾土肺金腎水。
㋔浣帒。方語に我汝を識得す。
㋗喝一喝。禪宗では馬祖大師にはじまる、どなりつけるのではない、これはやいみたか、知つたかとやるのじや。
㋳十世。過去三世、未來三世、現在三世、三世を一念と爲すを十世とす。
㋮蔽。蔽は猶レ常也、掩ふにはあらず。
㋘六凡。六道と同じ、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上。
㋫四聖。聲聞、緣覺、菩薩、佛。總べてで十界なり。

㋙長短期。百二十日、百日、八十日。
㋓畬。あら田なり。
㋢占波國。「ちやんぱこく」とよむも可なり、南海の南なり、しかしただ遠方をさすなり、日本なら、えぞ松前じや。
㋐梗。荒也。
㋚萍。水草也、うきぐさ。
㋖伶利。靈利に作るべし。さかしきなり。
㋴大海。孟子の盡心篇に出づ。
㋱萬法。宇宙の萬物を總稱して云ふ、有形無形ともに包含す。
㋯布衫。麻布の法衣、又はかたびら、ひとへうはぎ。
㋛淫紙。うろほふかみ。
㋽大虫。虎、又は於菟、又は李耳。
㋪翻筋斗。とんぼがへり、もんどり、木を斫る具なり。
㋲迷魂寨。中陰の人を指す、寨はとりで、木柵。

く、一者の僧、㋛渾紙を將つて㋽大蟲を裹まんと要す、趙州、針鋒頭上に㋪筋斗を翻す。奇なることは則ち太だ奇なり、只是れ歸處未だ分明ならず、人をして轉た㋲迷魂寨に入らしむ。今夜人ありて、萬法一に歸す、一何れの處に歸すと問はゞ、只他に向つて道はん、半は㋝露柱に入り、半は燈籠に上ると。」

次の日上堂。㋜東山の家宴、美盡し善盡す。西院の商量、赤心片々、金寶今日結夏、敢て諸人を㋑管顧せず、亦兩錯を論ぜず、何が故ぞ、㋺重賞の下には必ず勇夫あり。

㋩秉拂を謝する上堂。一喝賓主を分つ底の法門、兩堂首座已に說き了れり。虛空裏に向つて、㋥五字を寫す底の法門は、㋭書記已に說き了れり。一代藏教も㋬詮注し及ばざる底の法門は、㋣藏主已に說き了れり。更に緊要の一句あり。佛佛祖祖、㋠久しく斯要を默す。我が四㋷頭首也た各㋦緘默す。金峯久日㋸樺來唇、免れず今日鼓を擊つて、諸人の爲に吐露することを。良久して、下座。

㋾上堂。一二三四五六七、七六五四三二一、幼婦眉を舒べて笑臉開き、

㋝露柱。大黑柱といふこと、本來の面目、大悟の意を表す。

㋜東山家宴。會元十九に出づ、五祖演禪師晚に東山に居り、上堂結夏の法語あり。

㋑管顧。東山の諸人を管顧せんが如く、看管は其人を看顧管束する也。

㋺重賞。三略上に、香餌の下に必ず懸魚あり、重賞の下に必ず勇夫あり。

㋩秉拂。百丈清規には四節とあれども、大方結制は冬至の二節にあり、西班の前堂、後堂、書記、東西の藏司まで秉拂するなり、此を五頭首と云ふ、此れも多くは四頭首なり、秉拂は「ひんぽつ」とよむ。

㋥五字。祖師西來意の五字なり、五祖演錄に出づ。

㋭書記。禪宗の役僧名なり、文書を掌る。

㋬詮注。詮は具說事理也、事理

(ワ)夜叉膝を屈して眼睛出づ。構得構不得、門に當つて大吉を書す。主丈を卓して、下座。

上堂。塵塵(カ)爾、刹刹爾。拂を以て床を擊つて云く、「老鼠床頭を齩む、猫兒正に憨睡。」

半夏上堂。「法歲已に半ばを過ぐ。過去心不可得、解制未だ期に屆らず、未來心不可得、正當今日、現在心不可得、(ヨ)三世の心既に不可得。」拂子を豎起して云く、「且く道へ、(タ)者箇何れの處從りか得來る。」良久して云く、(レ)「自ら瓶を攜へて去つて村酒を買ふ、卻つて衫を著け來つて主人と作る。」

夏中藏主を謝する上堂。(ソ)擧す、古へ僧あり、經堂の中に在つて坐す。藏主云く、「何如んぞ看經せざる。」僧云く、「字を識らず。」主云く、「何んぞ人に問はざる。」僧(ツ)叉手して云く、「是れ什麼

始終、全體をのこさず、いひほどく。注は本文のよくわかるやうにいひほどく。

(ト)藏主。禪宗の役僧の名なり、經藏を掌る。

(チ)久默斯要。法華經藥草喩品に出づ。

(リ)頭首。西序を頭首と云ひ、東序を知事と云ふ。

(ヌ)緘默。口を緘してだまる。

(ル)樺來唇。かばの木の皮は弓にはるべし、かひほど大きなくちびる、皮のこころかとあり。來の字は俗語上のほどの義。斗來大きな、丈來高き等の語多く見ゆ。

(ヲ)上堂。端午。

(ワ)夜叉。梵語なり、此には能噉鬼といふ、人を噉ふを謂ふなり。

(カ)爾。此の如くの義にて、このとほり也。

(ヨ)三世之心。過去、現在、未來の三世心なり、金剛經に出づ。

(タ)者箇。珠曰く、不可得の心。

(レ)自携瓶。天厨禁臠上の王操が詩なり。

(ソ)擧。此の話、禪林類聚頭首門に出づ。

(ツ)叉手。たなごころをくみあはすこと、右を左の下へ、左を右の上へ拇指をむかへあはせ。

(ネ)烏焉。一字三寫すれば、烏焉馬となる。

(ナ)六月賣淸風。賣の字、買の字にも作る。

(ラ)好語。大惠武庫に五祖演佛鑑を戒むるの語。

(ム)彌滿淸淨。圓覺經略疏宗密の序。

(ウ)督般。肅州燉煌の人、年代未詳、この故事酉陽雜俎に出づ、祈雨に驗ある仙人。

(ヰ)繩墨。繩を引き墨を彈く、すみするもの、大工のすみつぼ。

(ノ)日中一食。五燈會元九仰山章に出づ。

の字ぞ。」藏主無語。拈じて云く、「者の僧字を問ふ、將に謂へり藏主の舌頭を坐斷すと、爭奈んせん、㋧烏焉馬と成ることを。藏主無語、者の僧の與めに師と爲るに堪へたり、會す麽。㋤六月清風を賣はゞ人間恐らくは價なけん。」

上堂。主丈を拈じて、卓一下して云く、「休みね休みね、㋶好語說き盡すべからず。」

解夏小參。㋰彌滿淸淨、他物を容れず、中に就いて限を立し期を立す。總に是れ㋒魯般が㋼繩墨、金峰、今夏現前の大衆と與に眉相結び、鼻相拄ふ。全賓是れ主、全主是れ賓、諸公の三昧、金峯知らず、金峯の三昧、諸公知らず。便ち見る㋨日中一飡、人人㋔落得の㋗盞盂柄なし。夜後一寢、箇々未だ曾て眼を開いて床に尿せず。只麽に㋳騰々として一夏を過了す、畢竟功阿誰にか歸す。拂を擊つて云く、「蠟人跳つて梵天に上り、鐵彈走りて東海を過ぐ。」

復擧す、僧、雲門に問ふ、㋮「初秋夏末、前途忽ち人ありて問ふ、作麽生か對へん。」門云く、㋘「退後退後。」僧云く、㋫「某甲甚麽の過ある。」門云く、

㋔落得。人々落ちついて。
㋗盞盂無柄。依然として、かはらぬつら。
㋳騰騰。上躍也。
㋮初秋夏末。雲門錄に出づ。
㋘退。「つい」とよむべし、さがれさがれ。
㋫某甲。凡そ名を知らず、名を言はざるを皆某と曰ふ、甲は甲乙等なり、次第の義也。
㋙輕輭。珠曰く、此の二句雲門の機用を述ぶ。
㋓蹉足。ちよこちよこばしり、せはしくかけまはる、蹉は急也。
㋢龍門。淮南子脩務訓に出づ、本有水門云云、上り行く上り過ぐること得るものは、便ち龍と爲す、故に龍門と曰ふ云云。
㋐大火西流。火は大火、心星也、六月の昏を以て地の南方に加ふ、七月の昏に至りて則ち下

「我れに九十日の飯錢を還し來れ」と。拈じて云く、㋙「輕徑㋓足を蹈んで㋢龍門過ぐ、腥風の地を動し來ることを惹き得たり。」

次の日上堂。㋐大火西に流れ、涼飈秋を報ず。九旬の㋚功課、一時に罷休す。好箇快活の時節、去る底は去り、留る底は留る。然も是くの如くなりと雖も、金峯肯て點頭せず。何ぞ也、如今㋖馬上に山色を看る、㋴牛に騎つて自由を得るに似かず。

つて西に流る。
㋚功課。しごと、つもり、ほどらい。
㋖馬上。馬のしりへに騎つて見ろ、面白けれども。
㋴騎牛。それよりのつそりした牛にのるが、自由ができる。

相州鎌倉縣瑞鹿山㋑圓覺興聖禪寺語錄

侍者㋺紹榮編

師、㋩元德元年八月二十日に於て入院。

山門。盡大地是れ圓覺伽藍、且く道へ、門限什麼の處にか在る。㋥彈指一下して云く、「看よ看よ、宿霧初めて收つて天已に曙。」

㋑圓覺。相模國鎌倉山の内、鎌倉五山の一。
㋺紹榮。國師に嗣ぐ、字は枯木、京師の安國寺に住す。
㋩元德。後醍醐天皇御宇、元德元己巳。
㋥彈指。驚覺の義なり、つまはじき。
㋭殿裏底。趙州錄に出づ。泥龕塑像斗りの意か。

佛殿。ホ殿裏底、他は是れ誰ぞ、咦。我早く儞を知れり、門にヘ鍾馗を貼す。坐具を展べて云く、「人天大衆前、ト且く一頭の低を放す。」

土地堂。法にチ隆替なく、人に可否なし。リ儼然として列坐して什麼をか護す。良久して云く、ヌ「良い哉、土地なることを謬らず。」

祖師堂。祖祖密付、ル天知り地知る。今日ヲ敗鈌、咎阿誰にか歸す。

據室。主丈を拈じて云く、ワ「烹佛カ煆祖、他の古德に還す。便ち是れ、ヨ渾鋼タ能く幾く鐵かある。新瑞峰聻。」丈を靠けて云く、レ「幾どソ覆轍に墮つ。」

拈帖。營門のツ樞機、法城のネ渠答、半幅全封、千重百匝、裏許の消息を知らんと要する麼。凜凜たる威風ナ六合に生ず。

ヘ鍾馗。唐開元中、明皇の夢に大小の二鬼あり、大の方が鍾馗なり、小なるものを擒へて之れを殺して食ふ、覺めて後に吳生に命じて、之を圖せしむるに始まる。

ト且放一頭低。頭をさげるはずでなけれども、了簡してちよつとさげてやる。

チ隆は次第によくなりゆく、替は廢也。

リ儼然。貌の莊なること、きつとして也。

ヌ良哉。贊美の辭、善にすぐれたる意。

ル天知地知。後漢書楊震の傳に出づ。

ヲ敗鈌。今日に至つて、しそこなひ、をちど。

ワ烹。鐵を燒いて水へ入れてだんだんくづをとること。

カ煆。燒けたる鐵をたたいて、くづをとると、金屑の鍛が正

字なり。

ヨ渾鋼。はがね。

タ能く。此れがそのままむくのはがねじや、鐵は一つもない。

レ幾。ほとんど。すんでのことで。

ソ墮覆轍。古人の敗鈌のまねをする。

ツ樞機。易の繫辭に、言行は君子の樞機、かんじんのきじめのきかい、極意のこと。

ネ渠答。鐵蒺藜。

ナ六合。天地東西南北。

ラ褒。德と境と請と次第して書く。

ム納敗。はいけつする。

ウ諸山疏。隣山の住持連名の書也、五岳入院のときは、南禪五山十刹の常住連名にて、五山巡番にて製作する也、勸請の意を專にするなり。

ヰ炳然。あきらかなること。

ノ東山樹。隣寺どうしの境致な

山門の疏。(ラ)褒も也た屋裏の話、貶も也た屋裏の話、甚に因つてか此くの如くなる。疏を呈起して云く、「謂ふこと莫れ大家(ム)納敗すと。」

(ノ)諸山の疏。衆口一舌、字義(ヰ)炳然、諸人還つて會す麼。(ウ)東山の樹は西山の樹に對し、上澗の泉は下澗の泉に流る。

法座。(オ)燈王三萬二千の座。座を指して云く、「盡く是れ此の一座從り出づ。且く道へ、此の座何れの處よりか得來る。」喝一喝。

拈香。此の一瓣の香、爐中に爇向して恭しく

(ク)今上皇帝の爲めに、聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝嚴す。陛下恭しく願はくは、永く(ヤ)文明を掲げて、德化を(マ)宣光の(ケ)中興に齊しうし、(フ)葆命を墜すこと毋くして、(コ)覆(エ)燾を(テ)大禹の高躅に竝せたまはんことを。此の香は征夷大將軍及び文武官僚の爲めに、同じく祿算を增し奉る。伏して願はくは(ア)一人の(サ)簡在に膺り、四海の(キ)具瞻に副はん、益輔佐の功を懋め、駢安撫の德を布かんことを。此の香は、本寺大檀那の爲めに、祿算を資陪し奉る。伏して願はくは壽山、百億(ユ)須彌の高きよりも高く、福海、十重(メ)香水の廣きよりも廣く、(ミ)權澤長く華夷に覃んで、(シ)皇極を綏んじ、

り。

(オ)燈王。須彌燈王如來。

(ク)今上皇帝。後醍醐天皇を指す。

(ヤ)文明。なにゝても、見事にあやあるを云ふ。

(マ)宣光。宣は周の宣王、光は後漢の光武。

(ケ)中興。一旦武家の代になりたるを、再び公家のさばきになりて、一統の代と云ふ、その意なり。

(フ)葆命。史記の晉の世家に、天の降せる葆命を墜すこと毋れとあり、葆は寶なり。

(コ)覆。普照也、おほふなり、中庸にもあり。

(エ)燾。音導、おほふなり、又幬ともかく。

(テ)大禹。書經の小注に、大と稱するは其の功を大にするなりと。

(ア)一人。天子を上一人と稱す。

(サ)簡。えらぶこと、上帝之心に

㋼誠明普く、㋪緇白に被らしめて、以て法門を耀さんことを。

此の香、久しく窮谷に在つて、之を埋めて腐ちず、屢々人前に向つて之を燒けども燼せず。今復た拈出して、前住巨福名山建長興國禪寺敕謚佛國禪師高峰大和尙に供養して、用つて法乳の恩に酬ゆ。

遂に座に就き、問答罷んで、乃ち云く、二六時中、四威儀の內、新羅夜半十日竝び照す、之を名づけて㋲大光明藏三昧と爲す。二千年前、㋝薄伽世尊、一時此の三昧に入りて、一切の諸佛菩薩と主伴同會し、㋜光嚴㋑住㋺持す。爾しより以降、圓覺の伽藍、互いに戶牖を開き、西天此の土、各門庭を立す。或は僻洞深巖に居りて、雲に嘯き月に吟じ、或は名山㋩望刹に據つ

在りと書經湯誥にあり。

㋖具瞻。詩經の南山に、赫赫たる師尹民具に瞻ると。

㋴須彌。梵には蘇迷盧、此に妙高といふ。

㋱香水界。華嚴經華藏世界品に、微塵數の香水海云云。

㋯權澤。權は權柄、澤は恩澤。

㋛皇極。皇は君、極は北極の如し。天子の星のやどりを北極紫極と云ふ、皇居とみるべし。

㋼誠明。中庸に、誠より明なる之を性と謂ふ、明なるより誠ある之を敎と謂ふ。

㋪緇白。又緇素とかく、僧は緇、俗は白。

㋲大光明藏。圓覺經上、一時薄伽梵神通大光明藏三昧正受に入つて、一切如來光嚴住持す云云とあり、藏は卽ち實性の法界藏也、起信論の心眞如也。

㋝薄伽梵。此には有大功德と云ふ、至聖の名なり、佛の名。

㋜光嚴。重重光を交へ、昭著なり。

㋑住。安住して永く攀緣を絕する也。

㋺持。失せず、壞せざるなり。

㋩望刹。人の爲めに仰ぐ所を望と曰ふ、刹此に竿と云ふ、人柱を以て之に代ふ、名けて刹柱と爲す、又表刹と云ふは所居の處を表するが故なり。

㋥隱顯。視ㇾ之在ㇾ前、忽然在ㇾ後の境界じや。

㋭行藏。論語に、之を用ふるときはすなはち行ふ、之を舍つるときは則ち藏る。

㋬野老。この頌、法眼禪師の宗要七首の萬法唯識の頌なり。

㋣堯舜力。帝の力なり、何か我に於てせんや、日出でゝ作し、日入りて息ひ、井をほりてのむ、田を耕して食ふ、太平にてあればなり。

㋠鼕々。鼓の聲。

て、衆を領し徒を匡す。㋥隱顯㋭行藏、千途萬轍、並に是れ圓覺を具足して、圓覺に住持する底の樣子なり。石上座、今日又此の伽藍に居して、無邊刹海の凡聖含靈と主伴同會し、光嚴住持す、古今恁麼に住持す、更に絲毫の異相なし。畢竟什麼の事をか濟し得たる。拂を以て牀を擊つて云く、㋬「野老は㋣堯舜の力を知らず、㋠鼕鼕鼓を打つて㋷江神を祭る。」謝、錄せず。

復擧す、㋦宜春の太守、慈明和尚を請じて、南源に住せしむ。明固辭して赴かず、後日に特に太守に謁して行かんことを願ふ。太守其の故を問ふ。明云く、「始めは之を欲せず、今は偶之を欲する耳。」遂に請じて住山せしむ。拈じて云く、「慈明和尚、㋸之を瞻るに前に在るかとすれば忽焉として後へに在り、蹤跡を見んと擬すれば山遙かに水長し。然も是くの如くなりと雖も、爭奈せん人をして是非海裏に墮在せしむ。卽今若し人ありて、『新瑞峰去年は固く㋾鈞命を辭して、當山に住せず、今日何が故ぞ、敢て來りて席を領ず』と問はゞ、便ち他に向つて道はん、竹に上下の節あり、松に古今の色なし。」

㋷祭江神。江神は山川の神をさすならん。
㋦宜春太守。五燈會元十二の慈明の章に出づ。
㋸瞻之。論語の子罕の章に出づ。
㋾鈞命。將軍の命令などで、鈞は重量三十斤のことにて、おもきを云ふなり。國鈞を秉ると云ふより、宰相のことに用ふ、今は執權の仰せ。
㋻釘一琢二。又丁卓に作る、算語也、丁一は成立の貌。
㋕鉗鎚。かなばさみ、かなづちで、うちきたへること、修行者をそだてるにたとふるなり。
㋵捏聚放開。手でにぎりあつめる、把住は手でにぎりとめる。
㋟扭定。ひつつかまへる、揪住ともかく。
㋹返聞。楞嚴經六に出づ、返つて聞の自性を聞せば性無上道を成ず、圓通是くの如しと。

當晚小參。㋻釘一琢二、本分の㋕鉗鎚、㋵揑聚放開、作家の受用、是れ世間の韜略にあらず、亦出世の機鋒に非ず。直に得たり、文殊の鼻頭を㋟扭定して、氣を出すこと能はず、觀音の耳朶を塞却して、㋹聞を返すに由なきことを。電激し星馳す、誰か敢て㋞壘に㋡摩かん。便ち恁麼にし去らば、鬧熱門庭は卽ち得たり。若し正眼を以て之を觀ば、未だ免れず、㋧將頭猛からざれば、三軍を帶累することを。山野乍ち此の精藍に住す、本分の鉗鎚、作家の受用を論せず、只要す現前の大衆と同じく作息し去らんことを。何が故ぞ、㋤天津橋上㋶私鹽を賣らず。問答錄せず。

復擧す、㋰張無盡相公、㋒皓禪師を請じて玉泉に住せしむ。皓陞座、大衆を顧視して云く、「君見ずや。」良久して又云く、「君見ずや。」無盡座下に在りて、蜀音を操つて云く、「見る。」皓云く、「但相公の見ることを得て便ち了れり。」便ち下座。拈じて云く、「玉泉、太古の淸音を唱へ出す。無盡、和するに絕聽の㋼希聲を以てす。而今に至るまで、餘韻未だ已まず、諸仁者、還つて聞く麼。」主丈を卓すること一下して云く、㋨「此の曲只應に天上に有るべし、人間能く幾囘か聞くことを得ん。」」

㋞壘。軍壁、とりで。

㋡摩。切近なり。

㋧將頭。將は大將、頭はかしらたる人。

㋤天津橋上。表向きのはれがましいところで。

㋶私鹽。しほの官營、唐時代に始まりしことあり。

㋰張無盡。張商英、字は天覺、無盡居士と號す、宋の名臣、護法論を著はす。

㋒皓禪師。宋の名僧、玉泉に住す、布裩承皓禪師、北塔廣に嗣ぐ、雲門五世。

㋼希聲。老子に云ふ、大器は晚成、大音は希聲。

㋨此曲。この詩は杜甫の詩なり。

㋔陶潛。晉の陶淵明、字は元亮、世に靖節先生と號す。

㋗短吟。「采二菊東籬下一、悠然見二南山一」の句、逍遙自得の境界。

㋳汾陽。汾陽錄上、「一句明明該二萬象一、重陽九日菊花新。」

九月旦、上堂。秋雲雨を栽せて過ぎ、淸飈林藪を攪く。構得不構得、一擧四十九。丈を卓して、下座。

菊節上堂。㋔陶潛が㋗短吟、只是れ世俗の活計、㋳汾陽の一句、未だ免れず、法眼沙を著くることを。㋮鹿峯門下、世法佛法、都て是れ一邊に拈向す。且つ如何んが箇の時節に應じ去らん。良久して云く、「爲に憐む處々籬邊の菊、一度の秋風一度の花。」

㋘都寺を謝する上堂。世間に㋻入得すれば、出世無餘、事に觸れ緣に應ず、都て㋵外料に非ず、㋓折旋俯仰、甚の㋢掠虛かあらん。然も是くの如くなりと雖も、玉を切ることは、須らく是れ㋐昆吾なるべし。

上堂。恁麼恁麼、密に中邊なし。不恁麼不恁麼、覿面猶ほ三千を隔つ。驀に主丈を拈じて卓一下して云く、「昨夜㋚雨師風伯に値ふ、觀音耳裏㋖鞦韆を打す。」

上堂。擧す、雲門大師云く、「直に山河大地㋴纎毫の過患なきことを得るも、猶ほ是れ轉句、一色を見ざる。始めて是れ半提、更に須らく知るべし、全提の時節あることを。」拈じて云く、「雲門和尚、三更孟津を過ぐ、白日宮

㋮鹿峯。國師みづからを稱す、瑞鹿山の意。

㋘都寺。「つうす」とよむべし、禪宗寺院の庶務を總轄する役僧名。

㋻入得。都寺は知事の首にて、世務を重に司る。

㋵外料。なににても入用の品を云ふ、風雲雪月は詩を作る入用ゆゑ詩料と云ふが如し。

㋓折旋。折はぎくとまはる、旋はくるくるまはる。

㋢掠虛。唐宋時代の俗語なり、虛をかすむなれば、ひとりよがりで日本のうすのろ、このたはけめ。

㋐昆吾。金剛と同じ。玉を切ること泥の如し。

㋚雨師風伯。あめの神、風の神。

㋖打鞦韆。ぶらんこ、打の字は造也、俗話につくること、船を打し、車を打すの如し。

㋴纎毫過患。雲門錄に出づ、す

路に行く。若し人他の手脚を覷透せば便ち好し、高く鉢嚢を挑げて丹霄に獨歩せん。其れ倘し未だ然らずんば、鹿峯、更に箇の注脚を下さん。㋱林泂杖を曳いて清興を嗜む、又㋯空濛紫翠の中に入る。脚力盡くる時山更に好し、有限を將つて無窮を趂ふこと莫れ。」

上堂。主丈を拈じて卓一下して云く、「諸人還つて會す麼。」丈を靠けて云く、「一枝㋛鷦鷯に付し、萬里㋽鴻鵠に付す。」

冬夜小參。問答罷んで、乃ち云く、「天地未分已前、箇の無字の曆日ありて、氣候節序を記せず、甚の㋪吉凶㋲悔吝とか論ぜん。天地已に分るに及んで、妄りに寒來暑往を見る。眞曆此れ從り㋝漫滅す、帀本天下に流行す。世を擧りて咸言ふ、『冬至の時節、㋜綉紋㋑線を添へ、㋺葭管灰を颺ぐ』と。引き得たり洞山卓を退けて、自ら家私を訐く、㋩霜華牓を掲げて、還つて㋥露布を成すことを。然も是くの如くなりと雖も、瑞峯、敢て此の弊を救ふことを欲せず、只要す依つて行ふことを。且く道へ意那裏にか在る。」良久して云く、㋭「異端を攻むるは斯れ害のみ。」

復擧す、㋬僧古德に問ふ、「如何なるか是れ冬來の事。」德云く、「京師に大

こしのあやまち。

㋱林泂。泂は林の外なり、郊野なり、まき、うまかひば。

㋯空濛。ぼんやりとくらきなり。

㋛鷦鷯。せきれい、莊子に鷦鷯深林に巣くふも、一枝に過ぎず。

㋽鴻鵠。ひばり、史記に燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らん哉。

㋪吉凶。めでたきこと、いまいましきこと、易繫辭傳、吉凶は得失の象なり。

㋲悔吝。なしたることをあとでくやむは悔なり、同上に悔吝は憂虞の象なり、なしたることを、あとにてのこり多く思ふやうなことをなして、恥をとることは吝なり。

㋝漫滅。漫はぱつとして差別なき意、滅はむつちやりとわからぬやうに消えること。

㋜綉紋。綉又は繡に作る、宮女

黄を出す」と。拈じて云く、「古人恁麼の答話、自ら謂へり身を宇宙に横へ、舌大千を覆ふと。殊に知らず、㋣虎豹の文は田を來し、猿㋠狙の㋷便は㋦藉を來すことを。」

冬節上堂。昨夜雞頭篳篥を吹けば、森羅萬象悉く㋸盧胡、今朝皷を打つて此の事を報ず。借問す諸人信ずるや也た無や。信底不信底、瑞案倶に歡喜す。何が故ぞ、陽氣發する時硬地なし。主丈を卓すること一下。

㋾東堂㋻東明和尚兼て四頭首秉拂を謝する上堂。昔日洞山和尚、冬夜菓卓を㋕掇退して、泰首座をして菓子を喫せしむることを致すこと得ず。千載の下風俗慣ひ易し、人人㋵鬭揍し、處處安排すれども、也た未だ人の喫し得るあらず。鹿山、今年又冬夜を迎へて、分に隨つて宴を作

の針仕事、よけいに出來るとよろこぶ。

㋑添線。唐の宮中、紅線を以て日の長短を計る。

㋺葭管灰。冬至となれば、日足ゆるやかに、葭管から灰をはぢき飈ぐるとなり。

㋩霜華。石霜一に霜華と稱す、慈明和尚のこと。

㋥露布。軍中捷を奏する辭なり、あらはに、ひろげる。

㋭異端。この語は論語爲政の章に出づ、異端は聖人の道に非ずして別に一端を爲すを云ふ、楊墨の如きなり。

㋬借問古德。五燈會元十三に出づ、洞山价法嗣疎山匡仁禪師。

㋣虎豹之文。莊子應帝王の章に出づ、とらのかはは文あるを以て、故に田獵の人を招來す。

㋠狙。手ながざる。

㋷便。便捷。

㋦藉。藉は繩なり、束縛する所以の者なり、籍にあらず藉なり。

㋸盧胡。ものわらひ、ものまれじやと云ふ、なんらの新機軸もないと云ふこと。

㋾東堂。禪宗の僧の法階なり、その山の前住を東堂と云ひ、他山の前住を西堂と云ふ、至德年中五山十刹諸山の次第を立てられしより、五山の住持を前住當住にかぎらず東堂と云ふ、十刹諸山の住持を西堂と云ふ。

㋻東明。惠日禪師、宋國の人、日本に東渡して圓覺建長等に住す、天童の直翁擧に嗣ぐ、洞下の名僧。

㋕掇退。はらひのける。

㋵鬭揍。揍は湊に作るべし、湊也、せりあひのこと。

㋟陳年。ふるきとし、故き也。

㋹低聲低聲。しづかにせよ、あまり聲が高い。

す、新奇底あることなし。只だ洞山㋟陳年の菓子を將て、皮を剝し核を去つて、逐つて我が四頭首の口邊に在れども、皆甘んぜず。遂に人天大衆の前に向つて、各〻自ら吐卻し了れり。驀に主丈を拈じて云く、「主丈子與麼の說を聽いて、出來つて便ち道ふ、㋹低聲低聲。這裏に東堂和尙あり、須ひず謾りに洞下の事を說くことを。鹿山覆水收め難し、且く主丈子に憑つて、其の㋞輕觸を謝し去らん。」主丈を卓すること一下。

臘八上堂。㋡六載の寒酸猶は自ら可なり、一朝の濁富、貧には如かず。明星㋧迸散す三千界、悉く㋤瞿曇眼裏の塵と作る。

上堂。世界恁麼に廣闊なり、什麼と爲てか㋶鐘聲を聽いて㋰七條を披す。雲門大師與麼の垂示、越國に㋒依俙として、揚州に彷彿たり。諸人還つて會す麼。拂を擊つて云く、㋼「山川限り無きの意を識得して、目前瀟灑として多きことを須ひず。」

除夜小參。問答罷んで、乃ち云く、㋨「玄樞運轉、㋔磨を旋るの蟻、其の步稍移る。歲序推遷、㋗竅に赴くの蛇、其の尾繫ぎ難し。若し能く此に於て不遷底の句を識得せば、白牛を烹て黍飯を炊ぐ。謂つべし㋳惠して費さ

㋞輕觸。かろくさはろで、ちよとからかつて見たとか、ちよとあたつて見たとかの意。

㋡六載。釋迦さまの雪山に六年の修行をいふ。

㋧迸散。明星を一見して大悟せられし光景。

㋤瞿曇。釋迦さまの姓。

㋶聽鐘聲。雲門の語、雲門錄に出づ。かれのこゑをきいて、けさをかける、これは食堂におもむくなり。

㋰七條。袈裟の條なり、けさの五條は行脚の衣、七條は食の衣、九條は說法の衣、二十五條は入滅の衣、福田の相をかたどるが袈裟。

㋒依俙。さもにたり。

㋼山川無限意。この頌は雲臥紀談乾の下一、假山偈に曰く、「數拳の幽石嵯峨を疊み、池水泓然たり一寸の波」の下の句なり。

すと。其れ倘し未だ然らずんば、疫癘を駈り㋮凝獃を賣る。都て是れ勞して功なし。鹿山今夜諸人と分歲、樣に依つて猫を畫くことを、別に箇の施設あり。主丈を卓すること一下して云く、「嫌ふこと莫れ冷淡沒滋味、一飽能く消す萬劫の飢。」

復擧す、僧㋘浮山遠和尚に問ふ、「新歲已に臨む、舊歲何くにか往く。」遠云く、「目前異怪なし、鍾馗を貼することを用ひず。」拈じて云く、「這の僧大洋海底に在つて、㋻尾閭を問へば、浮山須彌頂上に向つて、路頭を指す。還つて㋙針芥相投ずる分あり麼。」良久して云く、「夜深く、珍重。」

元正上堂。拂子を豎起して云く、「看よ看よ、吾が道㋓一以て之を貫せり、會得せば、城上

㋨玄樞運轉。日月のうつるを云ふ。

㋔旋磨蟻。蟻の磨を廻るが如し、磨ははやく蟻は遲し、これも日月のめぐるにたとへる。

㋗赴壑蛇。歲の盡きるのを知らんとせば、たにおもむく蛇に似たることありと云ふと。

㋳惠而不費。論語堯曰の章に出づ。

㋮凝獃。おろかもの。

㋘浮山。浮山法遠圓鑑禪師、葉縣省に嗣ぐ。

㋻尾閭。莊子秋水篇、海より大なるはなし、萬川之に歸す、尾閭之を泄す。尾閭一名は沃焦といふ、華嚴經に、應身佛は度沃焦佛といふ云云、能く地獄の中の人を度す、故に度沃焦佛と曰ふと、海水沃ぎ着けば即ち焦る、亦沃焦と名く。

㋙針芥。南本涅槃經純陀品に、「芥子針鋒に投ずるに、佛の出て給ふことこれよりも難し」とあり。通しがたきを能く通すの意。

㋓一以貫之。論語里仁の章に、曾子云云。

㋢角。軍中にて用ふる樂器の名、蚩尤、黃帝と戰ふ、帝命じて角を吹いて龍鳴を爲さしめ、之を禦ぐ。

㋐一盞燈。傳燈二十二に香林遠禪師の章に出づ。寂定中の智明を表する語。

㋚證龜作鼈。龜を呼んですつぽんじやと云ふ、おれのところびんぼふで油がないでこのやうな。

㋖波斯。今のペルシヤ、性躁暴、俗禮義なし、學藝なしといへども工伎多しと西域記にあり。

㋒然燈。智度論九に、然燈佛の因緣出づ、「れんとう」とよむべし。

已に吹く新歳の㋢角、然らずんば、窓前猶ほ點す舊年の燈。」

元宵上堂。家家㋻一盞の燈あり、三人㋚龜を證して鼈と作す。瞎眼の㋖波斯闍市に入つて、㋴然燈に撞著して㋱記莂を受く。且く道へ什麼の記莂をか受く。孟春㋯白月終ふ、定んで是れ㋛上元の節。

二月旦、新舊兩班を謝する上堂。㋓竺土大仙の心、㋪東西密に相付す。密に相付す差互なし。庭梅未だ謝せず舊年の花、岸柳旋舒ぶ新歳の絮。拂を以て牀を擊つて、下座。

佛涅槃上堂。一出一沒、半合半開、諸人什麼れの處に向つてか釋迦老子を見る。主丈を卓すること一下して云く、㋲「湘潭雲盡きて暮山出で、巴蜀雪消して春水來る。」

三月㋝望上堂。處處眞處處眞、何れの處の園林か春を領せざる。塵塵爾り塵塵爾り、遊客都て㋜白蹋の人なし。然も是くの如くなりと雖も、諸人還つて鹿峯が主丈花を生ずることを見る麼。丈を靠けて云く、「幾乎㋑西施をして薪を負はしむ。」

上堂。㋺古德云く、「我に一句子あり、虛空地に墮つる時を待つて、便ち

㋱記莂。梵に和伽羅と云ふ、記はこれ記事、莂はこれ了莂、佛の誠言その當果を授くることを蒙るを云ふ。

㋯白月。滿月を白分と云ふ、月かけて晦を黑分と云ふ。

㋛上元。正月十五日。

㋓竺土大仙心。竺土は天竺、大仙心は釋尊の御心。

㋪東西密相付。天竺も支那も日本も以心傳心じや。

㋲湘潭。此の詩は三體詩の許渾の詩凌歊臺の三句四句なり。

㋝望。十五日。

㋜白蹋。白の字俗話也、白吃(むだぐひ)、白白走(むだあるき)の白の字也。

㋑西施負薪。西施は支那の美人なり、この語は李白集鳴臯歌に出づ。

㋺古德。未詳。

㋩川僧打鐃鈸。鹵莽の義、鐃はどら、鈸ははち。

儞に向つて道はん」と。鹿山は卽ち然らず、我に一句子あり、虛空未生以前已に曾て說破し了れり。良久して云く、「三十年後、道ふこと莫れ、㋩川僧鐃鈸を打つと。」

㊁佛生日上堂。㋭佛身無爲にして、諸數に墮せず、㋬雲門の一棒、㋣龍を屠るに誇る。月明豈㋠珊瑚樹に在らんや。噁、瑞峯恁麼の說話、早く是れ淸淨法身を汙卻し了れり。急に須らく大佛殿に詣して、普請して佗を浴し去るべし。便ち下座。

結夏小參。德山小參答話せず、南人㋷駝を夢みず、趙州小參答話せんと要す、北人㋦船を夢みず。若し能く二大老の手脚を覷透せば、何んぞ妨げん大蟲舌上に鞦韆を打することを。直に得たり千古の㋸坏模を㋾脫略し、㋻諸方の㋕抑勒を㋵剸斷することを。期限を立し修證を論ず。都て是れ魯般が繩墨、然も是くの如くなりと雖も、鹿峯未だ點頭せざること在り。須らく知るべし圓覺伽藍裏、今夏百二十日、別に㋟條令の遊ひ行ふて始めて得べきあり。且く道へ、是れ什麼の條令ぞ、日中一飡、夜後一寢。

復擧す、㋹南泉和尙坐する次で、僧あり叉手して立つ、泉云く、「太俗生。」

㊁佛生日上堂。四月八日。
㋭佛身無爲。維摩經弟子品に出づ。
㋬雲門一棒。珠曰く、むだぼれなり。
㋣屠龍。莊子の列禦寇に出づ、朱泙漫は龍を屠るを支離益に學ぶ、千金の家を單(つく)す、三年にして技成りて而も用ふるに功なし。
㋠珊瑚。四時色かはらぬにたとへていふたのである、咽喉唇吻を要せざる絕對の境は、光明遍照である、他の力をからぬ。
㋷駝。らくだなり、らくだは寒をよろこぶ、熱はいとふものなれば。
㋦船。支那は北には海がなきゆゑ船を見たことはない。
㋸坏模。土器のすやきのかた。
㋾脫略。くくりあげ。
㋻諸方。諸方の規矩法度を。

僧便ち合掌す。泉云く、「太僧生。」僧無語、頌して云く、
(ツ)「塵外靈區不レ易レ尋。青山(ツ)九瓆(ネ)洞門深。
神仙將レ謂ト二斯地一。驚聽(ナ)空中(ラ)操二梵音一。」

次の日上堂。(ム)護生は須らく是れ殺すべし、八字兩ノなし、殺し盡して始めて安居す。山上鯉魚あり、箇の中の意を知らんと要するや、(ウ)鐵船水上に浮ぶ。休みね休みね、萬里の智あれば、萬里の憂あり。主丈を卓す。

秉拂を謝する上堂。聲前信息を通じ、句後安排を絶す。一(ホ)挨一(ノ)撥、佛祖崖を望む。拂子を拈起して云く、「只箇の拂子思算なし、須彌頂上三臺を舞ふ。」拂を擊つて、下座。

(オ)端午上堂。(ク)事三に過ぎず、月五に過ぎず。若し能く直下に雙眸を換へば、善財到る處是れ(ヤ)藥圃、其れ或は未だ然らずんば、(マ)蒲人を帶び(ケ)艾虎を戴くに(フ)一任す。

上堂。擧す、僧雲門禪師に問ふ、「如何なるか是れ諸佛出身の處。」門云く、「東山水上行。」後來(コ)圜悟和尙拈じて云く、「天寧は卽ち然らず、如何か是れ諸佛出身の處、(エ)薰風自南來、殿閣生微凉」と。二大老、一人は箚箒

(カ)抑勒。抑は按也止也、勒は馬頭の絡銜、くつは。
(ヨ)掣顚。あらけなくひくなり。
(タ)條令。法度がきのこと、式目のこと、科の次第のかき立て。
(レ)南泉。普願禪師、趙州に嗣ぐ。
(ツ)塵外靈區。世界をはなれた靈場。
(ツ)九瓆。九ケ所の入口入口がある。
(ネ)洞門。山奥に人家の田地のあるほどの平地ある處也。
(ナ)空中梵音。魏の陳思王の故事にはじまる。
(ラ)操。つかふなり。
(ム)護生。龐居士錄の語に出づ、安居は偏に夏月に約す、夏中は方尺の地も蟲あり、安居は禁足日。
(ウ)鐵船水上浮。同上の錄に出づ。
(ホ)挨。おしやる、むりに向へよるなり。
(ノ)撥。まぢかくよするなり。

蛾眉を畫き、一人は官路に私鹽を賣る。瑞峰與麼の㋢批判、覺えず失笑す。且く道へ箇の什麼をか笑ふ、地に就いて拾ひ得たり麗水の金、拈起すれば卻つて是れ㋐新羅の鐵。

中夏上堂。㋚烏飛び兎走る、碧落蹤なし。㋖一齊衆楚、法歳中を告ぐ。

上堂。拄杖を拈じて、卓一下して云く、「大衆會す麼、若し會せずんば、更に注脚を下し去らん。」又卓一下。

上堂。火雲天を蒸して、暑威烈烈、嘉州の大像通身汗流れ、陜府の鐵牛喘ぎて熱と苦しむ。別別、富士山頭長へに雪あり。拂を擊つて、下座。

夏中㋴東福和尚至る、上堂。擧す、㋱雪峯和尚衆を領じて浮江に到る。乃ち問うて云く、

㋔端午上堂。五月五日。
㋗事不過三。三は天、地、人の道。
㋳藥圃。文殊一日善財をして藥を採らしむ、圃ははたけ。
㋮蒲人。端午に艾(よもぎ)を菖蒲(あやめ)とくくりて、小人の形をこしらへてまじなひにする。
㋘艾虎。又艾を以て虎の形をつくりまじなひにする。
㋫一任。せけんなみにして、かつてにせいとのこと。
㋙圜悟。克勤禪師、五祖演に嗣ぐ、宋の名僧。
㋓薫風。新唐書の柳公權の傳に聯句出でて文宗曰く、『人皆苦二炎熱一、我愛二夏日長一』權曰く、「薫風自レ南來、云云」。
㋢批判。二大老の批判。
㋐新羅鐵。朝鮮の鐵は性鈍なりと云ふ。
㋚烏飛兎走。烏は陽日に象る、兎は陰月に象る、この四字日月のすぎさるを云ふ、この上もなく目出度い。
㋖一齊衆楚。孟子滕文公下に、一人の齊人之を傳ふるに、衆くの楚人之を咻せば、日に撻ちてその齊ならんことを求むも、也た得べからず云云。
㋴東福和尚。京都の東福寺五山の一。
㋱雪峰。「せつぽう」とよむべし。義存禪師、德山に嗣ぐ、唐の名僧。
㋯浮江。長慶安に嗣ぐ、この語、傳燈十一に出づ。
㋰大禮。孔子家語王言解に、至禮は讓らずして天下治る。
㋓禮之用。論語學而章に出づ。
㋪衡。秤のさをにて、物の輕重をわけるもの。
㋲鑑。鏡なり、物のよしあしをみわけるもの。
㋝妍媸。日本のこすいと云ふこ

「二百僧を寄せて夏を過さんと欲す、得てんや否や。」㋯浮山拄杖を以て、一劃一劃して云く、「著不得」と。拈じて云く、「浮江和尚、只㋛大禮辭讓ならざることを知つて、未だ㋽禮の用は和を貴しと爲ることを知らず。東福和尚京師より來つて一兩員の僧を寄せて夏を過さんと要す。鹿峯敢て古人の態度に傚はず、只是れ命に順ふ而已。何んが故ぞ、㋪衡㋲鑑前に在り、㋝奸俏を容れ難し。」

上堂。㋜殘陽未だ收まらず、㋑爽氣潛かに起る。㋺無位の眞人、㋩赤骨歷地。喝一喝。

上堂。擧す、㋥潙山、懶安に問ふ、「汝十二時中、當に何んの務むる所ぞ。」安云く、「牛を牧す。」山云く、「汝作麼生か牧する。」安云く、「一回艸に入去れば、驀鼻に拽き將ち回る。」山云く、「汝眞の牧牛なり」と。拈じて云く、「懶安金殿に塵沙を撒す、潙山艸庵に㋭鴟吻を安ず。瑞峰若し他の一回艸に入り去れば、驀鼻に拽き將ち回ると道はんを見ば、便ち他に向つて道はん、『盡大地一頭の水牯牛、更に什麼の處に向つてか拽き將ち回らん』と。他若し口を開かんと擬せば、便ち一掌を與へて道はん、㋬『國王の水艸を犯

と。

㋜殘陽。ゆふひ。

㋑爽氣。さわやかなるここち。

㋺無位眞人。心の異名也、このことは臨濟錄にあり、佛とも神とも名付けやうのなき故に、まあ無位眞人と云ふ。

㋩赤骨歷地。骨立也、まつぱだかなり。

㋥潙山問懶安。この因緣、傳燈錄石鞏の章に出づ。

㋭鴟吻。宮殿の棟のかざり、及びしやちほこのるゐ、飛魚の形、火災を辟くるの咒なり。

㋬國王水艸。五燈會元の三、南泉の章にも出づ。

㋣眞際。大智度論三十二に、問ふて曰く、「如と法性と實際と是の三事、一と爲さんや、異と爲さんや。」答へて曰く、「是の三、皆是れ諸法實相の異名なり。」

㋠廓落。大なること。

すこと莫れ』と。」

解夏小參。(ト)眞際元來(チ)廓落、封を絶し疆を絶す。情域瞥爾として區分る、凡あり聖あり、所以に釋迦如來二千年前、曲げて(リ)方便を垂れて、期を立し限を立し、凡を鎔して聖と成す。殊に知らず、模子既に正しからず、脱出し來る底、七凹八凸、便ち見る聲聞は精勤して、(ヌ)擇滅無爲を證得し、菩薩は克期して、(ル)平等性智に安居す。都て是れ(ヲ)錮鏴し得る底、未だ脱體完全することを得ず。我が此の現前の大衆、今夏一百二十日、者般の(ワ)鑪鞴に入らず、他人の鉗鎚を受けず、飢飡困寢、各自に烹鍛す。瑞峰今夜鼓を撾つて(カ)自恣の(ヨ)佛事を作す、只諸人各各所成底を驗過せんことを要す。大衆を顧視して云く、「元來只箇の(タ)鐵彈子。」

(リ)方便。機に隨つて物を利するを方便と云ふ。

(ヌ)擇滅無爲。俱舍界品に三種の無爲を說く。その一の擇滅無爲は擇は卽ち揀擇、滅は卽ち寂滅、謂ふは聲聞の人智を用ひて、揀擇して見思の繫縛を遠離して、卽ち寂滅眞空の理を證す、これを揀滅無爲と名づく。

(ル)平等性智。本來性の常分なり、證得して法身の受用を知るを圓滿報身として、又平等性智とす、卽ち第七末那識の轉變なり、又心無病なりと云ふ。

(ヲ)錮鏴。きづものにいかけすること、錮はつなぎとどむ、いふさぐ、聲聞菩薩もまんぞくに出來ぬを云ふ。

(ワ)鑪鞴。鞴は韛に作るべし、二字ともふいがうなり、國師の法子をこしらへるにたとへる。

(カ)自恣。盂蘭盆會の七月十五日の日に、自分から自分の善惡を人に問ひ、互に遠慮なく心のままに云ひあふて是非をわかつ。

(ヨ)佛事。維摩經注に、佛は人を化するを以て事と爲す、凡て是れ人を化するを皆佛事と名づく。

(タ)鐵彈子。てつのまるがせ。

(レ)初三、十一、中九、下七。この二句は曆書にある出行の吉日にて、世俗の常語なり、初秋夏末出行の時なり。

(ソ)籌。壺矢也、やかず、籌略籌策ははかりごとといふに用ふべし。

(ツ)輸。負けるなり。

(ネ)策功。論功のこと。

(ナ)寒山。寒山子、天台山の仙僧、本氏族なし。

(ラ)蓋面帛。死ぬとき、方帛を以て面を覆ふ、面衣のこと。

復擧す、雲門僧に問ふ、「初秋夏末、平常に觸れず、一句を道ひ將ち來れ。」僧對ふることなし、自ら代つて云く、（レ）「初三、十一、中九、下七」と。拈じて云く、「雲門大師明中に一著を贏ち得て、暗中に一（ソ）籌を（ツ）輸し了れり。」

次の日上堂。法歲已に終つて、人人（ネ）功を策つ。主丈を卓すること一下して云く、（ナ）「寒山拈却す（ラ）蓋面帛、元是れ東家の李大翁。」

八月旦、兩班を謝する上堂、主丈を卓すること一下して云く、「建化門開く、千足萬足、（ム）東自り西自り、思ふて服せずといふことなし、何を以てか驗と爲ん。」丈を靠けて云く、（ウ）「煥涼次序紊れず、秋末天氣已に（ヰ）肅す。」

（ム）自東自西。詩經大雅文王有聲の句。
（ウ）煥涼。煥は暖なり。
（ヰ）肅。肅殺なり、枯すといふ意なり、寒の意もあり。春生秋枯は天の常規也。即ち兩班を謝し、新舊交替するの一語の結にこの一句を用ゐたるもの歟。

再住山城州瑞龍山太平興國南禪禪寺語錄

侍者　紹榮　（イ）懷澄　（ロ）士永　等編

師、（ハ）建武元年十月十日、入院。

山門。㊁天下の瑞龍山、門に第二義なし、若し也た㋭蘆を銜み來らば、那裏是れ那裏。

佛殿。合掌して云く、㋬「希有なり世尊、希有なり世尊、且く道へ箇の什麽をか讃歎す。看よ他の鼻下に口門あることを。」

土地堂。㋣恍たり惚たり、神其の中に在り、恠しむこと莫れ、昔日南泉を見ることを得ざることを。王老師も也た未だ他の形容を見ず。

祖師堂。四七二三、家風未だ墜ちず、東西的的相承、榑桑國裏に流落す。良久して云く、㋠「好事門を出でず、惡事千里に行く。」

據室。古來の宗師、佛を叱し祖を呵す。南禪㋷好采人を接し、㋦丈室門戸を恢開す。何んが故ぞ、大瞋は怒らず。

敕黃。㋸皇祚の一統も也た此の印子に由り、㋾祖宗の中興も也た此の印子に由る。將に謂へり今日始めて流行すと。敕黃を捧起して云く、㋻「威音王前只這れ是れ。」

山門の疏。屋裏竪四橫三、情を盡して一一に說破す。諸人の好心、山僧が罪過。

㋑懷澄。不詳。

㋺士永。青山慈永、國師に嗣ぐ、建長に住す。

㋩建武。後醍醐天皇再祚建武元年甲戌、この前年元弘三年五月隱岐より還京あり、師六十歲。

㊁天下瑞龍山。珠曰く、此年の正月、明極和尚住山のとき、五山第一の勅命ありし後、初めて入寺、ゆゑに專ら支那の徑山に比しての語。

㋭銜蘆。淮南子に「雁は順風を以て氣力を愛し、蘆を銜んで翔り、以て矰弋に備ふ」と、矰はいぐるみ、みじかき矢。請狀を謝するにたとふるか。

㋬希有。金剛經に「希有世尊」とあり。

㋣恍惚。分明ならざる也。

㋠好事。この二句、北夢瑣言に出づ。

㋷好采。采は喝采の采なり、好

法座。座を指して云く、「十年兩度斯の座に登る、等級なき中等級を成す。一回歩を進むれば一回高し。㋕燈王も也た階下に在つて立つ。」香を拈じて云く、「此の一瓣の香、恭しく爲に今上皇帝、聖躬萬歳萬歳萬萬歳を祝嚴す。陛下、恭しく願はくは㋵武を建て文を揚げ、㋟駿功を萬世に播して㋹拔せず、禪を興し教を輔し、鴻業を未來の無窮に傳へたまはんことを。此の香、仰いで、皇太子の尊躬を祝す。伏して願はくは、㋞離明中に瑩きて、㋡嚴威百里に㋧震驚し、㋤副德深く殖ゑて、㋶景運千秋を保ち綏んじたまはんことを。此の香、闔朝の貴官、文武百僚の爲めに、同じく祿算を資け奉る。伏して願はくは、長く㋰天澤の中孚に沐して、久しく法城の外護

采は人看ることを愛す、不好采は人看ることを要せず。

㋦文室。大唐の顯慶年中、勅使王玄策、印度にて、淨名(維摩居士)の宅を過ぎて、笏を以て基を量るに、たゞ十笏あり、故に方丈の室と號す。

㋸皇祚一統。年譜に元弘三年、この年五月兩六波羅、鎌倉及び諸國の平氏、一時に盡亡して公家一統の世となる。

㋾祖宗中興。代代の天子さまの政治を中興なされたるは。

㋻威音王。祖庭事苑五に、禪宗は不立文字之を敎外別傳といふ云云、威音王佛已前は蓋し實際の理地を明す。

㋕燈王。須彌燈王、身の長さ八萬四千由旬。

㋵建武。珠曰く、この年改元の字なり、二字の義は建は初めて取立つるの意、武は左傳に戈を止むるを武と爲す、武に七德ありの說ありて干戈を止むかゝる武の德にて、後漢の光武も武德を以て天下をおさめられたゆゑに、初めて即位の年號を建武と立てられ、諡にも武の字あり、今もその意なるか。

㋟駿。駿は大也。

㋹不拔。堅固丈夫の意。

㋞離明。離は麗なり。日月天にうるはしく、百穀草木地にうるはし、重明以て正にうるはし、乃ち天下を化すと易の離卦象に出づ。

㋡嚴威。敬畏也。

㋧震驚。易說卦に、震を雷と爲す、長子と爲す、龍と爲す。百里を驚すは遠を驚し、邇を懼れしむるなり。

㋤副。かけがひ、副君也。

㋶景運。大運なり。

㋰天澤中孚。易の履卦象上に出づ、孚は信也。大觀珠曰く、

と爲んことを。
此の香、多年窮谷に抛在して、㋒贏ち得たり枝葉の自ら除ることを。錯つて人前に向つて㋬賣弄して、㋨聲價偏に掠虛に墮つ。早く今日の事を知らば、悔ゆらくは當初を愼しまざることを。㋔已に展べて縮めず、爐中に爇向して、前住相州巨福名山建長禪寺　勅諡佛國禪師高峰大和尙に供養して、用つて負恩の罪を謝す。」
就座。問答錄せず、乃ち云く、「向上の一著子㋗宇宙の間に㋳祕在す　佛祖の出興、皆斯の要を默す。靈山曾て迦葉に付せず、㋮少室誰か言ふ神光に授くと。㋘西竺乾、㋫東震旦、㋙繩繩繼繼、㋓響を接し虛を承く。或は放或は收、賓主互換、一挨一拶、擧踢相酬ゆ。便ち見る㋢五家行を㋐抗げ、途を通じ格を變ずることを。敲

後醍醐帝再祚の後ゆゑ、群臣は皆天皇隱岐へ遷幸の後、北條氏に從ひ嚴院に奉仕し、し衆ばかりなり、左すれば皆天皇に背きたる人々なり、しかし時勢を推察ありて科なかろくし、死罪を宥め給ふ、この御恩澤にいづれも永くうるほふなり。

㋒贏得。大觀珠曰く、かちは商の利の餘りなり、算用し了ふて見れば、これ計りが得たりと云ふことなり、勝の義あるゆゑかつとよむが、意は前文のとほりなり。

㋬賣弄。ひけらかすの義。

㋨聲價。珠曰く、名の直うちが實の方へゆかぬ、一方むきにそらごとの方へおつる也。

㋔已展不縮。虛堂錄卷一に出づ、もこ[illegible]寺して店をひらいたからは、尻おぼめはならぬ。

㋗宇宙。古往今來を宙といひ、四方上下を宇といふ。

㋳祕在。乾坤內宇宙の間に一寶あり。

㋮少室神光。傳燈三慧可大師の章、少室は達磨大師の居りしところ。

㋘西竺乾。印度。

㋫東震旦。支那。

㋙繩繩。絕えざること。

㋓接響承虛。不實を領取しての意、人の評判斗りきいてなり。

㋢五家。臨濟、潙仰、雲門、法眼、曹洞の五派。

㋐抗。抵抗なり、敵抗なり。

㋚有分。あたりまへのこと。

㋖祝聖。皇帝の萬歲を祝するの法式。

㋴無私。平等無差じや、天鑑無私などと云ふてえこひいきはないと云ふこと。

㋱爾宗。玄宗帝の子、李唐八代主、法を六祖惠能に問ひ給ふ。

㋯忠國師。南陽忠國師、六祖に

唱彌峻く、號令益嚴なり。然も是くの如くなりと雖も、終に未だ此の一著子を擧揚せず。

石上座。今晨此の座に陞る、亦只緘默するに(サ)分あり。是れ開堂(キ)祝聖の儀を失却すること莫し麽。良久して云く、「好し是れ(コ)無私の大法輪、蓋天蓋地 皇化を助く。」叙詞錄せず。

復た擧す、大唐の(メ)肅宗皇帝、(ミ)忠國師に問ふ、「如何なるか是れ(シ)無諍三昧。」國師奏して云く、(ヱ)「檀越(ヒ)毘盧頂上を踏んで行け」と。拈じて云く、「肅宗(モ)綸言虛りに出さず、言中自ら(セ)仙陀の響あり。忠國師の高談闊論は卽ち得たり、只是れ未だ鹽水器馬を辨ぜざること在り。山野今日恁麽の奏對を勞せず、坐ながら無諍三昧の自然に現前するを見る、何を以て驗と爲ん。」拂子を擊つて云く、(ス)「九垓(イ)鼎祚に歸し、(ロ)四塞烽烟を絕す。」

當晚小參。問答錄せず、乃ち云く、(ハ)「空劫那邊の一大機、古今(ニ)歷落して遷移せず、聲に騎り色を盞ふて獨り(ホ)旋斡す。佛祖當頭眼、眉に似たり、山僧當年此の精藍に據る。山門佛殿に(ヘ)朝し、(ト)厨庫(チ)僧堂に對す。翠竹青松、左に圍み右に列す。烟巒雲嶂、後に峙ち前に横ふ。今日看來れば、

嗣法す。

(シ)無諍三昧。金剛經に出づ。

(ヱ)檀越。「だんのつ」とよむべし、梵語に陀那鉢底、譯して施主と云ふ、檀を行ふに由る、貧乏を越度する者也。

(ヒ)毘盧頂上。法身如來を毘盧遮那と云ふ、遍一切處と譯す。大佛さんのあたまの上といふやうなもの。

(モ)綸言。天子のちよくめい。天子のおほせはだんだん云ひつぐほどぎやうさんになるゆゑ絲にたとへる。

(セ)仙陀。涅槃經の九に、一名四實鹽水器馬。

(ス)九垓。王者は九垓の田を置く、九垓は九州の極數也、垓は國のはて、極土なり。

(イ)鼎祚。鼎は三足兩耳、五味を和するの寶器也と云ふて、帝業にたとへる、天子の福德にしたがふの意。

皆悉く舊に仍つて、更に一絲毫許も移易せず。且つ喜すらくは、現前の大衆と同じく此の不變不異の域に游ぶことを。」驀に主丈を拈じて云く、「主丈子冷地甘なはず、出で來つて便ち道ふ、新南禪矚只一隻眼を具す。殊に知らず、近日（リ）皇風一變して、佛法也た斬新なることを。山僧伏して（ヌ）處分を聽かんに、卽今拄杖子其の斬新底の法門を說くこと（ル）一上せよ。」卓一下して云く、「諸仁者、還つて會す麼、其れ或は未だ會せずんば、更に注脚を下し去らん。」又卓一下。

復た擧す、僧、（ヲ）曹山に問ふ、「佛未だ出世せざる時如何ん。」山云く、「曹山如かじ。」僧云く、「出世して後如何ん。」山云く、「曹山に如かず」と。拈じて云く、「這の僧虛空裏に向つて兩橛を釘す。曹山（ワ）奨奨窠窠、亦（カ）鬮茸に（ヨ）例す。南禪今夜

（ロ）四塞。四方のてきどもも、いくさのろしをあげぬ。

（ハ）空劫。劫に成、住、壞、空の四あり、一大劫といふ。

（ニ）歷落。歷は分明、落は碧落、廓落と同じ。

（ホ）旋斡。めぐり轉ずるなり。

（ヘ）朝。朝見など云ふて、天子におめにかゝるを云ふ、河海の水、東に朝すなどに轉用してあつまる意味に用ふ。

（ト）厨庫。くり、寺のだいどころ、七堂伽藍の一。

（チ）僧堂。大衆のしゆぎやうするたてもの、選佛場とも云ふ。

（リ）皇風一變。天皇が武家の干涉するを止めて、一統して昔に復したまひしを云ふ。歷史上見ておくべき語なり。

（ヌ）處分。さばきさしづ。

（ル）一上。一場なり。

（ヲ）曹山。本寂禪師、唐代の名僧、曹洞宗の祖。

（ワ）奨々窠々。奨は逆行、窠は出格。この四字にて木にていへば節の多きなり、人に逆ふをよいとする人、すれる、ふふくものゝろゐ。

（カ）鬮茸。猥賤也、やくたいもなくいやし、しつかりと格のたたぬこと、ひれつ、賤は位のひくきことにて、了簡がせまいと云ふこと。

（ヨ）例。おしなべてと譯す、例鬮茸とは曹山も亦世間のひれつなせまい了簡の人と、おしなべてなられたとなり。

（タ）下揚州。三つの下揚州あり、その末に腰十萬貫をまとふて鶴に騎つて揚州を下るとあり。

（レ）聖節。後醍醐天皇の天壽聖節、文保二年十一月二日の御降誕なれば十一月二日の上堂ならん。

（ソ）千載間出。間出は孟子の公孫

敢て他の出と未出とを論せず、且く道へ畢竟何者か是れ佛。」喝一喝。
上堂。佛法多子なし、只自ら羞を知らんことを要す。昨日は晴今日は雨、妨げず鶴に騎つて㋟揚州に下ることを。
㋹聖節、上堂。㋞千載間出、一朝㋡誕彌、景運此の日從りして延ぶ。㋧日日是れ好日、㋤洪基其の時を得て以て建つ。時時是れ好時、㋶祥開き㋰慶布く。塵沙界、萬象森羅齊しく眉を展ぶ。
㋒無極㋼無徳の二首座㋨昭書記㋔玄藏主を謝する上堂。㋗羣形無極に生ず、誰か㋳端倪を辨せん。大用無徳に現ず、焉んぞ軌則を存せん。金章玉章、著述し成し難く、大藏小藏、詮注し得ず。太光生黑漆黑、人天の眼目通塞沒し。
冬節小參。問答罷んで、乃ち云く、㋮「陰化極る時、青松翠柏尙ほ色を變じ、陽威發る處、凍木寒叢也た芽を生ず。燠涼相凌いで、都て朕迹なし。其の所以を泯す、寧ろ識情を容れんや。者裏に到つて、沒量の大人、口㋘磔盤に似たり。明眼の衲僧、只頭彩を見る。惹き得たり皓老布裩を洗はず、汗臭掩ひ難く、㋫鏡清㋙臥單を展べず、眼を開いて床に尿することを。然

丑の章に、五百年必ず王者興ること有り云云とあり、天皇は實に千載の間出の帝王にていらせらるればなり、國師のこの語大に味ふべし、よき史料たるの語なり。
㋡誕彌。玉篇に、天子の生るるを降誕と云ふとあり、生日を誕彌の辰と云ふ、彌はわたる、十月を終るなり。
㋧日日是好日。昨日も今日も御めでたいなり。
㋤洪基得其時。洪基は大業のもとゐで、天皇の御事業は皇政に御復古の御志が、このときをはづしては得給ふことはむづかしいで、ちやうど御運がむかせられたので、建國の基となる。
㋶祥開。目出度ことの目に見ゆるなり、開ははじまるなり。
㋰慶布。目出度こと、布はひろがるなり。

も是くの如くなりと雖も、冬夜斯に臨む、空しく過すべからず。別に家宴を作して、我が此の現前の大衆を管顧し去らん。」手を拱いて云く、「仲冬嚴寒、伏して惟れば珍重。」

復た擧す、㋓南華の德禪師、新に寶壽に遷る。恰も新冬に値ふて、衆に示して云く、「新冬、新寶壽、言は是れ舊時の言、若し㋢西來意を會せば、㋐波斯舶船に上る。」拈じて云く、「寶壽此の四句を示す、梵語に依俙として、唐言に彷彿たり。山僧住院未だ幾くならざるに、忽ち冬節に逢ふ、也た一偈あり、是れ梵語耶、是れ唐言耶、諸人試に請ふ聽取せよ。新冬新南禪、言も也た是れ新言、喚んで西來意と作さば、北人船を夢みず。」

次の日上堂。陽は陰處從り生じ、陰は陽中に向つて極る。拂子を竪起して云く、「且く道へ、這箇那裏從り得來る。」拂子を擲下して云く、「九九元來八十一。」

㋚建武元年十一月二十八日、

㋖龍、駕本寺に臨幸して一宿、次の早、師に命じて衆の爲めに入室、齋罷んで上堂、拈香、祝聖罷んで趺座、問答罷んで乃ち云く、「一顆の靈光、

㋒無極。諱志玄、天龍第二世、佛慈禪師と諡す。

㋼無德。字は至孝。

㋨昭晉記。淨智の部に見ゆ。

㋔玄藏主。不詳。

㋗擧形。太極なり。

㋳端倪。倪は分也、際也、極際のこと、山のいただきと水のほとりと、本末始終の義。

㋮陰化。陰陽造化と云ふこと、冬分の也。

㋘磉盤。柱下の石。

㋫鏡淸。洞山价に嗣ぐ。

㋙臥單。會元十三に出づる故事。

㋓南華德。南華稀の法嗣。

㋢西來意。達磨さまが、印度から支那へやつてきた主意は、直指の旨を傳へんがためじや。

㋐波斯。方語に尋常茶飯。

㋚建武元年十一月二十八日。この年この十一月、護良親王鎌倉に幽閉せられ給ふ、この十

今古に輝騰す、明暗通塞、其の相を奪はず、長短方圓、其の形を狀らず、蕩蕩恢恢、㋴煒煒㋱燁燁、天地㋯此を得て以て覆載し、日月此を得て以て照臨す。㋛之を佛祖向上の法輪と謂ひ、亦君王㋽中原の㋪大寶と名づく。是れ㋲四輪の類に非ず、寧ろ七寶を將つて齊しうせんや。此の寶現ずる時、貴賤賢愚、咸く德を荷ひ、此の輪轉ずる處、妖邪魔外盡く蹤を潛む。今日龍㋝馭山中に光幸す、林㋜樾峯巒、爭ふて吉祥の色を呈し、齋鐘粥鼓、亦歡喜の聲を作す。直に得たり向上の法輪、推轉するに勞せず、㋑脫體斯に彰る。君王の大寶、希求する所なけれども、自然にして至る。正與麼の時、天を感ぜしめ國に報ずるの一句、如何んが㋺道著せん。主丈を卓すること一下して云く、㋩「此の深心を將つて塵刹に奉ず、是を則ち名づけて聖恩を報ずと爲す。」敍謝、錄せず。

復た擧す、大宋の㋥孝宗皇帝、佛照禪師に問ふ、「世尊六年雪山に居す、成ずる所は何事ぞ。」㋭佛照奏して云く、「將に謂へり陛下㋬忘却す」と。拈じて云く、「佛照御に對し玄を談ず、一時㋣大遇、檢點し將ち來れば、未だ免れず聖聰を汙瀆することを。今日忽ち人あり、再び此の山に住して、成

月藤原藤房官をすて去る。
㋖龍駕。天子の馬を龍といふ、南禪寺へ臨幸し給ふ。大日本史料六の二、建武元、十一、二十八日、南禪寺に行幸し、駐蹕二日にして還り給ふ。又夢窓國師臨幸私記あり、次第を記す。
㋴煒煒。盛赤也、光明也。
㋱燁燁。明盛也、電光也。
㋯得此。此は一顆の靈光。
㋛之を。一顆の靈光。
㋽中原。國の中央。
㋪大寶。一顆の靈光。
㋲四輪。金、銀、銅、鐵。
㋝馭。御に同じ、天子ののりもの。
㋜樾。なみき、木陰、木叢。
㋑脫體。一顆の靈光。
㋺道著。いひ得んなり。
㋩將此深心。楞嚴經三、阿難、佛を讚する偈の中。
㋥孝宗。南宋六代主、高宗の子。

す所は何事ぞと問はゞ、只他に對して道はん、低聲低聲、天子殿前、閒話を容れずと。」

十二月初三日、恭しく聖旨を奉はつて、特に㋠莊田を賜ふ。鼓を鳴して陞堂。拈香。祝聖罷んで、據座、㋷偈を說いて云く、㋦「公憑端自二日邊一臻。㋸乃祖田園畔明。㋾九穗嘉禾今已熟。荷レ恩何必待二秋成一。」

頭首の㋻御に對して秉拂するを謝する上堂。一喝㋕賓主を分ち、一句㋵敎禪を辨ず、㋟峻機頴脫、舌に㋹瀑泉あり。且く道へ賓主敎禪、一筆に㋞勾下する時又如何ん。拂子を擲下して云く、㋡「龜毛の拂子筋斗を飜へす、㋧鳳鸞を驚起して碧天に翔けしむ。」

臘八、上堂。六年癡坐、㋤蒙を擊つに由なし。㋶寒心㋰酸鼻、徹骨の貧窮、窮るときは則ち變

㋭佛照。育王山佛照德光禪師、大慧杲に嗣ぐ、南宋の名僧。

㋬忘卻。如來は我法は國王大臣に付すと說かれた、今帝には忘卻なされたらう、還つて記得しめされよと。

㋣大過。便利を得るの義。

㋠莊田。莊園と云ふが如し、天子より祿田を賜ふなり。大日本史料六の二に、遠江新所鄉を南禪寺に寄附す。

㋷說偈。この和韻に、明極楚俊も一偈あり。

㋦公憑。憑は托なり。

㋸乃祖。乃はなほ汝と云ふが如し。

㋾九穗。一莖九穗。

㋻對御。天子の御前。

㋕賓主。「ひんじゆ」とよむべし、臨濟の四賓主の故事あり、柳は綠花は紅と、ありありはつきりしてゐる。

㋵敎禪。敎相と坐禪と。

㋟峻機頴脫。頴脫は錐の芒也、いづれもみなやりてじやといふほめことば。

㋹瀑泉。いふことは、まるでたきのみづの流れるやうな辯者斗りとほめられた。

㋞勾下。除去するを云ふ、點をかけてけすこと、勾はまがるかぎの如くまがるなり。

㋡龜毛拂子。一塵は常にあらず、變めつするときは、きもうとかくに同じ。

㋧鳳鸞。當日の百官扈從に比す。

㋤擊蒙。蒙は「くらし」とよむ、故に開悟の意なり。

㋶寒心。戰慄也、ぞつとする。

㋰酸鼻。はなつまみもならぬ。

㋒襤褸。敝衣也、ぼろぎ。

㋼歲夜小參。除夜のばん。

㋨籥。鎖鑰也。

㋔爆竹。支那の祝日の習慣で、竹をはためく。

㋗張公李老。七兵衞も八兵衞も。

じ、變ずるときは則ち通ず。驀地に身を翻して山を下り去る、(ワ)襤褸袖裏春風を裹む。

上堂。主丈を卓すること一下して云く、「諦聽諦聽、唯此の一事實、餘二則ち非眞。」

(ヰ)歲夜小參。問答罷んで乃ち云く、「歲(ノ)籥運轉して、除夜斯に臨む。西巷東村、錢を燒き(オ)竹を爆き、(ク)張公李老、(ヤ)儺を驅り(マ)窮を送る。一等に是れ大丈夫、惜しい乎、十二時辰に使はれて、七顚八倒することを。(ケ)衲僧家、(フ)翛然として(コ)象外に遊ぶ。甚の月の晦朔、年の舊新とか論ぜん。卽今是れ臘月三十の夜にあらずや、誰か言はん來日定んで是れ大年朝と。直饒恁麼の田地に到り得るも、也た未だ(エ)解脫の深坑に墮在して、脚を擡げて起たざることを免れず。畢竟如何んが折合し去らん。」良久して云く、「是れ(テ)桃源の客にあらずんば、徒に洞中を話するに勞せん。」

復擧す、(ア)香林に因に僧問ふ、「萬(サ)頃の(キ)荒田、是れ誰か(ユ)主と爲る。」林云く、(メ)「看よ看よ臘月の盡くることを。」頌して云く、「萬頃荒田主是誰。答道看看臘月盡。昨日有レ人天台來。却得二江西一封信一。

(ヤ)驅儺。鬼は外、福は內。となり。儒者は正月晦日のことに用ふ、祖錄は除夜に用ふ。

(マ)送窮。鬼を追ふなり、韓文にも送窮文といふあり。

(ケ)衲僧家。われわれ坊主なかまではといふこと。

(フ)翛然。累はしきところなしと。

(コ)象外。世間外のこと、よろづかたちのほかと云ふこと。

(エ)解脫深坑。聲聞緣覺の境界におちこんで。

(テ)桃源。武陵桃源の故事、仙境のおもむきをしる人でなくば。

(ア)香林。澄遠禪師、雲門に嗣ぐ。

(サ)頃。田百畝を頃と爲す、六尺を步となす、二百四十步を畝となす。

(キ)荒田。本分の田地。

(ユ)爲主。ただ自照すべきこと。

(メ)看看。いつの間にやら、大晦日になつた。

元正上堂。㋯歳華云に一變して、暑運㋛三陽を告ぐ。試に腰間の曆日を把つて看よ、何れの日何れの時か吉祥ならざる。

元宵、新舊兩班を謝する上堂。進んで宗に違はず、退いて旨を失はず、左顧右㋓盻、都て暗地なし。佛法世法、照一致に歸す、何を以てか驗と爲る。拂を以て圓相を打して云く、㋪「我見燈明佛、㋲本光瑞如此。」

上堂。今朝二月一、人人誰か識らざる、二雙に非ず、一隻に非ず、聰明の大王㋝算筒を擲ち、雨餘の春水虛碧を漾はす。

㋜壽福㋑石梁和尙、遺訃至る、上堂。丙寅の生、囉囉哩、甲戌の滅、囉哩、滅不滅、生不生、囉囉哩、長空萬里一圓月、囉囉哩、壽福和尙、此の還源の歌を唱ふ。南禪恁麼に㋺擊節す、且く道へ是れ什麼の曲調ぞ。拂を以て床を擊つて云く、「囉囉哩、囉囉哩。」

佛涅槃、上堂。鹿苑の中㋩鶴林の下、左出右沒、千變萬化、而今滅後二千年、花柳㋥依依として春野に徧し。伏して惟んみれば、釋迦如來、㋭贓に和して捉敗し了れり。

三月旦、上堂。㋬睦州和尙云く、「現成公案、儞に三十棒を放す。」敢て大

㋯歳華。四時風雲草木等入りみだれて、次第にあやあるを形容して云ふ。
㋛三陽。十一月復、一陽、十二月臨、二陽、正月泰、三陽。
㋓盻。盼に作るべし、ふりかへりみる。
㋪我見燈明佛。人々自己の燈影あり、法華序品に出づ。
㋲本光瑞如此。いつもかはらぬ、人々具足の那一燈。
㋝算筒。さんぎのつつ也、昔のさんぎは今のそろばんの事。
㋜壽福。建保三年建立、鎌倉五山の一なり、龜谷山と號し、榮西を開山とす。
㋑石梁。仁恭禪師、寧一山に嗣ぐ、建仁壽福等に住す、徑山の石溪月に嗣ぐ。元の台州の人、建武元年十二月十八日寂、六十九歲。
㋺擊節。ひやうしをとると云ふこと、答への意。

衆に問ふ、「如何なるか是れ現成公案。」是れ輕烟柳眼を遮り、微雨花腮を濕す底なること莫し麽。是れ三通鼓鳴つて、四衆雲の如く集る處莫し麽。是れ南禪不說にして說き、諸人無聽にして聽く處莫し麽。阿呵呵、地に就いて拾ひ得たり麗水の金、拈起すれば是れ㋣新羅の鐵。

㋠浴主を謝する上堂。㋷水、水を洗はず、㋦妙觸宣明、十六㋸開士、㋾夢裏惺惺。主丈を卓す。

㋻果首座㋕忻藏主至るを謝する上堂。千經萬論、一默に如かじ、直示單傳、也た奇特に非ず。㋵仰山、錯つて㋟率陀天に上る。㋹觀音院內に彌勒あり。

浴佛上堂。天上天下、唯我獨尊、怗しむこと莫れ㋞渠儂思算なきことを。新生の孩子金盆に擲つ。

㋩鶴林。沙羅樹林の別名也。昔、如來の涅槃に入り玉ふとき、狗尸那城の沙羅樹林、變じて白鶴の如しと涅槃經に出づ。

㋥依依。柔弱なること、離るべからざること、しなやかにある體なり。

㋭和贓捉敗。贓は贓物と云ふ、盜のとるところの物。

㋬睦州。陳尊宿、黃檗希運に嗣ぐ、江南季王の裔、雲門もこの和尙に參じて、足を折られて大悟した。

㋣新羅鐵。鈍鐵也。

㋠浴主。ふろたきばうさま。

㋷水不洗水。本來空のところに於ては。

㋦妙觸宣明。このことは楞嚴經の五に出づる故事にして、印度の神話を以て禪化したものと云ふことである、水因を悟ると云ふ十六開士が、互に浴僧のときである、妙觸は水が肌にさはるとよい心もちなのを云ふ、宣明は水が水晶を、とかしたやうなきれいなものに、見えたるを云ふ、これは印度の熱い國の人だちじやから、水浴にちがひない、跋陀婆羅同件にてありき。

㋸開士。菩薩の一譯語である、悟を開いて居る人、又は、大士高士とも用ゆ。

㋾夢裏惺々。ゆめのうちにさつばりした、妙觸宣明成佛子住じや。

㋻果首座。未詳。

㋕忻藏主。大喜法忻禪師、太平準に嗣ぐ、佛滿禪師と諡す。

㋵仰山。潙山に嗣ぐ、前に出づ、絕四句離百非のことゝ同じ、このことは傳燈九仰山の章にあり。

㋟率陀。此には妙足と云ふ、都史陀とも云ふ、夢に上天す。

㋹觀音院。趙州錄の頌に、趙州

㋡天岸和尚、訃音至る、上堂。眉毛を相結ぶ、山川萬里、永く音容を絶つ。方に道義を見る、如是如是、不是不是、誰か知る㋧一路涅槃門、㋤同條に生じて同條に死せず。

結夏小參。九旬克期、㋶橋柱を抱いて㋰澡洗す。三處夏を度る、笤帚蛾眉を畫く。祖師門下、這般の㋒瞢底を管せず、只出格の機を要す。抑勒を㋼規繩に受けず、㋨威儀を㋔茆曠に混ぜず。㋗窈窈窕窕、別に生涯あり。若し能く恁地ならば、西天の蠟人氷、東土の鐵彈子、也た是れ閒家㋳潑具、諸仁者他の出格の生涯を知らんと要する麼。茶に逢ふては茶を喫し、飯に逢ふては飯を喫す。

復た擧す。僧古德に問ふ、「如何なるか是れ乾坤を定むるの句。」德云く、㋮「十日一雨、五日一風。」拈じて云く、「寸刄を施さず、坐ながらに太平を致す。古德なきにあらず、只是れ未在、何んぞ也、堯舜の君も猶ほ化に㋘稽ほる。」

次の日上堂。十五日已前、盞盂口天に向ひ、十五日已後、㋾紫茸氈を轗却す。正當今日、聻。主丈を卓して云く、「寒山管せず安居の事、須彌頂上に

の南、石橋の北、觀音院裏彌勒有り。
㋡渠儂。きよのう、渠は彼なり、他人を云ふ、儂は我なり。
㋾天岸和尚。惠廣禪師、佛國高峰に嗣ぐ、夢窓の同參。
㋧一路涅槃門。楞嚴經五に出づ。
㋤同條。當今でなら、おまへとならばどこまでもじや。
㋶抱橋柱。普燈十七廓庵遠の章に出づ、今は九旬克期の規矩に取りついて居るがわるい、たゞ大死一番せよとなり。
㋰澡洗。あらふ。
㋒瞢底。目くら。
㋼規繩。禪堂の規律。
㋨威儀。叢林の禮式。
㋔茆曠。狼藉の義、草のばうばう生えたるにたとへる。
㋗窈々窕々。幽閑の義。
㋳潑具。潑ははたし、日本のやくにたゝぬ道具と云ふこと。
㋮十日一雨。王充論衡に、太平

鍬钁を打す。」

五頭首の秉拂を謝する上堂。鷲嶺㋙一音を以て演法、衆上隨類各得解、龍山五音を借つて玄を談す、絶唱古曲人の會するなし。且く道へ鷲嶺底是、龍山底是。良久して云く、「牡丹一日紅に、松柏千年翠なり。」

上堂。拄丈を卓すること一下して云く、「會するときは則ち㋓途中受用、會せざるときは㋢世諦流布。」又卓一下。

㋐鏡空首座を謝し、兼て大衆の普請、地を㋚钁し土を般ぶことを謝する上堂。淨土院を革めて㋖延壽堂と爲す。眉間の劍、肘後の符、㋴鏡裏の空、㋱日中の斗、㋯大人の境界格量を超ゆ。普請諸人自ら看取せよ、凡地佛地高低沒し、㋛淨土㋽穢土異趣に非ず。龍山恁麼の擧唱、也

の時、五日一風十日一雨。

㋘稽。とゞこほると訓す、稽は滯也。

㋫靴卻紫茸氈。靴は履空也（くつのまはりがは）又襪也、拔也、紫茸氈は紫色長毛の茸亂を以て氈となしたるもの、外國の珍產也と云ふ、つまりいへば、むしやつくとて毛をむしつてのけた、透脫自在の境界じや、茸はむちやくちやはえるの意、靴卻はひきのばすなり。

㋙一音演法。維摩經の佛國品に出づ。

㋓途中受用。途中は彼岸に達する途中、受用ははたらき。

㋢世諦流布。世わたりのやりかた。

㋐鏡空首座。淨心、規庵圓に嗣ぐ、夢窓の法姪にて、前堂を退職するゆゑの上堂。

㋚钁。すぐと云ふこと。

㋖延壽堂。病僧の入る舍。

㋴鏡裏空。一切さはりなき意。

㋱日中斗。斗は斗の古字。

㋯大人。智度論七十二に、「菩薩は福德智慧積聚の故に、應に是れ大人なるべし」とあり。

㋛淨土。他界。

㋽穢土。此界。

㋪甕縣茶瓶。傳說に甕縣より出すところの茶瓶は口多しと、方語に多觜多口、兩方に口があるゆゑ、しやべるなどと云ふことか。

㋲飢逢王饍。法華經授記品に出づる偈。

㋝甕裏走鼈。たしかなことをとりにがしたる義。

㋜才。わづか、纔の字の略なり。そこへと云ふこと。

㋑貧疾。いらぬいぼ。

㋺大用現前。大活動の發露。

㋩揑聚放開。自在自由、天上天下、思の儘なること。

た未だ免れず、平地に骨堆を起すことを。拂を以つて牀を撃つて云く、「山前麥熟して桑麻緑なり、鑁頭を颺下して歸去來。」

上堂。擧す、雲門大師云く、「佛法は太だ殺あり、只是れ舌頭短し。」良久して云く、「長也。」拈じて云く、「雲門の舌頭短きときは則ち上梵天を拄へ、長きときは則ち口中を出でず。諸仁者、他の舌頭の落處を知らんと要する麼。噁、㋪鞏縣の茶瓶。」

上堂。寒の時は普天寒し、熱の時は普天熱す。㋲飢ゑて王饍に逢ふて餐すること能はず、剛ひて言ふ㋝甕裏に鼈を走卻すと。咄。

上堂。一葉㋜才かに落ちて天下秋を知る、祖意教意、好肉の㋑贅疣。喝一喝。

解夏小參。靈機活脫、㋺大用現前、㋩揑聚放開、軌則を存せず、㋥殼に滯り㋭封に迷ふ底、其の㋬體裁を知ること莫し。大覺世尊、二千年前、虛空裏に向つて、長短の劃を著く、之を法歲期限と謂ふ。結の時解あり、㋣三脚の蝦蟇飛んで天に上る。解の時結あり、㋠無角の鐵牛少室に眠る。倘し能く此に於て薦得せば、便ち見る釋迦老子、㋷七手八脚、便ち露れ了

㋥滯殼。殼はからなり、皮なり、書狀の袋なり、封筒なり。
㋭封。封も封筒なり、殼に同じ。
㋬體裁。しかた、もやうのきりもり。
㋣三脚蝦蟇。なぜなれば。
㋠無角鐵牛。なぜなれば。
㋷七手八脚。とりちらした。
㋦古德。洛京栢谷禪師。
㋸蠟人機。戒臘を守りたる古德にもはぢぬ。蠟は又臘に作る。
㋾聖制。佛の定めたまひし夏安居も、をはりて。
㋻精勤。精進勤苦。
㋕木上座。主丈子を云ふ
㋵莫謂。褒美の語にあらぬ。
㋟人人自有光明在。雲門大師上堂、人々暗昏々作麼生か自己の光明。
㋹呑却三四。傳燈十五、投子大同禪師の章に出づ。
㋞廣寒宮。山堂肆考宮集に云く、唐の明皇八月望日、月宮に遊

れり。其れ或は未だ然らずんば、山中九十日、雲外幾千年。

復た擧す、僧（ヌ）古德に問ふ、「九旬禁足の事如何ん。」德云く、（ル）「蠟人の機に墜ちず」と。拈じて云く、「古德恁麼の答話、只壁を照す月のみありて、且つ葉を吹くの風なし。」

次の日上堂。主丈を拈じて云く、（ヨ）「聖制已に周畢、人人（ワ）精勤を闘はしむ。唯（カ）木上座あり、舊に依つて黑𪓰皴、是れを虛しく一夏を度ると爲ん耶、別に長處あり耶。」主丈を卓すること一下して云く、「白日官路に行き、三更孟津を過ぐ。」

新舊兩班を謝する上堂。一進一退、水銀地に墜つ。左之右之、善盡し美盡す。（ヨ）謂ふことと莫れ南禪口門窄しと。山河大地齊しく懽喜す。拂を以て牀を擊つて、下座。

上堂。（タ）人人自ら光明の在るあり、看る時見えず暗昏昏、雲門大師、沙に和して黃金を賣る。只小利を貪ることを得たり、龍山未だ嘗て這般の事を說著せず、何んが故ぞ。良久して云く、「一擧四十九。」

中秋上堂。（レ）「三四を吞却し、七八を吐卻す。吞吐機前眼眉に似たり、

び天府の牓を見るに、廣寒清虛の府と曰ふ、素娥十餘人、皆皓衣白鸞に乘じ、桂樹の下に舞ふと。月宮殿のことなり。

（ツ）愿書記。愿は未詳。

（ネ）無賓主話。趙州錄に趙州示衆の語。

（ホ）一不成。初めできればそのとほり。

（ラ）二不是。次にできたらさうでない。

（ム）摩訶衍。具に摩訶衍那と云ふ、摩訶は大衍、那は乘也。

（ウ）南山和尚。士雲禪師、東福に住す、建武二年十月七日化す、年八十二。

（ヰ）十虛。十方虛空なり、楞嚴經九に、汝等一人眞を發し元に歸すれば、此の十方空皆悉く消殞す云云。

（ノ）舜若多神。此には空と譯す、これも楞嚴經の三に出づ。

（オ）一瓶凍。淮南子の說山訓に出づ。

㋞廣寒宮裏乾坤濶し。

上堂。大道本平夷、愚人自ら佇立す。良久して云く、「鮎魚竹竿に上る、駟馬追へども及ばず。」

上堂。主丈を拈じて云く、「聲前容を露はし。」丈を卓すること一下して云く、「句後跡を削る、畢竟如何ん。」丈を靠けて云く、「三雙六隻。」

開爐。㋡愿書記を謝する上堂、燠凉交替、彼此相知る。風頭暖なる處、商量時を得たり。拂を以て牀を擊つて云く、「三箇柴頭品字を成し、㋧無賓主の話繁詞を絕す。」

後堂首座を謝する上堂。㋤一不成㋶二不是、一著を放過すれば第二に落在す。苟し能く第二を識得し去らば、㋰摩訶衍の法別事なし。主丈を卓す。

㋒南山和尚遺書至る、上堂。化緣已に盡きて、一機を撥轉す。㋼十虛消殞し、萬象號悲す。當頭突出す大人の相、㋨舜若多神笑つて眉を展ぶ。

冬節小參。㋔一瓶の凍を觀て、天下の寒きを知り、一管の灰を觀て、天下の暖きを知る。造化の公憑全く昭著し、己靈の神用自ら現前す。㋗海嶽山童悉く其の分あり、寒梅瘦竹發機せずといふこと靡し。此に於て薦

㋗海嶽山童。童僕、未冠の稱。

㋳客作。法華經の信解品に、客作の賤人とあり。

㋮關棙子。からくりの棙どころ、緊要の箇所也。

㋘至節。冬至。

㋫聖節。後醍醐天皇御降誕、十一月二日の天長節。

㋙地不黃。黃は地の色。

㋓天不玄。玄は天の色。

㋢端拱。支那禮式ふうにて、うやまひてたゞしく手をこまぬいて、座して最敬禮したてまつる。

㋐四頭首。頭首とは、古參の上士にて、十四人あり、今は四人の最上士をいふ。庫司、典藏、知客、直日。

㋚人天眼目。この二句前堂首座を謝す。

㋖藉此。この一句子。

㋴摩訶衍法。摩訶衍は大と譯す、大法也。後堂首座を謝す也。

㋱建化門中。この句は藏主を謝す。

得せば、他に許す聲色叢中活路を通じ、聖凡魔外手を把つて遊ぶ。然も是くの如くなりと雖も、明眼に看來れば、也た是れ㋳客作の漢、何んが故ぞ、未だ祖師の㋮關棙子を透らずんば、徒に山河を認めて眼睛と作す。

復た舉す。僧趙州に問ふ、「如何なるか是れ不遷の義。」州手を以て流水の勢を作す。拈じて云く、「明中に官路を放開し、暗裏に封疆を把斷す。諸人什麼の處に向つてか趙州を見ん。」良久して云く、「陽氣の發する時硬地なし。」

㋘至節上堂。圓相を以て圓相を打して云く、「陰は這裏に向つて剝盡、分毫を減せず、陽は這裏從り生じ來る、一絲を添へず、也た減せず也た添へず、泥人突出す黃金の面。」

㋫聖節、上堂。威音王前、㋙地黃ならず㋓天玄ならず。威音王後、坤六斷乾三連、正當今日又且つ如何ん。㋢端拱して云く、「今上皇帝聖壽萬年。」

㋐四頭首の秉拂及び靜山首座の至るを謝する上堂。我に一句子あり、徧界曾て藏さず。㋚人天の眼目、㋖此に藉つて豁開し、㋴摩訶衍の法、此に

㋯十二分敎。十二部經とも云ふ、修多羅、祇夜、伽陀、和伽羅、尼陀那、阿浮陀達磨、伊帝目多伽、闍陀伽、阿波陀那、優婆提舍、優陀那、毘佛略。

㋛翰靈場裏。この句は書記を謝す。

㋹居山。この句は靜山首座を謝す。

㋪大歇。不詳。

㋲盤礴。箕踞の狀、わだかまる。

㋝迸裂。走散也、へい、はうの二音あり、今ははうとよむべし。

㋜光芒。きらきらする光なり。

㋑東福。京都五山の一。

㋺雙峰禪師。名は宗源、東福十二世、聖一國師に嗣ぐ、南禪にも住す、後宇多天皇の歸信厚し、建武二年十一月二十二日化す。

㋩慧日山。東福の山號。

㋥絕楚新。楚はいばらなり、出

宣揚す。㋦建化門中、是れを㋯十二分教と謂ひ、㋛翰墨場裏、喚んで四六の文章と作す。龍山與麼の説話、是れ好肉に贅を生ずること莫し麼。良久して云く、㋓「山に居して方に始めて山の靜を知り、世に處して誰か能く世の忙はしきを忘れん。」

㋪大歇首座を謝する上堂。道人相見の時、彼此漆桶を呈す。主なく賓なく、照に非ず用に非ず、大歇場中に㋲盤礴す。羣を驚し衆を動ずることを要せず。

臘八上堂 昨夜虚空、星斗を㋝迸裂し、㋜光芒を失卻す、大地の衆生都て識らず。唯瞿曇のみ有つて自ら著忙す。且く道へ著忙底是、識らざる底是。拂を以て牀を撃つて云く、「梅は須らく雪に三分の白きを遜るべし、雪も亦梅に一段の香を輸す。」

㋑東福、㋺雙峰禪師遺書至る、上堂。一株の大樹忽ちに凋零、㋩慧日山顚㋥楚新を絶す。將に謂へり後昆覆蔭なしと。昌々たる嫩桂又春に逢ふ。㋭桂昌庵の後に葬る。

上堂。㋬三通鼓罷んで、㋣簇々として上り來る、佛法㋠人事、一時に周

でて高きものなかるで、人の類を出づるを翹楚と云ふ、名僧を失ひしにたとへる。
㋭桂昌庵。東福の塔頭の名。
㋬三通鼓罷。五燈會元二十、淨居尼慧溫の章に出づ。
㋣簇々。むらがること。
㋠人事。世間の事がらをすること。
㋷曠劫。むかし〳〵。
㋦紀極。紀は記也、極は盡也、之を記して究書すべからざるを云ふ。
㋸交頭。あはい、新舊のしほざかひ、衲來正中來の位を見聞せよ。
㋾樂在其中。論語述而篇にあり。
㋻來年更有新條在。野客叢書六羅隱の詩。
㋕惱亂。擾亂と同じ。
㋵被風吹別調中。詩格十六、高駢風箏の詩。
㋟月建。孟春夏正建寅月。

畢す。法眼禪師、與麼の垂示、只金に陪して鐵を賣ることを知つて、覺えず利を見て義を忘るゝことを。龍山卽ち然らず、三通鼓罷んで、四衆雲の如くに臻る。客と作ることを會せざれば、主人を勞煩す。喝一喝。

除夜小參。㋷曠劫已來、今日に暨ぶ、烏飛び兎走り、暑往き寒來る、其の蹤迹追尋すべからず。並に是れ收めて舊曆日に歸す。明朝從り去つて、未來際に至るまで、劫波の成壞、晷運の改遷、其の㋦紀極考究すべからず。畢竟夢幻の中に付在す。歲夜斯に臨み、元正未だ至らず。乃ち是れ㋸交頭結尾底の時節、過去に屬せず、亦未來に非ず、喚んで現在と作すも也た得ず。者裏に到つて、甚の舊歲今宵去り、新年明日來るとか說かん。須らく知るべし萬物氣候の爲に遷されず、諸人元虛空と壽を同じうす。倘し能く恁麼ならば、今夜分歲、大家相聚つて冰霜を喫す。㋾樂其の中に在り、其れ或は未だ然らずんば、㋻來年更に新條の在るあり、春風に㋕惱亂して卒に未だ休まず。

復た舉す、僧雲門に問ふ、「如何なるか是れ雲門の一曲。」門云く、「臘月二十五。」拈じて云く、「太音希聲、今古を該括す。卽今臘月三十日、謂ふこと莫れ又㋵風に別調の中に吹かると。」

元正上堂。㋟月建今日に丁り、歲君新に㋹律を制す。物々祥符を獻じ、頭々㋞玉曆を擎ぐ。甚に因つてか此くの如くなる、道ふことを見ずや、一吉一切吉と。

㋹律。樂器。
㋞玉曆。舜が歷山に耕して玉曆を河際の岩下に得て、舜天命の己に在るを知りて、道を體して倦まずと云ふ故事あり。

㋑山城州㋺靈龜山天龍資聖禪寺語錄

侍者　㋩宏遠　㋥智光　㋭彌浩　等編

㋬暦應二年十月、敕を降し、後醍醐上皇の爲にし奉つて、㋣離宮を革めて梵苑と作して、乃ち基を開かしむ。

㋠康永四年四月初八、新に㋷法堂を開く。此の日㋦武將兩殿下法筵に光臨す。

上堂。先づ佛誕の儀を伸べ罷んで、乃ち云く、三世の諸佛、世に出現すること、唯法を説いて衆生を濟度せんが爲なり。是を以て㋸四辯㋾八音、並に説法の軌範たり。鹿苑鷲嶺、亦是れ度生の道場、祖師門下、單提獨弄、直に本分を示す。教門に同じからず、然も其の旨歸を㋻鞫

㋑山城州は、山城國葛野郡嵯峨。
㋺靈龜山天龍資聖禪寺。夢窓國師年譜に曰く、暦應二年己卯師六十五歳、西芳精舍に在りて六月二十四日、師、門人に謂ひて曰く、昨夢みらく、吉野上皇比丘身を現して、鳳輦に乘じて龜山の行宮に入ると。秋八月十六日上皇仙し去る、征夷大將軍(尊氏)勅を奉じて追修の道場を龜山の行宮に建て、詔累りに降つて師を請じ、開山とす、左武衛將軍(直義)、夢に金龍の寺の南の河中より出づ、故に寺を名づけて天龍資聖禪寺と曰ふ。

㋩宏遠。淨妙寺方外宏遠、國師に嗣ぐ。
㋥智光。絶照、同上。
㋭彌浩。無際、佛國に嗣ぐ。
㋬暦應二年十月。普明國師造營記に云く、北朝の光明天皇年號、此の年南朝延元四年八月十六日、後醍醐天皇吉野に於て崩御、光嚴天皇、尊氏將軍君臣合鉢之あり、龜山殿の離宮を禪苑に改むるの議定ありて、帝、師へ開山のこと仰せ出され、十月五日滿中陰に付き、院宣を下され、寺の封疆を定められ、其後追追造營あ

むれば、亦只傳法救迷の爲めなり。故を以て、西天の四七、東土の二三、各々相承するに、傳法の偈を以てす。達磨大師の云く、「吾れ本茲の土に來り、法を傳へて迷情を救ふ。」便ち見る(カ)少室雪中に(ヨ)臂を斷じ、(タ)黃梅(レ)夜半に衣を傳ふることを。正法流通して蹤を接し武を躡む。樹下石上、幽洞深巖、處として法幢を建てずといふことなし、機あれば必ず心印を傳ふ。(ソ)百丈大智禪師創めて叢林を興してより以來、震旦扶桑、(ツ)列刹相望む。大小異なりと雖も、皆法堂を構へて、宗乘を擧唱す。茲者、本寺基を開き、歳序未だ幾くならざるに、厨庫僧堂、三門兩廊、未だ其の功を畢へずと雖も、佛殿落成の後、先づ法堂を立つ。此れ其の佛祖の本意、說法利生に在ることを表するものなり。今に如

り、前後七年をへて康永四年始めて開堂の儀式あり。

(ト)離宮。天子行處の別署を云ふと文選に出づ。

(チ)康永四年四月初八。光明天皇の年號、この年八月晦日天龍寺供養佛殿慶讃の法語下卷にあり、後醍醐天皇御七年御忌なり、師七十一歲。

(リ)法堂。「はつたう」とよむべし、禪寺の大殿にして說法問答するの堂、七堂伽藍の一。

(ヌ)武將兩殿下。尊氏、直義、この日光明天皇、この翌日光嚴太上天皇臨幸。

(ル)四辯。法界次第下に、一義無礙、二法無礙、三樂說無礙、四無礙辯、又無礙智と曰ふ。

(ヲ)八音。如來の音聲言辭淸雅、諸衆生をして聞即悟解せしむ、一に極好音、二柔軟音、三和適音、四尊慧音、五不女音、六不誤音、七深遠音、八不竭音。

(ワ)鞠。推し窮む。

(カ)少室。二祖慧可大師。

(ヨ)斷臂。拈香の語に見ゆ。

(タ)黃梅。五祖弘忍大師なり。

(レ)夜半傳衣。六祖惠能大師が五祖のところで、よるひそかに法寶及び袈裟を傳へて、衆の爭を止むの故事。

(ソ)百丈。大智禪師は馬祖に嗣ぐ、唐の名僧にして叢林の規矩といふものを製して、百丈淸規といふ。

(ツ)列刹。諸寺諸山の名院。

(ネ)偶諧。偶は合なり、諧なり、諧は和なり、合なり、調なり。

(ナ)符契。符節契券。

(ラ)扃。門戸に署するの文を云ふ。

(ム)法雷。華嚴經入法界品に、亦大震の能く法雷を震ふて、群品を啓悟せしむるが如し。

(ウ)宸翰。二字つゞけていへば、どちらも御筆なり。

來降誕の日に當つて、已に法堂周備を得、時節因緣、㋧偶諧㋤符契を合せたるが如し、又辱なく
朝廷額を賜ふて、㋶扁して㋰法雷と曰ふ。㋒宸翰㋼奎畫、鳳舞ひ、龍翔ける、直に得たり法雨將に降らんとす、天瑞兆を旌はし、仁澤普く被らしめて、世洪恩を仰ぐことを。如來法を以て、國王大臣に付囑す、㋨慈鑑の効此に昭著す。㋔懿いなる哉、斯の法布益窮りなし。謂は所る法といふは何んぞ耶、乃ち是れ衆生圓具の本法なり。聖に在つても增せず、凡に在つても減せず、之を大いにするときは則ち宇宙に彌り、之を細かにするときは則ち㋗毫釐に攝す。古に亘り今に亘つて、不變不異、諸佛所說、㋳大小㋮權實、㋘半滿㋫偏圓、皆悉く此の法の名義なり。世間の所有艸木瓦礫、一切衆生の動作施爲、此の法の相用に非ずといふことなし。所以に道ふ、森羅及び萬象、一法の所印なりと。倘し能く恁麼に會得せば、如來未だ出世せざるに、度人已に周畢し、此の堂未だ營造せざるに、法門自ら現成す。山僧今日、此の座に陞る、別に㋙衷私底の法門の人の爲に說くべきなし。只本師釋迦如來及び盡虛空界の諸佛菩薩、諸の賢聖衆、現前の大衆、

㋼奎畫。奎は筆、畫は文字なりとみるべし。
㋨慈鑑。慈悲昭鑑。
㋔懿哉。醇美也。
㋗毫釐。十絲を毫、十毫を釐といふ。
㋳大小。菩薩、聲聞。
㋮權實。權は三乘なり、暫時かりにとく、實は一佛乘なり、古今不易の法。
㋘半滿。四教の內藏を半滿、通別圓を滿字敎と云ふ。
㋫偏圓。偏は化法四教の內、藏、通、別の三教を云ふ、聲聞、圓覺、菩薩は一方にかたよる、圓教は佛境界にのみ說く。
㋙衷私。衷は方寸の蘊む所なり、不偏なり、私は公ならざること、つまりいへば、不偏不黨のこと。
㋓欐。音例、むなぎなり。
㋢廣長舌。如來三十二相の中の

外護の尊官、堂中の㋓欄梁、燈籠露柱、無邊刹海の人畜艸芥と、各〻㋢廣長舌を出して、同じく大法輪を轉ずるのみ。正當恁麼の時、且く道へ什麼邊の事をか成し得たる。主丈を拈じて云く、「看よ看よ、釋迦如來、今日天龍が主丈頭上に在つて、周行七歩、天を指し地を指して、普く大衆に告げて言はく、「我れ今再び降誕し、此の堂新に落成す、賢聖㋗沓り臻り、人天交接す。」人々箇々、都べて是れ獨尊、牌扁の㋚奎畫、梁柱の方圓、物物頭々、演法ならずといふこと靡し、奇なる哉奇なる哉。正法聯綿して、未だ嘗て滅せず、靈山の付囑自ら人あり、㋖婆伽至尊、與麼の垂示、是なることは則ち是れなり、只これ生を降し物に應ずる底の法門なり。諸仁者、如來未だ胞胎を借らざる已前の消息を知らんと要する麼。」主丈を卓して一下して云く、㋴「諦聽、諦聽。」

㋱結制小參。問答能んで乃ち云く、「向上の玄關機路絶す、㋯四維上下一團の鐵、此の㋛關是れ行人を拒まず、自ら是れ行人透ること得ず、從上の諸大宗師、各一方に據つて㋜宗乘を扶立す。皆此の關を設けて以て㋪方來を接す。千載の下㋲儼然未散、天龍門下、㋝營功未だ畢らざるに、結

㋗沓。音たふ、重也、合也。
㋚奎畫。宸奎勅書也。
㋖婆伽至尊。婆伽は佛、至尊は世尊。
㋴諦聽。はつきりきけの意。
㋱結制小參。雨安居の、夏のはじまる日の小參。
㋯四維。維は方偶なり、[illegible]の四維は東、西、南、北。人の四維は禮、義、廉、恥。
㋛關。向上の玄關。
㋜宗乘。宗旨のたてかた。
㋪方來。四方よりあつまる雲水僧。
㋲儼然未散。靈山一會の佛、菩薩、羅漢たち、儼然未散を見ると云ふこと、天台の智顗禪師、南岳に在りて法華經を誦して法華三昧を悟り、藥王品の「是眞精進、是名眞法、供養如來」と云ふに至りて、感得するの故事。
㋝營功。經營の功業。

制斯に臨む。山僧別に作略の施すべきなし、只要す諸人此の玄關裏に在つて、禁足安居することを。謂ふこと莫れ、此の寺未だ僧堂あらずと。什麼の處に向つてか、尅期修證せんと。今夏苟も能く此の關を透得せば、還つて許す諸人朝に㋦高穹を踊んで、以て㋑上方の㋺香積厨中に到つて飯を喫し、暮に㋩厚地を縮めて、下界の天龍寺裏に歸つて打眠することを。其れ或は未だ然らずんば、更に長期を立して、以て彌勒㋥下生の時を待つに一任す。何んが故ぞ、㋭有利無利行市を離れず。」拂を以て牀を擊つ。

復た擧す、僧、雲門大師に問ふ、「如何なるか是れ諸佛出身の處。」門云く、㋬「東山水上行。」後來圓悟禪師拈じて云く、「天寧は卽ち然らず、如何なるか是れ諸佛出身の處、薰風自南來、殿閣生微涼」と。拈じて云く、「雲門の古曲、纔かに聽くに堪へたり、又風に別調の中に吹かる。」

次の日上堂。西天の蠟人氷、東土の鐵彈子、伶利の衲僧、敢へて㋣介視せず、大衆會す麼。㋠膝下の黃金㋷鍮に博へず、八九元來七十二。

四頭首の秉拂を謝する上堂。天龍一柄の拂子あり、一日我が此の四頭首に分付して、以て結制の佛事を作さしむ。便ち見る橫拈倒用、人天の眼目

㋦高穹。穹蒼は蒼天也、おほぞら。

㋑上方。うへのかた、維摩經に出づる故事。

㋺香積。禪寺にて庫裏のことを香積界と云ふ、故事別にあり。

㋩縮厚地。地をちゞめるで距離を近くすること。

㋥下生。五十六億七千萬歲の後じや。

㋭有利無利。あちらが得をしても、こちらが得をしても、問屋市場を外へはゆかぬ。

㋬東山水上行。一陽來復の端的、雲門のこの語を圓悟が擧揚せしを聞いて、大惠禪師は大悟せられた。

㋣介視。介は芥と同じ、しばらくも目をとめぬで、塵あくたのやうに見るの意。

㋠膝下黃金。膝の下にそなへてをれば不足はない。

㋷鍮。眞ちう。

を點開し、左擧右揮、摩訶衍の法を演暢することを。微妙の章句、此れ從り出生し、一代藏教、詮注することを勞せず。偉いなる哉、一柄龜毛の拂、無邊の大法輪を轉じ得たり。今日舊に仍つて還つて天龍が手裏に歸す。亦要す此の拂子、山僧に代つて說法一上して、以て頭首の㋦道誼を謝せんことを。拂を擧げ良久して云く、「休みね休みね、㋸太褒は卻つて貶と成る。」

上堂。無量の妙義、百千の法門、斬新の日月、特地の乾坤。驀に主丈を拈ず、天龍が主丈人情沒し、今日底を竭して盡く掀翻す。敢て諸仁者に問ふ、什麼の處に向つてか㋾氣を出し去ることを得ん。主丈を卓すること一下して云く、「峯轉じて路なきかと疑ひ、谿斜にして別に村あり。」

端午上堂、護身の法、肘後の符、羣邪自ら㋻辟け、百福克く㋕孚はる。咄。好事も無きには如かず。

㋵上堂。梅雨㋟珊々、林煙㋹簇々、谿東溪西、草肥え水足る。大衆を召して云く、㋞「水牯牛如何んが牧せん、分に隨つて些を納ることは、卽ち問はず、且く道へ卽今牛什麼の處にか在る。是れ佛殿裏に燒香し、法堂上に聽法する底なること莫しや。」喝一喝。

㋦道誼。誼は義に同じで、よしみなり。

㋸太褒卻成貶。あまりほめすぎると、おまけになる、これは警語、也褒也貶がまあよい。

㋾出氣去。むれをはらすことができやうとなり。

㋻辟。音せき、のぞく也、退くるなり。

㋕孚。信也、育也、釆也、鳥の卵を孵すが如く、其の期を過らぬが如く信を失はざること、說文に出づ。

㋵上堂。この語、水牯牛の話を提示す。

㋟珊珊。玉の聲の形容なり、つゆのあめのおとが。

㋹簇簇。むらがり、かへつて一種の風景じや。

㋞水牯牛。めうしの水牛。

㋡南泉。傳燈八、南泉の章。

㋧誵訛。或は聱訛に作る、あやまり。

半夏上堂。僧、(ツ)南泉和尚に問ふ、「祖々相傳ふ、箇の什麼をか傳ふる。」泉云く、「一二三四五」と。天龍は卽ち然らず、今日若し人ありて、「祖々相傳ふる、箇の什麼をか傳ふ」と。便ち他に對して道ふ、今朝是れ六月朔、且く道へ(ネ)諵訛什麼の處にか在る。良久して云く、「是れ神仙の客にあらずんば、徒に洞中を話することを勞せん。」

上堂。主丈を拈じ大衆を召して云く、「會す麼、今年(ナ)六月冬の令を行ず、炎帝の權威未だ一新ならず。將に謂へり乾坤大信に乖くと。烏藤舊きに仍つて黑粼皴。」主丈を卓す。

上堂。文殊の眼を剜卻し、觀音の耳を塞卻して、(ラ)聲色叢中に(ム)盤礴す。贏ち得たり、干戈自ら止むことを。不是不是、勇士那んぞ肯て家中に死せん。

解夏小參。問答罷んで乃ち云く、「佛祖(ウ)頂顙の一著子、今古に輝騰して差異なし。(ヰ)迷流は日に用ひて知らず、飯籮の邊に坐して自ら餓死す。釋迦如來、機を見て作して、方便門を開く、年々一夏九旬、人をして剋期取證せしむ。(ノ)制約(オ)嚴厲にして結あり解あり、結ぶときんば則ち普天帀地、一時に結す。漫天の網子百千重、(ク)鐵額銅頭跳不出、解くときんば則ち普天帀地一時に解す。君は瀟湘に向ひ我は秦に向ふ。四海五湖皇化の裏、忽ちに伶利の漢あり出來つて道はん、丈夫自ら衝天の氣あり、

(ナ)六月。時候不順で、六月に冬のさむさじや、風寒時ならず。
(ラ)聲色叢中。色界聲界の眞たゞ中。
(ム)盤礴。いつぱいになる。
(ウ)頂顙。いたゞき。
(ヰ)迷流。愚迷凡流。
(ノ)制約。諸制規約。
(オ)嚴厲。嚴重猛厲。
(ク)鐵額銅頭。修行のかたき雲水等をさす。

如來の行處に向つて行かず、天龍肯て點頭せざること在り、何が故ぞ。貧從り富に入ることは則ち易く、富從り貧に入ることは則ち難し。

復た擧す、僧、趙州和尚に問ふ、「如何なるか是れ不遷の義。」州手を以て流水の勢を作す。拈じて云く、「大衆會す麼、會するときんば則ち途中受用、其れ或は未だ然らずんば、山僧更に注脚を下し去らん。九夏推し移つて又秋を告ぐ。不遷の義曾て虔さず。㋳觀音菩薩胡餅を買ふ、放下すれば元來是れ饅頭。

次の日上堂。西天蠟人を以て驗と爲す、東土は鐵彈を以て驗と爲す。天龍門下、今夏只無驗を以て驗と爲す、甚に因つてか此くの如くなる。道ふことを見ずや、㋮官馬印を用ひずと。

中秋宋船の㋘綱司を謝する上堂、「普天帀地一秋光。不レ動二扶桑一見二大唐一。明月團團離二海嶠一 滿船官貨孰私商。」

重陽、新舊兩班を謝する上堂。一進一退、纖塵を動ぜず、左之右之、立處卽ち眞なり。箇の中の消息子を識らんと欲せば、重陽九日菊花新なり。

上堂。主丈を拈じて云く、「一㋫徑直二㋙周遮、放下すれば也た綿綿密密、

㋳觀音胡餅。會元十五、雲門の章。

㋮官馬。瑞曰く、馬に印をおすは燒印なり、公儀の馬には燒印なく、其の餘の馬には印があるなり。

㋘綱司。曆應五年の秋、幕府僧至本に命じて綱司と爲し、商舶を宋國に遣し、天龍寺を造營するの資と爲す。曆應造營記に曰く、「宋船二艘の事、當寺造營の要脚として免許せらるゝ所也、早く用意を致し、明年の秋放洋せしむるの由、綱司に仰せらるべく候」と。曆應四年十二月二十三日直義より天龍寺方丈名宛の狀あり、又綱司は公儀の荷物舟のつかさ也。

㋫徑直。さしわたし、まつすぐ。

㋙周遮。ぐるりを一ぺんまはして、はいらぬやうにとめる。

㋓吒吒沙沙。びら〳〵、尾のあ

拈起すれば也た㋓吒吒沙沙。」劃一劃して云く、「本店の賣買、分文㋢賒らず。」

冬至小參。烏飛び兎走つて仲冬に屆る。風離頭に逼つて篳篥を吹く。徹骨寒來る能く幾く人ぞ。剛ひて言ふ一物黑うして漆の如しと。諸仁者、還つて會すや、苟も能く會得せば、他に許す十二時辰を使ひ得て、陰陽の爲めに轉ぜられざることを。七十二候、二十四氣、咸く掌握の中に歸す。自家の戲具にあらずといふこと靡し。何んぞ妨げん萬象森羅を以て伴侶と爲し、㋐四相遷變を以て佛事を作すことを。然も是くの如くなりと雖も、更に須らく衲僧家別に生涯あることを知つて始めて得べし。且く道へ有ることを知る底の人、什麼の處に向つてか行履する。良久して云く、「曙色未だ分たず人盡く望む、天曉に至れば只だ尋常。」

復た擧す、僧㋚首山に問ふ、「如何なるか是れ學人親切の處。」山云く、㋖「五九盡くる日又春に逢ふ。」僧云く、「畢竟如何。」山云く、㋴「冬至寒食一百五。」拈じて云く、「首山和尚、屋裏に金玉の鋪を開いて、當頭此の僧に賣與し了れり。謂つべし善賈の家には㋱死貨を留めずと、子細に檢點すれば、未だ免れず小利を貪つて大利を失ふことを。」

る動物などの尾をふりまはすを云ふ。

㋢賒。音しや、おぎのらず、錢を拂はずして買ふを云ふ。

㋐四相。生、老、病、死。生、住、異、滅。大の四相、小の四相あり。

㋚首山。省念禪師、風穴に嗣ぐ。

㋖五九。冬至の後四十五日は則ち立春。

㋴冬至寒食一百五。冬至より百六日は是れ清明、寒食の節は清明の前一日、清明は三月の節なり。

㋱死貨。ねきもの。

㋯珍重。あつばれな、たふとし。

次の日上堂。一日の風雲を看卻して、一年の氣候を驗取す。此れは是れ世俗底、能く時節因緣を觀て佛性の深義を識得す、之れを出世底と謂ふ。且く道へ世俗底是、出世底是。咄、祖師門下、者般の閒事を管せず。

四頭首の秉拂を謝する上堂。諸佛廣長舌を出し、皆四無礙辯を具して、大法を演暢す。天龍舌頭を動ぜず、別に四無礙辯あり。宗猷を擧揚す、㋯珍重す三世の諸佛、灼然として我れに一籌を輸く。主丈を卓す。

上堂。㋛世尊一日陞座、衆纔かに集る。迦葉白槌して云く、「世尊說法竟んぬ。」世尊便ち下座。大衆を召して云く、「會す麼、其れ或は未だ然らずんば、山僧衆の爲めに㋼分疎し去らん。㋪朴涼の風度㋲弊猶ほ多し、法を貧しきに作る將に若何んとかせん。遂に見る二千餘載の後、㋝三尺の杖子黃河を攪くことを。」

臘八上堂。六載の辛酸世妄りに傳ふ、誰か言ふ道を悟つて人前に出づと。虛を吠え實を㋜啀いて今日に至る。雪は山に在り、星は天に在り。

上堂。㋑劍を擲つて太虛に揮す。及と不及とを論ぜず。英靈の黠兒、猶ほ自ら佇立す。喝一喝。

除夜小參、問答罷んで乃ち云く、「燠涼晦朔、春夏秋冬、終つて復た始まり、始つて復た終る。始

㋛世尊陞座。聯燈一。
㋼分疎。疎は疏と同じ、分明疏通の義なり。
㋪朴涼。質朴薄涼。
㋲弊猶多。年代久しくなり、しくせのわるくなること。
㋝三尺杖子。方語に不到底。
㋜啀。狗のかみあひ。
㋑擲劍。傳燈七に、盤山寶積禪師の云く、禪德はたとへば劍を擲つて空に揮ふが如しと云云。

中に終りあり、終中に始あり。㋺空索索赤條條、曠劫の前、其の太初を見ることなく、未來際、其の紀極を知ること罕なり。這裏に到つて、主歳の神將措く所罔し。聰明の大王算筒を擲つ、古人已むことを獲ず。剛ひて言ふ十世古今、始終當念を離れずと。且く道へ當念未だ生ぜざる時、十世古今、何れの處よりか得來る。驀に主丈を拈じて云く、「我が此の主丈子、忍俊不禁、出來つて道ふ、今歳今宵去り、明年明日來ると。者般の事を知らば便ち休せん、更に鞏縣の茶瓶を弄して作麼。山僧㋩唯唯、伏して處分を聽け、何んが故ぞ、道ふことを見ずや、局に當る者は迷ふ、㋥傍觀眼あり。」

復た擧す、僧㋭佛日の弼禪師に問ふ、「如何なるか是れ毘盧の印。」日云く、「草鞋雪を踏む。」僧云く、「學人不會。」日云く、「歩歩蹤を成す。」拈じて云く、「佛日和尚、口を開かば膽を見る、妨げず赤心片片なることを。若しこれ天龍ならば、又且つ然らじ。如何なるか是れ毘盧の印、印文已に露れ了れり、學人會せず、幸に是れ會せず、會せば卽ち㋬冬瓜の印。」

歳節上堂。拂子を竪起して云く、「舊歳這裏に向つて去り、新年這裏より來る。試に者裏に向つて高く眼を著けよ。元正祚を啓いて、太だ奇なる哉、何を以てか驗と爲す。」拂以て、牀を擊つて云く、「春信潛かに通ず雪裏の梅。」

㋺空索々。索々はおそろゝこと。
㋩唯々。承知したといふへんじ、よしよしなり。
㋥傍觀。たゞ目八目。
㋭佛日弼禪師。淨慈戒弼、育王璉に嗣ぐ。
㋬冬瓜印。にせいんのたとへにしたるなり、冬瓜の皮でつくりし印。

‼宵新舊兩班を謝する上堂。擧す、雪峯一日陞座、大衆を召して云く、「看よ看よ東邊底、看よ看よ西邊底、儞若し會せんと要せば、主丈を拈じて擲下して云く、者裏に向つて會取せよ。」拈じて云く、「雪峯和尚、一擧兩得、更に剩法なし。山僧別に伎倆なし、只要す諸人故を溫ねて新しきを知らんことを。大衆を召して云く、看よ看よ東邊底、看よ看よ西邊底、會す麼。」良久して云く、「我見燈明佛、本光瑞如此。」

上堂。拄杖を拈じて云く、「見る麼。」卓一下して云く、「聞く麼、我を知り我を罪するは、其れ惟主丈乎。」丈を靠け、下座。

佛涅槃上堂。二千年前、野火燒けども盡きず、二千年後、春風吹いて又生ず。柳堤花塢芳草の岸、波旬舞袖の輕きに一任す。

三月旦上堂。檀那の光臨を謝し奉る。花腮露を含んで媚び、柳眼烟を帶びて眠る。將に謂へり東皇此の令を行ず、看來れば都て是れ舊靑氈と。何を以てか驗と爲ん。看よ看よ、三世の如來、歷代の祖、毘耶室裏鍬钁を打す。主丈を卓す。

(ト)太上天皇、臨幸、上堂。春光と祥光と相映じ、和氣と瑞氣と(チ)糅浮なり。奇なる哉、斯の吉兆、諸人會すや也た不や。中原の大寶自然に至る、遼天の高價誰あつてか酬いん。會不會酬不酬。主

(ト)太上天皇。光嚴院天皇、貞和元年八月二十九日なり、師、說法二星の降ることを感ず、上皇大悅、物をたまふ。

(チ)糅。まじろ、異色の物の相集ると云ふ。

(リ)退院。師年七十二歲、貞和二年三月十八日退院。

(ヌ)七年。天龍寺造營は七年もかかつた。

(ル)業債。つみの借金で、罪業の負債との略也。

杖を卓して云く、「塞北安南一道に收む。」

㋷退院の上堂。「不レ効ニ汾陽付屬誡一。㋦七年の㋸業債董ニ修營一。今朝始有ニ爲レ人處一。三下鼕鼕退鼓聲。」

再住天龍資聖禪寺語錄

侍者㋑周澤編

師、㋺觀應二年辛卯七月二十日、陞座。拈香して云く、「此の一瓣の香、恭しく

今上皇帝

太上天皇の爲めに、睿算萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。恭しく願はくは聖德渝らず、永く㋩神符の籙に膺り、皇謨變ぜず、久しく㋥天授の圖を受けたまはんことを。

㋑周澤。字は龍湫、國師に嗣ぐ、南禪・天龍・建仁等の諸大刹に住す、不動尊をゑがく名僧なり、俗に妙澤の不動尊といふ。

㋺觀應。北朝崇光院の年號、この元年二月八日師七十六歲、光嚴光明兩太上天皇・太皇后ヿし皇太后諸宮妃官女等、師を內道場に請じて各衣盂法名を受け給ふ。光嚴法皇是の時法號を受けて無範和尚といふ。同二年は師七十七歲なり、この歲の九月晦日示寂す。

㋩膺神符之籙。文選四十八揚雄が文に、「天と神符を割き地と靈契を合す」とあり、籙は圖書なり、天子の卽位の次第を未來にかきたる書なり、膺は當る也。

㋥天授。天のあたふるところの

次に香を拈じて云く、「此の香㋭征夷大將軍及び㋬兩副將軍の爲めに、祿算を資陪し奉る。伏して願はくは㋣身宮久しく保ちて上を輔け下を撫づるの洪勳を失はず。智海彌深うして、永く敎を崇め禪を興すの大願に乘せんことを。」

又香を拈じて云く、「此の香未だ掌握に歸せざるに、偏界都て是れ眞熏す、纔かに爐中に挿めば、一會只假弄を成す。今日拈出して、前住巨福名山勅謚佛國禪師高峯大和尙に供養して、聊か世俗の禮儀を表す。」

師、座に就いて、問答罷んで、乃ち云く、「㋠竺土大仙の心、㋷東西密に相付す。㋦體量廣大にして、機用靈明なり。法界の凡聖、含靈、咸く他の恩力を受く。世間の興亡治亂、㋸此の封疆を擾さず、之を㋾大解脫門と謂ひ、亦㋻正法眼藏と號す。三世の諸佛、㋕此れを證して以て大法雷を震つて、一味平等の甘雨を降澍し、歷代の祖師、此れを悟つて以て大鑪鞴を開いて、鐵額銅頭の俊流を鍛錬す。便ち見る㋵五家七宗、㋟燁燁として祖燈を萬世に續ぎ、㋹顯演密說、㋞恢恢として敎網を㋡擧機に張る。偉いなる哉、此れ箇の大仙の心、能く是くの如くの大佛事を成す。然も興廢なり

德光。

㋭征夷。足利尊氏を指す。

㋬兩副將軍。同直義、義詮。

㋣身宮。身宮、康健など〻云ふて、只だ身と云ふことに見るべし。宮はほしなり、十二支を十二宮に配する。

㋠竺土大仙心。この語は石頭禪師の參同契に出づ。大仙は釋尊なり、雪竇著語に誰か能く擧す。

㋷東西密相付。雪竇著語に眉毛を惜取せよ。

㋦體量。法性の體量。

㋸此封疆。體量。

㋾大解脫門。[illegible]方諸佛の大解脫門。

㋻正法眼藏。的的[illegible]承の正法眼。

㋕證此。此れは大仙の心なり、證はさとる。

㋵五家七宗。五家とは臨濟、曹洞、潙仰、雲門、法眼、之に楊岐、黃龍を加へて七宗と云ふ。

と雖も、只だ是れ權化門中の事を成し得たり。天龍今日、諸仁者の爲に、佛祖頂額の㋧一著子を指出し去らん。」丈を卓すること一下して云く、「還つて會す麼、其れ或は未だ會せずんば、更に箇の注脚を下さん。」又卓一下、敍謝、錄せず。

復た擧す、㋤障蔽魔王と諸の眷屬と、一千年金剛齊菩薩に隨つて、其の起處を求むるに得ず、一日因に忽ち見ることを得たり。問うて曰く、「汝當に何くに於て住してか汝が起處を求むるに得ざる。」菩薩の曰く、「我れ有住に依つて住せず、無住に依つて住せず、是くの如くにして住す。」拈じて云く、「金剛齊菩薩是なることは則ち固に是、要は且つ只だ佛界に入つて未だ魔界に入らず。山僧此の山中に在ること十餘年、有る時は有住に依つて住し、有る時は無住に依つて住す。諸の魔外と相誰何せず、何んが故ぞ、豈見ずや、㋶毘耶大士の道く、『一切衆魔及び諸の外道、皆是れ我が侍なり』と。山僧與麼の體裁、金剛齊菩薩の行履と還つて優劣ありや也た無や。」良久して云く、「但だ見る皇風の一片と成ることを、知らず何れの處か是れ封疆。」

㋟燁燁。さかんなること。
㋹顯徧密說。教は顯に、禪は密にときたるを云ふ。
㋞恢恢。大いなること、天網恢恢などの。
㋡群機。群生の根機、すなはち衆生のこんきにしたがひ。
㋧一著子。大悟徹底の一手段た。
㋤障蔽。大惠の正法眼藏に出づ。
㋶毘耶大士。維摩居士をいふ、毘耶離に居るを以てなり。
㋰僧堂。坐禪堂なり、師の年譜に曰く、夏四月柱を植て力を竭して經營す、秋七月開堂、
㋒識心滅盡。涅槃經に、阿羅漢工を百日の中に畢て、思惑を斷じ盡して、三界の生死を受けず、故に我生已盡と云ふ。
㋔圓明了知。楞嚴經の四に、此の會中摩訶迦葉の如きは、久しく意根を滅して圓明の了知心念に因らずと。

新に(ム)僧堂を開いて、聖僧を安奉す。云く、(ウ)「識心滅盡現二威儀一。内外圓明發二了知一。好是大眞三昧力。無邊利濟適二(ノ)機宜一。」恭しく惟みれば、西天の(オ)鼻祖(ク)摩訶迦葉尊者、形容長く耀いて、金色を稱と爲、鬚髪自ら除いて、衲衣體に著く。半座を分つ處、(ヤ)十二頭陀、悉く眞光を放つ。一枝を拈ずる時、百萬の大衆、同じく微笑を推す。正法眼藏八字に打開し、教外の宗風十方に流布す。其の祖宗繁興の來歷を(マ)譏め、偏へに尊者廣大の(ケ)庇庥に托す。其の德至れるかな、(フ)感じて遂に通ず、其の慈浩然たり、請ずれば則ち必ず應ず。將に謂へり(コ)鷄足山中、遐かに慈氏の下生を俟つと。且つ喜すらくは天龍寺裏、正に聖僧の全體を現ずることを。大坐動ぜず、後昆を億萬年に覆蔭し、眞儀常に存して、玄旨を未來際に紹隆す。畢竟して如何んが(エ)此の事を保任し去らん。言ふことを休めよ選佛及第し難しと。那箇の衆生か心空せざる。

八月旦、御忌を啓建する上堂。雨林丘に灑いで、秋色細に入り、(テ)顥氣天を領じて、涼颸地を掠む。此に於て薦得せば、法爾の玄談、歷劫未墜、其れ或は未だ然らずんば、御忌の看經、今日を始と爲ん。是是不是不是。

(ノ)機宜。發すべきを機と爲し、相應するを宜と云ふ。
(オ)鼻祖。鼻は始也、獸の初生之を鼻といふ、人の初生之を首といふ。
(ク)摩訶迦葉。釋迦十大弟子中の第一なり、迦葉波此には飲光勝尊と譯す。
(ヤ)十二頭陀。頭陀の行者は迦葉これなり、十二頭陀は十二頭陀經といふあり、くはし。
(マ)譏。幾に同じ、きはむるなり。
(ケ)庇庥。蔭なり、樹陰を庥といふ。
(フ)感而遂通。易繋辭傳に出づ。
(コ)鷄足山中。迦葉の居給ふところ。
(エ)保任此事。法華譬喩品。
(テ)顥氣。顥は白きこと、天上のきよらかなること。
(ア)不合。せればよかつたになどいふ意味なり、いらざることすまじきこと。

杖を拈じて云く、「天龍(ワ)不合に口(サ)吧吧なることを、端なく笑殺す拄杖子。杖を靠け、下座。

中秋上堂。(キ)靈山月を話する、權實偏圓區域を分つ。曹溪月を指す、(ユ)體裁手段途を同じうせず。(メ)指話機先の消息子、佛祖も也た敢て名模せず。只だ恭しく　先皇の爲めに、月旦從り今日に至るまで、大藏(ミ)眞詮を看閲するが如き、法界の含情も亦同じく此の洪因を受くるや也た無や。拂を以て圓相を打して云く、「今夜一輪滿てり、清光何れの處にか無からん。」

八月十六日、(シ)多寶院に就いて陞座。香を拈じて云く、「此の香本來寥廓名相を絕す、攝化門中喚んで香と作す。三世の諸佛、其の價を知らず、歷代の祖師、只だ其の芳を傳ふ。今日拈出して寶爐に爇向して、(ヱ)閻浮攝化、(ヒ)盧舍那如來、(モ)千百億化身、釋迦牟尼大覺至尊に供養す。云々。裒むる所の善利、併せて用つて　後醍醐天皇の覺位に(セ)回嚴す、恭しく願はくば神儀と法界の含情と同じく此の眞熏を受けて、頓に其の妙果を成せん。」

座に就いて、問答罷んで、乃ち云く、「法身毘盧の主、大方所を包み、細無間に入る。赤條々空索々、凡に非ず聖に非ず、形名を何んの邊にか求

(サ)吧吧。大口のこと、口まめなやつ。

(キ)靈山曹溪。傳燈十八、玄沙の章に出づ。

(ユ)體裁手段。全體のきりもり、てぎは。

(メ)指話。月を話し、月を指す。

(ミ)眞詮。具說也、喩也。

(シ)多寶院。天龍寺の塔頭にして、後醍醐天皇を奉安するの聖廟。

(ヱ)閻浮。此には勝金と譯す、南瞻部洲とも云ふ。

(ヒ)盧舍那。此には光明遍照と云ふ、報身也。

(モ)千百億化身。摩訶衍に云く、應身也、千葉の上にまた千釋迦を現す、一葉に百億の國あり、一國一釋迦、故に釋迦牟尼を召んで千百億化身と名づく。

(セ)回嚴。回向莊嚴。

(ス)朕迹。線縫の隙、朕と云ふ。

めん。古に亘り今に亘る、㋦朕迹を當處に絕す。佛々出世顯演密談、只此れ他の光影邊の事を說き得たり。祖々相承、單提直示、未だ他の天眞の靈機を賣弄することを免れず。倘し能く與麼に會得せば、上攀仰なく、下己躬を絕す。獨脫無依、伴侶を借らず、更に一法の障礙を作す無し。直に得たり萬象を以て戲具と爲すことを。成就も也た我に由り、破亂も也た我に由る。乃ち知る聖凡の昇降、世界の轉變、皆悉く一妄從り生ずることを。一妄亦起處なし。之に迷ふときんば則ち幻化輪廻、甘んじて自ら沈溺す。之を悟るときんば則ち本有の妙用自然に現前す。所以に道ふ、㋑夢中明々として㋺六趣あり、覺めて後空々として大千なしと。若し是れ吾が家の眞の種草ならば、夢中覺めて後、俱に坐在せず。且く道へ他什麼の處に向つてか行履する。」拂を以て床を擊つて云く「須らく知るべし海嶽の明主に歸することを。謂ふこと莫れ干戈太平を致すと。」

㋩散說。夫れ以みれば、㊁眞淨界中他なく自なし、豈に怨親を其の間に容れん哉。一迷纔かに生ずれば、萬境隨つて現ず。世界の治亂、人倫の怨親、虛妄にして相酬い、虛妄にして相奪ふ。若し靈根あるものは、直

㋑夢中明明。永嘉の證道の歌に、夢裏明々とあり。
㋺六趣。人、天、修羅、畜生、餓鬼、地獄なり、趣とは衆生自らの業力に隨つて、六道に趣入する也。
㋩散說。この散說は史料としてよく注意すべし、珠曰く、按ずるに唐土の諸錄に散說なし、普說の變格也、普說は大惠が學者を開悟するを以て心と爲して聞取りよきやうに平話の如く、普く廣く說く也、又散說は寺の建立の由來、寫經、誦經、追薦の功德などを普說の如く說くなり。
㊁眞淨界。眞如淸淨法界なり。
㋭前後際斷。際は際畔の義。
㋬元弘。後醍醐帝の年號。
㋣征夷將軍。足利尊氏。
㋠讒虎。楞嚴八の中に、是の故に十方如來怨謗を色目して、同じく讒虎と名づく、なかご

下に非を知つて、一念生ぜず、(ホ)前後際斷す。若し是れ淺識の流は、此の幻妄に縛せらるゝことを被る、休歇あることなし。或は怨に似て親なるものあり、或は親に似て怨なるものあり、怨と親と都て定相なし。此れ其の怨親倶に是れ幻妄なる所以なり。(ヘ)元弘大亂の時、(ト)征夷將軍、特に勅命を奉じて、速かに國敵を亡す、茲に因つて官位日々喬に遷り、名望人々觀を改む。忽ちに(チ)讒虎威獰を長ずるに因つて、遂に(リ)逆鱗の回避し難きことを得たり。其の由來を繹ぬれば、併せて是れ疾かに功業を成して、甚だ叡襟に愜ふの致す所なり。古者道く、「親は是れ怨の媒と爲る」と。其れ此の謂か。茲に祥瑞雲散じて、龍馭(ヌ)虞らず南山に幸し、(ル)簫韶聲消して、鳳輦復た(ヲ)北闕に還らず。(ワ)武家大息して以謂らく、悲しいかな、臣遂に讒諛に墮ちて陳謝すること及ばず、永く逆臣の謬に沈むのみ。故を以て、武家の愁歎、常流よりも切なり。敢て恨緒を以て懷に介せず、自ら(カ)丹悰を灑ぎ、特に(ヨ)白業を修す。專ら覺果を祈り奉らんと欲して、遂に見る大伽藍を建てゝ、大佛事を作すことを。暑往き涼來りて、又(タ)南呂に逢ふ、一十三回、御忌忽爾として斯に臨む、五千餘卷の眞詮、舊に仍つて

とを申すやつ。

(リ)逆鱗。天子の御怒をたとへて、龍ののどの下にある逆鱗にたとへる。後醍醐天皇はじめは尊氏を信じ給ひしも、ゆゑありて敵とし給ふなり。

(ヌ)不虞幸南山。延元元年十二月、吉野に遷御。

(ル)簫韶。舜の樂を云ふ。

(ヲ)北闕。闕は宮門なり、轉じて内裏の稱に用ふ。

(ワ)武家。足利氏をいふ。

(カ)丹悰。悰はおもんばかるなり。

(ヨ)白業。大乘義章に、善業、善法、鮮淨之を名づけて白と爲す。

(タ)南呂。仲秋の月。

(レ)賚薦。薦は進也、推也と、向へすゝまする、向へおしやるなり、賚は菩提の資糧の意にて、入用をてつだふなり。

(ソ)蘊藉。蘊は積也、聚也、つみあつめたくはへる。藉は薦藉

看閲す。加之、新に僧堂を開いて、以て清衆を安ず。翅今日一會の佛事のみにあらず、盡未來 神儀を ㋹資薦し奉らんと欲す。其の追修懇切の志を諒むれば、偏に君臣不和の中より出でたり。此れを以て之を思はゞ、謂つべし怨は親の媒たりと。然も末運の變移、三寳諸天も亦奈何ともせず、世復た騷亂して人民穩かならず。是を以て今日佛事、武家の願望に加かず。然りと雖も、懇志の之く所、聊か供佛齋僧の儀を表す、仍ほ小比丘某に命じて、此の座に陞つて、宗旨を擧揚せしむ。某、内 ㋞蘊藉の德なく、外顯脫の才を缺く、只宿世の緣遇に因つて然らしむ。忝なく 先皇の ㋞仁顧に沐すること久し。已に八旬の暮齡に迨んで、自ら再住の家醜を揚ぐ、此れ亦前緣の然らしむる所なり。寔に ㋨聊爾 ㋤苟且の事に非ず、縦ひ台命を受けずと雖も、卑情寧ろ安閒を守るに忍びん乎、所以に敢て固辭せず、出で來つて納敗す。伏して乞ふ衆慈、各亮察を垂れよ。恭しく惟れば、

後醍醐天皇、德化 ㋶天選に冥符し、聖明古風を辱しめず、皇運時至つて、再び一統の洪基を建て、㋰鳳曆新たに開いて、重ねて萬乘の寶祚を踐む。四夷衽を斂めて、萬品襟を披く。將に謂へり ㋒堯風永く扇いで窮りなしと。豈度らんや ㋭舜日暫く出でて忽ちに隱れんとは。熟其の態度を思へば、寧ろ

也、下にしく。ゆつたりとしたる德也。
㋞仁顧。仁恩顧眷也。
㋨聊爾。且略也。
㋤苟且。草率也。
㋶天選。選は授也。
㋰鳳曆。左傳昭公十七年に出づる故事。
㋒堯風。論語に君子の德は風也の義にて。
㋭舜日。堯のことを、之に就くこと日の如しと云ふより、日の字を用ふ。

偶然として然りと謂はん乎。料り知る　神儀、假に㋨濁世の業緣を償ふて、早く淨邦の嘉會に預ることを。是れ聖運短祚の因由に非ず、只是れ衆人不幸の標幟なる者なり。果然として㋔登霞の後、今に至るまで世未だ靜謐ならず、緇白の流、多くは是れ所を失す、衆心攀慕、得て止み難し。上來伸ぶる所、皆是れ夢中の夢事なり、縱ひ實に有と雖も、既に往くを咎めず、況んや是れ夢事なるを耶。人間第一の輪王も、亦是れ夢中の寶位、㋗梵世最高の天王も、亦夢中の快樂なり。是の故に釋迦如來、輪王の位を棄てゝ、山に入りて苦行す、其の意何んぞや。蓋し人をして各　無上覺王の、世間の尊貴に超越することを知らしめんが爲の故耳。四部異なりと雖も、既に佛弟子と稱す、其れ豈に其の行藏に効はざらんや。恭しく願はくは、上皇頓に塵機を轉じて、㋳妄宰に拘らず、速かに業識を飜して、靈知を證得し、怨親差別の昏衢を超越し、迷悟一如の靈域に優游し、鷲嶺の付囑を忘るゝことなく、生々法門を保護し、龜山の寂場を動ぜず、刹々羣類を利濟せん。武家の祈り奉る願望、既に爾も斯くの如し、　上皇の叡念、寧ろ之が爲に消融せざらんや。修する所の善根、固に輕尠に非ず、諸佛の大慈、必ず當に冥に感應を垂るべし。若し爾らば則ち干戈永く止みて、四海清平に、災厄咸く消して、萬民康泰ならん。武運綿々として、永く㋮奕世に傳へ、願心㋘浩々として

㋨濁世。五濁、惡世。
㋔登霞。天王登霞すと、禮記曲禮に出づ、天子の崩御を申し上ぐる。霞は假遐又通す、遠きに登るの義にて、天に上ると同じ。
㋗梵世。梵天、或は梵世天とも云ふ。
㋳妄宰。幻妄を己が主宰となす。
㋮奕世。奕は重也。
㋘浩々。廣大なること。

普く含情に及ぼさん。

復た偈を說いて曰く、「人々箇の無盡藏あり、聖賢凡庸增減なし、河沙の德用盡く包容す、之を不思議實相と謂ふ。或は重々樓閣の雲を現じ、或は種々の音聲海を出す。㋻大千の經卷一塵に攝す、一塵偏く經卷の中に在り、一一の文字樓閣を現じ、一一の樓閣法門を演ぶ。是くの如きの法門舌に干らず、是くの如きの樓閣造作に非ず、今此の伽藍も亦是くの如し。大衆中に於て大藏を轉ず、伽藍經卷互に融攝す。明々として彌滿す虛空界、偉いなる哉出格の大佛事、神儀直に如來地に入る。普く法界迷倒の類を導いて、怨親平等覺果を成じ、佛法王法下衰せず、百千萬劫窮盡すること莫し、㋙三寶證明疑ふべからず、更に後昆の爲に公憑を立つ。」主丈を卓すること一下。

國譯夢窻正覺心宗普濟國師語錄上　終

㋻大千經卷。華嚴經の如來出現品に、此の大經卷復量大千世界に等しといへども、一微塵の中に住在す。

㋙三寶。佛、法、僧を宇宙最勝の寶なりとなす、故に三寶と稱す。法は宇宙の主體、僧は客體、佛は主客合融の極所にして、三寶を化現するを以て、宇宙の顯現を成すといふ、佛敎にては三寶說を諸宗の根元となす。

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄下

住天龍禪寺(イ)小師　(ロ)妙葩　編

陞座

(ハ)法華懺摩を慶讃す（香詞錄せず）

(ニ)靈光獨り耀き、暗に非ず明に非ず、淸寥寥白滴滴、罪雲(ホ)素來點を絕す、懺雪何ぞ功を積むに勞せん。解脫を以て諸佛を貴ぶべからず、淪溺を以て衆生を賤しんずべからず。釋迦老子、事は(ヘ)丁寧從り起ることを知らず、(ト)四十二年(チ)東街(リ)西媚、(ヌ)法華會上に到るに(ル)逗つて、(ヲ)奈んともせず。栓索俱に露るゝことを、卻つて言ふ、正直捨方便、但說無上道と。上は是れ天、

(イ)小師。梵には鐸曷攞、唐には小師といふ、受戒十夏已前皆小師と稱す。

(ロ)妙葩。塔銘に曰く、字は春屋、夢窓に嗣ぐ、後圓融帝、師を請じて特に智覺普明國師と賜ふ、南禪・天龍に住す、相國寺二世。

(ハ)法華懺摩。法華三昧懺儀は、隋の瓦棺寺の沙門釋智顗、法華、普賢觀經及び諸大乘經の意を采り、此の法を撰し、後代に流行す。

(ニ)靈光獨耀。百丈海の上堂の語。

(ホ)素來絕點。素來はもとより。

(ヘ)丁寧。再三告示することなり、くりかへしものを云ふことなり、日本の丁寧にはあらず。

(ト)四十二年。佛五時の說法、阿含十二年、方等八年、般若二十二年、法華涅槃はともに八年づつ、華嚴は最初三七日。

(チ)東街。街はうりつけるで、自媒なり、自分で媒合すること。

(リ)西媚。あいきやうらしくする

下は是れ地、甚を喚んでか無上道と作さん。(ヲ)七論玄談、都て是れ(ワ)太虛の(カ)黼黻、(ヨ)三周妙悟、好肉瘡疣にあらずといふこと靡し。(タ)龍女鱗を脫するも、未だ奇と爲るに足らず、(レ)慢者席を退く、卻つて些子に較れり。只今日諸仁者、法華三昧を修習して、(ソ)愆尤を懺滌するが如きんば、是れ方便門耶、是れ無上道耶。左右を顧視して云く、「(ツ)露地の白牛蹄を弄して行く、(ネ)雪山步步間草なし。」復た偈を說いて云く、「人人箇の一卷の經あり、古今歷落常に現前、是れ靈山所說底にあらず、亦(ナ)葱嶺より帶び將ち來るにあらず、蕩蕩として迥かに思議の表に出づ。是れを妙法蓮華經と名づく。都て文字の書寫すべきなし、更に何れの處に向つて此の經を讀まん。忽ち宿殖深厚の人あらば、當頭能く此の經あることを信ぜよ。書すべからざる處に、筆を下し得、讀むべからざる處に脣を鼓し得。是くの如く書寫し、是くの如く讀まば、無功の功大利を成ぜん。玆の功至竟何れの處にか歸す。(ラ)黃頭碧眼も也た知らず。」主丈を卓すること一下。

(ム)太平和尚(ウ)小祥忌の請（香詞を錄せず）

諸佛未だ出世せず、是の處山凸く谷凹む。祖師未だ西來せず、諸人天を

で、揄を取るなり、諂也。

(ヌ)法華會上。法華を說きたまひしときにいたりて。

(ル)逗。至るなり、叉投にも作る。

(ヲ)七論。法華は二十八品で、前の十四品は是れ迹門・開權・顯實、後の十四品は是れ本門・開迹・顯本にて七論あり、法華一如註に委し。

(ワ)太虛。骨折損することなり。

(カ)黼黻。斧の形のぬひ模樣。

(ヨ)三周。一には說法周、上根の爲めに、二には譬說周、中根の爲めに、三には因緣周、下根の爲めに。

(タ)龍女脫鱗。法華の提婆品に出づる因緣、變成男子のこと。

(レ)慢者退席。同じく方便品に出づ、增上慢のこと。

(ソ)愆尤。過ちなり、とが一切た。

(ツ)露地白牛。白は是れ色の本なれば、即ち本淨の無漏と相應す。

頂き地を踏む。木鏡素面を照す、幸に自ら可憐生、諸佛已に出世、㋼横說竪說、也たこれ白日に燈を點ず。達磨已に西來、㋨以心傳心、大いに河頭に水を賣るに似たり。一家事あれば、百家も亦忙し、便ち見る棒を行し喝を下し、拂を竪て牀を擊つて、多少の人を㋔簧鼓し去ることを。錯を將つて錯に就く、甚んの了期かあらん。驀に主丈を拈じて。看よ看よ、太平和尙、今日㋗瑞峯が主丈頭上に在つて、先賢の窠窟を掀翻し、直に諸人をして生死禍福、總に是れ太平無事の時節なることを知らしめん。諸人還つて知る麽。卓一下して云く、㋳「太平元是れ將軍の致、許さず將軍の太平を見ることを。」

復た擧す、『㋮白水の仁和尙、因に洞山の忌齋を設く。僧あり、問うて曰く、「先師還つて來るや也た無や。」仁云く、「更に一分の供養を下し著よ」と。拈じて云く、「白水和尙、謂つべし報恩㋘太だ過ぎて卻つて怨と成ると。卽今若し人あつて、今日此の忌齋を設く、太平和尙還つて來るや也た無やと問はゞ、便ち一絕の㋫古詩を以て他に呈似せん。「少小離レ家老大囘。齒黃面皺鬢㋙鬅鬖。兒童相見不ニ相識一。卻問客從ニ何處一來。」と。』

㋧雪山閑草。涅槃經如來性起品に、雪山草あり、名けて肥膩といふ、牛若し食へば純ら醍醐味を得と。

㋤葱嶺。印度の名山なり、こゝには天竺を總じて指す。

㋶黃頭碧眼。釋迦、達磨を指す。

㋰太平和尙。諱は妙準、勅謚佛應禪師、佛國に嗣ぐ、夢窓と同參、鎌倉淨智寺に住す。

㋒小祥。祥は凶を去り吉に從ふの義、一周忌の法要なり。

㋼横說竪說。說法の自在なるを云ふ。

㋨以心傳心。六祖壇經に、法は則ち心を以て心を傳へ、自悟自解せしむ。

㋔簧鼓。莊子駢拇篇にあり、言語を以て之を簧惑し、皷動する也。

㋗瑞峰。瑞鹿山なり、圓覺寺の山號、このとき師が住せしは圓覺なり。

性喜禪定尼小祥忌の請

普天匝地恁麼に熱す、富士山頭猶ほ雪あり、寒中の暑也暑中の寒、都て一定底の時節なし。倘し能く此に於て頂門の眼を著け得て、方に法に定相無し。緣に逢へば卽ち宗なることを信ぜば、便ち生死去來、安危得喪、是れ自家の遊戯三昧なることを見ん。有る時は東倒西擂、四海五湖皇化の裏、有る時は騎聲蓋色、毒龍行く處草生ぜず。成就も也た我れに由る、破亂も也た我れに由る。權柄掌握に在り、塵塵法幢を建つ。然も是くの如くなりと雖も、更に須らく向上眞歸の處あることを知つて始めて得べし。諸人者眞歸の處を知らんと要する麼。拂子を擊つて。漢收めず秦管せず、又驢子に騎つて楊州に下る。叙謝錄せず。

復た偈を說いて云く、「一段の精明 名相を絕す。古今寥廓として獨り光輝、乃ち是れ諸佛出身の處、含生此を以て歸する所と爲す。男に非ず女に非ず神鬼に非ず、左轉右轉眞儀を露はす。之を摩訶般若力と謂ひ、亦廣大無緣の慈と曰ふ。迥然として超過す言象の外、大人の境界人の知る沒し、君が爲に今日情を盡して說く。日は東方より出でて、夜西に落つ。」主丈を卓すること一下。

㋓上杉法禪禪尼小祥忌の請

香を拈じて云く、「此の香是れ人間の所有に非ず、亦龍宮より出來るに非ず、手に信せて才かに拈起

㋳太平元是。昭覺總禪師の頌、羅林類聚に出づ。
㋮白水仁。本仁禪師、洞山に嗣ぐ。
㋘太。唐の俗語である。日本のいかう、きつうの意なり。
㋫古詩。唐詩選の賀知章の詩。
㋙鬅鬙。鬅は披髮、鬙はかみすくなしとよむ。
㋓上杉法禪禪尼。鎌倉の上杉は足利の執權。

すれば、眞薰㋢九垓に滿つ。茲者奉三寶の弟子㋐侍中藤の某八、今晨伏して先㋚妣法禪禪尼小祥忌の辰に値ふて、手を借つて此の妙香を爇いて、本師釋迦如來、十方三世の婆伽至尊、圓覺楞嚴維摩法華一切の妙典、迦葉㋖阿難、㋴四向㋱四果、諸賢聖衆、文殊普賢㋯三賢十聖の諸大菩薩に供養す。鳩むる所の善利、併せて用つて先妣禪尼の㋛覺路に資薦す。伏して願はくは、覺靈法界の含情と同じく眞薰を受けて、共に道果を成ぜんことを。」座に就いて、問答罷んで、乃ち云く、㋓「妙性圓明、諸の名相を離る、切に忌む白日に燈を挑げて經行することを。靈光獨り耀き、迥かに根塵を脫す。憐むべし特地に㋪目を捏つて月を見ることを。目を捏らず燈を挑げず、生死禍福何れの處より得來る。所以に道ふ、夢裏明明として六趣あり、覺めて後空空として大千なしと。倘し能く此に於て薦得せば、西施㋲拈却す㋝蓋面帛、元是れ隣家の老㋜母嫫。㋑寶蓮未だ嘗て㋺泥犁に陷らず、龍女誰か言ふ正覺を成ずと。玉樓金殿、劍樹刀山、意に任せて㋩逍遙し、都て忻厭なし。之を無爲無事大人の境界と謂ふ、更に甚麽の㋥五障㋭三從とか論ぜん。正當恁麽の時、修善報恩、還つて功浪りに施さざる分ありや也た無や。」

㋢九垓。くにのはてまでも。
㋐侍中。日本の藏人と云ふ官職にあたる。
㋚妣。禮記の曲禮に、生を父と曰ひ母と曰ふ、死を考と曰ひ妣と曰ふ。
㋖阿難。釋迦の弟子中多聞第一なり、秦には歡喜と譯す。
㋴四向。須陀洹向、斯陀含向、阿那含向、阿羅漢向。
㋱四果。須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果。
㋯三賢十聖。華嚴に、十住十行十迴向を賢と爲す、十地を聖と爲す、妙覺を佛と爲すと。
㋛覺路。成佛のかどでに。
㋓妙性圓明。楞嚴七に出づ。
㋪捏目見月。楞嚴二下に出づ。
㋲拈卻。とつて除ればといふこと。
㋝蓋面帛。ふくめん。
㋜母嫫。大醜婦のこと。

主丈を卓すること一下して云く、㋬「骨を換へ腸を洗ひ紫塞に投ず。洪門切に忌む更に蘆を銜むことを。」贊經叙請錄せず。

復た偈を説いて云く、「十方薄伽梵、一路涅槃門、去來別處に非ず。縛脫共に同源、徧界曾て藏さず。覓むるときは則ち暗昏昏、大にしては纖芥に入り細にしては乾坤を蓋ふ。與麽に照破するもの之を大覺尊と謂ふ、與麽に受用し去る乃ち是れ大善根、此れを以て㋣三有を資け、此れを以て㋠四恩を報ず。功德涯量沒し、贊歎㋷言を爲し難し、我れ今自ら㋦話墮す、笑倒す鐵崑崙。」と。

㋸法海禪師忌の請

香を拈じて云く、「此の香、其の根廣大、豎に㋾三際を窮め、横に十方に亘る。其の蔭洪荒、上高穹を覆ひ、下厚地を載す。茲者平安城㋻佛心禪寺住持比丘某、今晨伏して先師法海禪師大和尚㋕三十三回の遠忌に値ふて、手を山僧に借り、此の寶香を爇いて、現座道場、當來導師彌勒慈尊、現在應迹、釋迦牟尼如來等、微塵法界、十方三世、諸薄伽梵、華嚴般若法華涅槃等、㋵龍宮海藏、諸部の眞詮、文殊普賢地藏觀音等の諸大薩埵、西天四七、

㋑寶蓮。寶蓮華比丘尼、この因緣楞嚴八の中に出づ。
㋺泥犁。地獄の梵名、秦には無有喜樂と譯す。
㋩逍遙。優遊自在を云ふ。
㋥五障。法華提婆品に、女人の身猶ほ五障あり、一には梵天王と作ることを得ず、二には帝釋、三には魔王、四には轉輪聖王、五には佛身、如何んぞ速に成佛を得ん。
㋭三從。大智度論九十九に、女人の體、幼なるときは父母に從ひ、少きときは夫に從ひ、老いたるときは子に從ふと。又禮記にも見ゆ。
㋬換骨。傳燈二十、永安淨悟の章に見ゆる語。紫塞は秦長城を築く、土皆紫色、之を紫塞といふ。又雁門草に、色みな紫なるが故に紫塞と名づく。
㋣三有。欲有、色有、無色有。有は一切有漏の法是れなり。

東土二三、踵を繼ぎ宗を傳ふ歷代の祖師、先師法海禪師大和尙に供養す。冀ふ所は、香雲徧く布いて、無邊の含情、咸く㋟龍華三會の慈雨に霑ひ、法海彌深うして、未來永劫、遐かに㋹天池一派の正流を通ぜんことを。」

座に就いて、問答罷んで、乃ち云く、「威音以前も也た與麼、一絲毫を添へず、威音以後も也た與麼、一絲毫を減せず。也た添へず也た減せず、空索索亦條條、洗滌すれども湛に匪ず、塗糊すれども汙に匪ず、樣を離れ模を離れ、迥かに心識の㋞機栝を出で、淵に至り奧に至る。寧ろ言詮の梯媒を借らんや。然も是くの如くなりと雖も、苟も能く荊棘林を透過せば、處處綠楊馬を繫ぐに堪へん。深玄の法門、㋡刹說衆生說、廣大佛事、一成一切成、㋧渢和を藉らず。刹刹羣動を度し、號令を勞する毋く、塵塵法幢を建つ。山野恁麼に告報す、諸仁者、還つて法海禪師冷地に聽き得て横に點頭することを知る麼。若し也た知り得ば、山僧今日利を失はず、其れ或は未だ然らずんば、眞淨界中纔かに一念、閻浮早く是れ八千年。」主丈を卓すること一下。

復た擧す、㋤耽源和尙、忠國師の忌日に齋を設く。僧あり問ふ、「國師還

㋠四恩。父母の恩、衆生の恩、國王の恩、三寶の恩。

㋷難レ無レ言。いふことがしにくいの意。

㋦話墮。墮也などいふ語あり、破れて一物も立てざるところをいふ。

㋸法海禪師。淨智寺無象靜照禪師、入宋して月石溪に嗣ぐ、京の佛心、丹の寶林、常の興禪に開山たり、淨智に住す。

㋾三際。過現未の三世。

㋻佛心寺。倭漢禪刹次第に、平安山又は永安、一條大宮桃園宮舊趾。

㋕三十三回忌。師臨川に在り、曆應元年。

㋵龍宮海藏。金翅鳥の眷屬ども、三自歸を受け已つて、卽ち龍の子に從つて海の宮殿に到る、彼の宮殿中に七寶塔あり、諸佛所說の諸法ふかく藏す、別に七寶の函あり、中に

つて來るや不や。」源云く、「未だ他心を具せず。」僧云く、「又設齋を設けて作麽。」源云く、「世諦を斷せず」と。師拈じて云く、「耽源和尙、世諦を斷せざることは卽ち得たり、若し是れ佛法は遠くして遠し矣。今日法海禪師の遠忌に丁りて、門下の高弟、同じく齋會を設く、且く道へ是れ佛法耶、是れ世諦耶。」拂を以て牀を擊つて云く、「三千界外光明を放ち、雙六盤中喝彩を休む。」

㋶康永改元壬午仲秋初五日欽んで、聖旨を奉じて京城東山㋰八坂寶塔を慶讃す（塔中兩界の諸尊を圖繪す）

香を拈じて云く、「此の香、微塵刹界求め得難く、大願海中流出し來る。爐中に爇向して、恭しく㋒今上皇帝㋭太上天皇の爲に、㋨本地法身、法界塔婆、釋迦如來、㋔眞身舍利、㋗胎金兩部、無邊の諸尊、三世出興の諸佛如來、十方常住の諸賢聖衆に供養し、次に㋳祝貢を伸ぶ。梵天帝釋四大天王云云。榑桑顯化伊勢太神宮、八幡大菩薩等、大小福德、一切神祇、伏して願はくは、洪慈保持、彼の大願力を增長し、諸障㋮消殞して此の勝善根を圓成せんことを。」

諦つ云云。菩薩處胎經の中に出づ。

㋟龍華三會。本尊が彌勒ゆゑに、初會說法、九十六億の人阿羅漢を得。第二大會說法、九十四億の人あらかんを得。第三大會の說法に、九十二億の人あらかんを得。

㋹天池。莊子逍遙遊の篇に、「窮髮の北、溟海あり、天池也」とあり。

㋞機はゆはず、栝はやはず。

㋡刹說衆生說。晉譯華嚴の普賢行品に出づ。

㋧漚和。梵には俱舍羅、此には方便と譯す。

㋤耽源和尙。耽源應眞、南陽忠國師に嗣ぐ、六祖惠能三世、唐代宗肅宗時代。

㋶康永改元。北朝光明帝年號、師六十八歲。

㋰八坂寶塔。祇園下の八坂の法觀寺の塔、今建仁寺派に屬す。

座に就いて、索話、㋘無縫塔裏、一線を通せず、佛事門中、且く相見を容す、袖中に㋫漫刺を藏する底あること莫き麼。僧あり衆を出でゝ問うて云く、「塔を修し、㋙斧を止め、供養良辰を擇ぶ、朝旆筵に臨み、山川瑞靄を生じ、人天耳を側つ、請ふ師提綱。」答へて云く、「日月光を添へて天老いず、山川瑞を布いて地に秋なし。」進んで云く、「佛事門中還つて西來の祖意あり麼。」答へて云く、「鐵牛擎げ出す黄金の角。」進んで云く、「與麼なるときは則ち但見る皇風一片と成ることを。知らず何れの處かこれ封疆。」答へて云く、「切に忌む管裏蒼穹を見ることを。」進んで云く、「記得す、僧㋓石門の聰禪師に問ふ、『如何なるか是れ無縫塔。』門云く、『直下に看よ』と、的當なりや也た無や。」答へて云く、「白日官更を打す。」進んで云く、「僧云く、『如何なるか是れ塔中の人。』門云く、『退後退後』と、意那裏にか在る。」答へて云く、「半開半合。」進んで云く、「學人卽今和尚に咨す、如何なるか是れ無縫塔。」答へて云く、「大家這裏に在り。」進んで云く、「如何なるか是れ塔中の人。」答へて云く、「當面に蹉過す。」進んで云く、「和尚恁麼の答話、古人と是れ同耶是れ別耶。」答へて云く、「蓋面の帛を拈却して看よ。」進んで云く、「只今日慶

㋒今上。北朝光明天皇。
㋼太上。同光嚴天皇。
㋨本地法身。これより眞身舍利までは舍利禮の文なり。舍利、又は設利羅、此に身骨と譯す。
㋔眞身。色心不二の法體を以て之を分つ。
㋗胎金。胎藏界、金剛界。
㋳祝貢。言を以て神に告ぐを祝といふ、貢は下の上に與ふる也。祝は願文、貢は供物。
㋮消殞。殞は歿也、沒終也。
㋘無縫塔。これには、無影樹下合同船、瑠璃殿上無知識の古語あり。卵形の塔である、しかしこの宇宙間はすべて無縫塔の卵塔じや、層落々影團々と雪竇もいふてゐる。
㋫漫刺。刺は名刺、今日でいへば名刺の亂呈じや。
㋙止斧。普請を止めてなり。
㋓石門聰。首山念に嗣ぐ、宋の名僧なり。

賛する㋢浮圖の如き、便ちこれ無縫塔なること莫し麼。」答へて云く、「地に就いて拾ひ得たり麗水の金、拈起すれば却つて是れ新羅の鐵。」進んで云く、「莊嚴既に善美を盡す、供養も亦㋐勤渠を致す。畢竟什麼邊の事をか成し得る。」答へて云く、「萬象隨喜、虚空證明。」進んで云く、㋚「翅學人㋖瞢昧を開くのみにあらず、普く含識をして良因を結ばしむ。」答へて云く、「大商は小利を見ず。」又僧あつて出でゝ問うて云く、「浮圖壯麗、慶讃を周畢し、法筵儼然、好し是の時節、願はくは提唱を聞かん。」答へて云く、「既に自ら能く此くの如し、我今再三せず。」進んで云く、「一句全提、萬機㋴寢削、學人猶は遲疑、更に請ふ慈誨を垂れよ。」答へて云く、「左眄千生、右顧萬劫。」進んで云く、「昔年雙林の㋱傳大士、靈塔を旋繞す。七佛前に引き、維摩後に接す、未審しこれ什麼の㋯標格ぞ。」答へて云く、「彩氣夜常に動く、精靈晝逢ふこと少なり。」進んで云く、「今日八坂の勝伽藍、靈塔を慶贊す。王臣歸崇し、人天感動す、還つて功浪りに施さゞる分ありや也た無や。」答へて云く、㋛「大功宰せず。」進んで云く、「鄕談相似て、州縣同じからず。昔年底便ち是か、今日底便ち是か。」答へて云く、「六隻の骰子滿盤紅なり、大都只是れ頭彩を見る。」進んで云く、

㋢浮圖。或は蘇斗婆に作る。正しくは窣都婆なり。
㋐勤渠。遑々は勤むる也。
㋚翅。啻に同じ。これのみでないなり。
㋖瞢。蒙と同じ、めくら。
㋴寢削。寢は息也、削は刮也。けづりてのける、やみてなくなる。
㋱傳大士。善慧大士ともいふ、支那梁の時代の非僧非俗の道人。
㋯標格。佛法中での標準なり、のり、手本といふこと。
㋛大功不宰。慈悲喜捨の中で慈悲喜は大功なり、捨の一字は不宰の義、この四字はづゐぶん難解の語じや、つまりいへばおれこそと主宰にはならぬといふこと。

「與麼ならば則ち古今異路なし、達者自ら歸を同じうす。」答へて云く、「君は瀟湘に向ひ我れは秦に向ふ。」進んで云く、「上來指示を蒙る、猶ほ功勛の邊に墮す、如何なるか是れ向上の事。」答へて云く、「八角の㋮磨盤空裏に走る。」進んで云く、「夜來の鴈に因らずんば、爭でか海門の秋を見ん。」答へて云く、「君子は介視せず。」乃ち云く、「群生の大本、諸聖の眞源、古に亘り今に亘る。獨露獨耀、伴侶を萬法に借らず、靈明を諸緣に昧さず、恢恢焉として、十虛に㋪彌綸し、㋲蕩蕩乎として、三際に通貫す。識を以て識るべからず、凡庸爭でか㋝梯航を得ん。智を以て知るべからず、聖賢も亦鑽仰し難し。梯航を絕する時、機路自ら活し、鑽仰し難き處、車馬潛かに通ず。倘し能く此に於て承當せば、觸向都て㋜適莫なし。便ち見る本分地上、全く佛事門を開き、佛事門中、直に本分の事を示すことを。淨穢元異域に非ず、處處祖宗を擧揚し、聖凡同じく一音を發して、時時玄旨を演暢す。正當與麼の時、且く道へ功何れの處にか歸する。」拂子を竪して云く、「天高うして羣象正しく、海濶うして百川朝す。」散說幷せて後に附す。「今日法會の旨趣佗なし、只此の塔婆を慶讚し、其の善利を成就せんが爲め而已。夫れ㋑塔婆は梵語、此には高顯處と云ふ、亦功德聚と名づく。或は外相に就いて以て名を立て、或は內蘊に㋺

㋮磨盤。磨を承くる盤といふ、ひきうすのだいなり。
㋪彌綸。彌は徧なり、あまねくをさむ。
㋲蕩蕩。廣大なること。
㋝梯航。ふなわたしするなり、ふなわたし舟のこと。
㋜適莫。論語里仁篇に、「君子の天下に於けるや、適もなく莫もなし」と、非常にすききらひなり。
㋑塔婆。法華義疏十一に云く、舍利あるを塔婆と名づく、舍利なきを支提と名づく。
㋺約。とりて。

約して以て義を明す。蓋しこれ標識、高顯遠く望み近く瞻て、俱に益を得、體性融通、大功至德、悉く周圓するが故のみ。諸佛菩薩、各三摩耶形、此を以て本形と爲す。一切の衆生、種種㋩五取蘊體、此を以て總體と爲す。啻凡聖含靈能く斯の體相を具するのみに匪ず、草木瓦礫に至つても、亦其の形容を受く、所以に之を法界塔婆と謂ふ。十方世界、弘法利生の處、之を建立せずといふこと靡し。諸聖敷演する、眞詮祕典の中、皆以て讚歎す。祖師門下、別に模樣なし、當頭箇の無縫塔を指出す、通上徹下、間に髮を容れず。橫に徧く竪に窮む、㋥杳として形を見ることなし。性具の德用、既に思議を絕す、修飾の功勳、那ぞ限㋭劑あらん。端由述べ叵し、㋬梗槩㋣旃に在り。伏して惟んみるに、㋠征夷大將軍、㋷左武衛將軍、兩殿下、㋦英傑を天賦に稟け、武門の遺風を玷さず、善本を夙生に殖ゑ、鷲嶺の付囑に相符ひ、左武右文、王室の機栝を爲すに堪へたり。內眞外俗、寔に是れ法城の㋸金湯、玆者、

㋾元弘以來、國家大いに亂る、賢懷を想ひ料るに爰ぞ惡を介むことあらん。祇是れ天災不虞に起つて、人民を傷害すること尠からず、舍宅を焚燒する幾何ぞ。此の惡緣に因つて、飜つて善願を發す、其の善願は、所謂六十餘

㋩五取蘊。俱舍頌疏一、因に從つて名と爲す、有漏を取蘊と名づくるは煩惱を取と名づく、よく生死を執取するが故なり、蘊は五蘊、取より生ずるが故に、取蘊と名づく。

㋥杳。はるかに。

㋭劑。分劑也。

㋬梗槩。大綱の如し。

㋣旃。之なり、焉なり。

㋠征夷。足利尊氏を指す。

㋷武衛。同上弟の直義を指す。

㋦英傑。千人に英といふ、英に倍するを賢と曰ふ、萬人を傑といふ。

㋸金湯。外護の俗人を云ふ。

㋾元弘以來。元弘元年、北條高時兵を發して西上す、これより天下大いに亂る。

州の内に於て、州毎に一基の塔を建てんと欲するものなり。其の旨趣敢て私家の爲にするにあらず、佛法王法同時に盛に興らんことを祈らんと欲す。其の回向も亦自利の爲にするにあらず、此方他方一切の含識を濟はんと欲す。具に精㋻悃を陳べて、上　聖聞に達す。其の志叡襟に協ひ、亦同じく大願を發し、乃ち主の㋕幹を武將に命じて、以て㋵締構を諸州に成す。或は新たに營功を樹て、或は重ねて廢址を補ふ。今此の當山の靈塔、是れ其の一なり、玆に因りて數年漸く頽落の積弊を補ひ、今日特に供養の㋟彝儀を旌す。㋹朝旆筵に臨み、法の爲めに證を作し、梵苑彩を添へ、人をして㋞觀光せしむ。㋡龍象㋧沓來、人天交接、伶倫樂を奏す、以て世俗諦中に眞諦あることを表するに足れり。淸衆㋤諷經、亦眞空門裏化門を開くとを示すに堪へたり。法會㋶九成、叡願萬足、此れ乃ち冥顯感應の致す所なり、豈君臣道合ふて然らしむるに非ずや。本寺堂頭㋰高山和尙、願を發して此の塔を修營すること、已に㋒四十餘回に迨ぶ、累年興隆大功、併せて高德に歸す、今日慶贊の唱導、寧ろ別人に干らん乎。然りと雖も、老師自ら謙讓の㋼忱を伸ぶ、遂に山野を擧げて以て代らしむ。是を以て、叨りに

㋻悃。至誠なり。
㋕幹。せわするなり。
㋵締構。締は結、構は成也。
㋟彝儀。彝は法なり。
㋹朝旆。朝廷の行列。
㋞觀光。國の盛德、光輝を觀せしむるを云ふ。
㋡龍象。龍の如く象の如しといふて、水には龍、陸には象、もつとも力大なり、昔阿羅漢たちの力にたとへる。
㋧沓。重なり、疊也。
㋤諷經。禪宗風に唐音でふぎんとよむ、經をよむなり。
㋶九成。集めて大成する也、成は樂の一終なり。
㋰高山和尙。慈照禪師、建仁に住す、雲洞院に塔す、法燈國師に嗣ぐ、六寺に開山となる、夢窓國師と同時なり、康永二年十二月二十五日寂す。廣濟禪師と謚號あり。

詔命に膺つて、固辭を爲し難し、愚(ノ)惷を援るに遑あらず、出で來りて敗闕を納る。伏して乞ふ乘慈、各亮察を垂れよ。繹ぬるに夫れ(オ)七百年前、靈塔草創の時節、乃ちこれ六十餘州、佛法流布の最初、(ク)上宮太子の此の塔を建つるや、大悲願力、深く群品の心に熏ず。(ヤ)淨藏上人の此の塔を祈るや、靈驗嘉聲、普く諸人の耳に落つ。偉いなる哉斯の塔、迥かに常標に出づ、外には五重の層級を構へ、内には三粒の(マ)駄都を納る、内外相稱ひ、全く法身の靈場を露はし、(ケ)輪圓德を具して、宏いに祕藏の玄(フ)閟を闢く。又見る(コ)兩界の覺皇、(エ)四佛の尊像を奉安して、各五智の深理を具し、(テ)宛爾として斯に彰る。互に主伴の化儀を爲す、儼然として見るべし。中心の一柱、(ア)三千諸佛を圖し、邊隅の四柱、(サ)三十七尊を繪く。過現相在り、彼彼含攝すること、猶ほ(キ)鏡燈の如し。横竪無礙、重重互融して、(ユ)帝網に異ならず、(メ)八祖四壁に列坐し、(ミ)八天四方に圍繞す。當に知るべし諸聖諸賢同じく會して、常恒祕を談じ玄を談ずることを。何ぞ疑はん善神善祇降臨して、日夜に人を護し法を護することを。奇瑞殊特、自ら是れ集めて大成す。褒美稱揚、其れ豈言の及ぶ所ならん哉。(ヒ)治承(エ)正應に

(ウ)四十餘回。四十年中、斡辨の心力也。

(ホ)忱。諶と同じ、まこと。

(ノ)惷。愚也。

(オ)七百年前。崇峻天皇己酉の歳、太子建塔、曆應二年まで七百六十載なり。

(ク)上宮太子。聖德皇太子。

(ヤ)淨藏。淨藏貴所は三善淸行の弟(一説に子)といふ、天曆年中に八坂寺に寓す。

(マ)駄都。梵には達磨駄都と云ふ、舍利の異名なり、如來の身分なり。

(ケ)輪圓具足。曼陀羅、古に譯して壇といふ、新譯にはりんゑんぐそくといふ。

(フ)閟。音秘、閉づるなり。

(コ)兩界覺皇。覺皇は大日如來、金剛界は智法身、胎藏界は理法身。

(エ)四佛。阿閦、寶生、無量壽、不空成就佛、これに大日を加

此の塔屢㋪回祿に罹る、太子願力堅固にして燼灰と成らず、累朝尊崇、今に至つて相續す、叡信彌篤うして、嚴飾轉た新なり。㋲建久年中、鎌倉の㋝右幕下、深く信心を生じて、特に供養を伸ぶ。爾し自り以降、武家渇仰も亦相繼ぐ、靈塔紹興未だ嘗て休まず、於戲如來、佛法を以て國王大臣有力の檀那に付囑す、金言虛ならず、得て驗みつべし。昔本朝伽藍の興建、此の地是れを㋜權輿と爲す、今諸國塔婆供養、此の地亦先鋒と作す。其の感應冥符に由つて、此の緣遇際會を知る、佛法の流布すること、既に此の㋑精舍從り始まり、佛法の再興することも、亦此の精舍に資る者歟。㋺阿育王曾て八萬四千の塔廟を造る、皆八祥の靈地を擇んで、以て址基とす。榑桑國新たに六十六箇の浮圖を立つ、先づ八坂の精藍に於て供養を修す、乃ち知る此の地元㋩八祥の德を蘊む、故に自ら八坂の名を得ることを。厥の來歷を想ふに、固に苟も然るに非ず、敎中に云く、『正法住正法滅、須らく塔婆の興廢を以て觀るべし。』と、既に是れ塔婆興隆時を得たり、應に知るべし如來正法世に住することを。彼の㋥法勝寺の寶塔、去春火災に罹つて壞滅す、貴賤皆同じく悲歎す。此の法觀寺の寶塔、今日供養を遂げて再

へて五智如來といふ。
㋢究徹。其まゝと譯す。
㋐三千諸佛。三世無數の佛。
㋚三十七尊。中央の大日尊に四菩薩、東方の阿閦佛に四尊、南方の寶生佛に四尊、西方の無量壽佛に四尊、北方の不空成就佛に四尊、內の四供、外の四供その他の四尊。
㋖鏡燈。鏡十面を取り八方に安排し、一炬を燃して之を照す。互影光を交へ、學者因つて刹海渉入、無盡の義を渉入す。
㋴帝網。重々帝網。
㋱八祖。龍猛、龍智、金剛智、不空、善無畏、惠果、弘法以上を眞言七祖と稱し、是に眞言の始祖、金剛薩埵を加へて八祖となす。
㋯八天。八方天なり、伊舍那天、帝釋天、火天、閻摩天、羅刹天、水天、風天、多聞天。
㋛治承。高倉天皇年號。

興す、緇素隨喜せずといふことなし。兩塔壞滅と再興と、示相異なりと雖も、諸人悲歎と隨喜と得益これ同じ、此を以て之を思ふ、謂つべし、塔婆の興廢、倶に是れ佛法流通なることを。所以に道く、(ホ)『乃至童子戲に沙を聚めて佛塔と爲す、漸漸功德を積み、皆以て佛道を成ず』と。童子の戲、尙ほ覺因を爲す、何ぞ況んや朝廷の叡願、武門の精誠をや。聚沙の功も、亦善種を熏ず、何ぞ況んや田園を頒ち賜ひ、財產を割き施すをや。然らば則ち慶賛を多言に備ふることを用ひず、偏に是れ證知を三寶に仰ぐ而已。謂ふことなかれ塔婆唯六十六州に興ると。須らく知るべし法界に周徧して、塵塵廣く建化門を開くことを。誰か言ふ供養聊か一時一會を期すと。亦當に盡未來を窮めて、世世常に大佛事を作すべし。此の鴻因を以て、皇祚を祝延す、金輪統御して、三代の嘉猷を踵ぎ、寶曆綿洪にして、萬年の景運を享けたまはんことを。玆の善利に憑つて、武門を(ヘ)保裕し、久しく帝道を佐け、榮耀家に傳へ、永く祖風に歸し、智才出格、其の威力に仗つて、法門を護持し、伽藍肅靜にして、(ト)魔孽蹤を潛め、僧侶安寧にして、宗猷踵を接ぎ、厥の餘薰を散じて、國土を賑濟し、干戈永く止んで、朝野清平を

(エ) 正應。伏見天皇年號。
(ヒ) 回祿。火災をいふ。
(モ) 建久。後鳥羽天皇年號。
(セ) 右幕下。右大將頼朝公。
(ス) 權輿。始なり。
(イ) 精舍。精練行者の居るところ、之を精舍と云ふ。
(ロ) 阿育王。佛滅度の後百年に阿育王、佛の舍利を取りて夜鬼神を役し、七寶末を碎き、八萬四千の塔を造る。
(ハ) 八祥。第一、毘羅城龍彌儞園、これ佛生のところ。第二、摩訶陀國泥連河菩提樹下、これ佛成道のところ。第三、迦尸國波羅奈城、これ佛正法輪を轉するところ。第四、舍衞國祇陀園、これ佛大神通を現すところ。第五、曲女城、忉利天より下降のところ。第六、王舍城聲聞分別、佛化度をなすところ。第七、廣城靈塔、壽量を思念するところ。第八、

樂み、災禍咸く消して、㋠黎庶康阜なることを得ん。斯の功德を併せて羣生に回向す、怨親親類、齊しく㋷塵勞を出でて、有緣無緣、同じく㋦種智を圓かにせんことを。」

復た偈を說いて曰く、「人人箇の無縫塔あり、八面玲瓏、覆藏せず。廓落虛通內外なし、湘南潭北封疆を絕す。卓然獨立す乾坤の外、塵塵刹刹靈光を放つ。眼を著けて看來れば形段沒し、形段沒き處露堂堂、大にして大に非ず纖芥に入り、小にして小に非ず十方を裹む。羣生㋸庇に托して未だ嘗て識らず、今日分明に爲めに擧揚す。一塔出生す無量の塔、諸塵擎げ出す古佛場、好し是れ洪㋾麻窮め盡すこと莫れ、佛運皇基共に久長。」主丈を卓して下座。

㋻覺皇寶殿、㋕慶讚陞座。㋵康永四年八月晦日、此の日 太上天皇臨幸。

香を拈じて云く、「此の一瓣の香、根、實際に蟠り、蔭、高穹を覆ふ。無遍の德用、集めて其の中に在り。爐中に爇向して、恭しく
㋟今上 皇帝、㋹太上天皇の爲めに、聖壽無疆を祝嚴し、洎び文武百僚、
增福增壽。

拘戸那城沙羅林の內大雙林の間、佛涅槃に入り給ふところ。この八祥は八大靈塔經の說による。

㋥法勝寺。白河院承曆元年十二月十八日、帝幸して慶す、永保三年十月初塔成る、九層なりしと。

㋭乃至。法華方便品、若し曠野の中に於て土を積み佛廟を成じ、乃至云云。

㋬裕。佑に作るべし、音は又、神の助なり。

㋣魔孽。孽は禽獸蝗蟲の怪を云ふ、わざはひなり。

㋠黎庶。人民。

㋷塵勞。圓覺經疏鈔十一に、塵は六塵なり、塵に由つて勞を成す故に塵勞といふ。

㋦種智。一切の種智、佛の智惠。

㋸托庇。おかげによりて。

㋾麻。樹の蔭。

㋻覺皇寶殿。天龍寺の佛殿。

次に香を拈じて云く、「此の香、時に應じて變化す、蹤由沒し、手に信せて拈じ來つて掌握に歸す。寶爐に爇向して、現座道場、毘盧遮那如來、千百億化身釋迦牟尼大覺世尊・普賢菩薩・文殊菩薩等の諸大薩埵、迦葉尊者達磨大師等の歷代の祖師、及び徹塵刹界の一切の三寶に供養す。鳩むる所の善利、恭しく 後醍醐上皇の爲めに、覺果を莊嚴す。次に 大梵尊天帝釋尊天四大天王、日月星宿、火德星君、天界列位、諸天仙衆、地界所屬、一切靈祇、水界所屬、諸大龍王、榑桑顯化、伊勢太神宮、八幡大菩薩等の大小の神祇に祝貢を伸ぶ、普く用つて資薰す、同じく ㋞保護を垂れたまへ。」遂に趺坐索話、祖令當行、千聖舌を結ぶ。唱和門の中、且く響節を容す、㋡同聲相應する底あること莫しや。問答罷んで乃ち云く、「玄機透脫して、萬象を目前に融す、至鑒高明にして、千差を物表に會す。一透一切透、一明一切明、竪抹橫該適くとして可ならざることなし。左顧右眄、克く其の原に逢ふ、纖毫を費さずして、廣く沒量の佛事を修し、一念を動ぜずして、普く法界の衆生を度す。直饒恁地に ㋧違得し去るも、若し祖師門下に入らば、也た是れ階下の漢、直に得たり淨裸裸、承當を絕し、赤洒洒、近傍し

㋕慶讃。年譜に、貞和元年乙酉に師年七十一歲秋八月、先皇の七年忌を以て天龍開堂法會の儀を行ふ、其辰を擇び用つて正日を以てせず。延いて月の末に在り、是の月二十七日、敕使山に入り、特に金襴の紫衣を賜ふ、二十九日太上天皇山に入る、師陞座說法、二星の降ることを感ず、上大に悅んで錦帛三十襲、水晶の數珠、白銀の花瓶等を賜ふ。

㋵康永。北朝光明天皇年號。

㋟今上天皇。北朝光明天皇。

㋹太上天皇。北朝光嚴天皇。

㋞保護。保持守護。

㋡同聲。易の乾卦文言に、同聲相應じ同氣相求む。

㋧違。こえうるの義なり、なつとると云ふ俗語にあたる。呉音ちやく。漢音たく、とく。とほし、はるか、こゆの訓あり。

難し。世間の㊉樞要、總に相干らず、出格の風流、亦交涉なし。更に甚麼の廣く佛事を修し、普く衆生を度すとか說かん。好し是れ無爲無事大解脫門、倘し能く此の門に入得すれば　皇家も也た無爲無事、佛家も也た無爲無事、一切の災厄、禳せざるに自ら消し、萬古の㋶徽猷、求めざるに自ら備はる。三世の如來、共に斯の要を默し、歷代の諸祖、亦只㋰端拱す。小比丘、某甲、今日　詔を奉じて、此の座に陞る、拱默を容れ難し、且く一線路を通じて、此の大解脫門を開闢し去らん。」拂を以て牀を擊つて云く、㋻「鵰弓已に掛けて狼煙息む、萬國の歌謠太平を賀す。」

㋼御願文並に㋨諷誦文を宣讀す。

復た云く、「妙性圓明にして、諸の名相を離れ、本來世界衆生あることなし。此れは是れ如來不欺の語なり、既に世界なし、安んぞ興亡治亂の變を爲すあらんや。亦衆生なし、寧ろ彼我寃親を其の間に容れん哉。然も是くの如くなりと雖も、一翳眼に在れば、千花亂墜、此の性緣に隨つて諸の名相を現ず、名相轉變して、圓明を昧却す。若しこれ悟達の人は、寂滅性中に安住して、恒沙の妙用を起し、世間の幻相に隨順して、顚倒の衆生を利濟す。虛妄轉變を以て、其の懷を擾らず。蓋し其れ國土の安危、自他の逆順、皆吾が家の戲具たるのみ。迷妄の類、肯て信及

㊉樞要。樞はとぼそ、要はかなめ。
㋶徽猷。よきはかりごと。
㋰端拱。たゞしく手をこまぬく、支那の最敬禮。
㋻鵰弓。畫弓なり、天子は敦弓なり、敦弓は畫弓なり、詩の大雅に出づ。
㋼御願文。御創立の趣旨をのべさせられたるなり。
㋨諷誦文。諷誦は經文を諷誦して、その功德により災厄を禳ふを目的とするなり、その式法は高聲に唱ふべきこと、全部文宸翰は少し御名だけのが多しといふ。

せず、無相を敵ふて有相と爲し、妙用を枉げて妄用と爲す。是の故に世間否泰相奪ひ、衆生業債相酬ゆ。曠劫輪廻して、㋔因循として今日に至る、未來の沈溺、出脫何れの時をか待たん。然も其の流轉の相、實體あることなし、夢幻の如く空花に似たり、若し其の本を究むれば、則ち禍と福と源を同じうし、寃と親と體を一にす。佛祖世に出興する、別事の爲ならず、唯衆生をして此の同源一體の域に悟入せしめんが爲めのみ。爰に元弘以來天下大いに亂る、翅、戰場の兵卒多く軀命を殞すのみにあらず、山野㋗飛走に至るまで、亦其の餘殃に罹り、神廟佛堂、㋳朱門㋮白屋、或は兵火の爲めに焚かれ、或は賊徒の爲めに壞せらる。嗚呼災の物を害すること此に加くこと莫し。其の天災の來歷を繹ぬるに、世運の㋘否屯より出でたり、所謂否屯は外より來らず、此れ乃ち積劫業債の然らしむるなり。業債の因由、亦佗の作に非ず。只是れ一念無明の感ずる所なり。夙植深厚の人に非ざるよりは、能く之を知ること莫し。或は知つて故に犯すことあるものは、佛祖も亦未だ之を如何んともすることあらざるのみ。茲者、征夷大將軍源朝臣、左武衛將軍源朝臣、眞智内に熏じ、靈機外に發す。自ら慙愧を懷ひて、愆尤を謝せんと欲して、具に丹悃を陳べて上叡聞に達す。伸ぶる所の懇志、深く叡襟に協ふ。乃ち聖旨を奉じて、榑桑國中に於て、州每に、一寺一塔を建立して、普く元弘以來の戰死傷亡、一切の魂儀の爲めに

㋔因循。所作なきを云ふ。
㋗飛走。禽獸を云ふ。
㋳朱門。貴臣は朱門。
㋮白屋。かやぶきやれ、賤人の居るところ。
㋘否屯。陰陽不交を否となす、交りて未だのびざるを屯といふ。
㋫曆應。北朝、光明天皇年號。

覺路を資薦す。又㋫曆應年中、特に叡願を立てゝ、此の皇宮を革めて以て梵苑と作し、先皇の爲にし奉り、寂場を嚴飾す。又武家に命じて、其の營造を董す、年を經ること未だ幾ならざるに、不日にして功を成す、寔に是れ君臣道合し、天龍保持するの致す所耳。便ち見る物、否を終へずして、惡事轉じて善事と成り、法定相なし、逆緣卻つて順緣と爲ることを。此れ其の禍福同源、寃親一體なる所以の者なり。兵革の世を亂ること適今のみに非ず、上古も亦夥し。其の端緒を原ぬるに、或は國祚を爭ひ、或は叛逆を誅す、其の中一毫一勝、只是れ業を增し寃を增す而已、未だ惡緣を轉じて善緣と爲すこと、今日の如くなるを聞かず。㋙竊んで以みれば、佛化の行はるゝこと、未だ苟且の中より出づることあらず、其れ必ず處を得、時を待つて興る。疇昔嵯峨天皇の御宇、慧蕚上人あり、敕を奉じて大唐に渡つて、佛法を本朝に流通す、㋓鹽官の安國師に參じて、教外の玄旨あることを信ず。仍つて其の㋢會下の㋐上首義空和尚を請じて本朝に來る。敕して東寺の西院を以て、安下の處と爲して、時時に鳳闕に召對す。時に㋚皇后宿植開發して、一面契悟す。乃ち精舍を此の嵯峨に建てゝ、以て檀林と號す。彼の禪師を請じて住持せしむ。檀林寺の內に、十二院あり、皇后其の一院に居す、因つて檀林皇后と稱す。其の事具に石碑に載せて東寺に在り。

㋙竊。盜のあやまち字なり、伏の字と通ず。
㋓鹽官安。馬祖に嗣ぐ、義空の師。
㋢會下。會裡にある人の意。
㋐上首。會下のかしら、上足ともいふ。
㋚皇后。橘の太后、諱は嘉智子、太政大臣橘の淸友の女、嵯峨天皇弘仁七年册立す。
㋖其碑。蘇州開元寺の契元に求めて作らしむといふ。

㋖其の碑の表題に云く、『日本首傳禪宗の記』と。然れども禪宗の興行、未だ其の時を得ず、皇后登霞の後、檀林精舍、漸漸に荒零して、或は郊蕪と爲り、或は民居と爲る。嵯峨聖代より已後、四百載に迄んで、禪院㋴聿に興る。謂ふ㋱洛の建仁・東福、相の壽福・建長是れなり。爾しより以降、大小の禪刹、天下に徧し。七十年の前、後嵯峨院皇居を此の地に卜す、乃ち是れ檀林寺一院の故基なり。龜山法皇亦相繼いで以て行宮と爲したまふ。其の内に㋯壽量院あり、南禪寺の僧二十員を分つて此の院に安ず、今の法堂の所在、便ち是れ壽量院の舊趾なり。是に知んぬ、此の地將に大叢林を興さんとして、豫め斯の兆あることを。遂に又此の行宮を革めて大伽藍と作すを見る。禪宗首めて本朝に傳ふるは、則ち此の地を先鋒と爲す。禪宗、化を世に旺んにする、則ち此の地亦殿後たり、此れ乃ち處を得、時を得て、以て佛法を興すの驗なり。理自ら昭著、其れ誰か諸を疑はん。本寺の修營、已に太半に及び、朝廷の叡願、必ず當に圓成すべし。山名寺號、未だ牌扁を掲げず、今上皇帝、先づ宸筆を染む。佛殿、㋛法堂の署額、㋾左梁右欐の誌文、以至㋪聯芳㋲洞鑒の表題、並に是れ太上天皇の奎翰なり。聖表の懇誠斯に彰はれ、祖宗の光幸見るべし。熟思ふに此の伽藍の興建、偏に大亂の因縁より起る。其れ豈明王賢臣、外逆內順、表裏を相爲して、宗猷を扶堅するものに非ずや。恭

㋴聿。惟と同じ。

㋱洛、建仁・東福は京都、壽福・建長は鎌倉。

㋯壽量院。虎關國師の濟北集十に、壽量院のありしこと分る。

㋛法堂。法雷堂といふ。

㋾梁欐。はり、むね、光嚴天皇親しく宸翰を染めて上梁の文を製したまふ。

㋪聯芳。祖師堂の額。

㋲洞鑑。土地堂の額。

しく惟みれば　太上天皇、善因冥に熏じ、聖徳顯れ布いて、神符の籙に膺り、天授の圖を受く。理を以て之を考ふれば、則ち先皇の貴裔に非ず、義を以て之を思へば、則ち猶ほ㋣繼體の副君、茲に因つて今月、伏して　先皇七周御忌に値ふ。今日儼然として、當山に　臨幸して、特に小比丘某甲に命じて、此の座に陞つて、精藍を慶讃し　尊靈の爲めに覺果を莊嚴し奉る。某、旣爾叨に開山に膺る、敢て自ら鄙野を揆らず、正法を擧揚して、上　洪庥に答ふ。復た諸の㋜龍象を請じて、同じく證明を作さしめ、供佛施僧、諸山に及ぶ、看經誦咒全藏を轉ず。大いに囚虜を赦して囹圄を出し、苦楚を免れしむ。特に伶倫に命じて、㋑霓羽を翩し、簫韶を奏せしむ、豈止一獄の囚者のみならん乎。法界の含情同じく㋺樊籠を出づ、寧ろ四部の伶倫に限らん乎。山河草木齊しく起つて鼓舞す、眞俗互に融し、事理相攝す。此を以て三寶に供養す、供養中の最上なり。此を以て伽藍を慶賛す、慶賛の中の純眞なり。加之、龍馭山に入つて、法筵彩を添へ、台㋩旆㋥砌に列つて、衆會光を觀る。顯れて見る所尙ほ言の陳すべきに非ず、冥の感應、奚んぞ然らざるもの有らん哉。天龍雲のごとくに集り、賢聖光降して、今日の佛事を證明すること、言はずして諭しつべし。法會の㋭彝儀、旣に是れ善

㋣繼體君。光嚴天皇は一旦、後醍醐天皇の皇太子とならせられたるなり。

㋜龍象。太平記の二十四卷によると、この諸龍象といふのは、南禪の智明、建仁寺の友梅、東福寺の一鞏、萬壽寺の友松、眞如の良元、安國寺の至孝、臨川寺の思玄（無極）等なり。

㋑霓羽。霓裳羽衣、仙樂を云ふ。

㋺樊籠。かごなり、紛雜なるをいふ。

㋩旆。はた也、將軍の臨場を形容す。

㋥砌。いしだたみ、きざはし、或は[illegible]に當る。

㋭彝。のり。

盡し美盡す。哀むる所の鴻業、當に知る無量無邊なることを。曠劫の業根、亦拔出しつ應し、矧んやこれ元弘以來の㋬愆尤を乎。無始の積妄、尚ほ消融しつべし、何に況んや一旦㋣介爾の情執を乎。恭しく惟みれば、後醍醐上皇、天選の㋠鳳質、物外の神標、德二儀を蓋ひ、明兩曜に並ぶ。或は㋷臧或は否、隨緣㋦玄化知り難し。是れ聖是れ凡、出格の高行辨ずること莫し、祇叡運時を得ざるに因つて、遂に見る仁風扇がんと欲して止むことを。嗚呼㋸喬嶽の仙長く逝いて、㋾茂陵の駕還らず、尊儀已に大乘の法社に入る、勝趣何ぞ小節の幻緣に拘はらん。假令輪王の位に在つて、七寶豐饒なるも、爭でか極聖の身を證して、㋻萬德圓備なるに似かん。恭しく願はくは、神儀徑に覺殿に登り、㋕業障本空の門を開き、常に慈舟に棹して、寃親平等の海に遊び、鷲嶺の付囑を忘るゝこと無うして、法幢を塵區に建て、龜山の寂場を動ぜずして、羣類を沙界に濟はん。戰陣傷亡の幽魂、親疎齊しく巨益を蒙り、昏衢迷倒の含識、貴賤同じく㋵圓明に入らん。更に冀はくは、玆を履んで以往、未來に至るまで、兵戈偃息して、寰宇康寧に、皇祚延洪にして、天下の大慶を錫ひ、營門㋟繁衍にして、法城を護つて永く隆ならん。上來伸ぶ

㋬愆尤。とが。
㋣介爾。介とは細念を云ふ。
㋠鳳質。龍鳳の姿、天日の表。
㋷臧否。よし、あし。
㋦玄化。神に參じて靈と合契す。
㋸喬嶽。支那の故事にて、詩周頌にあり。事死に、後醍醐天皇を周王に比するか。
㋾茂陵。漢武帝を茂陵に葬る。
㋻萬德。華嚴鈔序に、よく盡く佛の功德を說くこと無し、無盡の德すべてを云ふ。
㋕業障本來空。これは證道歌の中の「了ずれば則ち業障本來空」と云ふたとろ。
㋵圓明。寶覺圓明眞妙淨心無二圓滿。
㋟繁衍。はびころ、繁は又蕃に作る、衍は豐也、盛也。

る所の情旨、並に是れ實に詣して供通す、萬象證明し、太虛保任せん。」

復た偈を說いて云く、「一莖草上梵刹を現ず、一處纔かに現ずれば處々現ず。一梁一柱河沙に遍し、片瓦根椽法界を含む。法界の諸塵亦相攝す。壞なく雜なく罣礙なし。帝網交羅して互に莊嚴す。微妙の壯麗自ら圓備す。一多大小其の量を泯す。廣狹中邊誰か敢て論ぜん。偉いなるかな此れ箇の勝伽藍、永劫儼然として廢すべからず。無邊の諸佛諸聖賢、光嚴住持裏許に在り、人天鬼畜諸羣品、貴賤冤親共に一家、寂滅性中對待なし。安んぞ業債の互に相酬ゆるあらん。人々同じく光明藏に入つて、刹々恢開す無礙門。」主丈を卓す。

拈香

達磨忌

謾に㋑六宗を破す、水、水を洗はず、㋺堅白の理論を㋩主張として、剛ひて道ふ單傳の玄旨と。㋥嵩山冷坐九年の弓、兒孫奕世の累を引き得たり。我れ今只其の恩なきを謝す、敢て其の㋭髓を得ることを望まず。插香

㋑六宗。佛大勝多は小乘禪を佛陀跋陀に學ぶ、達磨も同じく學びしことあり、六宗を分つ、第一有相宗、第二無相宗、第三定慧宗、第四戒行宗、第五

して云く、「古へ柏一炷價千金、比すること莫れ神光の隻臂を斷ずるに。」

壁觀九年、拙を露し醜を呈す。隻履西に歸る賊空手なし、頭を改め面を換へて伎已に窮す。三十六路走るに如かず、葱嶺塵塵現前、少林處處繁茂、惡跡卒かに未だ消せず、累千載の後に及ぶ。拈香して云く、「兜樓一炷恩怨を分つ、半は香ばしく兮半は是れ臭し。」

鯨波萬里、嶮を冒して西來、意趣解し難し、世を擧つて疑猜す。震旦河頭に水を擔つて賣り、榑桑平地に骨堆を起す。(ト)千變萬化、滿面の塵埃、隻履西竺に歸り、全身九垓に現ず。少室峰前兮、月明かに雪白し、(チ)片岡山下兮、葉落ち花開く。慈蔭恢恢として今古に亘る。後昆往往自ら(リ)張乖。拈香して云く、「我が此の瓣香是れ官貨、謂ふこと莫れ今晨忌齋を設くと。」

(ヌ)圓覺開山忌

(ル)龍淵の水を攪動して、榑桑雷霆を震ふ。電收つて四十年、遺風轉た更に腥し。這般の惡迹掩ふこと得ず。咸言ふ(ヲ)圓照(ワ)寧馨ありと。拈香して云く、「是れ怨是れ恩、吾識らず、兜樓一瓣(カ)玄冥に寄す。」

無得宗、第六寂靜宗、之を達磨が一に破せしなり。

(ロ)堅白。史記の荀卿傳に出づ、公孫龍の堅白は即ち守白なり、白はなほ是の如し、堅執してその說を是として之を守る也、同異は衆人の異論を合同するなり。

(ハ)主張。著力の意。

(ニ)嵩山。少林のあるところ、支那の鄭州にあり。

(ホ)得髓。二祖惠可は髓を得たり。

(ヘ)柏。堅緻にたとへろ。

(ト)隻履。達磨は滅後三年、手にかたしの履を携へて行くを魏の宋雲が逢ひしといふ。

(チ)片岡。日本の大和國片岡山に現じたといふ、滅後八十六年、聖德太子が衣を脫して付せられし故事。

(リ)張乖。相戻也。

(ヌ)圓覺開山。後宇多天皇弘安五

㋵一山國師忌㋟大雲庵の請

圖し成す砌下一池の水、㋹飣出す簷頭數朶峰、好箇㋞天眞法供養、今晨何事ぞ大家忽し。恭しく惟みれば、前住當山　勅謚一山國師大和尚、其の智自ら㋡及を游ばしむ。其の辯孰れか鋒に嬰らん。內之外と相應、㋧宗之說と兼通ず、峻機㋤玉山の頂を踏み、妙用㋶頑極の風を移す。震旦扶桑兩處に龍と成る、國師の名翼、十方空に翔ける。㋰曩時我れに命じて㋒巾瓶に侍せしむ、㋼三喚聲裏虛しく睡困す。三十年來、未だ此の恨を消せず。遠忌斯に臨む、誰か恩怨を分たん。高弟相共に他の手を借つて、自らの香を拈ず。南禪も也た公税を納れて、以て私獻に當つ。且く道へ斯の如き供養、還つて慈蔭に酬ゆるの分ありや也た無や。挿香して云く、「怪

年、師年五十七、北條時賴の請により住す、無學佛光國師。

㋸龍淵。支那の徑山の方丈を龍淵室といふ、無學の師の無準にたとへる。

㋾圓照。無準國師の塔の名。

㋻寧馨兒。晉人の俗語、かやうな、又は如ㇾ此の意、かゝる秀でたる兒と云ふこと。

㋕玄冥。有氣の始なり。

㋵一山。一寧禪師は元の台州の人、正安己亥本邦に來る、建長圓覺淨智に住す、後宇多天皇師を寄信し、正和二年南禪寺に勅住せしむ、文保元年九月廿四日寂、壽七十六、上皇國師號を賜ふて、塔を龜山廟の側に建て、法雨の額を賜ひ、像の贊を御製す。

㋟大雲庵。南禪寺の寺中、一山の塔處。

㋹飣。貯食也、飣出すはもり出すなり。

㋞天眞法供。法華の藥王品に、是れ眞の精進是れを眞に法を以て如來を供養すと。

㋡游及。餘地あることにたとへる、故事あり、莊子の養生主に出づ。

㋧宗說。宗は道の本、說は敎の跡。

㋤玉山。頑極の師の癡絶冲禪師の塔のある金陵の玉山庵のこと。

㋶頑極。頑極行彌禪師、癡絶冲に嗣ぐ、宋の名僧、一山の師にして無準三世、育王に住す。

㋰曩時。今より既往を云ふ。

㋒侍巾瓶、夢窓國師は一山に參じて侍者たり、二十三四五の三年に亘る、後又參す。

㋼三喚。侍者のつとむるを三應とも三喚ともいふ。

㋨膚寸。四指のこと、おや指をのけて四本立つること。

むこと莫れ香煙一縷の微なることを。大雲元(ノ)膚寸より起る。」香を提起して云く、「此れ箇の一物、(オ)地に先だち天に先だつ、都て今古の相なし、豈に陰陽の爲めに遷されんや。前住當山　勅諡一山國師大和尙、昔大唐に在つて此の物を求む、之を(ク)玉几峯前に得たり。一生受用して(ヤ)固必毋し、千變萬化只緣に隨つて、(マ)七處に住山し去る、此を以て鉏斧と作す。萬里海を渡り來る。此を以て(ケ)鐵船と作す。(フ)君王に對して玄を談ずるときは、則ち是れを廣長舌と爲す。衲子の與めに手を垂るゝときは、則ち是れを惡辣拳と爲す。歸寂の後十三回、祕して家中に在つて靑氈と作す。今日遠忌斯に臨む、門下の高弟、又之を拈出して、用つて一瓣の香と作して、爐中に爇向して、上慈蔭に酬ゆ。還つて先師の爲めに恩を報ずるの分ありや也た無や。」挿香して云く、「用ひず(コ)巴陵三轉の語、婆が裙子を借つて婆年を(エ)拜す。」

(テ)玉雲庵に就く。

(ア)佛國禪師忌

荊棘滿地、吾れ也た未だ師の藩籬を窺はず、白浪滔天、吾れ也た未だ師の靈骨を見ず。曾て慈訓の蒙を啓くなく、只怒罵呵咄に遭ふ。打初の一歩已に錯る、眼を開いて佗の

(オ)先天地。傅大士の偈に、「物あり天地に先つ、形無くして本寂寥。」となり。
(ク)玉几峰。支那鄮山阿育王寺の境致にあり。
(ヤ)固必。とりつき滯るなり、固執必期の意。
(マ)七所。支那では祖印寺、補陀山、日本では修禪寺、建長寺、圓覺寺、淨智寺、南禪寺。
(ケ)鐵船。鐵船水上浮の古語あり。
(フ)君王。後宇多天皇に對御叡信を忝うす。
(コ)巴陵三轉語。一道。明眼人落レ井。二吹毛劍。珊瑚枝枝撐ニ著月一。三提婆宗。銀椀裏盛レ雪。
(エ)拜。俗に年を賀するを拜年といふ。
(テ)玉雲庵。建長寺中一山の塔頭。
(ア)佛國禪師。高峰顯日、後嵯峨帝の皇子。

窠窟に墮す、今朝既に往くをば咎めず、例に隨つて箇の忌齋を設く。拈香して云く、「從前の怨恨百千緒、此の瓣香に和して當下に灰す。」

先師三昧南禪知らず、南禪三昧先師知らず、平白一條の路、東西各背馳、盡く謂ふ子を養つて父に及ばざれば、以て家門一世の衰を致すと。諸人苟も能く恁麼に批判し去らば、拈香して云く、「我が此の一炷の香、功浪りに施さず。㋚債に主あり、寃に頭あり、先師好呆我れを接す。端なく怨仇を結び得たり、㋖切齒責を悔いて、覆水收め難し。㋴一做さゞれば二休せず、今朝又此の兜樓を爇く。」

㋱元翁和尚盡七の請

此の香、生育二儀を籍らず、根苗自ら羣卉を壓す、之を失ふときは、則ち㋯五分法身を昧却す。之を得るときは則ち一切種智を熏成す。伏して惟みれば、前席南禪元翁和尚、此の香の夙熏を得て、平生の志操萃を拔く。遂に見る德馨日に新にして、乃ち㋛王臣の爲めに貴ばるることを。㋽先師の門庭を扶起して、嘉聲㋪浩浩として墜さず。慧林も亦此の香些子の熏力を得て、元翁の受用底と㋲連枝同氣、ある時は之を丘壑に藏して、共に寂寥を守り、ある時は之を街衢に賣つて、各小利を求む。

㋚債有主。おの〳〵あいてがあるの心なり。
㋖切齒。切齒扼腕。
㋴一不做二不休。俗語也、しおふせればおかぬと云ふの意。
㋱元翁和尚。元翁本元。
㋯五分法身。法華玄義釋籤に出づ、一戒身、二定身、三慧身、四解脱身、五解脱知見身。
㋛王臣。都督世良親王、師を禮して師となす。
㋽先師門庭。元翁と夢窓とは同參、佛國々師に嗣ぐ。
㋪浩々。大水にたとへる。
㋲連枝。弟子兄弟。

此の老(セ)奄然として化權を戢む。中陰已に(ス)盡七の忌を迎ふ。謹んで玆の妙香を爇いて、現座道場圓通大士及び無邊塵刹、常住の三寶、果海の賢聖に供養す。鳩むる所の殊勛尊靈を資薦し、品位を增崇す。且く道へ寂滅性中、什麼の位次を增崇せん。拈香して云く、「樹凋み葉落つ天地の秋、誰か見る春花の碓觜に開くことを。」

(イ)耕雲和尙の爲にす

胸次汪洋、擧措(ロ)超軼、風度を(ハ)松源の的流に稟く、塵機を(ニ)大通の密室に喪す。一時の名望、山嶽空を凌ぐ、兩處の化權、雷霆蟄を驚す。此れは是れ耕雲和尙平生受用三昧なり、只末後一たび人身を失へば萬劫にも復へらずと道ふが如きんば、諸人什麼の處に向つてか、此の老と相見せん。拈香して云く、相見不相見、只(ホ)一炷の香を消す。」

師叔(ヘ)孤雲西堂和尙の爲にす

大方外なく、大圓内なし、出格の擧措、寧ろ對待あらんや。平生奇智を蘊む、圭角彰れず、滅後全機を喪す、靈光何ぞ昧まさん、生處に滅を示す。(ト)仰山當年寂寥を致す、滅時に生あり、(チ)臨川今日自ら慶快、慶快と寂寥

(セ)奄然。たちまちなり。
(ス)盡七。亡して四十九日目。
(イ)耕雲。諱は克原、建長の西澗子曇禪師に嗣ぐ、京の萬壽に住す。
(ロ)超軼。軼は逸に同じ。
(ハ)松源。崇岳禪師。密庵咸傑禪師の法嗣なり、宋の名僧。
(ニ)大通。西澗子曇の勅諡號。宋の人、天童の石帆に嗣ぐ、本朝文永八年此の方に來り、弘安戊寅元に歸る、又正安元年一山寧公と同船し、重ねて來る、北條貞時弟子の禮を執り、圓覺・建長に住す、運庵三世。
(ホ)一炷香。この語は國師、惠林寺にあるときの語と見ゆ。
(ヘ)孤雲。未詳。
(ト)仰山。唐時代なり、潙山、西に問ふの古則あり。
(チ)臨川。國師、嵯峨臨川寺におるときの語なり。

と、大虛五彩を著け、轉換の句子如何んが話會せん。拈香して云く、「碧天萬里一孤雲、變じて香雲と作つて沙界を覆ふ。」

恭しく㋷龜山聖廟の爲にす

聖駕去つて後、山幽かに洞深し、㋦舊日祥雲、猶ほ未だ散せず。㋸今朝甘雨寒林に灑ぐ、恩澤滂流して㋾纖芥に及ぶ。柏根一片價千金。

㋻全璧首座の爲にす（難に罹りて卒す）

生涯喪盡して、始めて自便を爲す。轉身の一路、東邊西邊、㋕眉間に劍を掛くる時節、直に得たり血梵天に濺ぐことを。謂ふこと莫れ是れ宿債を償ふと。須らく知るべし璧を全うして還ることを。拈香して云く、「今日他の與に意氣を添ふ、薰風吹き散ず㋵博山の烟。」

上杉道果禪門盡七の請

此の香、無根の根、深く盤る㋟金輪際、也た其の限に非ず、無蔭の蔭、廣く覆ふ太虛空、也た其の包を推す、一切の功德を以て枝條と爲す、無邊の法門を以て花果と爲す、淨穢刹土、此れ藉つて基本と爲す。凡聖含靈、誰か庇庥に托せざる、價直貴賤の商量を用ひず、馨香豈に沈檀の品藻に干からんや。茲に日本國相州鎌倉縣居住某人、今月今日、伏して先考某人、盡七の

㋷龜山聖廟。龜山天皇御分骨所は、南禪寺中の南禪院にあり。
㋦舊日。天皇御在世の。
㋸今朝。九月十五日。
㋾纖芥。民衆を云ふ。
㋻全璧。未詳。
㋕眉間。これ以下は首座の緣語。
㋵博山。黃帝内傳に博山爐あり、蓋し王母帝に遺る者と、その名此に起る。
㋟金輪際。地量下を云ふ。

忌辰に値ふて、特に此の寶香を爇いて、以て十方常住、一切三寶に供養す。鳩むる所の功勳、併せ用つて某人報地を莊嚴す。伏して惟みれば、某人、氣韻溫和、㋹風采㋷冲淡、俗に混じて道を抱く、謂つべし雪後の松操と。㋨欲に在つて禪を行ず、固にこれ火中の蓮華、其の德人に可なり、遍く觀遐かに聽き皆善と稱す。其の行格を超え、出生入死優遊するが如し。世に處ること五十三年、雲に釘し風に繫ぐ、㋧泉に歸して四十九日、幻收夢破る。且く道へ某人、即今何れの處にか在る。香を拈起して云く、「此に於て看取せば、體露金風、其れ或は未だ然らずんば、樹凋み葉落つ。」

㋤冷泉黃門月巖居士の夢に一首の歌を作りて舊友に告げて我が作善と爲さんことを願ふ、因つて數輩を相率ゐて齋會を設けて請ず

此の香、無住を根本と爲す、夢幻を枝條と作す、將に謂へり、牢固ならず、劫火も能く燒くこと莫し。玆者某等手を借つて此の寶香を爇いて、以て供養す云々。伏して惟みれば、某人、曾て夢形を貴冑に寄せ、㋶歌仙の名望㋰南柯に屬す。滅後㋒青黃已に三周、夢裏恍乎として㋼素面を呈す。

㋹風采。風儀光采なり、彩と同じ。
㋷冲淡。冲は虛なり、和也、淡は安也。
㋨在欲而行禪。維摩經の佛道品にあり、五欲を受くることを示すとも、亦復禪を行ずることを現すと、肇法師の注についてみるべし。
㋧泉。黃泉に入りてより。
㋤冷泉黃門。冷泉權中納言爲相なり、爲家の三子、定家の孫也、嘉曆三年七月十七日六十六歲にて鎌倉に卒す、月巖昌久と名づく、曾て國師に法要を問ふ、唱酬の和歌あり、正二位に叙せらる、冷泉家の祖。
㋶歌仙。和歌の妙手といふこと。
㋰南柯。夢の故事。
㋒青黃。月日のたつを木の葉芽のかはるにたとふ。
㋼素面。素は本也。

(ノ)灼然夢中の夢、又夢中の吟を作す、舊知遺賚、聞いて焉を悵む。今日夢中に嘉會を成す、乃ち夢中の佛事を修して、他の夢中の(オ)沈冥を救ふ。特に夢窻野人に命じて、謾りに此の寐語を説かしむ、正當恁麼の時、還つて窟底の消息ありや也た無や。香を拈起して云く、「由來斯の義甚だ(ク)幽深、彌勒大士も也た不會。」

(ヤ)前讃州太守観公大禪定門忌の請

此の香根なうして活を得たり、地を離れて倒れず、臭中の香、香中の臭、佛祖も也た品藻し難し。予レ茲、云々、冀ふ所は覺靈法界の含識と、同じく斯の妙熏を受けて、業根を翻して善根と作し、惡果を轉じて覺果を成ぜんことを。伏して惟みれば、某人、(マ)翳花果を結ぶ。五十餘年、太虚の相貌今古を絕す。水月光を掩ふ一千箇日、本分精明變通なし、生何れの處よりか來る。木人托出す日中の斗、死何れの處に向つてか去る。玉象踏翻す鏡裏の空、福祿災殃皆戲具と爲る。(ケ)四生三有是れ樊籠にあらず、盡く謂ふ長逝沒蹤跡、誰か知る徧界眞容を露はすことを。此の陰德を將て賢裔に付す、高門豈に肯て(フ)于公に傚はんや。

(ノ)灼。昭也。

(オ)沈冥。沈は久しく生死に淪するを云ふ、冥は永く無明に溺るをいふ。

(ク)幽深。須菩提に云ふ、此の義幽深なり、吾れ不能説のところじや、彌勒大士に問へとの故事あり、聯燈錄といふ、僧傳に出づ。

(ヤ)前讃州太守。足利尊氏の父の貞氏なり、法名は淨妙寺殿貞山道觀大禪定門。

(マ)翳花。圓覺經の金剛藏章に、幻翳の妄に空華を見る如しと。

(ケ)四生。有情は胎卵、濕化の四種の生あり、倶舍の世間品に出づ。

(フ)于公。前漢于定國傳に、定國が于公、其の門閭壞たり、父老と共に治す、于公曰く、其の門を廣大にして駟馬高車を容れしむべし云々、子孫必

(ヨ)上杉武庫禪門忌の請

此の香、大いにして太虚を包み、細にして纖芥に入る。臭きことは則ち(エ)蕕草よりも臭く、馥しきことは則ち(テ)沈檀よりも馥し。諸佛此を以て(ワ)道樹と爲つて正覺を其の下に成ず。列祖此を以て心華と作して、宗芳を無窮に流ふ。偉いなるかな、此の香鑚仰すれども及ばず、若しくは凡若しくは聖、誰か恩を受けざる。今日資する所の覺靈、某人、平生心を祖苑に遊ばしむ。能く者箇に順つて信根を深うす、末後命を戰場に殞す。亦者箇に藉つて以て聲價を增す、死生既に自ら此くの如し、罪福那んぞ差殊あらん。于レ茲(サ)令子中書某人、此の熏力を受けて、孝行を失はず。今日某人一周の辰に丁つて、謹んで爇い一云々。冀ふ所は覺靈、無邊の業種、一時に焦枯し、本地の風光當處に成現し、(キ)乃子乃孫、榮昌絕えず。或は親或は怨、利濟休すること無からんことを。

野州禪門(コ)逆修の請

春至つて百花開拆す、老箇素容を改めず。秋來萬卉凋零す、者箇亦變色なし。淨穢器界、此を以て基と爲す。佛祖の化儀、悉く其の力を承く。之を失ふときは則ち(メ)二利倶に失し、之を得るときは則

す異るものあらんと、定國に至つて丞相となる、これは貞氏が子の尊氏に至つて大將軍になりしを、國師が宣揚せられしなり。

(ヨ)上杉武庫。武庫は兵庫の頭也。

(エ)蕕。くさみぐさ、水邊に生ずるなり、善惡のたとへに引く。

(テ)沈檀。沈香白檀等の香木。

(ワ)道樹。金剛座上の菩提樹、佛其の下に坐して等正覺を成じ給ふ。

(サ)令。善なり。

(キ)乃。汝の字と同じ意。

(コ)逆修。生前に葬儀の佛事を修し、忌齋を行ふの式を云ふ。

(メ)二利。自利利他。

ち一擧兩つながら得。茲者云々某人、報緣を濁惡の時に獲て、罪業を㋯迷昏の域に積む。自ら當來の苦果を懼れて、預め滅後の善根を修す。特に山野が手を借つて、虔しんで爇いて云々。冀ふ所は、㋛聖力に仗つて㋽凡力を資け、㋪業根を拔いて㋲善根と爲し、眞熏實際に通じ、彌天の愆尤頓爾として消除す。妙利洪庥に答へ、出世の資粮、儼然として備足す。㋝現當相續、餘裕窮りなく、寃親平等にして、濟度普く及ばん。插香して云く、「卽今已に是れ公憑を立つ、永劫何ぞ妨げん巨益を成すことを。」

覺照禪尼の爲の請

者箇の爛木柴、能く萬象の主と爲る、價直定度なし、熏成只緣に隨ふ。僧家に在るときは、則ち解脫の香と爲し、世俗に在るときは、則ち資生の具と爲す。男子に於ては則ち之を㋜乾德と謂ひ、女人に於ては則ち名づけて㋑坤儀と爲す。茲者云云某人、戰場汗血の忠を抽んづと雖も、特に本寺に就いて、瀝心の孝を旌はす。遙に山埜が手を借つて、虔しんで爇いて云々。伏して願はくは㋺懿靈㋩此を以て㋥器仗と爲して、永く積劫の業根を截し、此を以て資粮と爲して、早く無生の覺路に登り、㋭餘裕綽々として後裔を㋬孚祉し、洪熏綿々として含情を賑濟せんことを。

㋯迷昏。愚迷昏昧。
㋛聖力。佛力法力。
㋽凡力。凡夫の力。
㋪業根。罪業の。
㋲善根。善種の。
㋝現當。現今、當來。
㋜乾德。易說卦傳に、乾は天也、故に父と稱す。
㋑坤儀。同上に、坤は地也、故に母と稱す。
㋺懿。美也。
㋩以此。者箇爛木柴。
㋥器仗。刀戟の總名。
㋭餘裕綽々。裕寬の意。
㋬孚祉。孚は信なり、育なり。祉は止也、福止んで移らざる所也。

且く道へ只箇の一瓣の香、甚と爲てか大佛事を成し得る。拈香して云く、「六月清風を賣はゞ、人間恐くは價なからん。」

妙印禪人の爲の請

此の香、能く萬物の本根と爲り、(ト)四序の青落に干らず、人々曾て欠餘なし、只是れ受用すること得ず。今日拈出して、三世如來十方賢聖に獻じ奉る。沒量の供養、能供の相を絶す。眞箇の納受、所受の心なし、好し是れ善根思議に出づ、須らく知るべし熏力亦廣大なることを。此を以て妙印禪人の覺路を資く、資も也た資に非ず。此を以て塵沙法界の迷流を濟す、濟も也た濟に非ず。正當恁麼の時、且く道へ什麼邊の事をか成し得る。拈香して云く、「大功至德人の識るなし、只見る爐中一穗の煙。」

上杉中書禪門の爲に請ず

某處、今晨伏して某人、(チ)捐棺以來、百日斯に臨むに値ふて、特に五分法身の香を爇いて、以て多生染愛の業を灰にす。伏して願はくは此の香、本有の衆德云に彰れ、無限の眞熏墜ちず。無盡廣大の妙供を出生し、虛空法界、三寶の境界に獻じ奉る。最勝甚深の法句を演暢し、微塵刹土一切の含生を(リ)啓迪す。茲の善利に憑つて覺靈を資く。曠劫の業債一時に滅す、翅餘熏の家眷を庇ふのみにあらず、

(ト)四序青落。四季の月日のたつのをたとへる。
(チ)捐棺。死を云ふ。
(リ)啓迪。開導也。

法界の迷流同じく益を得ん。言ふこと莫れ此の事保任し難しと。萬象森羅齊しく證明。

㋦清拙和尚の遺書至る

四七二三此の香を傳ふ、㋸遼天の高價商量を絕す。既に是れ一花開五葉、東西何れの處か芳を聯ねざる。伏して惟れば、前住龍山清拙大和尚、祖業相承し此の香を傳ふ。㋾馥郁たる家風大唐に滿つ、化導の緣分固必すること毋れ。此の香を懷いて分㋻扶桑に到る、普天瑞氣を凝し、四衆恩光に沐す。言ふこと莫れ滅後なしと。遺薰餘㋕烈十方に徧し、老拙も亦此の香あり、拈出して以て寂場に獻ず。是れ河頭に水を賣ること莫し麽。插香して云く、「已に展ぶるを縮めず、家醜外に揚ぐ。」

征夷大將軍の爲に奉る預修

此の香、天に先ち地に先つて名相を離る、榮枯の爲に素容を變せず、手に信せて拈じ來つて掌握に歸す、無邊の功德其の中に在り。茲者、征夷大將軍源君某甲、預め當來の苦報を懼れて、滅後の善根を逆修す。始め中陰より終り遠忌に迨るまで、逐一に佛事を作す。至誠自ら囘嚴、乃ち今日を

㋦清拙和尚。諱は正澄、元の人なり。愚極に嗣ぐ、大鑑禪師と勅諡せらる。

㋸遼天。遠きなり。

㋾馥郁。香馥也。

㋻到扶桑。清拙和尚は、元の泰定三年齡五十三にして本朝の請を受け來る、日本嘉曆三年なり、北條高時の歸信を受け、建長寺に居らしむ、淨智圓覺に住す、元弘三年後醍醐帝勅して建仁に、建武三年南禪に遷住せしむ、曆應元年建仁の禪居庵に退く、同二年正月十七日寂す、壽六十三。小笠原流の祖貞宗、師に歸依し、信州開善寺を創め、大鑑淸規により諸禮法をはじむと云ふ。

㋕烈。光也。

㋵十三同。十二支終りて、始めて先支を迎へて追慕を寓する也。

以て、一㋵十三回の忌辰に當つ。特に山野が手を借つて、謹んで此の寶香を爇いて、周徧法界、摩訶毘盧遮那如來に供養す云々。冀ふ所は㋟七分全得の功、便ち速効を見、萬德本圓の理亦自ら現前、此の世福壽保安、藩垣を營門に固うし、來生願望圓成、賑濟を法界に播さん。伏して惟れば、殿下、大願力に乘じて、軸を博桑に㋹秉り、宰官身を現じて、轡を祖域に㋞頓す。既に祖域に遊んで奚ぞ迷鄕に入らん。幻妄實なし、任佗㋡片雲の太淸に點ずることを。靈光獨り耀く、妨げず一月の衆水に印することを。過現の罪性求むれども不可得、未來の業債何んの酬ゆる所かあらん。赤條々空索々、虛空突出す那吒の面、萬象全提活脫の機、機先の一著標準なし、佛祖當頭眼眉に似たり。正當與麼の時、向來修善の功何れの處にか歸す。香を擧して云く、「三千界外㋧毫光を放つ、雙六盤中彩を喝することを休めよ。」

㋟七分全得。福利一切の聖事を造り、七分中乃ち一を獲て、六分の功德は生者自利すと云云、七七日の內癡の如く聾の如く、或は諸司に在つて辯論すと云云。

㋹秉。國政を秉るなり。

㋞頓。とどむ、たづなをとどむるなり。

㋡片雲。この語は楞嚴の九に出づ、虛空の汝が心內に生ずること、なほ片雲の太淸の裏に點ずるが如しと。

㋧毫光。三十二相の中の三十なり、眉間白毫相を云ふ。

小佛事

(イ)慧林寺釋迦佛安座（拈華微笑の像）

大法元可不可なし、圓明の門戸關鎖を絕す。三賢十聖競ふて喬に遷る、也た是れ空花重ねて果を結ぶ。恭しく惟れば、本師釋迦如來大和尚、其の慈也至れる矣。法界の含識、咸く庇庥を受く、其の德也大いなる哉、無邊の虛空、能く包裹すること莫し。寂場を動ぜず鹿苑に赴く、(ロ)天魔外道自ら負墮す、東倒西(ハ)擂、五十年到る處尊と稱す。橫說豎說三百餘會終に口過なし。末後拈起す一枝の花、百萬の大衆看不破、與麼の體裁、謂つべし事は丁寧より起ると。沒量の大人敢て之が爲に陳賀せず、諸仁者還つて我が世尊別に箇の本分底の三昧あることを知る麼。當軒大坐、峭巍巍、迦葉亦只半座を得たり。

(ニ)臨川寺普賢安座開光明

一條才かに動じて大千收る、片瓦包容周からずといふこと靡し。當下圓成(ホ)華藏界、金屑を將て雙眸に著くること莫れ。恭しく惟れば、(ヘ)三曼跋

(イ)慧林寺。關東名刹の一にして、所在は甲斐國牧莊東山梨郡乾德山慧林寺、開基は二階堂出羽入道々蘊なり、國師五十六歲にして元德二年秋九月開創す、牧の莊には國師の父母の居住せられしこと年譜に見ゆ。

(ロ)天魔。菩提樹下で釋尊の修行を邪魔する。

(ハ)擂。物を研くなり、するなり。

(ニ)臨川寺。十刹の一にして、山城嵯峨天龍寺の門外川端に在り、龜山天皇の仙居にして、又後醍醐天皇第二皇子世良親王の遺跡御墓所あり、元弘三年八月天皇師に命じて開山と爲し給ひ、三會院は國師の塔所なり。

(ホ)華藏。華嚴は華藏世界品に、

陀菩薩摩訶薩埵、證入修持を假らず、住處國土に依らず、㋣一毛の區域浩曠、善財未だ封疆を見ず。㋠十種の願海、㋷汪洋、諸聖咸く廣大を譲る。分身月の如く多少影を知らず、玄辯㋦缾を瀉ぐ、豈に止二千酬のみならん哉。誠なる哉普賢の稱、稱する所謬に匪ず、偉いなる哉大士の德、衆德の衰むる攸、茲者微塵を捏聚して、清淨の尊像を露現し、一草を挿卻して、㋸圓融の道場を落成す。假を弄して眞を象り、全く天然の態度を具す、事に卽して理を顯はす、寔に世諦の戲論に非ず。須らく知るべし、此の小場を藉つて、以て恒沙の梵苑を莊嚴することを。何んぞ妨げん、此の一像を散じて、萬品の衆生に隨順することを。諸天諸神皆悉く威を承け、內外冥に人法を（土地堂額）資く。乃佛乃祖、互に相戮力、東西密に宗猷を（祖師堂額）付す。慈風蕩蕩扇ぐ時なし、鴻業恢恢累劫に播す。上來特地の慶讃、都てこれ化門の㋾冗餘、諸仁者還つて大士頂門、別に正法眼あることを知る麼、卽今分明點開し去らん也。筆を以て空に點じて云く、「毫頭點出す大光明、凡聖含靈同一眼。」

天龍寺三聖安座

妙性圓明にして變通を絕す、恢恢として包裹す十方空、無邊の德用無邊の智、盡く衆生方寸の中

此の華藏世界海は是れ毘盧舍那。

㋬三曼跋陀。梵語なり、此には普賢と譯す。

㋣一毛。華嚴入法界品。

㋠十種願海。華嚴普賢行願品、一、禮敬諸佛、二、稱贊如來、三、廣修供養、四、懺除業障、五、隨喜功德、六、請轉法輪、七、請佛住世、八、常隨佛學、九、恒順衆生、十、普皆回向。

㋷汪洋。深くひろきこと。

㋦瀉瓶。華嚴離世間品、一を問へば十を以てるを云ふ。

㋸圓融。臨川寺の佛殿を扁して、圓融道場といふ。

㋾冗餘。塵垢粃糠といふが如し。

に在り。恭しく惟れば、摩訶毘盧遮那無上世尊、三曼跋陀大士、文殊師利菩薩、無相中從り、不具の相を現ず。如然の大智、暗に非ず明に非ず、法爾眞慈(ワ)適もなく莫もなし。互に主伴と爲つて、以て事理圓融の儀を表し、權に中邊を示す。寧ろ昇降差別の域に墮ちんや。(カ)懿い哉、如來の境界、淺識商量を超ゆ。萬象森羅、三聖にあらずといふこと靡く、羣生倫類皆(ヨ)十身を具す。赤條條明歷歷、昔年室を摩竭に掩ひ、今日門を本山に開く。古今兩般なく、隱顯同一座、諸仁者還つて此の一座子を見る麽、薰風自南來、殿閣生微涼。

(タ)三會院彌勒安座

大功元安排を藉らず、一戶才かに開かば萬戶開く。刹刹塵塵是れ都率、下生謂ふこと莫れ當來に在りと。恭しく惟れば、彌勒菩薩摩訶薩埵、(レ)千尺の尊軀、光豔法爾として圓備す。萬德の妙相、秀媚集めて大いに成る。慈を垂るゝこと(ソ)無緣より出づ。(ツ)梅哆唎耶の稱、(ネ)螻蟻も也た耳を悅ばしむ。德を布いて法界に徧し、(ナ)阿鞞跋致の用、(ラ)闡提も尙ほ心を傾く。(ム)補處の記を受け、且く一生を約す。不退輪を轉じて、焉んぞ(ウ)三會に限

(ワ)適莫。非常にすききらひ。
(カ)懿哉。よし、美なること、懿乎と同じ。よいかなとほむるなり。
(ヨ)十身。華嚴敎門指掌に云く、一、菩薩身、二、願身、三、化身、四、力持身、五、相好莊嚴身、六、威勢身、七、意生身、八、福德身、九、法身、十、智身。如來の一身自ら是くの如き十身あり。
(タ)三會院。臨川寺の中の三會院は、夢窓國師の塔所なり、曆應二年に師六十五歲に預め遺誡を書す。
(レ)千尺。彌勒下生經に、端正無比なり。身の長け千尺云云。
(ソ)無緣慈。菩薩、平等心を以て一切衆生に攀緣すれば、自然に慈を發といふ三緣慈あり。
(ツ)梅哆唎耶。梵語、此に慈といふ、彌勒を慈氏といふ。

らん。傳へ聞く因地㋼樓閣の壞を觀て、大心を發すと、知らず今日宮殿の成るを見て、何の想をか生ず。曲船深く揖して云く、「良い哉大士此の中に處して、指示す人人同一座。」

南禪㋨大光國師の爲の入祖堂

去來蹤を見ず、出沒何の象をか作す、一段の大光明、古今兩樣なし。伏して惟れば、前住當山 勅諡普照大光國師、去就㋔軒昂、㋗操履清爽、光華を以て懷に介まず、唯韜晦を將て望となす。一時應世、㋳利錐嚢を出で、兩處住山、鈯斧掌に在り、㋮大應室中、曾て選佛の㋘魁科に登る。皇帝陛下、敕して國師の㋫金牓を錫す。便ち見る少室の燈光、增熾に增聯り、㋙虛堂の門戶、愈高く愈廣きことを。盡く謂ふ、去年化權を攝す、誰か知る今日眞相を露はすことを、眞相既に露る、還つて此の老安身の處を見る麽。牌を擧起して云く、「公憑皎然疑謗を生ずること勿れ。」

㋓太平和尚㋢正統庵入祖堂

祖林の翹楚果を結ぶ、霜露を待たず、天產の精金㋐柔を致すこと、豈に煆煉を假らんや。謂つべし越格の俊流、寔に是れ㋚克家の正統、平生數刹

㋧聾瞶。つんぼ、ごろ。
㋤阿鞞跋致。梵語なり、此に不退と譯す、不退位の菩薩のこと。
㋶闡提。闡は信、提は不具と譯す。
㋰一生補處。等覺の菩薩を以て、一生補處となす。
㋒三會。上に注するが如し。
㋼樓閣壞。これも彌勒下生經に出づる故事。
㋨大光國師。南禪寺、通翁鏡圓禪師、大光國師は勅諡號なり。南浦明に嗣ぐ、萬壽寺に住す、元亨四年正月二十七日寂す。
㋔軒昂。軒は自得、昂は擧也、たかしといふ意。
㋗操履。志を守りて改めぬを操といふ、行ふて怠らざるを履といふ。
㋳利錐。きりをふくろの中にいれるが、きつさきを早くみつ

に歷遷す。緇素競ふて庇麻に托す、末後十虚を踏破す。佛祖蹤跡を見ること罔し、畢竟那裏か、是れ此の老安身の處。牌を擧起して云く、(キ)「太平象なく不象なし、地獄天堂法幢を建つ。」辭世の頌に云く、末後の一句、向下文長し、處處蹤跡なし、地獄と天堂と。

南禪(ユ)雙峰禪師の爲に入祖堂

(メ)慧日輝を分つて瑞龍を照す、雙峯の春色衆峯を壓す、流芳千載今日に至る、五葉花開く又一重。恭しく惟れば、前住當山　敕謚雙峰禪師大和尚、智象外に游び、妙(ミ)環中に契ふ。圓照の燈燄を續ぎ、(シ)聖一の高蹤を踊む。遐邇德彩に歸し、魔外機鋒を怖る。先輩の坏模を脫略す、單提獨弄、今時の窟宅を掀飜す。(ヱ)蔀を發し蒙を擊つ、此れは是れ雙峰禪師、平生の操履底。諸仁者卽今還つて其の眞相を見る麼。牌を捧げて云く、(ヒ)「機を回し(モ)位を轉ず人の識るなし、寂滅場中祖風を振ふ。」

(セ)孤雲和尚(ス)正脈庵入祖堂

是れ凡是れ聖、本來空、出沒何ぞ曾て影蹤あらん。若し也た蓋面の帛を撥開せば、色聲叢裏眞容を見ん。伏して惟れば、前住(イ)乾明山萬壽禪寺孤雲和尚大禪師、胸次棘なく、語言鋒を藏す。其の才寔に翹楚たり、其の智

けろ。

(マ)大應。南浦の國師號。

(ケ)魁科。宗論ありしとき、延曆・園城・東寺・南都の講師と清凉殿に於て對辯す、首としてかちしを云ふ。

(フ)金牓。試驗に及第するを金牓に名を掛くと云ふ。

(コ)虚堂。智愚禪師、宋の名僧なり、南浦の師。

(エ)太平和尙。妙準、高峰顯日に嗣ぐ、夢窓と同參、淨智に住す。

(テ)正統庵。建長寺中佛國國師高峰顯日の塔所。

(ア)致柔。老子に、氣を專にし柔を致す、能く嬰兒の如き乎とあり。

(サ)克家正統。易に、子家を克くすとあり。

(キ)太平。東坡廿四に、無象の太平還つて象あり、炊煙起る處人家と。

(ユ)雙峯禪師。宗源國師、聖一國

㋺闒茸に非す。嘉名四遠に飛び、秀氣蒼穹に薄る。佛光の餘輝、燦燦乎として燄を續ぎ、龍淵の正脈、滔滔乎として流通す。㋩先輩と德を並ぶべし、後昆の爲に蒙を啓くに堪へたり。建化門中且く此の說を作す、老師分上未だ崇と爲るに足らず。諸仁者、還つて他の眞實安身の處を見る麽。牌を捧げて云く、「只箇の公憑囊葢沒し、妨げず奕世宗風を繼ぐことを。」

㋥多寶院欽んで後醍醐院の聖忌に遇ふて御座を奉安す

萬法從來寂場に在り、寃親榮辱封疆を絕す、良い哉斯の理自ら昭著、佛運皇圖共に久長。恭しく惟れば、後醍醐上皇、世表の風采、天選の儼姿、明兩曜に並び、德二儀を動す。否を致し臧を致す、人測ること毋し。是れ凡是れ聖、誰か敢て窺はん。怪むこと莫れ仁風扇がんと欲して止むことを。須らく知るべし帝運の時を得ざることを。仙夢已に破る、何ぞ小節の妄緣に拘はらん、御忌斯に臨む、忽ち大祥の歷數に屆る。遺臣各懇誠を攄ぶ、勝善覺路を資け奉る。假令輪王の位に在つて七寶豐饒なるも、爭でか覺皇の身を證して、萬德圓具するに似かん。從前の毒藥變じて醍醐と作る、曠劫の無明翻つて正悟を成じたまはんことを。諸仁者、卽今還つて

師に嗣ぐ。
㋱慧日山。東福寺の山號。
㋯環中。莊子の則陽に、環中は虛靜無物の處。
㋛聖一。東福寺開山圓爾辨圓禪師、宋に入り法を無準に嗣ぐ、敕して聖一國師と諡す。
㋾葢。ひおひ、ひよけ、周匝の義。
㋪回機。同安察の十玄談に、機あれば宗を失し、尙に知見を存す、これを大病といふ。
㋲轉位。異類中行なり。
㋝孤雲。未詳。
㋜正脈庵。今の眞如寺なり、高師直の開基、如大尼の開山なり、佛光國師の骨髮を安す、山城葛野郡衣笠村に所在す、相國寺派に屬す。
㋑乾明山。相州乾明山萬壽寺は佛光國師の開山なり、關東十刹の一。
㋺闒茸。猥賤なり、やくたいも

上皇眞實㋭登極の處を見る麼。御牌を捧げて云く、㋬「是法住法位、世間相常住。」

㋣無量壽院　㋠佛國禪師の爲に入塔

出沒隨緣卽ち是れ宗、大人到る處靈蹤あり、良い哉徧界無私の句、萬象森羅讐を患へず。伏して惟れば、前住建長　勅諡佛國禪師大和尚、智物外に超え、妙環中に契ふ、大用量り難し。橫該豎抹、峻機圓轉、八脫七通、未だ寂を示さゞる前、處處靈骨を露す。已に眞に歸して後、塵塵眞容を現ず。隱顯空手なし、說默利鋒を藏す。好し是の一著子、化權窮りあることなし。諸仁者、還つて先師の眞相を見る麼。合掌低頭して云く、

「今日豁開す無縫塔、未來塵劫門風を扇ぐ。」

挂額　御書㋷佛燈國師

佛佛傳燈此の時に至る、㋦塵生自ら昧して曾て知らず、宸毫點出す本光瑞、萬象忻然として齊しく眉を展ぶ、天眞㋸八體、固に㋾鳥跡の比する所に非ず。奎畫一㋻爻、寧ろ㋕龍圖を以て基と爲んや。燦然たる無字の字、珠玉も也た須らく彩を讓るべし。㋵焯爾たる無明の明、日月猶は私あるに

なく、かくのしつかりたゝぬ義。

㋩先聖。無準佛光を指す。

㋥多寶院。天龍寺の後醍醐天皇聖廟。

㋭登極。寶位也、天子のみくらゐ。

㋬是法住法位。法華經方便品の偈、萬法が佛性の實相に歸して、その位に住すれば、世間差別の相が、そのまゝ眞理のあらはれで常住なり。

㋣無量壽院。未詳。

㋠佛國禪師。高峯顯日、後に佛國應供廣濟國師と賜ふ。

㋷佛燈國師。南禪約翁德儉禪師、建長の大覺に嗣ぐ、後宇多上皇西の郊の離宮に召して禪要を詢ひ、特に佛燈大光國師の號を賜ふ、師謝恩遜讓す、上皇大光の二字をのぞき重ねて之を賜ふ。

㋦塵生。當に甚に作るべし、瞎

似たり。便ち見る刹刹皆皇化、塵塵是れ國師なることを。其れ或は未だ證據せずんば、切に忌む外に向つて窺ふことを。額を指して云く、「無縫塔前高く揭示す、分輝續燄窮期莫からん。」

從上座の爲に火（水に溺れて死す）

衲僧の行履都べて顧(タ)藉なし、直に萬丈の深淵に投じて、曹源の一滴を吸盡す。是れ他の安身立命の處なること莫しや。火把を擲下して云く、「從來死水龍を藏さず、又火雲を擎げて霹靂を轟かす。」

調上座が爲の火

識馬の調ふべきなく、妄塵の拂ふべきなし。生死涅槃只一咄を消す、若し是れ伶俐の衲僧ならば、焉んぞ舊時の窠窟を戀はん。(レ)火把を擲下して云く、「火把踍跳して天に上る、偏界(ソ)臭烟(ツ)蓬焞。」

杲藏主の爲の火（辭世の頌に云く、生前死後、西より東より一回步を轉ずれば八面淸風。）

(ネ)日木上に昇る、則ち之を杲と謂ふ、日木下に沈む、則ち之を杳と謂ふ。一輪纔かに現ずれば、明昧亦兆す。便ち見る東西南北區に分る、生死去來紛擾たることを。一回步を轉ずれば淸風を起す。也た是れ外邊に之遶を打

変生などの如し、愚なり、味なり。

(ル)八體。一、大篆、二、小篆、三、刻符、四、摹印、五、蟲書、六、署書、七、殳書、八、隷書。

(ヲ)鳥跡。黃帝の臣蒼頡、鳥跡をみて以て文字を作る。

(ワ)爻。象る、易の卦をなす六つの畫段の稱。

(カ)龍圖。河圖は伏羲氏天下に王たり、龍馬河に出づ、遂に其の文に則つて以て八卦を畫す。

(ヨ)焯爾。灼の字の古字、かゞやくこと。

(タ)藉。身の依るところを云ふ。

(レ)火把。たいまつの形をしたる、引導するとき導師の手にもつもの。

(ソ)臭烟。法華譬喩品に出づ、むさきにほひの譬喩。

(ツ)蓬焞。煙のあがりて、むしあ

す、大乘還つて衲僧眞の歸處を見るや也た無や。火把を擲下して云く、㋤「焦尾の大蟲火中に睡る、木鷄夜半天曉を報ず。」

遠上座の爲の火（夏中）

護生は須らく是れ殺すべし、殺し盡して始めて安居、他を殺して也た要す還つて自ら殺すことを。自ら殺して方に㋶歸歟を賦するに堪へたり。遠上座、箇の中の意を會せんと欲せば、鐵船焰上に浮ぶ。

自㋰防藏主の爲の火（夏中）

德㋒姧人を㋭黜け、禮君子を妨ぐ。衲僧坐斷す十方空、佛祖も也た壘に靡ること能はず。安居限內、位を離れ機を轉ず。生死關中、誰か可否を問はん。如是如是、不是不是。㋨蜋蟟火裏に鳴く、大蟲の睡を驚起す。

㋔萬壽玉峰の爲の火（本律家に居る）

動靜妨げず、物外に遊ぶことを。去來都て是れ環中に付す、有る時獨り唱ふ還鄕の曲、㋗桂轂秋を推して碧空に碾る。恭しく惟れば、前住萬壽玉峰和尙、神機卓邁、氣韻粹和。㋳螢火自耀の光を顧みず、直に祖燈廣照の燄を續ぐ。喜び得たり㋮正統の門庭、棟あり㋘欄あり、乃ち見る㋫乾明

つきなり。

㋧日昇木上。淮南子に出づる日扶桑を拂ふを晨明と云ふ、東の字は木の中に日、昢明、杲の字は木の上に日、反景、杳の字は木の下に日、桑楡。

㋤焦尾。山堂肆考に、虎、人と化す、惟尾化せず、燒き去ることを須ひて、乃ち人と成る。

㋶歸歟。論語公冶長篇の、歸らん歟、歸らんか、吾が黨の小子云云にとる。

㋰防。防禦、守護の意なり。

㋒姧。左傳に、亂れて外に在るを姦と爲す、內に在るを宄と爲す、姧は姦の俗字。

㋭黜。貶下也、又私也、一に僞也。

㋨蜋蟟。むかで、せみ。

㋔萬壽。相州。

㋗桂轂。月輪と云ふが如し、轂はこしき。

㋳螢火。小乘戒に比す。

山裏、雷を爲し霆を爲すことを。此はこれ玉峰和尚、平生㋵行李の處、情を盡して說破し了れり也。還つて此の老、今日諸人の爲に大人の相を示すを見る麽。圓相を打して云く、「太虛を擘破して面目を呈す、㋓丙丁童子笑ひ㋢柴崖。」

妙鏡監寺の爲の火

妙中の鑑鑑中の妙、兩頭俱に剗除す、破鏡重ねて照さず、世間出世間、一了一切了、左之右之、迥かに物表に出づ。直饒恁麽に違得して行くも、也た是れ外邊に之遶を打す。且く作麽生か折合し去らん。火把を擲下して云く、「三脚の驢子跡を弄して行く、丙丁童子手を拍つて笑ふ。」

海禪人の爲の火 (夏中)

衆生を殺し盡して始めて安居す。勘し來れば猶ほ己船の在るあり。直饒己船を喪卻するも、未だ毒海に墮在することを免れず。某人、法歲制禁に拘らず、瞥爾として象外に超昇す。是れ他眞實安居の處なること莫し麽。火把を擲下して云く、「火星迸散す三千界。」

眼㋻都寺の爲の火

㋮正統。佛國國師の塔所のあるところ。

㋘欐。梁也。

㋒乾明山。萬壽寺の山號。

㋵行李。俗音では「かうり」とよます、元使者のことなり、李は治なり、使人なり、人行うとあれば治裝す、まちがつて荷物のことゝなる、俗家では假りて其の人の履踐を云ふ。

㋓丙丁童。火也、火が火を求むで、自己が自己を求むじや。

㋢柴崖。笑ふこと。

㋻都寺。禪宗役僧の名、「つうす」とよむべし。

㋚蝶夢。莊周、夢に蝶か人か、我が蝶かとの故事あり、只しばしのあひだのことをなげきていふ。

五十九歳、㋚蝶夢悠々、一朝忽ち筋斗を打す、更に蹤迹の求むべきなし。好箇快活の時節、是般の事を知らば便ち休せよ。且く道へ休後又如何。火把を擲下して云く、「赤眼攛著す火柴頭。」

智德侍者の爲の火

機智內に忘じ、德用外に彰る、死袴生衫、著脫無礙、直饒與麼に薦取するも、未だ免れず㋖陰界に坐在することを。呼ぶこと兩聲して云く、「兩度三回呼べども應へず、乃ち知る㋙火生三昧に入ることを。」

助侍者の爲の火（夏中）

衲僧行藏、都て標據なし、左出右沒、資助を借らず。一段の精明、到る處に昭著。禁足安居、棘林壞架、助侍者那裏にか去る。火把を擲下して云く、「三喚機前夢鄕を出づ、大火聚中暑を避くるに堪へたり。」

普要禪人の爲の火

梅霖乍ち晴れ、普天熱を催す。要徑の消息、分明に漏泄す。寒暑迭に移る、一字劃を著けず。生死交謝、八字兩丿なし。別別、木人火裏氷雪を嚼む。

不二禪人の爲の火

生死の窟宅を透出して、不二の法門に入得す。若し是れ伶俐の衲子ならば、這裏に向つて㋱粱跟せ

㋖陰界。五陰、十八界。五陰は色、受、想、行、識。十八界は六根、六塵、六識なり。
㋙火生三昧。金剛手菩薩入火生三昧云々。

す。天堂地獄到る處尊と稱せん、即今那裏に向つて他と相見せん。火把を擲下して云く、「大火西流し去つて、爽氣乾坤に滿つ。」

上杉法禪禪尼の爲の火

生也如是、死也如是、㋯夜壑舟移る、未だ嘗て變異せず。伏して惟れば、新圓寂、某人、生を塵世に寄せて、而も活祖の禪を信ず、形を女流に受けて、而も㋛丈夫の氣を負ふ。今日奄爾として既に㋽元に歸す、平日の嘉聲也た美に非ず。眞實落著の處、畢竟那裏にか在る。火把を擲下して云く、㋪「火官頭上の風車子。」

忍浴主の爲の火

妙觸宣明水因を悟る、然も忍を證すと雖も未だ親と爲ず、若し也た祖師門下の客ならば、更に須らく火裏に全身を浴すべし。

攝津洒掃禪門の爲の火

風淸く月皓うして秋光好し、霧斂り天晴れて爽氣浮ぶ。寂滅道場只這れこれ、何ぞ須ひん外に向つて歸休を覓むることを。伏して惟れば、某人、業を文士に禀け、政を武門に輔く、身を宰官に寄せ、心を祖道に醉はしむ。謂つべし一擧兩得、乃ち是れ末運の上流、五十

㋱橜跟。きりかぶのことを云ふ、住著して觸するところあることなきの意。
㋯夜壑舟移。莊子太宗師に、舟を壑に藏し、山を澤に藏す、之を固しと謂ふ云々。
㋛丈夫。黃氏日鈔五十七に、人は壽百歲を以て正と爲す、形は一丈を以て正となす、故に男子名づけて丈夫と爲す。
㋽歸元。楞嚴經六に、歸元性無二。
㋪火官。火をつかさどる炎帝・祝融等なり、こゝでは只だ火を指す。

三年、幻夢已に破る、四生（も）九有、業縁何ぞ拘はらん。玉象踏翻す鏡裏の空、新羅夜半日頭出づ。如是快活底の時節、火裏の蓮花徧界香し。

寂監寺の爲の火

（せ）諸法從本來、常自寂滅相、春到つて百花開く、黄鶯枝上に囀ず。寂監寺還つて會す麼。會するときは則ち左眼半斤、會せざるときは右眼八兩、畢竟如何が折合し去らん。三脚の驢子蹄を弄して行く、丙丁童子笑つて掌を拊つ。

解（ス）副寺の爲の火（夏中）

解制を待たず、褌を脱して行脚す。幸に（イ）自己の庫藏あり、何ぞ妨げん到る處に開卻することを。直饒恁麼に去るも、也た是れ路途の樂、畢竟作麼生。火把を擲下して云く、「紅爐焔裏重ねて烹鍛す、鐵牛驀げ出す黄金の角。」

鏡監寺の爲の入骨（夏中。收めて壺中に在り）

鏡像の生涯都て喪盡す、赤骨歷地天眞を露す。曾て佛法の氣息なし、寧ろ世間の埃塵に染んや。正當與麼の時、何れの處にか渾身を著けん。壺中の日月常と異なり、何ぞ必ずしも安居九旬に限らん。

（も）九有。三有或は九有と名づく、或は二十五有と、九有とは欲界の五趣、天と人と餓鬼と畜生と地獄と、色界の四禪、無色界の四空、各〻四地あり、共に九と爲す。

（せ）諸法從本來。法華の方便品、諸法は本よりこのかた常に自ら寂滅の相なり、この偈を看て頓に開悟せし僧あり、下の春到りての二句を續ぐ。

（ス）副寺。禪宗役僧の名、金錢出納及びその他の會計を管す。

（イ）自己庫藏。如來藏經に云く、煩惱身中に如來藏あり、常に染汚なし。

佛祖贊

出山相

入レ山出レ山。(イ)獸心人面。(ロ)五十年開ニ貨鋪一。只解ニ(ハ)和レ麩糶レ麪。

用禪人畫ニ一圓相一求レ贊（上有レ雲、下有レ水）

毘盧主法身師。離レ名離レ相。匪レ尊匪レ卑。(ニ)逆浪洄漩。而未ニ嘗沒溺一。(ホ)凝雲(ヘ)靉靆。而轉見ニ光輝一。釋迦彌勒是他奴。畢竟知他是阿誰。放ニ一頭低ニ示ニ(ト)此相一。桀犬吠レ堯一ニ任伊一。

釋迦

(チ)西天老比丘。只做ニ此面觜一。特地出世(リ)欲ニ何謀一。解レ道未ニ嘗說ニ一字一。(ヌ)如是如是。(ル)不是不是。普賢跨ニ象王一。文殊騎ニ師子一。

觀音

巖崖岌岌。滄海悠悠。圓通不レ會ニ圓通境一。靈禽啼在ニ樹梢頭一。石涯波(ヲ)穀皺。瓶裏柳絲柔。被ニ人喚作ニ圓通境一。可レ悔當初誤(ワ)入流。

(イ)獸心人面。夷狄の人、貪りて利を好み、髮を被り衽を左にす、人面獸心。
(ロ)五十年。如來三十成道、八十にして入滅す、中間五十年。
(ハ)和麩糶麪。かすぐろみうりつける。
(ニ)逆浪。五欲風の。
(ホ)凝雲。凝愛迷雲。
(ヘ)靉靆。雲の興ること盛なり。不動の貌。
(ト)此相。圓相なり。
(チ)西天老比丘。珠曰く、將に謂へり、何の奇特ぞ。
(リ)欲何謀。珠曰く、說法の外にあるまい。

(カ)三十二應。(ヨ)墨突孔席。慈力不レ及處。獨聞二瀑聲激一。

達磨

少室峰前。九年瞎睡。開二卻眼一來猶寐語。亂道神光得二吾髓一。

(タ)維摩

丈室恢開(レ)不二門。無レ端惹得(ソ)鑠レ金論。雖三然一默塞二衆口一。(ツ)彼上人名今古喧。

(ネ)無準和尚（(ナ)虛堂、(ラ)偃溪、入室。）

龍淵無レ風起レ瀾。青天雷轟電掣。惹三得雨滴二虛堂一。(ム)簷溜蕭蕭。又聞水激二偃(ウ)溪一。湍流(ヰ)沏沏。從レ此(ノ)凌霄峰頂路。多少行人墮二覆轍一。

又（半身）

祖門間出。混二迹迷津一。無德之德。聳二動天

(ヌ)如是々々。上の句を受く。
(ル)不是々々。下の句を起す。
(ヲ)穀。羅穀也。
(ワ)入流。楞嚴六に、流を入し、所を亡すとあり、義疏に入流は猶ほ流を返すがごとし。
(カ)三十二應。法界身を現じて、羣機に圓應する也、之を開すれば三十二あり、合すれば四聖六凡羣類を攝盡す。
(ヨ)墨突孔席。淮南子修務訓に、孔子黔突なし、墨子煖なる席なしと、流浪のことを云ふ。
(タ)維摩。秦には淨名といふ、妙喜國より此の境に遊ぶ云々。
(レ)不二門。維摩經入不二法門品に云く、文殊歎じて曰く、善哉々々、乃至文字語言有ることなし、これ眞の入不二門。
(ソ)鑠。消する也、三十三人の菩薩が各不二門を説くけれども、維摩は默然言なし。
(ツ)彼上人。維摩經問疾品に、文殊が佛に白し言く、世尊彼の上人は酬對を爲しがたしと。
(ネ)無準和尚。名は師範、破庵先に嗣ぐ、勅賜佛鑑禪師、宋の名僧。
(ナ)虛堂。傳前に出づ。
(ラ)偃溪。名は廣聞、浙翁琰に嗣ぐ、宋の名僧。
(ム)簷。虛堂の緣。
(ウ)溪。偃溪の緣。
(ヰ)沏々。音切、水聲なり、ながるゝこと。
(ノ)凌霄峰。徑山寺の主山を云ふ。
(オ)文武火。五車韻瑞に、丹法に精神を奮迅して雜念を除くを武火となす。意を專にし、光を含み、默然溫々絕えずして、綿々存するが若く、亡するが若くするを文火となす。無準國師錄二にも、何似徑山文武の語あり。
(ク)燒尾。古人云く、魚をとりて龍門にあり、雷ために尾を燒

人ー。不說而說。雷霆在レ脣。龍淵火發㋔分ニ文武ー。躍者靡レ非ニ㋗燒尾鱗ー。㋳五十世中大知識。未ニ嘗容易現ニ全身ー。

㋮佛光禪師（三）

機用雄㋘毅。㋫菸菟有レ翼。支那一天。無レ地レ收レ化。扶桑國國。㋙擯レ他不レ得。榮之而匪㋓レ忭。辱之而匪㋢レ愳。致レ柔則魔外也弗ニ相誰何ー。致レ剛則佛祖也難レ爲ニ抑勒ー。好采接レ人。㋐磣心叉匿。自灌ニ龍淵水ー。到處㋚滋ニ荊棘ー。拈ニ起龜毛ー意在何。不ニ是河南ー便河北。

㋖河目㋴山眉。㋱木舌鐵觜。接ニ佛國ー而㋯破レ家。攪ニ龍淵ー爲ニ惡水ー。平生擧措沒ニ人知ー。剛道舍利包ニ天地ー。稽首這般㋛不喞嚠。堪下與ニ兒孫ー添中意氣上。

㋾厲而太溫。坦而太嶮。披レ襟也。嶽

く、乃ち化して龍となる。

㋳五十世。釋迦より無準に至りて五十三世。

㋮佛光禪師。無學祖元、無準に嗣ぐ、宋人、日本に來り、佛光圓滿常照國師の號を賜ふ、圓覺寺の開山。……この時は未だ國師號を賜はらざるの作とみえたり。

㋘毅。果敢なり。

㋫菸菟。とらの異名、菸は於に作るべし、左傳の宣公四年楚人虎を於菟といふ。

㋙擯。斥也、棄也。

㋓忭。喜樂也。

㋢愳。心に愧づるを云ふ。

㋐磣。毒也、砂中にまじる。

㋚滋。はびこらす、又ふやす。

㋖河目。目の上下正平なるを云ふ、聖人の孔子さまなどの相。

㋴山眉。遠山をのぞむが如き美眉。

㋱木舌鐵觜。機辯を讃美するの辭なり、これには故事あり略レ之。

㋯破家。趙州の道く、我れ十八にして破家散宅を解すと。

㋛不喞嚠。たわけものといふこと。

㋾厲而太溫。威ありて猛からずじや。

㋪大元三尺劍。佛光錄年表に、大元の至元十三年師年五十一、天兵境を歷して寺衆竄匿す、師一榻兀坐、軍士刃を以て頸に加ふ、神色少しも變はらず、爲に偈を說いて曰く、「乾坤無地卓孤筇。喜得人空法亦空。珍重大元三尺劍。電光影裡斬ニ春風ー。」

㋲一擲灰。佛光自悼頌に云く、「爲レ法求レ人日本來。珠回玉轉委ニ荒唐ー。大唐沈却孤筇影。添得扶桑一擲灰。」

㋝佛國國師。高峰顯日、後嵯峨天皇の皇子、佛光に嗣ぐ、建

蓄海涵。垂手也。星飛雷閃。不レ可ニ以レ賢褒一。不レ可ニ以レ愚貶一。放打ニ無味之談一。焉顧ニ斯言之玷一。㋪大元三尺劍。護斬ニ刧外春風一。搏桑㋲一掬灰。再輝ニ文武火燄一。沈蹤跡處現ニ半身一。脚跟汗臭難ニ遮掩一。

㋝佛國禪師（九）

者老漢太孤峻。鑽仰無レ門。㋜不レ緇不レ磷。唇吻中藏ニ㋑蠱毒郷一。竹篦下設ニ㋺長蛇陣一。家法無ニ恕容一。佛魔倶斥擯。高門陰徳不レ爭レ多。㋩自有ニ青山傳ニ後㋥胤一。（元翁請）

㋭火鼠匪レ燒。㋬氷蠶匪レ溼。物有ニ天産徳一。不ニ是借ニ修習一。老師蘊ニ什麼徳一。只解ニ隨レ時坐立一。㋣菩魍薩魎。毀賛不レ及。哂レ之笑レ之。㋠百歩五十。祖庭祖庭。徳已遺兮不レ可レ拾。（祖庭道人請）

長及び[illegible]に住す、夢窓の師なり。

㋜不緇不磷。論語陽貨篇の、磨すれども磷がず、涅すれども緇まず。

㋑蠱毒。まどはすの意なり、毒藥を以て害することなり、又人に藥す、人をして自ら知らしむるを云ふ。

㋺長蛇陣。孫子の下に、善く兵を用ふるものは譬へば率然の如く、率然とは常山の蛇也云云。

㋩自有靑山在。傳燈十六樂普元安の章に、夾山の末後の語あり。

㋥胤。は子孫相承續するなり。

㋭火鼠。本草綱目五十一に出づ、火浣布などのできる原なり。

㋬氷蠶。文錦を織る原なり。

㋣菩魍薩魎。大惠普說一に、喚んで菩薩となさば便ち歡喜す、喚んで魍魎と作さば便ち煩惱す云云。[illegible]一句と作し、菩もう薩[illegible]うとなさば、你をして[illegible]を得ず、煩惱も須惱[illegible]せざらしむ、又かげぼふしのことにいふ。

㋠百歩五十。少しの差にて大體が同じじや。

㋷高峰。顯日の號。

㋦無見頂。三十二相の一。

㋸都盧。すべてなり、盧の字には意なし、たゞ都の字を云ふ。

㋾口便碑。いひつたへのことなり、口碑などを云ふ、路上の行人是れ口碑に似たりなど。

㋻瓜瓞。ちひさきうり、佛光錄行狀に、師一日定中、東山下瓜瓞聯綿たるを見る、時に高峰東山に在り、師書を貽りて之に與へて云く、吾が法足下より盛大ならんと、果してその言に符ふ、峰この書を以て夢窓國師に付す。

盡大地撮ニ出箇(リ)高峰一。仰レ之(ヌ)無レ見レ頂。塵沙界(ル)都盧一佛國。描レ之不レ似レ伊。卽今圖畫得底。不レ知是甚麼姿。咦。留ニ與人間一且證レ龜。

這老古錐。無ニ翹楚姿一。口中惟一舌。眼上有ニ雙眉一。云何聲價播ニ天下一。路上行人(ヲ)口便碑。逢レ強卽弱。逢レ卑卽尊。是凡是聖。叵ニ得而論一。佛光錯做ニ(ワ)瓜瓞夢一。惹ニ得時人胡亂(カ)原一。

此老無ニ定姿一。徧界爲ニ胸次一。瞋時與ニ萬象一倶瞋。喜時與ニ萬象一倶喜。是聖是凡。不レ可ニ品量一。在レ前在レ後。莫ニ能瞻睎一。當年錯見ニ老佛光一。(ヨ)大鵬飛入ニ(タ)醋甕裏一。從レ茲名翼落ニ人間一。描(レ)邈多論似不レ似。我今爲レ贊不レ覺(ソ)額泚。

(カ)原。推したづぬるなり。

(ヨ)大鵬。莊子逍遙遊篇の意にとる。

(タ)醋甕裏。佛光と佛國と問答の語あり、佛國錄の行錄に見ゆ。

(レ)邈。貌に作るべし。かたちのにると云ふことなり。

(ソ)額泚。ひたひにあせのでること、孟子滕文公に、人の爲に泚するに非ず、中心より面目に達すと。

(ツ)猥毒。砒霜と同じ、毒草にたとへる。

(ネ)龍泉。むかし楚王、劍を作りて龍泉といひ、太阿といひ、工市といふ、これにたとへる。

(ナ)五據名藍。雲岩、淨妙、萬壽、淨智、建長。

(ラ)正續。無準の塔を萬年正續院といふ、徑山にあり。

(ム)漏逗。そこばくのふかくした、或は投に作る、打ちもらしたといふことなり。

(ウ)鎖口訣。元亨釋書上に、佛光定中、觀音大士形を現じて曰く、我れ船を將つて來りて汝を取らん、乃ち日月の二字を示す、元起ちて像前に詣して卜籤するに、亦日月の二字を得たり、此の日香を爇いて、鎖口訣を作る。

(ヰ)分付。本義はわけてわたすの意なり、俗語にいひつける。

(ノ)寧馨子。晉人の俗語、かやうな、如此の意、かゝる秀でたる兒と云ふに用ふ。

(オ)雌黃。硫黃と砒素との混合物、これにたとへて。

(ク)兕。野牛に似て色靑く一角なり。

(ヤ)仁山。足利尊氏の法名、仁山道義大居士、この一章は仁山請に依る。

(マ)中峯。明本禪師、元の高僧なり、高峯妙に嗣ぐ、仁宗召せども起たず、天目山に住す、日

㋡狼毒介レ懷。㋥龍泉在レ舌。㋤五據二名藍一。人天寃結。滅二卻圓照㋶正續宗一。㋰漏二逗佛光㋒鎖口訣一。末後打二筋斗一。風雷動二塵刹一。更有二一德贊不レ及。㋼分二付太虛橫竪說一。圓照正續孫。佛光㋨寧馨子。脣有二㋔雌黃一。胸無二城市一。三尺竹篦不レ打二癡獃一。五處陷穽只擒二虎㋗兕一。我今蹉口揚二家私一。恐是人窺二蜂桶裏一。

㋳仁山大居士請

精神可レ掬。眼蓋二乾坤一。橫揮二竹篦一。佛祖不二敢摩レ壘。曲垂二隻手一。緇白競而趨レ門。者般風度難レ爲レ隱。分二付仁山一蔭二子孫一。

㋮中峰和尚

勢儼氣柔。神清貌古。生機迅捷。旋嵐過レ空。黠慧高明。杲日亭午。不下向二人前一賣中青氈上。天目山巔打二㋘毒鼓一。㋫棲二遲知足一菴一。嘉聲自喧二寰宇一。顯而匪レ混二世塵一。隱而匪レ閉二門戶一。德覃二于異邦一。聞レ名猶二㋙會晤一。矧乎大元國裏。王臣也服二風度一。非二是僥倖而然一。道香生二於㋓煨芋一。敕號二佛慈圓照廣慧禪師一。其誰誣以二㋢鐵鑪步一。

㋐太平和尚

本にもこの人の嗣法何人もあり。

㋘毒鼓。このことは雜毒の藥を以て、用ひて大鼓に塗ると、瞋恚・貪欲・愚癡悉く滅盡するにたとへる。

㋫棲遲。息也、ゆつたりとあそぶ、詩經にも衡門の下以て棲遲すべしとある。

㋙晤。對也、むかふ、相對して語るの意。

㋓煨芋。懶瓚禪師、衡岳に居るとき、德宗之を召す、起ちて恩を謝す、師方に糞火を撥ひて煨芋を尋ねて之を食ひ、寒涕垂垂として未だ答へず、使者之を笑ふ、師云く、我豈に閑工夫の俗人の爲に涕を拭ふあらんや、帝之をきいて倍々欽羨を加ふと云ふ故事による。

㋢鐵鑪步。これはあることをないと云ひ、ないことを有ると

才智難名。風度軒昂。行レ己則毋レ固毋レ必。爲レ人則有レ柔有レ剛。法乘(サ)覩軏。祖門棟梁。革ニ佛光之轍一。證ニ佛國之羊一。盡謂此老匡レ徒止ニ于(キ)三兩刹一而已。不レ見レ道處々無ニ蹤迹一。地獄與ニ天堂一。（二句乃辭世頌。）

天目(ユ)高峯禪師

震旦裏生ニ此(メ)魁一。(ミ)仰山化育更換レ骨來。心肝渾是鐵。操履不レ泥レ塵。內秘ニ廣大慈悲一。賢愚咸皆托レ庇。外現ニ忿怒相貌一。佛祖亦須レ望レ崖。踞ニ(シ)師子巖ニ三十歲。哮吼之聲徧ニ九垓一。

(ヱ)靈山和尚

胸無ニ畦畛一。眼蓋ニ虛空一。(ヒ)浮華不ニ介視一。(モ)枯淡爲ニ家風一。仰山々下。一點水墨。博桑震旦。兩處成レ龍。(セ)易レ地震ニ雷霆一。龍淵通ニ海東一。沒量化權。戢不レ戢。滅後舍利露ニ靈蹤一。

元翁和尚

此老氣韻。軒昂智才。秀ニ出羣(ス)彙一。或幽谷或叢林。與レ我相從久矣。隔レ生三四年。顏貌猶如レ視。今對ニ茲像一。也太相似。異中同々中明。莫レ言圖畫非ニ眞儀一。本來面目只這是。

云ふにたとへ、柳宗元の文に出づ。
(ア)太平和向。妙準、佛國に嗣ぐ。
(サ)覩軏。輗は牛につかふながえのさきの横木。軏は馬につかふよこがみ(軸頭)。
(キ)三兩刹。雲岩、淨智の二寺。
(ユ)高峰。原妙禪師、元の高僧、天目山に住す、雪巖欽に嗣ぐ。
(メ)魁。帥也。
(ミ)仰山。雪巖欽禪師、無準に嗣ぐ。
(シ)師子巖。天目の西高き峯の肩にあり、地を拔くこと千仞、崖石林の如く立つ、師之を樂んで乃ち岩西の石洞に造り、小室を營み、舟の如くしたて、丈を以てし、よこ之に半す、上溜り下淖ふ。榜するに死關を以てす、
(ヱ)靈山。道隱禪師、雪巖欽に嗣ぐ、本朝の元應の初年東來す、勅して佛慧禪師と諡す、建長に住す。

見二平(イ)德人容貌一。自然令二人意消一。試對二此像一子細看。稱贊不レ用舌頭饒。

前住(ロ)理智光院月樓律師　（禮レ師受二衣盂一）

(ハ)標致爽邁。(ニ)蘊藉汪洋。學レ敎而不レ墮二(ホ)兎罤一。護レ戒而不レ執二(ヘ)螢光一。匪三啻舌頭飜二巨浪一。自知言外有二玄綱一。(ト)律虎之名飛二于遠一。莫レ謂無三翅可二翺翔一。

(チ)土岐伯州禪門

稟二天賦於勇士一。氣韻不レ可二凌侵一。本地靈根匪レ朽。祖門信種甚深。外逞二(リ)汗馬勢一。內絕二(ヌ)敗レ人心一。布二其陰德一庇二家裔一。箇々膝下有二黃金一。

良哉這老居士。武德不レ辱二先宗一。更有二(ル)潛行密用處一。不レ離二俗體一現二僧容一。

備州卓然禪門

卓然氣宇混二塵鄉一。豎二起(ヲ)娘生鐵脊梁一。是俗是僧沒二人辨一。火中蓮藥吐二馨香一。

(ヒ)浮華。浮雲榮華。
(モ)枯淡。枯泊淡靜。
(セ)易地。孟子の離婁の章に、易レ地則皆然。
(ス)欒。類也。
(イ)德人容。禪門寶訓上に出づ。
(ロ)理智光院。鎌倉の律寺。
(ハ)標致。外身。
(ニ)蘊藉。內心。
(ホ)兎罤。言句を云ふ、罤は兎の網。
(ヘ)螢光。小乘戒。
(ト)律虎。律の達者と云ふ意。
(チ)土岐伯州。伯耆守。
(リ)汗馬。從前汗馬無二人識一、只要二重論ヲ功と。
(ヌ)敗人心。人をそこなふのこゝろ。

(ル)潛行。俗體にて祖宗門下の大事を信ず。
(ヲ)娘生。母を娘々といふ。
(ワ)大姉。尼女十夏以上を大姉といひ、二十夏以上を大師といふと毘那耶律にあり。
(カ)貞白。清白節を守るを貞といふ。
(ヨ)左轉右轉。人の口馬にのつてなどなり。
(タ)非鬼。元來男女相を越ゆるの儀、この故事あり、傳燈末山尼の章にあり。
(レ)坤儀。坤德儀容は女の姿。
(ソ)覺雄。無隱圓範禪師の諡號なり、蘭溪道隆に嗣ぐ、建仁・圓覺・建長に歷住す、夢窓國師の

妙容㋾大姉（普恩寺殿母）
賦性㋕貞白。脱ニ得世塵一。㋵左轉右轉。㋟非レ鬼非レ神。㋹坤儀表出普恩力。後裔流レ芳億萬春。

㋞覺雄禪師
胸次容ニ羣象一。眼皮蓋ニ大清一。風采質朴。㋡無レ將無レ迎。五據ニ名刹一。匪レ沾ニ嘉聲一。不レ設ニ陷穽一而陷ニ虎兕一。不レ把ニ釣竿一而釣ニ鯤鯨一。垂レ手接レ人。令レ證ニ㋧大覺之覺一。續燈照レ世。乃是無明之明。吾曾㋤受ニ業於會下一。只恨機緣欠ニ圓成一。今日拜ニ慈像一。倩レ毫投ニ寸誠一。更有ニ賛不レ及處一。付ニ在彌勒下生一。

受業師なり。
㋡無將無迎。將は送なり、莊子の知北遊に出づる語、物に無心なるなりとあり。
㋧大覺。蘭溪道隆禪師、無明性に嗣ぐ、宋の名僧なり、淳祐六年日本の後深草天皇寛元四年本邦に來る、平の時頼建長寺を鎌倉に剏して、師を請じて開山と爲す、又詔して建仁に住し、壽福を主る、敕して大覺禪師と諡す。
㋤受業。夢窓國師二十歲、建仁寺に於て、受業するため服を易へて參堂。

㋐自賛
南禪元翁和尚請
獸心人面。智薄行麤。頂門不レ亞レ眼。肘後不レ懸レ符。好箇娘生三昧。落ニ得天選一愚一、長老長老。

莫レ訴吾無ニ㋺跨レ釜之作一。先師折脚鐺子。須ニ
相共扶一。

滿翁庵主請

渠似レ吾而非レ吾。吾非レ渠而相似。不レ要ニ
打ニ殺老僧一。何須燒ニ卻㋩橙子一。景與ニ㋥
罔兩一。㋭一馬一指。滿翁滿翁。佗時有レ人。若
問ニ我眞形一。報道領下眉毛長尺二。

一谿居士請

這㋬田庫奴。形醜心愚。其醜也者。畫得
太似。其愚也者。固匪レ可レ圖。莫レ謂㋣丹
青無ニ妙手一。佛祖亦難ニ以名摸一。借問一谿居士。
擬下向ニ何處一見上レ吾。咦。

大判事請

咄這㋠沒刁刀漢。稟ニ賦性於愚魯一。擧措信レ彩
不レ拘ニ規矩一。坐ニ曲彔牀一無レ所レ成。剛道市中㋷

㋑自讃。國師自分の畫像に、讃を人のこはるゝまゝになしたるを云ふ。

㋺跨釜。子父に過ぐるを云ふ、故事あり。

㋩橙。幀に同じ、或は橙に作る、畫幅を張る也。

㋥罔兩景。莊子齊物篇に、罔兩は影邊の淡薄なるものと、景も形といふ意なり。

㋭一馬一指。莊子齊物篇に、天地一指也、萬物一馬也とある、是非にたとへしなり。

㋬田庫奴。田舍奴どしといふ、唐宋時代には田庫奴とかいたのであるさうな、土百姓、ゐなかつぽめと、人を輕侮叱責するの意。

㋣丹靑。赤きと靑きと、卽ち繪畫の道を云ふ。

㋠沒刁刀。古語に云く、筆久うして厭勞すれば、刁を害して刀と成す云々、まちがひやすいとのこと。

㋷田。畋と通ず、かりするなり。

㋦狼虎。これは韓非子に出づる故事、市に虎ありと三人が言ふ、王は信ずるかと、寡人之を信ぜん、恭曰く、夫れ市に虎なきこと明けし、しかれども三人言ふて虎と成す云々、願はくは王之を察せよと、龐恭と云ふものと太子と邯鄲に質たり、魏王に申し上げしなり。

㋸潑天。まきちらす、出格の衲僧の境界なり。

㋾國賊。梵網古迹記に、出家は役を避く、福田に非ざればその國王に於て用ふるところ無きが故に、大賊と言ふ。

㋻背觸。佛を呼んで佛と作し、祖を呼んで祖となさば、是れ聲聞じやぞとなり。

田ニ㋜貌虎一。只將ニ此破生涯一。扶ニ起㋸潑天門戶一。這㋾國賊無ニ面目一。有時把レ纜放レ船。有時騎レ牛上レ屋。提ニ鈯斧一而不レ解ニ住山一。握ニ竹篦一而不レ知ニ㋨背觸一。呵呵呵。苟不ニ自贊一誰贊レ我。

禪人請（九）

全假全眞。水銀㋕阿魏。品藻在ニ傍觀一。都不レ干ニ吾事一。

眉底有レ眼。鼻下有レ唇。好是娘生三昧力。因睡飢餐不レ倩レ人。

通身無ニ影像一。圖ニ箇什麼一來。若能覷得破。確觜放レ花開。

這㋵骨律錐。老而益癡。百醜千拙。㋟甘レ分過レ時。莫レ謂無ニ儀可レ則。堪下㋹與ニ善人一爲上レ資。

我無ニ影像一。繪ニ箇什麼一。一時風流。萬世㋡懡㦬。

本質倘如レ幻。影像是何容。欲レ見ニ我眞相一。擘ニ破太虛空一。

脚跟下事。難レ可ニ指陳一。建化門裏。且露ニ半身一。（半身）

眉底有レ眼。鼻下有レ唇。娘生面目。分明莫レ言。唯現ニ半身一。

㋕阿魏。阿魏に眞なしで、本手がない、藥の名なり、本草綱目三十四に出づ。

㋵骨律錐。叢林に宗師を呼んで古錐、或は骨律錐となす、その皮膚脫落機鋒尖利なるにとる。

㋟甘分。身分相應の義。

㋹與善人爲資。老子二十七章に、善人は不善人の師、不善人は善人の資。

㋡懡㦬。はぢかくと云ふこと。

㋡一精明。一心。

㋧六和合。六根、眼、耳、鼻、舌、身、意。

㋣較。まだらうして、いりまじりのことなり。

㋶諸々。相惡むの意、多言の意、そらごとの意、やかましくいふにまかすとなり。

賚都寺夢與レ師相見圖ニ其所レ見像一求レ贊

坐ニ盤石一倚ニ古松一。不ニ是凡相一。不ニ是聖容一。都寺都寺。莫レ見ニ吾於窠窟中一。

圓相中

元是㋡一精明。分爲ニ㋧六和合一。不ニ是混融一。亦非ニ㋤駁雜一。全體現成。千重百帀。畢竟如何分疎。一ニ任傍人㋶諸諸一。

㋑偈頌

客中偶作

㋺蕩子生涯無ニ貯㋩畜一。山雲溪月是青氈。
東西白踏一條路。不レ在ニ㋥途中家舍邊一。

㋭寓ニ居聚㋬落一

寓舍囂塵晝掩レ關。市中㋣買得沃州山。
娘生口裏不レ含レ血。掛ニ在乾坤宇宙間一。

㋑偈頌。偈は梵文の略なり、正には伽陀、唐には頌といふ、偈頌とは梵漢かね稱する也。
㋺蕩子。放蕩なり。
㋩畜。蓄と同音。積也、藏也。
㋥途中家舍。臨濟錄中の語。珠曰く、途中とは世諦流布の世間法なり、家舍とは本分の田地なり。
㋭寓居。師年譜、四十三歳秋九月、古溪を出でて洛に游んで北山に寓す、居聚落に降る、此の偈は天龍山內妙智院にありといふ、之を日本拜の偈といふ、萱の上に之を書す、天目の中峯和尚、元國に在りて

佛成道

冷坐六年㋠蛇入レ筒。剛將ニ氷雪一當ニ家風一。昨宵覷ニ得虛空一破。驚ニ起明星一藏ニ眼中一。

太平和尚來訪不レ値翌日惠レ偈次レ韻以謝㋷

不レ容ニ佛祖入レ門來。㋦白眼青眸豈肯開。仁義道中通ニ線路一。山川齊起舞ニ三臺一。

謝下圓覺靈山和尚見訪ニ㋸三浦庵居一

世上浮榮屬ニ貴家一。㋾窮栖贏得飽ニ煙霞一。春光今日添ニ和氣一。海岸枯㋻椿也放レ花。」㋕豎レ拳消息我㋵罔レ措。不レ累ニ㋟瑞峰齒牙寒一。庵外潮平門限濶。莫レ言水淺泊レ船難。」

靈山和尚夏末寄レ偈次レ韻爲答

禁足不レ離三浦境。無邊刹海偏經過。意通方外山川絕。情隔目前雲霧多。一榻蕭條忘ニ歲月一。四簷鬱密蓋ニ藤蘿一。少林妙旨非レ干レ我。誰管㋹如之與ニ若何一。」

之を聞いて、日本に向ひて拜をなされたと云ふ。

㋬落。居也、村落・屯落・聚落といふ。

㋣買山。支遁林の故事、隱栖の事に用ふ。

㋠蛇入筒。初發心を云ふ。

㋷太平和尚の一頌は、師四十五歲元應元年土佐に在つての作。

㋦白眼青眸。白眼はいかり、にらむ、青眸はよろこび、したしみ。

㋸三浦庵居。泊船庵と名づく、年譜に師四十六歲なる元應元年夏末に、三浦の横洲に留つて泊船庵を建つ、その翌年二月ごろの作。

㋾窮栖。窮巷、栖遲。

㋻椿。都江の切、くひ、放は開也。

㋕豎拳。趙州諗禪師、一庵主の處に到るの古則あり、これを

(ソ)善福(ツ)大川和尚相訪有レ偈倚レ韻以謝

(ネ)包桑計足世波外。衆口從他能鑠レ金。淡薄情同輕霧色。(ナ)黑甜夢破暮潮音。(ラ)隈レ山卻自忘二山險一。臨レ海未三曾窮二海深一。不レ是(ム)要津剛把斷一。門前巨浪涌千尋。」

(ウ)穀食(ヰ)鶉居沙渚邊。釣磯漁舍地相連。更無三東閣接二高客一。一點漚涵萬里天。」

巨壑雷聲過二僻地一。蟄居寂寞一時空。贊歎莫レ謂口門窄。庭際寒梅春信通。」

謝二(ノ)雲巖太平和尚來訪一

殘生懶癖療難レ痊。醜拙深藏海嶼邊。今日被二雲巖覷破一。風前把レ手笑忻然。」

和韻（諸友寄二偈于三浦庵居一。）

天南地北不レ留レ蹤。又入二月江烟嶼中一。(オ)退水藏鱗有二餘裕一。不レ希三化作二(ク)禹門龍一。」

山市江村堪レ(ヤ)擇レ鄰。行藏多混二釣漁人一。只因三手裏無二香餌一。

引き用ひたるなり。

(ヨ)罔措。措は施し布く也。

(タ)瑞峰。圓覺寺の山號瑞鹿山。

(レ)如之若何。之をいかんともすることはできまいとなり。

(ソ)善福。關東十刹の一、相州。

(ツ)大川。道通禪師、大休念の法嗣、瑞鹿山の臥龍庵に塔す。

(ネ)包桑。包は苞に作るべし、易の否卦に出づ、安固を爲すの道を云ふ、包桑にかゝる、桑は根深く固し、苞はむらがり生ずる、その固きことはなはだし。

(ナ)黑甜。ひるね。

(ラ)隈。倚（よる）也。

(ム)要津。この語は臨濟錄の序より出づ。

(ウ)穀食。莊子天地篇に、鳥の子、ひよこの母に哺せらるは自ら求むるに非ず、食に無心なるを云ふ。

(ヰ)鶉居。定所なきなり、猶ほ野

免得欺ニ謾(マ)負命鱗一。」

(ケ)樛木元非ニ大(フ)厦材一。那堪下叨屬ニ貴門一來上。而今拋在ニ江村外一。付ニ與漁翁一撐ニ釣臺一。」

一庵釣レ寂海門東。(コ)聖域(エ)凡邦信不レ通。莫レ怪私鹽成ニ滯貨一。天津橋上叵レ欺レ公。」

(テ)一把茆茨天宇濶。山爲ニ籬落一海爲レ庭。庵中消息無ニ囊蓋一。來者猶言掩ニ竹扃一。」

壺中風物獨沈吟。相伴唯容藤一尋。昨夜無レ端打ニ談笑一。虛空聽得也寒心。」

天峰（相模左近將監殿）

絕頂蒼蒼雲霧外。虛空背上勢(ア)崢嶸。人間仰望不レ爲レ少。只見衆山從レ地聳。

壁山

元來峭峻無ニ(サ)瑕纇一。雨琢風琱光轉生。雲霧不レ埋峰頂路。相如失脚入ニ秦城一。

[illegible]といふが如しと。

(ノ)雲巖。下野東山雲巖寺、開山は佛國禪師。

(オ)退水藏鱗。五灯會元十五の雪竇顯の章に出づる古語、登科云々の問答。

(ク)禹門。禹、龍門をうがつて大夏を通じ、河を決り水を亭(たひら)ぐ。

(ヤ)擇レ鱗。孟母の三遷を云ふ。

(マ)負命。太公望の直釣の故事。

(ケ)樛。音鳩、木の枝の下り曲るなり。

(フ)厦。大屋也。

(コ)聖は淨土。

(エ)凡は穢土。

(テ)一把茆茨。この作も元應元年四十五歲の作、この偈を止めて人に示す。

(ア)崢嶸。山のけはしきこと。

(サ)瑕纇。疵なり。

(キ)嶮巇。嶺の危きなり。

(ユ)胥靡。靡は不明のこと。

春山

和氣靄然藏ニ㋖嶮巇一。峰巒花木自逢レ時。登臨須レ具ニ登臨眼一。莫下向ニ㋴青青黯黯一窺上。

別峰

孤峻不レ同ニ羣嶺勢一。幾人望見換ニ雙眸一。㋱德雲賺ニ殺善財一後。翠靄紅霞卒未レ收。

竹庭

㋯三曲兩斜排ニ砌下一。年年添得一叢林。㋛香嚴擊碎大千界。此地依前鎖ニ翠陰一。

㋼天使到レ山留レ偈次レ韻以贈

世路悠悠懶ニ往還一。一庵甘レ分卜ニ殘山一。地爐灰冷無ニ黃獨一。㋪雪㋲涕㋝工夫也不レ閒。

古潭

曠劫已來淸皎潔。月穿風攪水無レ痕。今時不ニ敢窺ニ淵底一。剛道蒼龍這裏蟠。

㋱德雲。華嚴經入法界品に、善財が文殊の教を受けて德雲に見ゆ、七日を經て別山に在りて、徐として經行するを見る。

㋯三曲兩斜。趙州の法嗣杭州の多福和尙、僧問ふ、如何が是れ多福一叢の竹、師曰く、一莖兩莖は斜なり、曰く、學人不會、師曰く、三莖四莖は曲れり。

㋛香嚴。香嚴は、竹が木にあたつて、かちんと音のしたので、省悟したその故事。

㋼天使到レ山。年譜、正中二年乙丑師年五十一、春後醍醐天皇詔して、特に近臣を使して洛の南禪寺に住せんことを命ず、師病と稱して應ぜず、敕使以レ偈爲に勸む、年譜に、「拭涕工夫也不レ間」とある、このとき上總千町の退耕庵に在り、八月京師に至る、次の日召して便殿に對し、說法し、これ

(ヌ)先覺

威音劫外自開悟。正眼看來是後生。借問從前佛兼レ祖。幾多閑語爲レ誰呈。

雪溪

(イ)片片紛飛非二別處一。氷花影裏水光清。(ロ)寒流激出廣長舌。喚二得石烏龜睡一驚。

(ハ)枯木

(ニ)獨倚二寒巖一無二暖氣一。(ホ)皮膚脱落未レ爲レ奇。有時花發乾坤外。不レ識春風何處吹。

藏庵

直將二天下一爲二門戶一。天下從來在二裏頭一。不二是家風剛葢卻一。(ヘ)銜レ花百鳥自然休。

休翁

萬機罷卻自騰騰。暮請朝參也不レ曾。問著老來成二底事一。笑言雙鬢白(ト)鬅鬙。

より叡信深し。
(ヒ)雪。のごふ。
(モ)滌。はなしろ。
(セ)工夫。ひま、でま。
(ス)先覺。師の法嗣先覺周怙禪師、城州の天龍に住す。
(イ)片々非別處。唐の龐居士の好雪片々、不落別處の語あり。
(ロ)寒流。此の雪溪の寒流は、甚深の妙法を演說すると。
(ハ)枯木。國師の法嗣、紹榮。
(ニ)獨倚寒巖。婆子燒庵の古則に、庵主云く、「枯木倚二寒岩一三冬無二暖氣一」の語あり。
(ホ)皮膚脱落。涅槃經陳如品。
(ヘ)銜レ花百鳥。支那、牛頭山融禪師の故事。
(ト)鬅鬙。髮の亂るゝこと。
(チ)一回登陟。一回此の奇峯へ登りをほせてあるならば、目がさめようぞ。
(リ)只尋常。目がさめて見たればたゞいつもの。

奇峰

終古巍巍勢不レ凡。木靈石怪呈二祥瑞一。(チ)一回登陟換二雙眸一。

(リ)只在二尋常煙霧裏一。

(ヌ)假山水韻

(ル)纖塵不レ立峰巒峙。(ヲ)涓滴無レ存澗瀑流。(ワ)一再風前明月夜。

(カ)箇中人作二箇中遊一。

(ヨ)題二那智觀音堂一

(タ)天河激出(レ)人間瀑。(ソ)㶁㶁寒聲響二碧空一。(ツ)珍重大悲觀自在。

我儂幸是(ネ)耳無レ聽。

春巖

(ナ)融風煦日旺二和氣一。枯木陰崖也著レ花。欲レ問二(ラ)空生坐二何處一。

煙霞影裏路千差。

(ム)嘉曆丙寅退二南禪一赴二關東一。元翁分レ訣而寓二居叡山一。有レ偈

見レ寄和レ韻

君踏二雲梯一登二(ウ)叡嶺一。我呼二藤杖一出二京師一。(ヰ)箕南(ノ)斗北一千里。」

(ヌ)假山水。庭園のつき山。

(ル)纖塵。はきちぎつたつき山。

(ヲ)涓滴。清淨なる泉水。

(ワ)一再。いく度もの義。

(カ)箇中人。このつき山に對し遊ぶ人は、この中の事を知つた人があそぶ。

(ヨ)題那智觀音。紀伊東牟婁郡那智山は、日本西國靈場第一、この偈は年譜に嘉曆元年八月伊勢に至り、善應寺を開き、何くなくして東に歸ろ、熊野を船にて過ぎ、登山せらるゝときの作。

(タ)天河。あまのがはのたかきより。

(レ)人間。人間界へおつるたき。

(ソ)㶁々。水の流るゝこと。

(ツ)珍重。あつぱれなこと、たふといこと。

(ネ)耳無レ聽。夢窓國師、耳根圓通の三昧を證得す。

(ナ)融風。東北の風を云ふ。

正是眉毛厮結時。

次レ韻悼レ僧（遭二官事一而死）

患難雖レ然爲二(オ)槖籥一。爭如三直入二(ク)涅槃城一。
春風已唱還源曲。佛手不三應遮二此行一。」
衆口鑠レ金金已空。(ヤ)咎休盡屬夢郷中。
從前窟宅莫二回顧一。碧落元無二飛鳥蹤一。

圓覺(マ)險崖和尚來訪不レ値留レ偈次
日依レ韻以謝

郝翁疇昔訪二庵主一。惡迹難レ藏宇宙間。
昨日瑞峯枉二光駕一。我儂幸不レ在二斯山一。

(ケ)清拙和尚韻

(フ)剩水殘山是我郷。小窻落得飽二秋光一。
善財休レ説南詢去。(コ)去者須レ知不レ至レ方。

(エ)月山

光境忘時(テ)光境現。(ア)巍巍擎出廣寒宮。

(ラ)空生。須菩提、こゝに空生と譯す。
(ム)嘉暦丙寅。元年七月鎌倉の壽福寺に應請せず、二年又淨智にも應請せず、九月鎌倉におもむく。
(ウ)叡嶺。比叡山。
(ヰ)箕。二十八宿の一、東方にある星の一み。
(ノ)斗。同上の一、北方にある星の一群。
(オ)槖籥。韛と同じ、ふいがう。老子五章、天地の間はそれ猶ほたくやくの如き乎云々。
(ク)涅槃城。晉譯華嚴入法界品、爲陰賊害者には涅槃城を置く。
(ヤ)咎休。災と慶となり。
(マ)險崖。巧安禪師、大休念に嗣ぐ、建長に住し、圓覺にも住す。
(ケ)清拙。正澄、來二日本一の元僧なり、建長・圓覺・建仁に住す。

(フ)剩水。剩殘の山水なり、あるに任せて分に甘んずるのみ。
(コ)去者。中觀論に、方を觀て彼れ去ると知る、去るもの方に至らず、これみな動に卽して靜を求む、以て物の不遷を知ることと明けし矣。
(エ)月山。勝樂寺月山、周樞國師の法嗣。
(テ)光境。傳燈七に盤山の章に云く、夫れ心月孤圓光萬像を呑む、光境を照すに非ず、境亦存するに非ず、光境倶に忘ず、復た是れ何物ぞ。珠曰く、眞實能所なきを云ふ。
(ア)巍巍。その時眞實の月山が現ずる。
(サ)孤危。此の古岩は。
(キ)茆廣。くはしくなく、あらましにて、かざらぬつくろはぬこと。
(ユ)酒肆はさかや、魚行はさかなや。

一回親到最高頂。物外何妨有二路通一。

古巖

(サ)孤危峭絶先二天地一。木老苔深不レ記レ年。莫下對二空生一問中來歷上。怕レ看二花雨更紛然一。

放翁

家風(キ)芾廣無二拘束一。(ユ)酒肆魚行建二法幢一。聖不レ收兮凡不レ管。老來只見兩眉(メ)厖。

(ミ)德叟

胸中蘊藉無二人識一。幸有三皇天輔二弼他一。不下把二聲名一自賛鼓上。恢恢(シ)風化徧二河沙一。

暮春遊二(ヱ)横洲舊隱一。(二首)

當年久住此洲濱。今日優遊來作レ賓。庵畔林巒不レ忘レ我。替レ花新綠獻二殘春一。」日映二蒼波一輕霧收。回洲疊嶂鬪二奇尤一。滿船載得暮春興。與レ(ヒ)點爭如二此勝遊一。

(モ)笑山

由來未レ喫二馬師(セ)踏一。歷劫柴崖直至レ今。將謂平夷無二險處一。烟雲影裏有二刀林一。

(メ)厖。犬也、としよりの眉毛の多きこと。
(ミ)德叟。周佐禪師、國師の法嗣、南禪に住す。
(シ)風化。躬上に行ふて風下に動く、之を化と云ふ。
(ヱ)横洲。舶船庵のありし三浦。
(ヒ)點。論語の先進章の、「吾れは點に與せん」と云ふを引く。
(モ)笑山。周念禪師、江州の金剛寺に住す、國師の法嗣。
(セ)踏。蹋に作るべし、洪川水老和尚、初め馬祖に參ず、祖一踏を與ふ、師大悟して云く云云。

賀二(ス)福山聚寮落成一

(イ)聖凡元是一家舍。(ロ)大匠垂レ慈始闢レ門。休レ問此中(ハ)多少衆。根椽片瓦蓋二乾坤一。

賀三(ニ)雲山越首座住二奥州護國一（時居二嵩山傳芳庵一、庵在二建長一、覺雄禪師無隱創レ之）

高臥嵩山絕頂雲。擧二揚奥旨一住二天眞一。眉間霜刄忽歸レ掌。塞外從レ玆祖令新。

泰山（(ホ)秋田(ヘ)別駕）

險處深藏安靜境。東方羣嶂讓二(ト)崔嵬一。誰知(チ)五十餘盤外。別有二天門(リ)石扇開一。

贈二玄侍者(ヌ)南遊一

(ル)忼慨(ヲ)栗繡離二瑞峰一。百城春色屬二孤筇一。一回改二卻生涯一後。更挂二(ワ)古帆一歸二海東一。

贈二(カ)感知客南遊一

江外横趨早是遲。迢迢航レ海又奚爲。脚跟且放三十棒。更待他時衣レ錦歸。

(ス)福山衆寮。清拙禪師、嘉曆二年建長に住して衆寮をたつ。
(イ)聖凡。根本を云へば。
(ロ)大匠。佛を指す、今清拙をさす。
(ハ)多少衆。文殊、無着にとふの古則によりては、凡聖同居、龍蛇混雜、前三三と後三三とじやとある也、あまたありてかぞへきれぬとなり。
(ニ)雲山。雲山智越禪師、無隱範に嗣ぐ、圓覺に住す。
(ホ)秋田。城之介。
(ヘ)別駕。唐官名、日本の介也。
(ト)崔嵬。高峻のこと。
(チ)五十餘盤。泰山五嶽の東岳也、一に岱宗と云ふ、山の屈曲五十餘なり。
(リ)石扇。泰山にある天門、李白集二十に出づる故事なり、石壁開けて一門の中に天地日月あり。
(ヌ)南遊。元の國に遊方參禪する

贈ニ㋵郁侍者南遊一

萬里鯨波天一涯。無邊風月勿ニ張乖一。草鞋跟斷底時節。跳ニ出㋟南陽陷穽一來。

悼ニ雲峰居士一

老來㋹頓レ轡遊ニ㋞方外一。不㋡レ宰ニ從前汗馬功一。㋧夜壑舟移無ニ覓處一。塵塵擊出碧雲峯。

祖峯

四七二三呈ニ峻機一。高高勢壓ニ五須彌一。躋攀自有ニ兒孫在一。絕頂宗風未ニ下衰一。

㋤東峯

岱嶽高名今古傳。日昇月出勢㋶穹然。青黃不レ墮ニ衆山色一。永領ニ春光一億萬年。

㋰古庵

㋒把茆歷劫蓋レ頭來。㋼多少後生門外隈。莫レ謂都無ニ斬新底一。年年庭樹放レ花開。

を云ふ。

㋸忼慨。憤激する也。

㋾棄繻。前漢書終軍傳に出づる故事、きぬのへりで符信をつくる。

㋻古帆。古帆不挂時如何云云。

㋕感知客。通叟宏感禪師、國師に嗣ぐ、元に入りて參學す、慧林・淸見・淨智に住す、元國に在ること二十年。

㋵郁侍者。元章周郁禪師は國師に嗣ぐ、元國に遊歷し、初め江州の金剛、後に天龍に住す、久しく元國に留まる。

㋟南陽。三喚の因緣、前に出づ。

㋹頓。止也、捨也。轡を頓ては仕官をやめるなり。

㋞方外。莊子太宗師に、孔子曰く、彼方の外に遊ぶ者也、丘は方の内に遊ぶ者也。

㋡宰。主なり、主とせずなり。

㋧夜壑。これは居士が亡したるを嘆いての形容詞なり。

爲二（リ）月巖居士一講二金剛經一

諸賢命レ我談二（オ）波若一。滿座盧胡咸瀆レ聽。
好箇一場（ク）閙打鬨。堪レ令下居士夢魂惺上。

和二韻（ヤ）天岸和尙謝レ事見レ贈

慈到二無縁一稱二法幢一。（マ）月涵二萬水一不二昇降一。
大人到處乾坤濶。（ケ）休レ謂閒雲分二半窻一。

天岸和尙相二訪於甲之慧林一有レ偈次
レ韻爲レ謝

淩レ空（フ）金錫枉降臨。數日淸談味二（コ）德音一。
（エ）鏟レ彩殿堂成二壯麗一。蓄レ幽林樾轉陰森。
（テ）淡交喜得懷無レ（ワ）磣。浮世從他（サ）氈有レ針。
（キ）盛事定應レ傳二永劫一。（ユ）山門不三翅幸二于今一。

和レ韻謝三天岸和尙送二（メ）初祖頂相一

隻履西歸似レ不レ曾。更留二惡跡一最堪レ憎。
（ミ）魚投二臭水一有二來歷一。且爲二（シ）渠儂一打二（ヱ）葛藤一。

（ナ）東峰。相模右馬頭、舊板この五字あり。
（ラ）窅然。着天なり、たかきことを云ふ。
（ム）古庵。安國古庵普紹禪師、國師に嗣ぐ。
（ウ）把茆。珠曰く、この古庵はいつのむかしよりできてある。
（ヰ）多少。此庵へ來るほどのものは多少。
（ノ）月巖。冷泉爲相。
（オ）波若。般若、亦はにやと云ふ。
（ク）閙打鬨。閙は乾とも、かく、乾打鬨はいぬさわぎ、哄•鬨は通用す、どつとわらふの義。
（ヤ）天岸。惠廣禪師、佛國の法嗣。
（マ）月涵萬水。珠曰く、無緣の大慈はたとへば。
（ケ）休謂。珠曰く、必ず山居隱遁はごむやうじや。
（フ）金錫。これは天岸和尙、來遊をほめて云はれしなり。
（コ）德音。帝其の心を度る、貊たる其の德音。（詩經皇矣）
（エ）鏟。光を埋める、けづるなり。
（テ）淡交。禮記の表記に、君子の交は水の如し、注に水は相得て合するのみ。
（ワ）磣。まじる、物の中に沙のまじるなり。
（サ）氈針。朝野群載に、杜錫太子を諫む、太子針を坐處の氈中に置く、之を刺して血を流す。
（キ）盛事。來訪の。
（ユ）山門。今日惠林斗りの幸ではない。
（メ）初祖頂相。達磨の畫像、頂相は「ちんさう」とよますのならひ。
（ミ）魚投臭水。妄念不起を云ふたのであらう。
（シ）渠儂。かれ、他人を云ふ。
（ヱ）葛藤。禪家では、事を說くこと枝蔓徑挺ならざるを云ふ。
（ヒ）翼然。翅なり、鳥の翼をはり

和二韻慧林圓通閣一

(ヒ)翼然幻出一樓臺。廣大慈門關鍵開。(モ)天籟奏レ奇非二苟且一。(セ)土毛獻レ勝有二由來一。東園西護水千派。後揖前朝山萬堆。直下入流是(ス)南海。纔移二寸步一路迂回。

東白

(イ)金雞三唱至二(ロ)熹微一。未二是蒼天全曙時一。夜半明明太陽出。榑桑鬪レ額(ハ)弗波提。

(ニ)山居韻十首（贈二古航和尙一）

(ホ)小庵含二大千一。獨處伴無數。德化已圓成。至功何所レ樹。」
(ヘ)深山巖壑中。佛法無二興廢一。拗二破老(ト)黃龍一。牀脚下種レ菜。」
山高罕二客登一。唯有二白雲騰一。獨照空二寰宇一。寧同二(チ)日下燈一。」
胸次辟二魔(リ)撓一。(ヌ)浩然游二世表一。大人沒二限量一。碧落慙二其小一。」
雲幕垂二牀畔一。氷輪輾二檻前一。莫レ言能晦レ跡。背後有二人天一。」
莫レ怪蕭然獨閉レ扉。　韜光乃是放光時。雷聲常震沒二人聽一。卻道溪深龍出遲。」

(モ)天籟。風などのこと、天籟・地籟など、こゑなくしてこゑありなど、莊子の齊物篇にむづかしくいふてある。

(セ)土毛。毛は草也、封略の内何れか君の土に非ざる、土の毛を食む、誰か君の臣に非ざると、左傳昭公七年にあり。

(ス)南海。補陀落迦山觀音の住處。

(イ)金雞。東方朔の神異經に出づ、金雞鳴くときは石雞鳴く、石雞鳴くときは天下の雞鳴く、悉く鳴くときは潮水之に應ずと云云。

(ロ)熹微。微陽なり、太陽の光りかすかなるを云ふ。

(ハ)弗波提。東弗于逮なり、舊譯には弗波提、此には勝と譯す。

(ニ)山居韻十首。年譜に、元弘二年春、又慧林に往く、古航の韻を和して、山居の偈十首を作る、時五十八歲なり。

黑甜夢破午陰遷。古栢烟消對二博山一。三十年前塵累事。
一時休罷付二幽閒一。」

青山幾度變二黄山一。浮世紛紜總不レ干。眼裏有レ塵三界窄。
心頭無事一床寛。」

物外逍遙自得時。家風(ル)放曠不レ求レ奇。客來無レ物可二供養一。
白石清泉當二(ヲ)土宜一。」

佛祖垂レ慈務救レ迷。誰知罪過與レ天彌。爭如盤二礴幽巖下一。
坐看閑雲洞裏歸。」

松隱

千株塞操列成レ牆。翠靄深深堪レ(ワ)葆レ光。莫レ責閉レ門圖二自了一。
(カ)後人標榜不二曾藏一。

梅窓

一樹花開六戸香。家風(ヨ)襲得(タ)嶺南芳。從レ茲萬國通二春信一。
那箇(レ)獼猴在二夢郷一。

送二榮藏主省レ親

(ホ)小庵含大千。石頭和尚の草庵の歌に、庵小なりといへども法界を含む、これは無碍圓通不思議の境界を述ぶるなり。
(ヘ)深山巖壑。深山嵓崖の中、還つて佛法ありや、語大惠武庫にあり。
(ト)黄龍。慧南禪師。
(チ)日下燈。一伎一能日下孤燈の古語より出づ。
(リ)撓。雜撓也、擾也。
(ヌ)浩然。天地の正氣也、盛大流行のこと、孟子公孫丑章に出づ。
(ル)放曠。拘束なきなり。
(ヲ)土宜。その土地より產出したるものをみやげと云ふるゐ。
(ワ)葆光。葆は藏すなり。
(カ)後人標榜。臨濟松を栽うるの因緣、標榜は後世のてほん。
(ヨ)襲。世襲で、よつぎ。
(タ)嶺南芳。六祖の塔所は大庾嶺にあり。

㋞陳老鞋中藏㋡五逆。㋧洞山胸次蘊眞慈。者回別有報親句。
滿袖春風㋤撩亂吹。

玉田

㋶義堂

耕翻一片閒荒地。泥土粲然光自生。更有秋成時節在。
收來顆粒價連城。

㋰無範（光嚴法皇）

第一門兮第二門。高低閫奥絕談論。大家領略幽深旨。
珍重當來彌勒尊。

世間樞要沒交涉。佛祖楷模也浪施。孤迴迴兮空索索。
㋒鳳栖不在碧梧枝。

的翁

眞正相承無等倫。傍宗別派有誰爭。老來更驗實頭處。
㋼尺二眉毛頷下生。

進叟

㋹獮猴。このたとへは見性についてのこと、さるが六窗にむかつて山山と喚べば、倶に應ず、これに依り、言句についてまはつてゐては夢郷に在るも同じと。

㋞陳老鞋。睦州陳尊宿は唐の名僧、わらぢをつくりて母を養ふが故に、陳蒲鞋の號あり。

㋡五逆。一、殺父母、二、破和合僧、三、出佛身血、四、殺阿羅漢、五、破羯磨僧。（華嚴孔目）

㋧洞山。悟本禪師、母の行乞するを見て、伴りて識らずと爲す、母竟に路傍に死す、往いて之を視れば、米數合あり云云、冥福を薦む。林間錄下に出づ。

㋤撩。挑弄也。

㋶義堂。南禪義堂周信禪師、國師に嗣ぐ、空華集あり。

㋰無範。光嚴天皇の御法諱なり、

水窮山盡更移レ歩。(ノ)寶所元來在二脚跟一。將謂從レ茲廿二(オ)靖退一。家中牀席未二曾溫一。

立山

旋嵐偃レ嶽不二曾搖一。峭峻孤危勢似レ翹。只許躋攀窮レ頂者。經行坐臥自逍遙。

雪庭

(ク)六花滿地冷氷氷。(ヤ)一色明邊萬象沈。砌下猶存松栢操。神光自失丈夫心。

一庵

統二取大千一爲二小屋一。四維上下更無レ隣。含靈凡聖在二這裏一。郝老何方訪二別人一。

(マ)桂巖（細川賴之）

昌昌嫩嫩潑二雲瑞一。密葉高枝不レ可レ攀。(ケ)善吉長年放憨坐。罔レ知月窟在二其間一。

玉淵（賴之夫人）

勝光智無謚法皇といふ。貞永元年四月八日西芳寺に御幸して、衣盂を受け、弟子の儀を執りたまふ。

(ワ)鳳栖。毛詩疏に、鳳は梧桐に非ざれば栖ます、竹實に非ざれば食はず、醴泉に非ざれば飲ますと。天皇の遺跡なる丹州山國の莊常照皇寺の御室を鳳栖軒と御銘ありしは、この偈に依らせらる、宸居の跡今にあり。

(ホ)尺二眉毛。大人の相。尺二は一尺二寸なり、卓爾として群ならすじやと、虚堂もいはれた。

(ノ)寶所。法華の化城喩品に、寶所近きに在り云云。

(オ)靖。安也。

(ク)六花。草木の花は三十五出、雪は六出。

(ヤ)一色。一色邊の事を明らむ云云の古語あり。

靈源不レ琢自瑩徹。兩岸中流一片光。㋫業業㋙臨レ深知幾箇。
咸言瑞壁在二㋓崑岡一。

㋢默庵

㋐醭口長年懸二壁上一。柴門深掩放二疎慵一。就レ中密說如二雷震一。
露柱燈籠不レ患レ聾。

㋚古山（武衛將軍）

不レ墮二青黃一獨岌然。千峰萬嶺遜二陳年一。絕巓雲斂無二遮障一。
劫外風光在二目前一。

㋖無極

十方寥廓絕二邊中一。子細看來亦有レ窮。倒駕二大鵬一遊二象外一。
藕絲竅裏是㋴鴻濛。

㋱北叟

㋯七星影裏獨藏レ身。未三肯南詢歷二百城一。莫レ怪老來無二思算一。
從前得喪不レ關レ情。

㋛仁山（將軍）

㋮桂巖。常久居士、地藏院開基なり、碧潭周皎に參す。
㋘善吉。梵には須菩提、こゝには善吉と譯す。
㋫業業。危きこと。
㋙臨深。詩經の戰々兢々云々の語よりいづ。
㋓崑岡。崑は玉を出す山の名、岡は山脊也。
㋢默庵。周論禪師、國師の法嗣、江州の金剛、京の等持に住す。
㋐醭。酒の上のかびにたとへる。
㋚古山。足利直義公。
㋖無極。志玄禪師、國師に嗣ぐ、天龍二世。
㋴鴻濛。天地未判を云ふ。
㋱北叟。何人か不詳。塞翁の別名北叟といふ、これからとりし名か。
㋯七星。北斗裏藏身は如何なるか透法身の問ひに、雲門が答へた。
㋛仁山。足利尊氏の法諱。

慈德高高非ニ㋓賞功一。平寛孤峻在ニ其中一。此峯不レ望ニ衆人仰一。
只是衆人仰ニ此峯一。

嵩山和尚見レ訪次レ韻

山圍水繞絕ニ行蹤一。龍象來時路自通。一刻淸談無ニ折合一。
大家泥ニ入是非中一。

和ニ韻嵩山和尚雪中見ㇾ寄

氷花一夜滿ニ林皐一。露出嵩山千古標。明白裏頭無ニ活路一。
神光㋪徒爾立齊レ腰。

題ニ臨川㋲梵音閣一

㋝水月道場天地濶。一樓影現百千樓。圓通不レ洗圓通耳。
門外洪川日夜流。

㋜建武乙亥予住ニ南禪一㋑明極和尚退居ニ淨土院一以レ偈寄レ之

境致元非ニ淨穢殊一。大人所在是靈區。凝然㋺藏レ密機彌峻。
老矣休レ交㋩德不レ孤。坐ニ斷十虛一爲ニ丈室一。指ニ呼萬象一作ニ參徒一。
毋レ勞ミ特地㋥鑿ニ隣壁一。焰慧光明何處無。

㋓賞。もつこ、賞功は九仞一簣といふて、すこしのことがつもつて多くの功をつむといふこと、將軍の武功を賞していはれしなり。

㋪徒爾はいたづらに、齊腰は雪がつんでこしまである。

㋲梵音閣。臨川寺の山門を梵音閣と扁す、閣上に觀音を安す、普門品の梵音、海潮音は彼の世間の音に勝るといふにとる。

㋝水月道場。宗鏡錄廿三に、性空の世界に遊戲し、水月の道場を建立す。

㋜建武乙亥。二年、師六十一歲。

㋑明極和尚。楚俊禪師、元國明州人、徑山の虎岩伏に嗣ぐ、建長・南禪・建仁に住し、攝の廣嚴に開山たり、後醍醐帝歸信厚し、勅して佛日焰惠禪師と賜ふ、楠正成公も師に參ず。

㋺藏密。易繫辭上に、聖人此れ

明極和尙見レ和再韻以謝

仙凡(ホ)咫尺有ニ差殊一。纔到ニ壺中一見ニ別區一。獨樹花開羣卉麗。衆山雲暗一峰孤。趨レ門咸是(ヘ)爪牙客。入室寧容ニ(ト)糠粃徒一。靖退也知非ニ小節一。說禪誰謂默時無。

又見レ和書レ懷以答

行藏只信(チ)報緣殊。再入ニ龍峰一卜ニ舊區一。飯罷興來吟力健。禪餘睡足夢魂孤。見聞一一非ニ他物一。前後三三是我徒。莫レ謂住持欠ニ機巧一。灼然好事不レ如レ無。

淸拙和尙起來行韻賀ニ少林院明極和尙病起一

起來行起來行。徐徐擡レ脚鴻毛輕。萬象忻然齊鼓舞。(リ)「腦後圓光又重生。」(ヌ)「未レ有ニ長行一而不レ住。當頭坐斷千差路。佛祖莫レ由レ窺ニ藩籬一。懷中何曾介ニ喜怒一。」「未レ有ニ長住一而不レ行。放蕩漫遊(ル)乾闥城。揑ニ聚大千一作ニ戲具一。無レ意レ驚レ人人自驚。」

を以て心を洗ひ、退いて密に藏る。

(ハ)德不孤。論語の里仁篇の語。

(ニ)鑿壁。匡衡が勤學にして燭なし壁をうがつて隣舍の燭の光を引き、書を讀めりとの故事。

(ホ)咫尺。八寸なり、轉じてみじかき距離に用ふ、接近してゐるが、仙人と凡夫とはじや。

(ヘ)爪牙。つきびとのおもなるものといふに轉用す、ときにつめとなり、ときにきばとなるのでいふ。

(ト)糠粃。やくざもの。

(チ)報緣殊。緣の會遇は佛祖も避けることが出來ぬ、況やその他をやじやによつて。

(リ)腦後圓光。圓光寶蓋、佛の後光などと同じ。

(ヌ)未有長行。五燈會元五の藥山儼の章、馬祖との問話の故事。

(ル)乾闥城。眼に見るべくして實あることなし、是を名けてい

起來行起來行。不レ可レ形兮不レ可レ名。東倒西擂和二泥水一。峻機壁立終弗レ傾。」㋾衆生病則菩薩病。大悲寧墮二㋻愛見情一。㋕篋中四蛇養得穩。㋵日面月面鎭長明。」世醫拱レ手罔レ所レ措。少林祕術有二公憑一。將二此一方一除二萬累一。塵刹何處非二昇平一。」起來行。起來行。喜見宇宙全身橫。」

送二果首座一

出入同門無二㋟楚越一。休下將二情謂一屬中㋹參商上。山黃水肅秋㋞强半。㋡兜率誰言在二夢鄕一。

送三元首座住二慧林一

㋧天宮夢裏不レ停レ機。出格風流惟自知。古錫凌レ空霜露冷。慧林果熟在二斯時一。

送三㋤明首座赴二防州安禪一（建武年）

祖苑光華混二陣煙一。江湖雲衲坐二針氈一。此行協二得安禪瑞一。

ふ。

㋾衆生病。維摩問疾品の意。

㋻愛見。同上の意。

㋕篋中四蛇。涅槃經德王品の意、篋は一身にたとふ。

㋵日面月面。これは佛名經にある佛の名で、日面佛の壽命は一千八百歲で、月面佛の壽命は一晝夜、むかし馬祖大師が不快でねてゐられるので、院主が近日ごきげんはどうでござると、尋ねたら、馬祖は日面佛月面佛と答へられた、なにも病氣にかゝつたからとてさわぐに及ばぬとじや。

㋟楚越。異なること、楚と越とはちがふと云ふに轉用す。

㋹參商。參と商との二星は相遠ざかるより、別れて後、久しく相會はざるにいふ、杜詩に、「人生不二相見一。動スレバ如二參與一レ商。」

㋞强半。なかばすぎ。

一錫霜風價大千。

送三明首座赴二(ラ)聖福一

(ム)正人一萬邪消。祖道何愁致二寂寥一。鈯斧這回生二羽翼一。

待看佗日更遷レ喬。

送三(ウ)哲首座住二慧林一

世治二(ヰ)澆漓一歲月深。祖門日廢莫レ由レ禁。良哉宗匠不レ懷レ手。

鈯斧高提入二慧林一。

送三(ノ)以首座赴二阿州(オ)補陀一

龍淵通徹(ク)白花崖。南海潮音震二法雷一。莫下把二烏藤一輕靠上レ壁。

他時必有二善財來一。

送三(ヤ)昭首座住二甲之慧林一

化門隆替有二因緣一。(マ)一髮千斤要二保全一。法雨毋レ慳澍二邊鄙一。

慧林榮茂蔭二人天一。

題二偏界(ケ)一覽亭一

天封二尺地一許二歸休一。(フ)致レ遠鈎レ深得二自由一。到レ此人人眼皮綻。

(ツ)兜率。仰山の條、前に見ゆ。

(ネ)天宮。兜率天宮。

(ナ)明首座。蒙山智明禪師、南禪規庵圓に嗣ぐ、安禪・聖福・建仁・南禪に住す。

(ラ)聖福。筑前博多にあり、建仁年間、榮西宋より歸朝して創建す、始めて禪規を行ふ、扶桑最初の禪窟といふ。

(ム)正人。趙州上堂に云ふ、正人邪法を說けば、邪法悉く正、邪人正法を說けば正法悉く邪。

(ウ)哲首座。大同妙哲禪師、佛國に嗣ぐ、甲の慧林に住す、相州の眞如・淨智に住す、京の北禪第一世とす。

(ヰ)澆漓。世の末、漓は薄也。

(ノ)以首座。大道一以禪師、東福藏山空に嗣ぐ、補陀・東福・南禪に住す、淡路の安國に開山たり。

(オ)補陀。曆應三年、阿波州細川源公補陀寺を建て、師を請じ

河沙風物我⦅コ⦆焉度。

題二翠象軒一（⦅エ⦆三條殿）

明窻發レ錦對二東山一。勝槩推排在二几前一。到者都無二蓋面帛一。多生忍昧一時蠲。

雪中⦅テ⦆下レ山

⦅ワ⦆庵内不レ知庵外雪。休下將二⦅サ⦆三等衲僧一論上。有レ時移レ歩千山上。踢二倒⦅キ⦆孤峯一在二脚跟一。

臘八値レ雪

寒窻睡足夢魂回。不レ見二明星一眼自開。帀地普天擎二雪嶺一。雅疊何處出頭來。

佛成道

六載忍レ寒吾不レ如。覩レ星成道不レ如レ吾。出レ山忘卻來時路。直至二于今一在二半途一。

佛涅槃

⦅ユ⦆放光動地逗二羣機一。可レ惜小慈妨二大慈一。否去泰來二千載。

⦅ク⦆白花。補陀落伽、此には小白花樹。

⦅ヤ⦆昭。果山宗昭。

⦅マ⦆一髮千斤。列子仲尼篇に、髮引二千鈞一。責任の重きを云ふ。

⦅ケ⦆一覽亭。年譜に、嘉曆三年師瑞泉に在りて、絕頂に於て亭を構へ、遍界一覽と名づくと、師五十四歲、明極・清拙同じく賦す。

⦅フ⦆致遠鈎深。易の繫辭に出づ。

⦅コ⦆焉度。論語爲政篇に、人焉度哉。

⦅エ⦆三條殿。足利直義の第宅。

⦅テ⦆下山。年譜に、正和元年師三十八歲、甲州の笛吹河上龍山庵に居る、方來の衲子をさけて、雪中に山を下る。

⦅ワ⦆庵內。雲門出でて問ふの故事、五燈會元十三に出づ。

⦅サ⦆三等衲僧。大惠武庫、拾遺の

年年春至百花披。

即事

秋色辭レ柯落葉多。寒雲載レ雨過ニ山阿ー。人人自有ニ娘生眼ー。爭ニ奈現成公案ー何。

秀峰

天然擢出羣川上。莫レ謂微塵聚作レ堆。曉霧暮雲遮不レ斷。四方望見碧崔嵬。

雲巒

天然浩氣生ニ膚寸ー。片片重重覆ニ碧層ー。靉靆倍增孤峻勢。只堪ニ仰望ー不レ堪レ登。

佛光禪師題ニ清見韻ー

追思乃祖昔年游。自愧逢レ時不レ若レ鷗。幸有ニ古今該括句ー。海門明月照ニ沙頭ー。

南江

明正爲レ源流不レ盡。百城烟水此中收。達磨失脚過ニ魏北ー。

圓通秀禪師の話に出づ。

(キ)孤峯。雪千山を覆ふ、甚麼としてか孤峯不白なるの故事あり。

(ユ)放光動地。法華序品に、普佛世界六種震動などのゐる。

(メ)山阿。山の曲り入りしくま。

(ミ)清見韻。佛光錄に、題ニ清見ー偈に云く、「暫歇ニ征鞍ー此地遊。回看廣岸一沙鷗。欲レ留ニ姓字ー無ニ新句ー。馬上頻頻又轉頭。」

(シ)明正。南は正也、南は明也、萬物を發生す、聖人の南面此にあり、易の離卦に、重明にして以て正に麗（つ）く、乃ち天下を化成す。

(ヱ)百城。南方一百一十城。

(ヒ)魏北。梁を南梁といふ、魏を北魏といふ。

(モ)間卻。むだあしつかふなり。

(セ)蘆花。楊子江頭。

(ス)在首座。此山妙在禪師は、佛

(ヌ)閒卻(ル)蘆花兩岸秋。

送ᅳ在首座赴ニ長保一

久遊ニ震旦一換ニ(イ)雙眸一。向レ外馳求已自休。衣レ錦歸來不レ袖レ手。
肚皮束レ篾下ニ西州一。

貞和改元臘月九日夜半雷鳴次日大雪

昨夜震雷誰不レ怪。今朝瑞雪世皆懽。道人(ロ)盤礴乾坤外。
(ハ)落得生涯吟境寬。

因レ雪

氷(ニ)蘂翳レ天無ニ碧落一。玉塵埋レ地沒ニ青山一。(ホ)太陽一出孤峯頂。
(ヘ)徹骨寒來也是閒。

玉林

布レ影交レ光無ニ雜樹一。栴檀(ト)薝蔔亦非レ倫。風磨雨琢絕ニ瑕纇一。
葉葉枝枝渾是珍。

枯禪

聖智凡情俱罷休。不下將ニ(チ)榮耀一挂中心頭上。莫レ言墮ニ在(リ)石霜窟一。

國に嗣ぐ、夢窓同參なり、佛國手度の弟子、建仁・南禪・圓覺に住す、永和三年正月十二日寂。
(イ)雙眸。孃生の。
(ロ)盤礴。閑雅のこと。
(ハ)落得。おちつきぬいて。
(ニ)蘂。しべ。
(ホ)太陽一出。見性明了大日輪一たび出づると。
(ヘ)徹骨。八寒地獄もむだごとじや。
(ト)薝蔔。大論に、此には黃花と云ふ、その樹廣大、花氣遠く聞ゆ。
(チ)榮耀。世間の、榮耀名利。
(リ)石霜窟。支那石霜山慶諸禪師、石霜山に在ること二十年間、學衆長坐不臥、屹として株杌の若くなること、天下之を枯木衆といふ。
(ヌ)活馬騮。騮は赤色黑のたてがみ、くりげの馬なり。これに

胸有二三千(ヌ)活馬騮一。

(ル)曇芳

希有(ヲ)瑞花時一現。西天此土競相傳。遺熏餘烈今猶在。
不レ混二千叢萬卉邊一。

(ワ)春屋

百花本是一枝花。遂見衆芳聯二我家一。驀地開レ門出二和氣一。
(カ)韶光從レ此偏二河沙一。

無得

道德慈威集大成。(ヨ)從レ門入者匪二家珍一。胷中蘊藉盡拋卻。
空手垂來賑二濟人一。

海岸

(タ)渺渺瀰瀰納二百川一。煙波萬里水連レ天。古帆掛得底時節。
到レ此方知有二那邊一。

(レ)古首座南遊有レ年而歸レ國寓二居(ソ)陬方一以二三偈一見レ寄因和二其韻一

は故事あり、略レ之。
(ル)曇芳。周應禪師は國師に嗣ぐ、圓覺・建長に住す、應永年中寂す。
(ヲ)瑞花。優曇華のこと。
(ワ)春屋。妙葩禪師、國師に嗣ぐ、普明國師と特賜す。相國の二世。
(カ)韶光。春色を云ふ。
(ヨ)從門入者。一に胸襟より流出し將ち來れじや、故事あり、略レ之。
(タ)渺々瀰々。水の廣く遠かなるのこと。
(レ)古首座。靈岳宗古禪師、雪村友梅に嗣ぐ、嘗て天龍に在りて藏主となる、南禪に出世す、入元有年。
(ソ)陬方。諏訪なり、信州の湖。
(ツ)口皮禪。趙州の禪は只口唇皮子上にありと、大慧普說に出づ。
(ネ)龍湖。五燈會元六、龍湖普聞禪師は唐の僖宗の太子なり、

頃刻相逢如二百年一。寒溫舒盡ツ口皮禪。
莫レ言愚智異二區域一。震旦扶桑無二兩天一。」
偏ニ參海外一究二幽深一。晝錦鮮鮮輝二祖林一。
穩ニ得ネ龍湖千載躅一。十靈神廟裏振二雷音一。」
適回換卻舊時顏。不レ識胸中幾海山。
名翼高飛有レ時在。待看朝旆入二雲間一。

天龍寺ラ十境

ム普明閣

廣大慈光照二世間一。善財當面隔二重關一。
眼皮橫蓋虛空界。ウ彈指門開ヰ匹似間。

ノ絕唱谿

灘聲激出廣長舌。莫レ謂深談在二口邊一。
日夜流轉オ八萬偈。灼然一字未二嘗宣一。

ク靈庇廟

精藍分レ地建二靈宮一。專冀神風助二祖風一。

邵武城外にありて苦行するものあり、居る、師の至るを見て、乃ち曰く、上人當に此を興すべしと、長揖して去る、師居ること十餘年、一日一老人あり、拜謁す、師問ふ、何の處にか住在する、老人曰く、此の山に住在す、然も人に非す、龍なり云云、即ち崖下に穴して泉を爲して曰く、此の泉他日多衆の設を爲すと、今龍湖と號す。

十靈神。諏訪明神。

ラ十境。年譜に、貞和二年春二月、龜山の十境を賦す、以て敎外別行の場たることを表す、師年七十二。

ム普明。天龍の山門、普明閣と扁す、觀音大士を安奉す、觀音普門品の無垢淸淨光云云、普明照世間にとる。

ウ彈指門開。華嚴の善財童子の彌勒に到りて、樓閣に詣つて彈指して聲を出し、其の門郎ち開くの故事あり。

ヰ匹似閑。かんにひとしき。匹似は等しきなり、なに／＼の如しの意なり。

ノ絕唱谿。洪川也、大きい川。

オ八萬偈。八萬四千、諸法門、此を以て諸佛は衆生を度するのである、蘇東坡の「溪聲廣長舌。山色淸淨身。夜來八萬四千偈。他日如何擧二似人一。」の偈をみても、この偈の趣意に似てゐる。

ク靈庇廟。八幡の神祠なり、鎭守堂。

ヤ天眞正直。神は正直の首にやどるの意。

マ曹源池。集瑞軒の前にあり、方丈書院の前。

ケ月落波心。支那の翠巖眞禪師は慈明圓の法嗣なるが、「如何なるか是れ佛法の大意」と問に曰はれて、眞は「雲の嶺上に

莫レ怪庭前松屈曲。㋳天眞正直在ニ其中一。

㋮曹源池

曹源不レ涸直臻レ今。一滴流通廣且深。曲岸回塘休レ著レ眼。夜闌有三㋘月落ニ波心一。

㋫拈華嶺

㋙靈山拈起一枝萼。分作ニ千株一在ニ此峯一。只見聯芳至ニ今日一。不レ知劫外幾春風。

㋓度月橋

虹勢截レ流橫ニ兩岸一。一條活路透ニ清波一。㋢度レ驢度レ馬未レ爲レ足。玉兎三更推レ轂過。

㋐三級巖

分レ危布レ險作ニ三重一。水激雲遮路不レ通。無レ限金鱗遭ニ點額一。誰知偏界起ニ腥風一。

㋚萬松洞

萬株松下一乾坤。翠靄㋖氛氳鎖ニ洞門一。仙境由來屬ニ仙客一。

生ずる無ければ月の波心に落つるあり」とやつた、明目を瞋して喝して曰く、「頭白く齒豁にして猶ほ這箇の見解を作す、如何んが生死を脫離せん」云云、」明聲を震つて曰く、「雲の嶺上に生ずる無ければ月の波心に落つるあり、」眞言下に於て大悟す。

㋫拈華嶺。嵐山なり、庭田家の記に云く、後宇多院詔あり、櫻樹千本を嵐山に栽ゑ、藏王權現の祠を創建し、和州芳野の境致に象る、建治三年暮春下旬、嵐山に行幸し、藏王遷座の儀を修し給ふ云云。

㋙靈山。迦葉が佛の金波羅華を拈ずるを見て、破顏微笑の緣。

㋓度月橋。洪川に架す。

㋢度驢。驢馬もわたせば、うまもわたす。

㋐三級巖。嵐山の瀑泉、となせを禹門の三級に擬す。

莫レ言此地匪ニ桃源一。

㋓龍門亭

不レ借ニ㋟巨靈分破擘一。兩山放出一洪川。
三更夜半無ニ來客一。數片歸雲宿ニ檻前一。

㋯龜頂塔

松生ニ背上一綠毛長。頂ニ戴浮圖一萬劫祥。
戸牖恢開不レ㋛藏レ六。㋼重重法界目前彰。

題ニ㋪三塔一

雲居古㋲語協ニ眞風一。三塔該收萬塔功。
㋝落落㋜團團無ニ縫罅一。龍蛇混雜在ニ其中一。

㋑虎谿

山險澗深人不レ到。菸菟作レ隊鬪ニ威獰一。
三賢攜レ手過レ橋後。錯聽ニ水聲一爲ニ笑聲一。

㋺投機頌

多年掘レ地覓ニ青天一。添得重重礙膺物。

㋚萬松洞。龜山の上に在り。

㋖氛氳。氣のさかんなること、杜詩に佳氣日に氛氳など。

㋓龍門亭。龜山の南崖に在り、三級嵓に對す。貞和二年三月十七日、光嚴上皇御幸、山に入りて法を聽きたまふの後、國師と此の亭に上りて嵐山の花を賞せらるの事、臨幸私記に見ゆと事苑にのせたり。

㋟巨靈。巨靈といふ大力無雙の男がむかしゐて、太華山と首陽山とを切開して、二つにわけたと云ふ神話。そこに龍門と云ふ河がある、それを黃河に流れるやうにもした。

㋯龜頂塔。龜山にあり。

㋛藏六。龜の六を藏すより、人の六根を藏すより、魔便りを得ずといふにたとふ。

㋼重々法界。華嚴の一一塵中に法界を見るといふにとる。

㋪三塔。年譜に、貞和二年三月十八日、鼓を鳴らし、退を告げて東庵に居す、扁して雲居と曰ふ、蓋し支那の雲居祐禪師の三塔を作るに倣ふのみ、竺仙仙禪師等の碩德、皆この頌を和して一巨軸を成す、國師親しく序を製し、東陵璵禪師跋語並に和偈ありと。

㋲語。古倒切、音こう、敎なり。

㋝落落。層がだんだんに重なつてゐること。

㋜團々。月のまるきが如く、影がまる〳〵としてゐるの義。

㋑虎谿。靈文藏主、國師に嗣ぐ。

㋺投機。見性するときの偈、年譜に、師三十一歲の嘉元三年五月末日。

㋩蓬瀛。蓬萊・方丈・瀛洲の三神山、秦始皇時代に齊の徐市が上書するに始まる。

㋥常在光院。尊氏建立して、國師を開山とす。

㋭下界上方。維摩の不思議品に

一夜暗中颺二碌塼一。等閒擊碎虛空骨。

將軍府有二山林泉流之樂一以レ偈美レ之

(ハ)蓬瀛勝槩聚二營中一。石峙流洄興不レ窮。好箇優遊嬉戲處。
曹溪正脈自流通。

題二(ニ)常在光院一（上下兩庵今作二一院一。）

山巒水石獻二奇珍一。勝地方知屬二傑人一。(ホ)下界上方同一境。
(ヘ)妙莊嚴外更無レ塵。

臨川無極和尚雪韻

人人只見(ト)不香花。未レ會紛飛落二在何一。上等禪和坐二堂裏一。
識神依レ舊屬二(チ)陀那一。

嵩山和尚訪二西山庵居一

幾片白雲橫二谷口一。不レ遮二道友扣レ扉來一。從前惡跡莫レ由レ晦。
把レ手徜徉三兩回。

題二(リ)友雲庵壁一

洞僻巖深晝若レ曛。(ヌ)一間竹屋半容レ雲。(ル)單丁自有二單丁樂一。

出づ、下方上方無數の世界云云。

(ヘ)妙莊嚴。妙莊嚴の域と云ふこと、大圓覺の境界。

(ト)不香花。唐人、雪を云ふ。

(チ)陀那。第八識、此に執持と云ふ、此は凡聖に通ず。

(リ)友雲庵。三會院の假山水の中に在り。

(ヌ)一間。五燈會元十七に、「千峰頂上一間屋。老僧半間雲半間」と云ふ句あり。

(ル)單丁。單は獨（ひとり）なり、丁は畦丁（はたけつくり）、園丁（はなつくり）、山丁（やまど）の丁也、單は自己、自己の丁と爲るなり。

(ヲ)聖賢群。維摩の觀衆生品の、此の室釋迦牟尼佛云云、是な八未曾有難得の法と爲すにとる。

(ワ)彼此。西堂と國師と。

(カ)同風千里。君子は千里同風、

不レ羨ニ聖賢來作一レ群。

有レ僧掘レ地得ニ佛舍利一因索ニ師偈一

地中湧出赴ニ機緣一。一顆圓光含ニ大千一。難測難量奇特事。
明明只在ニ钁頭邊一。

璞翁西堂見レ寄レ韻

彼此隨レ緣卜ニ別山一。同風千里固爲レ難。楚雲越水無ニ遮障一。
日夜相逢話ニ老殘一。

放牛

鞭繩抛卻任ニ天眞一。欄外遨遊不レ顧レ人。將謂無レ由レ討ニ蹤跡一。
塵沙刹界現ニ全身一。

清溪

攪不レ渾時無ニ淺深一。水天得レ一碧沈沈。要レ窮ニ眞箇曹源脈一。
休下向ニ中流兩岸一尋上。

閒叟

凡聖行儀都不レ干。騰騰任運似ニ癡頑一。這般活計無ニ人識一。

世の太平なること。

放牛。光林禪師、具圓提に嗣ぐ、法觀・建長・建仁・天龍・南禪に住す。

清溪。通徹禪師、國師に嗣ぐ、元國に游方すること多年、淨居・臨川・天龍・南禪に住す、後ち丹の常照に居す、第二世となる、至德年中寂す、大井河に水葬す。

中流。賢聖を云ふ、維摩の見阿閦佛品に、此岸ならず彼岸ならず、中流ならずして、而も衆生を化すと、肇注に此岸は生死、彼岸は涅槃、中流は賢聖也と。

閒叟。閒叟宅間禪師、國師に嗣ぐ、臨川に住す。

古源。邵元禪師、雙峰源に嗣ぐ、元に入り、諸老に參見す、貞和の間、大聖・等持等に住す。

默翁。妙誠禪師、國師の法嗣、

一箇老翁天地間。

(ツ)古源

曹溪一滴先二威音一。流遠方知出處深。可レ惜今時未レ還客。外求二竺土大仙心一。

(ネ)默翁

默翁求二我默翁頌一。自語相違笑二倒人一。不二門中重檢點。維摩也是樺來脣。

(ナ)中巖

不レ墮二兩邊一呈二嶮峻一。更無二差路與レ人行一。空生未レ解談二般若一。幸有二(ラ)孤猿叫二月明一。

(ム)玉巖（鎌倉殿）

峻機光潔非二琱琢一。八面玲瓏絕二點埃一。好是現成般若體。諸天日夜雨レ花來。

(ウ)瑞山（三條副將軍）

艸木呈レ奇禧氣浮。祥雲靉靆覆二峰頭一。千巒萬阜推二高德一。

補陀・妙幢・臨川に住す。

(ナ)中巖。中本禪師、國師に嗣ぐ。

(ラ)孤猿。永明壽禪師の孤猿叫落中嵓月の偈。

(ム)玉巖。鎌倉管領基氏の法號、足利尊氏の子、義詮同母弟なり、卒して瑞泉寺に葬る。

(ウ)瑞山。足利義詮。

(ヰ)蒼生。人民を云ふ。

(ノ)親炙。親近して之に薰炙するなり。

(オ)平山。善均禪師、國師に嗣ぐ、天龍及び臨川に住す。

(ク)中心樹子。玄沙備禪師云く云云、この緣、禪林類聚十九に出づ、之を略す。此の事を喩へていふの語なり。

(ヤ)鐵舟。德濟禪師、國師に嗣ぐ、元に入り名山に遊履す、阿波の補陀、京の萬壽、播の瑞光に住す、師元に在るの日、元帝その德を崇んで圓通大師の號を賜ふ。

那箇(?)蒼生不レ受レ麻。
送二榮首座赴二長保一
(ノ)親炙多年緣自熟。一朝告レ別下二西州一。住山祕訣休二求覓一。
錔斧元來在二手頭一。
(オ)平山
坦夷寬廣絶二高低一。七凸八凹歸二一齊一。最頂不レ知在二何處一。
元來無二路與レ人躋一。
方外
一片閒田無二四至一。(ク)中心樹子也難レ看。回レ頭南北東西表。
始信從前被二眼瞞一。
(ト)鐵舟
徹頭徹尾自渾鋼。不レ入二洪爐一泛二大洋一。盡謂尋常船舫類。
是非海裏錯商量。
(マ)絶照
(ケ)明鏡和レ臺打破來。瞎驢眼裏不レ生レ埃。暗昏昏地家風別。

(マ)絶照。名は智光。
(ケ)明鏡。明鏡も亦臺あらずの六祖大師の偈。
(フ)適庵。法順首座、國師に嗣ぐ、龜山記室に居して、秉拂後第一座に遷る。
(コ)自若。妄動なきを云ふ。
(エ)眉峰。古詩に、登レ高寛二眼界一。望レ遠展二眉峰一。
(テ)傀儡。でくのばう、木人能く歌舞すなどいふ。
(ア)鷸蚌爭。兩者相爭ふ間に、他の者にその利を獲らるゝを云ふ。
(サ)閻魔。閻摩は此には雙と云ふ、羅社は此には王と云ふ、兄及び妹皆地獄の主となる、兄は男子を治し、妹は女の事を理す、故に雙王といふ。
(キ)考鞠。罪人を窮理する也。
(ユ)放馬華山。書經の武成篇に、王商より來る、豐に至る、乃ち武を偃せ、文を脩め、馬を

一任燈籠笑口開。

㋐適庵

主人㋙自若展眉㋓峰。椽柱欐梁呈笑容。更有一般和悅處。
半窓明月半窓風。

因亂書懷

世途今古幾窮通。萬否千臧歸一空。㋢傀儡棚頭論彼我。蝸牛角上鬪英雄。須知㋐鷸蚌相持處。終墮閻魔㋚考鞠中㋖。㋙放馬華山待何日。不如㋱頓覺城東㋯。

華山の陽に歸し、牛を桃林の野に放つ、天下に復た兵を用ひざることを示す。
㋱頓。すてる。
㋯覺城東。唐譯には福城。

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄下　終

跋

㋑我が宗に語句なく、亦法の人に與ふるなし。佛國道く、「漏逗少からず」と。夢窓國師、夢中驚覺して、起き來つて便ち見る。三世の諸佛夢なきに夢を說き、六代の祖師夢なきに夢を說き、天下の老和尙も夢なきに夢を說く。還つて夢窓の落處を知る麼。一國の師、㋺三朝の敬する所、南禪初步、淨智後に遷る。圓覺重ねて臨み、天龍再び住す。直に得たり炎天白雪を飛ばし、陸地に紅蓮を產す。樹頭驚起す雙々たる魚、石上迸出す長々たる笋。斯くの如きの機用、豈に測量すべけんや。設使㋩疎山㊁石頭も、也た須らく退身三步して始めて得べし。

㋭至正二十六年八月

前嘉興天寧㋬楚石道人梵琦謹跋

㋑我宗無語句。年譜に、嘉元元年師二十九歲、氣を以て自負ふ、一日非を知りて一山に詣し呑ふて曰く、某甲已事未だ明めず、請ふ師指示せよ。山云く、我宗に語句なし、亦一法の人に與ふるなしと云云。

㋺三朝。序文に見ゆ。

㋩疎山。光仁禪師、洞山价禪師に嗣ぐ。

㊁石頭。希遷禪師、靑原行思に嗣ぐ。この疎山・石頭の二師の名に因んで、夢窓國師は諱を疎石と名けらる、年譜に、永仁元年師年十九歲、一夕恍然として人あり、師を引いて疎山・石頭に到らしむ云云の因緣により、服を易へて參禪す、自ら疎石を名とし、夢窓を號とすとあり。

㋭至正。大元順宗年號、日本の南朝正平廿一年、北朝の貞治五年に當る、國師寂後十五年なり。

㋬楚石。梵琦禪師は原叟端に嗣ぐ、大惠六世なり。

この脚注はこの語錄の事苑に專ら依りて起稿す、中に就いて珠曰くとあるは、大觀文珠禪師（東嶺圓慈に嗣ぐ、天保年中の人）の諱にして、その付號なり。

（譯注者 法常皇寺沙門宮裡祖泰白）

先國師、語要、嘗て世に傳ふること許さず、故に吾が徒之を藏して未だ敢て違囑せず矣。然るに藤原公德叟居士、乃し英烈の丈夫にして、既に身門弟子と爲り、其の機鋒と存する所とは、禪會に預る古の名士輩と雖も、未だ必ず過ぎず。輙ち語本を取つて以て梓に命じ、且つ誡しむる所に依つて、亦吾が徒をして之を議せしめずんばあらず。吾れ則ち謂ふ、先師之を見ば、尙ほ遏めず焉。諸方亦必ず爲めに之を勘驗せん。但妙葩、勉めて紀に從つて歳月を以てすと云ふ。

貞治之四年歳在二乙巳一五月二十二日

天龍住山門人春屋妙葩謹書

この跋の前年に楚石梵琦の跋あり。

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄附錄

西山夜話

師、南禪に住せしとき、元翁和尚（佛德禪師）師に謂うて云く、「和尚㋑叢林を出でゝより來、二十餘年、其の間動止定まらず、既に十餘箇處に迨ぶ、我れ心中に以謂らく、此れ豈身を勞し道を障ふるの因緣に非ずやと、近ごろ㋺像法決疑經を看るに、佛の言はく、『比丘の止住、三月に過ぐること莫れ、若し人謗して、此の比丘動止定まらずといはゞ、必ず當に㋩泥犂に墮すべし』と。此れより僻情已に破れ了んぬ」と。師の曰く、「我れ必ずしも其の佛制を守るが故に爾るにあらず、直に大圓覺を以て我が伽藍と爲す、東に去り西に留る、未だ嘗て暫くも其の中を離れず。世多年一處に止住するものあり、未だ必ずしも一牀の上に坐せず、ある時は㋥東司に趨り、ある時は㋭後架に到り、ある時は庭前に徘徊し、ある時は山頂に眺望す、此れ豈動止不定なるに非ずや。然も其の動止未だ嘗てより此の一處を離れざるが故に、我が身別處に在り

㋑**出叢林**。しゆぎやうをすましてなり。
㋺**像法決疑經**。住處に執著し、俗人に如似し己が舍宅を護つて、時に依りて三月に一たび移ること能はざれ云云。
㋩**泥犂**。地獄なり。
㋥**東司**。又は登司、郭登に同じ、厠の神なり、登は主也、今人誤りて東司となす。
㋭**後架**。架は棚也、東司所用の器具を置くところで、不淨を洗ひその他の事をなすところ。

と謂はず、若し其の有限の情を轉じて、以て無邊の境に遊ばゞ則ち何の怪しむことか有らん乎。」

僧ありて、師に謂ふ、「和尚は是れ臨濟下の兒孫、而して本分を以て人を接せず、常に經典を講ずることは何ぞや。」師の曰く、「夫れ善知識は、須らくこれ解行相應して始めて得べし、縱ひ相應すと雖も、若し也た時機を得ずんば、則ち世に益なし矣。余羽毛未だ具はらず、力量未だ充たず、其の機を得ず、其の時に逢はず、寧ろ我を怪しみ得ん乎。今時己眼未だ明かならず、妙用未だ備はらず、只識情を以て、古人の標格を學得して、一挨一拶、轉轆轆地、乃ち宗風を擧揚すと謂へり。看來れば只是れ一時の風流、古人の體裁を學ぶことは則ち易く、古人の利益を得ることは則ち難し。若し夫れ其の利益なきことを顧みずして、徒に其の體裁を得るに誇るものは、固に吾が期する所に非ざる耳。」僧の云く、「若し爾らば、則ち和尚胡爲れぞ出でて法社を主り、錄を談じ經を講ずる耶。」師の曰く、「惡業を造るものは、寧ろ泥梨に墮せんが爲ならん乎、而も泥梨に墮することは、只業力の爲に牽るゝが故に爾り。吾れ未だ肯て長老の名を求めず、而も出でて法社を主ることは、只前生片善の爲に驅らる故なり。然れども吾れ亦必ずしも門を閉ぢて自ら活することを圖らず、且行くに因つて◯臂を掉はんことを爲す。是を以て經を講じ錄を談じて、或は未だ因果を知らざる者をして、昇沈あることを知らしめ、或は未だ大乘を解せざる者をして、玄譚あることを解せしめ、或は未だ祖宗を信ぜざるものをして、此

◯掉臂。孟子盡心章に故事あり。路に不平を見て、刀を拔いて相助くるの的のこゝろと事苑にあり。

の事あることを信ぜしむる而已。古人或は㋣路口に在つて、茶湯を旅客に施す、斯れ乃ち衆緣を結ぶなり、吾も亦是くの如し、只佛祖の言教を談じて、以て衆緣を結ぶ耳。」僧の云く、「今時の僧俗、亦禪を信ずるもの多し、何ぞ其の機を得ずと言はん乎。」師の曰く、「世に禪機なしとは道はず、只吾と針芥相投ずるの機なき耳。」僧の曰く、「鈍根の人縱ひ悟らずと雖も、直に本分を以て之を接せば、則ち結緣の分、亦以て深かるべし。何の故ぞ之を弃つる乎。」師の曰く、「道ふことを見ずや、㋲千鈞の弩は、鼷鼠の爲に機を發せず、如來出世、閒言長語、海藏に滿つ、何ぞ直示せざる耶。爾宜しく之を思ふべし。㋷圓悟禪師曰く、『先づ其の偏墜する所を奪つて、然して後に示すに本分の鉗鎚を以てす』と。㋦大慧禪師曰く、『宗師は須らく衆生の機を備へて法を說くべし、擊石火閃電光の一著子の如きは、是れ這般の根器にして、方に承當し得ん。根器不是の處に之を用ひば、則ち㋸苗を揠くなり』と。」僧の云く、「若し爾らば則ち如來の所說は、皆是れ虛語なり乎。」師の曰く、「是くの如きの所問、皆正問に非ず、故に我が前に答ふる所も亦正答に非ず、只爾の情に徇つて、且つ泥團を弄ずるのみ。人ありて書を以て㋾大慧に呈して云く、『請ふ公案を示せ。』慧答へて曰く、『聞く爾常に圓覺經を讀むと、吾が示す所の㋻公案も、亦其の中に在り』と。大慧平生示す所の公案

㋣路口施茶。奇特の事なり、衆生緣を結ぶためならばなほよし、名聞ならばなほわろし。
㋠千鈞弩。三國志魏志、荀彧の語、鼷は小ねずみ。
㋷圓悟。圓悟心要。
㋦大慧。大慧書の下。
㋸揠苗。孟子公孫丑上にあり、徒に益なきのみに非ず、又之を害するなり。
㋾大慧。大慧書下。
㋻公案在其中。大慧書。

は、須彌山、乾屎橛、趙州の無の字等是れなり、謂ふ經文を看よ。是くの如くの公案、何れの處にか在る。倘し能く此に於て會得せば、啻圓覺のみにあらず、千經萬論及び世間麤言細語に至るまで、祖師の公案、如來の所說にあらずといふことなし、豈之を虛語と謂はん哉。恁麼ならば則ち寧ろ經敎を講ずるを以て、吾を謗して宗師の體裁を失ひぬと言はん乎。㋕古人云く、『馬祖百丈以前は、多く理致を示し、少しく機關を示す、馬祖百丈以來、機關は多く理致は少し』と。此れ亦何の謂ぞ乎。上古の知識、眼なきが故に多く理致を示すと謂はん耶。當に知るべし祖師門下は、㋵座主家の法門の、㋟一尺は終に一尺、二尺は終に二尺なるに似かず、只是れ機を見て作す、通途變格、之を破家散宅と謂ふ。今時或は機關を貴び、或は理致を崇ぶ、並に是れ座主家の法門を出でず。世尊の言はく、『始め鹿野苑より終り跋提河に至るまで、未だ嘗て一字をも說かず』と。且く道へ是れ理致耶、是れ機關耶、若し也た此に於て薦得せば、吾を讃することも也た得たり、吾を毀ることも也た得たり。」

師每に徒に謂うて曰く、「余年二十にして、業を㋹建仁に受く、堂裏を出でずして、㋞孜孜として此の事を參究す。明年の冬㋡關東に下つて、錫を㋧巨山に掛く。㋤耆宿あり余に諭して云く、『古人の機緣語句、之を版に刊つて、以て流通することは、他なし只後生勉學をして、此に因つて悟入せしめん

㋕古人云。圓悟心要に出づ。
㋵座主家。經敎を講ずる學解優秀の人を云ふ。
㋟一尺終一尺。大慧普說。
㋹建仁。無隱範禪師に就いて。
㋞孜々。汲汲也、勤也。
㋡關東。鎌倉。
㋧巨山。巨福山建長寺。
㋤耆宿。六十を耆と云ふ。

ことを欲す。而今虚を承け響を接して、以て名(ラ)繮利鎖の資と為るもの多し。或は自ら道人と稱して知識に參せず語錄を看ず、只管濛濛として閒坐するものあり、並に是れ禪錄流通の所由を失する者なり。世澆季に迨んで、眞の知識あること罕なり、苟も向道の志を勵して、以て禪錄を看ば、則ち古人の機緣、卽ちこれ今人の機緣なり、安ぞ古今の異あらん哉。」余其の言を甘んじて、禪餘寮に歸つて語錄を看閱す。茲に一山國師建長圓覺に兼住す、其の會下に在つて、數年晨昏に親炙して、吾が家の宗脈を參決す。自ら謂へり、禪門の宗旨、明らめずといふ所なしと、時に復た自ら胸中を顧みれば、依前として未だ穩かならず。乃ち知んぬ門より入るものは是れ家珍にあらざることを。(ム)古人の云く、『靈光不昧萬古の徽猷、此の門に入り來りて知解を存すること莫れ』と。我れ敎門を出でて禪門に入る、所學異なりと雖も、知解是れ同じ。(ウ)只麼に時を過さば、其れ豈靈光を昧卻するものに非ず哉と。便ち年來貯ふる所の(ヰ)骨董袋を以て、悉く丙丁童子に付す。時に佛國禪師、萬壽に住す、余初めて(ノ)函丈に詣して、先づ其の所志を伸ぶ。佛國之を歎じて乃ち云く、『我れ年十六にして、(オ)業を東福に受け、一の耆舊に依止す。他我をして禪錄を讀ましむ。之を讀むこと一行し

(ラ)繮。韁也、之を繫つて馳限を出づることを得ざらしむる也、名聞のさかひ、利得の鎖鑰なり。

(ム)古人。傳燈錄九、平田普岸の章に出づ、有時衆に謂つて曰く、神光不昧云云。

(ウ)只麼。ひたすらなり。

(ヰ)骨董袋。霏雪錄に、骨董は乃ち方語、初より定まれる字なし、東坡は骨董に作る、晦庵は汨董に作る、がらくたぶくろといふ意。

(ノ)函丈。方丈に同じ。

(オ)業を。佛國禪師は年十六にして東福開山聖一國師に從つて滿分戒を納る。

て、就いて此の意如何と問へば、他云く、宗門の語話は、教家の所談に似かず、故に敢て解説せずと。我れ云く、苟も解説せずんば、云何ぞ其の旨趣を知らん。他云く、須らく是れ自ら悟つて始めて得べしと。我れ又問ふ、錄を讀み功を積んで、自然に悟を得んや否や。他云く、若し悟り去らんことを要せば、直に須らく自ら究むべしと。我れ斯の言を聞いて、復錄を讀まず、便ち堂裏に歸つて打坐す。僧侶多く來つて我を勸めて云く、少年の人先づ須らく學問すべし、一旦の道心、㋗克く終りあること鮮し、老後必ず悔ゆる所あらんと。我れ敢て動せずして、彌々坐禪を好む。今年已に六旬に逾ぐるまで、未だ悔ゆる所あらず』と、言ひ已つて一笑す。余其の激勵を聞いて、志操彌々堅うして、風雨を憚らず、連日去つて參ずれども、粗趣向ありて、未だ徹底の分あらず。深く跡を丘壑に晦して、以て此の事を究めんことを欲して、遂に㋳瑞鹿を出でて、奥州に下りて、居を深山に卜して、自ら誓ふ、若し此の事を明めずんば、須らく艸木と倶に腐つべしと。圜悟心要・大慧書・林間錄之を机上に置いて、以て警策と爲す、其の外は蓄ふる所なし。閒居已に三霜を閱、見地未だ一片と成らず。一日忽ち佛國禪師、別に臨んで垂誨するを憶ふに云く、『道人若し世出世に於て、毫釐も挾む所あらば、則ち悟入すること能はじ』と。自ら惟ふ我れ世諦に於て、曾て希ふ所なし、然も未だ佛法を挾んで、以て悟入の障を作すことを免れずと。既に此の非を知つて、馳求の心自ら歇んで、只麼に兀爾として、時を過す而已。一夜墓地に從前妄想の窠窟を踏飜して、

㋗鮮克有終。詩經の大雅蕩に。
㋳瑞鹿。圓覺寺の山號。

方に知んぬ佛國の示す所、虛語に非ざることを。此れより㋮比來、蓄ふる所の三部の語錄、亦皆人に付して、眼書を看ず、脇席に著けず、只閑閑地を守つて、二十年を經、老來力衰へて常坐に耐へず、又業風に吹かれて、住院徒を匡すに至つて、西に㋘擂し東に倒る。然も操履初志に負くと雖も、未だ塵緣に泥じて本明を昧まさず、斯れ乃ち從前常坐不臥の力なり。或は法堂に陞つて、胡說亂道し、或は衆請に應じて、錄を談じ經を講ず、言奇を欠くと雖も、心畏るる所なし、亦是れ從前學解を弃捐するの效耳。此に到つて方に信ず、古人の道く、『愈晦ませば愈明かなることを。』若し也た之を晦まして又晦まし、以て晦ますことなきに至らば、則ち自家の大機大用、求めずして自ら現前することを得んこと、得て疑ふべからず。」

師又曰く、「佛光禪師佛國に謂うて云く、『我れ日本の兄弟を見るに、一生に悟を得るもの多かるべからず矣。此の國の風たるや、只智才を貴んで、悟解を求めず、是の故に設ひ靈根の者あるも、內外の典籍を博覽して、深く巧僞の文章を嗜んで、自ら此の事を究むるに遑あらず。迷中に一生を過し了る、固に憫むべしと爲す。或は一類、道人と稱する者あるも、多くはこれ其の器量博學强記に堪へず、故に閑坐を以て功業と爲して、眞實向道の心を辨せず、此の類亦今生に開悟すべき者にあらず。』佛國先師、余が爲に之を說く、余乃ち問うて云く、『若し靈根を具して直下に參究する者は、且く置いて論ぜず、前の所謂二類の中、何れの輩を優れりと爲ん。』先師の曰く、『直饒

㋮比。次也。
㋘擂。たふし、礧に同じ、つみおとすなどに用ふ。

鈍根にして今生に悟らずとも、倘し能く孜孜として臘月三十日に㋐捱到せば、業力の爲に牽かれず、來生出頭し來つて、必ず當に一聞千悟すべし。若し博學を以て業と爲すものは、翅虛しく閻浮に來つて打一遭するのみにあらず、亦恐らくは來生不如意の處を招き得んことを』と。」

僧ありて師に問ふ、「多く學功を積みて、以て談柄を資るものは、固に言ふに足らず。㋙古語を博覽して、智光を發するものは、何の過かあらん乎。」師曰く、「中下の根機、直下に家に到ること能はず、千聖此を憫んで、且く㋓遽廬を設けて以て之を接す、其の遽廬とは儞が所謂古語なり。若し其の益を論ぜば、則ち經に經師あり、律に律師あり、論に論師あり、何ぞ禪師を怪しまんや。㋢古人の云く、『達磨西來、文字を立せず、直に人心を指して、見性成佛せしむ。』又云く、『此の事若し言句の上に在らば、一大藏敎豈言句なからん乎。祖師西來を用つて什麼にか作さん。』黃檗禪師の云く、『學者若し成佛せんことを欲せば、一切の佛法總て學ぶことを用ひざれ、唯無求無著を學せよ』と。無求なるときは卽ち心生ぜず、無著なるときは、卽ち心滅せず、不生不滅卽ち是れ佛なり。八萬四千の法門、祇是れ接引の門なり。翅祖師門下獨り此の說を作すにあらず、㋐了義の大乘も亦皆轍に合ふ。法華に云く、『我れ阿難と空王佛の所に於て、同時に菩提心を發す。阿難は常に多聞を樂ひ、我は常に精進を勤む。是の故に我れ已

㋐捱到。捱はのびゆるむ也、しかたなくきたならばじや。
㋙古語。古人の敎。
㋓遽廬。はたごや、旅舍也。
㋢古人。圓悟心要。
㋐了義。涅槃經の四依品には、不了義は聲聞乘をいふ、了義とは名けて菩薩眞實智惠と爲すとあり。

に菩提を成ずることを得たり。」楞嚴に云く、『阿難、佛を見て悲泣す。恨むらくは無始より來、一向多聞にして、未だ道力を全うせざることを。』圓覺に云く、『末世の衆生、成道を希望すれども、悟を求めしむることなし、惟多聞を益して、我見を增長す』と。縱ひ群籍を覽て、智光を發すとも、豈阿難と肩を齊しうすること得ん哉。夫の阿難の多聞を得るを學ばんよりは、曷ぞ世尊の菩提を成ずるを學ぶに若かん。余事已むことを獲ずして、錄を談じ經を講ず、只人をして佛祖の玄旨の文字言句の中に在らざることを知らしめんと要す耳。」僧又詰りて云く、「宗門最上の機を接すと雖も、亦意句を立す。其の中意句倶に到るを以て勝れたりと爲す。爾らば則ち伶利の漢あつて、意句並び參せば、何の不可なることか有らん乎。」師曰く、「古人の云く、『未得底の人は句に參せんより意に參ずるには如かじ、到得底の人は意に參ぜんよりは句に參ずるには如かず』と。爾只意句を立することを知つて、未だ意句を立する所以を知らず。㋚古人又云く、『句能く意を剗り、意能く句を剗る。意句交馳す、之を畏るべしと爲す。爾還つて此の語を會す麼、須らく知るべし本分の田地は、意句倶に相干らざることを。然も是くの如くなりと雖も、建化門の中、且く意句を論ず、初心の學者、情識の中に於て、宗師の話脈に參ぜんと欲せば、則ち自ら路頭を塞いで、悟入するに由なけん。故に云ふ、未得底の人は、句に參ぜんより意に參ぜんには如かじと。已に悟入を得る者、若し未だ句に達せずんば、則ち宗師の體裁を失卻して、人を接すること能はず。其の意句倶

㋚古人又云。大慧法語上。

に到ることを貴ぶことは、豈に初機をして、意句並び參せしむるの謂ならん哉。」僧の云く、「近來宗師人をして公案を看せしむ、此れ豈初心の學者に句に參ずることを敎ふるに非ず耶。」師の曰く、「然らず、圓悟禪師の云く、『初機勉學、乍爾ち參ぜんことを要すれども、㋖捫摸の處なし。先德慈を垂れて人をして公案を看せしむ。蓋し法を設けて其の狂思橫計を繫住して、識慮を沈めて專一の地に到らしむ。驀然として心の外より得るに非ざることを發明すれば、向來の公案は乃ち門を敲く瓦子なり』と。圓悟與麽の說話、豈人を欺かん哉、當に知るべし、先德人をして公案を看せしむる、只自家大解脫門に入得せんことを要する耳。大慧禪師每に學者の爲に、古人の話頭を擧似して云く、『意根下に向つて卜度すること莫れ、擧起の處に向つて承當すること莫れ、㋴無事甲裏に颺在すること莫れ』と。大慧恁麽の擧似、老婆心も亦其の中に在り、瞖睛の術も亦其の中にあり、若し能く與麽に提撕せば、之を句に參ずと謂ふべからず。縱ひ蒲團上に坐して、心を冥して寂默すとも、苟し語路の上に於て活計を作さば、則ち是れ意に參ずるの人にあらず。㋱圜悟の云く、『卽心卽佛、已にこれ八字に打開す、非心非佛、重ねて當陽に向つて點破す。其の言を尋ねずして、一直に便ち透つて、方に古人赤心片片たるを見ん、更に他の語言の中に入らば、則ち永く透脫せじ』と。又云く、『若し大根器を具せば、必ずしも古人の言句公案を看ざれ、但只朝より起きて、念を正卻し心を靜卻し

㋖捫摸。さぐろこと、まれろなり。

㋴無事甲裏。閣板の第一層なり、閣板(たないた)は甲乙を以て號と爲す。

㋱圜悟云。圜悟心要の中に出づ。

て、凡そ指呼する所、作爲すること一番、再び更に提起審詳して看よ。是れ箇の甚物か、如許多を作爲し得と一たび透らば、則ち清淨無爲の道場なり』と。二大老の示す所、寔にこれ參禪の樣子なり。今時の學人、多くは是れ冊子の中に於て、古人の話脈を探り得て、胸中に蘊在して、代語別語滯る所なし、一抜一摋自由を得て、自ら謂へり、祖師の玄旨止此くの如しと。此れは乃ち圜悟の所謂、狂思横計の類なり。」

僧又問うて云く、㋯「虛を承け響を接して、自ら悟達すと謂へるものは、寔にこれ狂思横計の人なり。若し伶俐の漢あつて、實に句中の眼を得ば、寧ろ之を悟達の者に非ずと謂はん乎。」師曰く、「直饒ひ句中の眼を得るも、若し未だ見地明白を得ざる者は、名づけて句到意不到の人と曰ふ。若しこれ虛を承け響を接するの流、之を許するに足らず、古人云く、『但本を得て即ち末を愁ふること莫れ』と。見處明白はこれ本なり、機鋒穎脱はこれ末なり。譬へば樹を種ゑて其の根活することを得ば、則ち枝葉花果榮茂せずといふこと靡きが如し。㋛大慧禪師の曰く、『大凡參禪は、必ずしも機鋒あつて、便ち我れは是なりと言はざれ。』昔㋵雲蓋の智和尚、道眼明白なり、因に太守山に入つて、談空亭に憩うて、問ふ、『如何なるか是れ談空亭。』智云く、『只是れ箇の談空亭』と。太守喜びず、遂に擧げて㋪本嵩願に問ふ、本云く、『只亭を將て法を說く、何ぞ口を用て空を談ぜん。』太

㋯承虛接響。これはさとりつくして、師家の印可を受けたるなり、印可はゆるし。
㋛大慧禪師曰く。大惠武庫。
㋵雲蓋智。黃龍南に嗣ぐ。
㋪本嵩願。白雲端に嗣ぐ。

守乃ち喜んで本を遷して雲蓋に任せしむ。若し本を以て智に較べば則ち大いに遠し。乃ち知んぬ眞實の事、機鋒を以て取るべからざることを。㋲寶峰元首座、亦有道の士なり、答話の機鋒鈍なり、㋝覺範號して元五斗と爲す。蓋し口を閉ぢ氣を取つて、五斗の米を炊ぎ得て、熟せしめて方に一轉語を答へ得たり。」

僧又問うて云く、「文字言句、若し學者に於て害を爲さば、何の故ぞ古來の尊宿、各代語別語拈古頌古ありて、世に行はるる耶。」師の曰く、「明眼の宗師、東語西話、以て學者を接す、示す所異なりと雖も、皆是れ㋜小玉を呼ぶの手段なり。若し吾が家の種草ありて、言外に旨を領ぜば、則ち宗師の言句、何の害かあらん乎。然も事久しうして弊を成す、㋑株を守り㋺舟を刻むもの多し矣。玆に因つて宗匠間出でて、其の弊を救ふ、之を通途變格と謂ふ、亦破家散宅と爲す。昔圜悟老師、夾山に住せし時、學者の爲に雪竇の頌古を評唱して、名けて碧巖集と曰ふ。㋩佛鑑禪師書を以て之を責む。其の略に云く、『某昔㋥祖峰老師の左右に奉じて、嘗て其の語を聞く、個の輩他後忽ちに人天の師範と爲らば、切に宜しく此の事を以て自ら勉むべしと。某遂に心に銘じて敢て玆を忘れず、老兄邇來兄弟の雪竇の頌古を請益するが爲に、許多の擊

㋲寶峰元。眞淨文に嗣ぐ、元又原に作る。
㋝覺範。洪。眞淨文に嗣ぐ。
㋜呼小玉。小艷の詩に「一段風流畫不レ成、洞房深處惱二愁情一、頻呼小玉元無事、只要檀郎認二得聲一」と。大慧武庫にこの因緣くはしく出づ。
㋑守株。くひぜをまもる、時勢に伴はずして舊習を守るをいふ、韓非子にこの話は出づ。
㋺刻舟。頑固にして時勢に通ぜざるを云ふ、呂氏春秋にこの話は出づ。
㋩佛鑑禪師。太平慧懃、五祖の演に嗣ぐ、この書は緇門警訓に出づ。
㋥祖峰老師。此の人、誰人なるか未だ詳ならず。

節ありと聞く、某之を聞いて覺えず涕を灑ぐ。自ら謂へり、高踏の士何ぞ此に至ると矣。老兄何ぞ達磨未だ來らざる時の因緣を激揚して、學者を誘掖せざる云云。』大慧普說の中に云く、『先師佛鑑の書を見て遂に已む」と。然も好事のものありて、㋭梓に鋟めて世に行ふ矣。後來大慧其の版を炬く、此れ乃ち破家散宅の手段なり。一炬の後、二百餘年、大元の㋬大德年中に迨んで、㋣張明遠といふものありて、復た重ねて版に刊つて、以て世に行ふ。三教老人と號するもの有りて之が序を爲る矣。其の始めに云く、『或人問ふ、碧巖集の成毀、孰れか是なる乎。曰く、皆是なりと云云。』其の序の中に、只圜悟之を成じ、大慧之を毀つこと皆其の以あることを陳ずるのみ。此の官人亦未だ宗師の手段、成毀の處に在らざることを知らず、馬祖百丈以前は、多く理致を示し、少しき機關を示す。馬祖百丈以後、機關は多く、理致は少し。風穴興化に至つて、唱彌高く和彌峻なり、亦これ通途變格の體裁なり。當に知るべし、祖師の宗旨、畢竟して理致機關の中に在らざることを。都てこれ小玉を呼ぶの手段耳。所以に道ふ、會するときは則ち途中受用、會せざるときは則ち世諦流布と。」又云く、「佛祖の言教を看ること、生冤家の如くにして、始めて少分の相應あらん」と。僧の云く、「苟し爾らば則ち都べて言教を看ず、默然として時を過すもの可ならん乎。」師の曰く、「古へ云く、『語言を以て到るべからず、寂默を以て通ずべからず』と、祖師門下文字を立せず、其れ豈默を喜んで語を惡まん哉。

㋭梓。正字通に音子、百木の長、一に木王と名く。
㋬大德。四年、元の成宗、日本の後伏見天皇正安二年なり。
㋣張明遠。諱は煒。

只人をして此の事の、語默の處に在らざることを知らしめんと要する耳。倘し能く此の事を透明すれば、佛祖の言敎咸くこれ我が屋裏の事なり。然らば則ち佛祖の言敎を知らんことを要せば切に宜しく從前の學解機智を放下して、放下の處に就いて、猛烈に一則の公案を提撕すべし。若し也た靈根あるものは、必ずしも公案を看て、亦寂默の處に墮せず。一切時中直下に參究す。此くの如くの類、並にこれ吾が家の道人なり。向來の所說偏に吾が家の道人の爲に之を諭す、其れ若し宿植浮淺にして都て道念なく、只管に博學を好む者は、是れ余が諭す所にあらず、然れども若し其の中に於て、或は因果の怖るべきを知つて、以て行儀を愼み、或は禪門の藩籬を窺つて、以て宗敎を補はゞ則ち以て相似禪を流通すべし、此れ亦弃つべからず。布袋和尙の㊉十無益の中に云く、『行學都て絕せば僧形無益』と、蓋し是れ此の謂歟。邇來叢林に復た一類ありて、專ら外典を學んで業と爲す、是れ意に參ずるにあらず、亦句に參ずるに非ず、喚んで禪僧と作さば、則ち可ならん乎。經論の中處處に之を呵す、既に佛子と爲つて佛制に拘はらざる者は何ぞや。」

僧又問ふ、「句に參得する者亦自ら謂へり、西來の意旨を透得すと、如何が其の意に參得するものに非ざることを驗みん耶。」師曰く、「古人の云く、『達磨西來別に一法の人に傳ふるなし、祇是れ人々具足箇箇圓成、佛祖と一絲毫を移易せざることを指出する而已。』既に人々箇々佛祖と一絲毫を移易せずと言ふ、何ぞ自他勝劣を其の間に容れん哉。若し人ありて、我れ已に悟れり、他未だ悟らずと謂ひて慢心

㊉十無益。傳燈二十七、布袋和尙の十無益出づ。

を生せば、則ち以て是の人未だ曾て西來の意旨に參得せざることを驗知しつべし。倘し能く西來の意旨に參得するものは、乃ち教門の性相專理、禪家の理致機關、盡くこれ(り)月を標する指、門を敲くの瓦なることを知らん。今時の學人到る處に頭を聚めて、指頭の短長を計較し、瓦子の大小を論量して、實法の會を作す、此れ乃ち語話の禪なり、寧ろ之を西來の意旨に參得するものと謂はん哉。(ヌ)大慧禪師少きより行脚して、語話の禪に參得して、自ら謂へり、參禪徹底と。三十六歲にして始めて其の非を知つて、遂に圜悟老師に逢ふて業識團を打破す。後來衆の爲に垂誨して、每に其の錯を說いて以て學者を誡しむ、以て今時學者の(ル)針芥と爲しつべし矣。若しこれ明眼の宗匠、手を垂れて人の爲にするは、把住放行擒縱殺活、擊石火の如く閃電光に似たり、之を活祖の手段と謂ふ、亦翳睛の術と名づく。永嘉大師の云く、『或は是或は非、人識らず、逆行順行天も測り難し』と。未だ這の田地に到らずして、其の體裁を學ぶ者は、啻自ら錯るのみに匪ず、多少の人を惹き得て、以て魔業を成せしむ、愼まずんばあるべからず。」

(り)標月指。圓覺經、清淨慧菩薩の章に出づ。

(ヌ)大慧自少行脚。普說一に十九歲出家、三十六歲にして圜悟に見ゆるの因緣、くはしく出づ。

(ル)針芥。はりやきうてん、くすりといふの意味。

國譯夢窻正覺心宗普濟國師語錄拾遺

臨川（イ）家訓

本寺の住持、妄りに請ずべからず、三會院の塔主、門弟の宿老と相共に商量して、其の器を選んで以て之に任ずべし。門弟の中、其の器なくんば、則ち他門の（ロ）名勝を請ずるも亦可なり。尋常度弟院の式に倣ふこと莫れ矣。

共住の僧衆、須らく其の人を擇ぶべし、自佗の門派を問ふこと莫れ。衆を安ずることの多寡は宜しく（ハ）莊園の土貢に隨ふべし。近來の長老、或は人情に徇ひ、或は弟子を憐んで、常住の煩費を顧みず、衆を安ずること分に過ぎて、以て山門の衰耗を致す、甚だ宜しからず。古人云く、「僧を安ずること必ずしも多からず、日用の齋粥、常に後手をして餘あらしめば、自然に力を費さず。」良い哉斯の訓、循はずんばあるべからず。

（ニ）沙彌（ホ）喝食の（ヘ）挂搭、五人に過ぐること莫れ、十七歳已前、（ト）僧と倣

（イ）家訓。顏氏家訓などに、一門内を整齊し、子孫を提撕するを以てなりとあり、この意なり。臨川とは、夢窓の塔所の名也。

（ロ）名勝。涅槃師子吼品に、名稱十方に充滿す、是を名勝と名づくと。

（ハ）莊園。領地。

（ニ）沙彌。此には息惡行慈と云ふ、又息慈とも云ふ。

（ホ）喝食。年七歳より十三歳に至るを皆驅烏沙彌と名づく、蓋し齋時に食を行ひ遍し了りて行者喝して食と云ふ、日本の叢林中古以來驅烏の沙彌をして喝食せしむ。

ることを許さず。
客僧若し常住僧の知己に非ずんば、接すべからず、接するところの客僧、一宿に過ぐること莫れ。或は風雨に阻てられ、或は事緣ありて淹留せば、當に住持に稟すべし。爾らずんば則ち典座之が爲に飯を打すべからず。古來の叢林、皆㋠旦過を開いて、以て方來を接す、今也宜しく之に倣ふべし。然りと雖も世澆季に迨んで、僧に似て僧に非ざる者多し。翅常住を費すのみにあらず、亦清衆を濫ることあり。此れ乃ち予が客を接することの、敢て古に倣はざる所以のものなり。

㋷兩班十人に過ぐること莫れ、㋦侍者は宜しく四人を請ずべし。請を受くるの人、固辭して若し其の謂あらば則ち免ずべし、理なうして辭せば、須ちく起單し去るべし。位に居ること須らく一囘を經べし、容易に退を告ぐることを得ざれ。大刹すら尙ほ人を得ること多からず、矧んやこれ小刹をや。一囘に滿つと雖も、如し交代なくんば、則ち住持懇請して之を留むべし。若し也た固辭して、再三に及ばゞ則ち免ずべし、須らく其の位を虛しうして以て後來を待つべし。㋸寮元㋾堂主、㋻淨頭聖僧侍者、人を缺くべ

㋬挂搭。僧籍を登錄するを云ふ。

㋣不許做僧。剃染を謂ふにはあらず、沙彌は只五戒十戒に止ろ、比丘戒を受けて始めて僧と云ふ。

㋠旦過。寮の名。暫到の人包を卸す處、則ち休息のところを云ふ。

㋷兩班。西序は前堂、後堂、書記、知藏、知客、知浴、知殿、侍香、侍狀、侍客、侍衣、侍藥、聖僧、侍者共に十四人なり、而して侍衣と聖僧のみは立班せず。東序は都寺、監寺、維那、副寺、典座、直歲の六員、雜務は干らず、今之を約して十人に過ぐることなかれと云ふ也。

㋦侍者。前に出すが如し、省く所は侍狀か。

㋸寮元。寮の頭といふこと。

㋾堂主。延壽堂主は病僧の湯藥

からず、寮元は須らく二十臘以上の人に係けて、半月半月代つて之を主らしむべし。堂主は須らく心を寛うし事に耐へて、病僧を哀憐するの人を請ずべし。淨頭㋖聖僧侍者㋕、若し自ら欲するの人なくんば、則ち十臘以下の僧に係けて、一月を限となして、輪番して勤むべし焉。若し戒臘少うして行年老いたるものあらば、宜しく之を免ずべし。（十臘以下如し足らざれば則ち十五臘以下之を勤むべし。）

本寺他山の耆舊、大小を論ぜず、並に堂裏に挿單して、禪誦作息衆と異なることなかるべし。或は東堂西堂、或は老衰して起居に堪へざるもの、宜しく其の意に隨ふべきなり。

衆僧の位次、耆舊堂僧を論ぜず、宜しく戒臘行年の次第に依るべし。其の中若し東堂西堂及び耆舊あらば、宜しく衆僧の上に在るべし。梵網經に云く、「先受戒の者は前に在つて坐し、後受戒の者は後に在つて坐すべし、如來の意、人をして戒法を尊重せしめんと欲す。故に此の說を作す。」然るに今時禪流の受戒の儀を看るに、多くは名ありて實なし。少年の僧我はこれ戒臘已に年序を經と道うて、便ち老僧の上に在つて坐す。其の言は則ち梵網の說に似て、其の理は則ち敬老の儀を失す。如來の制律、開遮時に隨ふ、堅執すべからず。是を以て予必ず受戒の先後を用つて位次と爲ず、同年の人は、戒を以て上と爲す、同戒の人は年を以て上と爲す。同年同戒の者は、宜しく挂搭

粥食等を看す。

㋖淨頭。地を掃ひ、香を裝ひ、籌を換へ、厠を洗ひ、湯を焚き、水を添へて、須らく是時に及ぶべし。

㋕聖僧侍者。これは今時は單に禪堂內の大衆の世話とかれて堂內の本尊を供養するの役になつてある、それで大衆のはきもののぬぎやうから、又衣類ふとんのしまつまでを監視してをる、すべて大衆の世話役である。

の後先に依るべし。若し十年他より老いたる者あらば、宜しく他の上に在るべし。若し其の戒十臘、他より先なる者は、其の年老いたりと雖も恕すべからず。予建化門の中に於て、且く此の說を作す、㊀眞如㋟法界には、自なく他なし、更に何の位次かあらん。只諸人各無諍三昧に入りて、無位の眞人を識得せんことを要する而已。

遠國莊園の公務は、須らく㋛莊主之を掌り、寺邊の田地に於ては、則ち都寺（或監寺 副寺）相共に之を掌るべし。莊主妄りに請ずべからず、宜しく其の人を選ぶべし。或は請或は改、並に宜しく住持と兩班大耆舊及び老僧と、相共に評定して、輕忽なることを得ざるべし。莊園の土貢、收納の時も亦須らく諸人評定して、細かに來年の齋料、及び修造の公用を計つて、常住をして衰弊を致さしむること勿るべし。住持及び知事、意に信せて支用すべからず、恐らくは大衆の疑怪を招くことを矣。

山門の規矩、須らく要を取つて行ずべし、必ずしも大叢林に倣はざれ。今時の叢林、禮數を事として、道行を廢す、豈古人規繩を立し、禮數を設くるの意を失はざることを得んや。如し其れ事の上に於て無事に通せば、則ち禮數の繁多なるも、也た何の妨かあらん。後生勉進は、此くの如くなること能はず、要ず須らく萬事を省して、專一に行ずべし。日用勤行の法式、具に年中行事に在り。

㊀眞如。楞嚴疏に、眞如は諸の虛妄を離る、故に眞と名づく、常住不變なる故に、如と名づく。

㋟法界。清凉大師云く、一切衆生の心體也、圭峰云く、一心の稱なりと。

㋛莊主。日本では大庄屋、又は代官など。

㋞四時の坐禪、唯㋡浴日㋧坐參を除き、其の餘は極寒極熱、㋤修正㋶蘭盆の時節も、亦㋰開くべからず。（若し坐禪の時に於て時に事の作すべき有らば則ち之を開くべし。）㋒趙州和尚云く、「我れ南方に在ること三十年、粥飯の二時を除く、是れ雜用心の處」と。趙州寧ろ粥飯の二時、是れ正用心の處にあらずと謂ふ耶、只これ其の粥飯を除いて、外更に餘事に雜はらざることを言ふ耳。此の老は生れながらにして知るの人なり、然も其の履踐工夫、猶ほ以て此くの如し、矧んやこれ自己未だ明めざるものを乎。古德又云く、「大事未だ明めずんば、當に考妣を喪するが如くすべし、大事已に明かならば、亦當に考妣を喪するが如くすべし。」古人苦口叮嚀なり、其の意豈人をして日を限り時を約して、工夫純ならざらしむるに在らん乎。上古の道人は、皆これ僻洞深巖を卜して、樹下石上に居す、更に何事の作すべきかあらん、寢を廢し飡を忘れ、一味に道を存す。百丈叢林を建立してより以來、普請作務、其の事少からず。然りと雖も人人道を以て頭を聚む、故に辨道工夫、曾て事緣の爲めに奪はれず。百丈滅後、三百年に迨んで、叢林の規繩漸く衰へて、緇流慚愧あること少し。始め㋼盤板坐禪の儀あり、之を四時の坐禪と謂ふ、蓋しこれ主法の

㋞四時。一日中に後夜、粥後、齋後、初夜。

㋡浴日。開浴といふて寒月には五日に一浴、暑天には毎日淋汗、日本の叢林も略ゝ之に同じ。

㋧坐參。古は晩ごとに必ず住持に參じて以て開示を求む、故に衆を率ゐてひとしく集り坐して鼓の鳴るを待つて、往いて之に參ず、名づけて坐參といふ、百丈清規にあり。

㋤修正。正月の初めに三日又は五日大般若經を轉讀又は眞讀して祈禱する、日本の禪宗寺院は今も之を行ふてゐる。

㋶蘭盆。盂蘭盆は訛也、正しくは烏藍婆拏と云ふ、此に譯して倒懸と云うて、七月十五日を自恣の日というて夏制九十日を了りて休養の意なり。この日施餓鬼會を行ひ、亡者の倒懸の苦を救ふ。

單宿、曲げて方便を設けて、以て解怠の者を誘く耳。今時の後生、猶ほ四時の坐禪を嫌ふ、動もすれば則ち省略せしめんと欲す、無慚無愧、此れより甚だしきは莫し。

臨時の(ノ)祈禱、或は敕命に順じ、或は武命に依つて、諸の寺院、一同勤行せば、則ち本寺も亦當に祈禱の牌を掛けて精誠を致すべきなり。其の余或は寺家の爲め、或は檀越の爲め、別に祈禱を作さば、則ち不可なり。毎日(オ)三時の看經諷咒は、併せて天下康寧、伽藍鎭靜の爲めなり。毎日の祈禱、若し効驗なくんば、一時の勤行、豈感應あらん乎。祈禱に二あり、所謂、俗塵の執心深重なるが故に、佛に祈り神に禱り、以て壽福を持し災厄を(ク)攘はんことを欲す、此れはこれ世間の祈なり。身心は道の器なり、虚しく棄つべからず、故に三寶諸天の哀憐を求めて、以て道に進むに障なきことを要す、是を出世の禱と爲すなり。今時の人佛法を信じ、神祇を崇ぶを見るに、多くはこれ世間の祈禱耳。僧家又世情に徇ひ、之が爲めに祈禱して、以て名利を貪る、其れ豈理の宜しき所ならん哉。師檀倶に道理に違ひ、佛神奚ぞ哀憐あらん。縱ひ小利ありとも、卻つて大利を失ふの因由

(ム)開。放開の意にて、止むの意、放參とも云ふ、止定の反對なり、放參は坐禪をせぬとき、止定は坐禪をする時。

(ウ)趙州云。本錄の上堂の語。

(ヰ)擊板。板をうつこと、叢林の規矩として今日でも禪堂では朝うつのを開板、夜うつのを解板と云ふ、生死無常を警むるの語が、この板にかいてある。

(ノ)祈禱。事を告げ福を求むる也、祈禱の牌を掲げて修するなり。日本では元寇の頃より始まりしが、禪宗の祈禱の最初じやと云ふ。

(オ)三時。支那の元朝時代に、中峰國師が幻住清規には諷經は粥罷と黄昏と二時を限りとあるが、日本では建仁寺の榮西禪師が興禪護國論には一日夜式亦二時也と、日中を加へて三時と爲すとは、夢窓國師の

とならん、愼まざるべけん乎。禪家只須らく萬事を省して本分を守るべし、乃ち是れ四恩を報じ三有を資くるの祈禱なり。

法堂之を構ふることを要せざれ、何んとなれば則ち古の叢林、宗說倶に通ぜるの人を以て、主法の者と爲す、會下の龍象、頭首の位に居して、以て住持の化を助く、故を以て上堂秉拂、所益尤も多し。今時の叢林、道古に及ばず、大刹の長老頭首すら、尙ほ以て其の人を得難し、何ぞ況や小院を乎。若し是れ智眼明かならず、機辨具せずして、心を相似の間語に勞し、念を滑稽の浮華に紛さば、謂つべし自ら欺き亦人を欺くと矣。如かじ住持頭首、衆と作息して、同じく㋳涅槃堂裏の禪に參ぜんには。若し也た住持、古人の體裁を具するものは、妨げず丈室に端居して、以て方來を接せんことを。寧ろ法堂なしと謂はん乎。

或は放曠として閒遊し、或は故往觀聽し、或は晚に門外に出で、或は夜他所に宿す、並に皆制すべし。若し要緊の事あらば、當に住持及び維那に稟して去るべし。

獨り比丘尼の庵及び㋮嫠婦の家に入ることを許さず、但佛事の爲に請を受くるを除く。直饒請に赴くとも伴なくして去るべからず。

夢中問答上に云く、大覺禪師建長に住するとき、日中の經課なし、蒙古の來寇に當つて、官寺院に命じて各祈禱を修せしむ、これに因つて日中特に觀音經を誦す、爾來沿襲して規となす、豈禪宗の本意と爲すべけんやとあり。

㋗攘。除也。

㋳涅槃堂裡禪。虛堂錄普說に出づ、又は延壽堂とも、省行堂ともかく、その實は人をして生死を了ぜしむるところと羅湖錄に出づ、佛眼禪師の語。

㋮嫠。寡婦也。

比丘尼及び女人、聽法の時に非ずして寺に入り來ることを許さず、直饒齋會の時節にも、亦寮舍の內に於て、茶飯等を喫せしむることを許さず。

方丈及び諸寮、緇白集會して、㋘點心を喫し茶宴を作し、游談日を終へて去ること甚だ宜しからず。唯特に佛事の爲にすることを除く、縱ひ佛事の爲に大齋會を設くるとも、點心一兩種に過ぐることなかれ。

若しくは㋫葷、若しくは酒、門に入れしむること莫れ、縱ひ㋙調菜の爲にすとも、亦用ふべからず。縱ひ俗客ありとも、日午以後、他をして食せしむること莫れ。寮暇の僧も亦中を過ぎて食すること莫れ。若し療病の爲に、非時食を要せば、宜しく延壽堂に歸すべし。僧に二種あり、謂く、菩薩僧、聲聞僧。圓頂方袍は、皆これ聲聞僧耳。㋓敎中に云く、「釋迦の法中別の菩薩僧なし。」蓋し釋迦如來㋢濁世に出でて、宜しく聲聞の形を以て、㋐慧命を績ぐべきに由る耳。是の故に佛鹿苑に赴いて比丘の形を現じ、文殊等の大乘の菩薩、亦皆剃染して、其の形體を同じうし、其の威儀を一にす。㋚法華に云く、「內祕菩薩行、外現是聲聞」と、乃ち此の謂なり。今時の禪流、多く言ふ、㋖大乘の行者、寧ろ禁戒を以て身を束ねん乎と。嗚呼此の說を作す者は、大いに如來諸弟子をして同じく聲聞

㋘點心。非時のおぎなひに食するを云ふ。
㋫葷。五辛等、臭菜及び魚鳥獸肉。
㋙調菜。料理のあぢつけなどに。
㋓敎中云。大智度論三十四。
㋢濁世。法華の方便品。
㋐慧命。止觀六の三、賢聖慧を以て命と爲す。
㋚法華云。五百弟子受記品。
㋖大乘行者。禪門寶訓下、萬庵曰く、叢林至る所云云の意なり。

の形と作さしむる所以の意に違ふなり。百丈の規繩豈小乘の學者の爲に設けん耶。然も佛運澆季に迨んで、㈠三千の威儀を具し、八萬の細行を守ること、誠に以て難しと爲す。些子の教誡、誰か之を守ること能はざらん、若しこれ能はざるもの、宜しく僧形を棄てゝ、俗に在つて禪を行ずべし、復た何の妨かあらん乎。

㈥請暇は五十日を以て限と爲す。若し遠く行いて早く歸ること能はざることあらば、則ち後日に歸り來つて、更に挂搭を求むべし。免と不免と須らく住持の意に任すべし。

寮暇は七日に過ぐること莫れ、七日以後、猶ほ未だ安きことを得ずば、則ち病暇を爲すべし。宜しく寮に在りて將息すべし。他處に在ることを得ざれ。

病暇の人は、宜しく延壽堂に在るべし、他處に在るべからず。若し他處に在つて療養せんと欲せば、宜しく請暇し去るべし。請暇若し日限を過ぎば、須らく其の單を抽づべし。輕安の後、更に挂搭を求むべし。或は免或は不免、宜しく住持の意に任すべし。病中只非時食を許す、葷酒等を喫することを許さず。律院の式、病を療ずるに五辛を食ふことを制せずして、㈦非時食を制す。其の制意尤も以あるなり。予が制する所此に反せり、亦所思あ

㈠三千威儀。名義集四に、二百五十戒に約して各四威儀あり、合して一千と爲す、三世に循じて轉じて千と爲す、三千威儀を將て身口七支に分配すれば、二萬一千と爲る、復た對治三毒及び等分に約すれば八萬四千と成る。

㈥請暇。「しんか」と讀みならはす、いとまをこふの意なり。

㈦非時食。日中午を過ぎての食を云ふ。

ればなり、怪しむことを得ざれ。或は藥を服するに酒を用ひて嚥下し、或は藥を煎ずるに少しく葱根を入るることは則ち之を禁せず、其の餘は宜しく如來㊁寧死不犯の誡に遵ふべし。謂ふこと莫れ酒肉五辛、能く人をして身を養ひ命を延べしむと。俗家長時に之を食ふもの、未だ長生不死の人を見ず。僧家道の爲に身を養ふこと、是れ古聖の制する所に非ず、幸に餘藥の用ふべきあり、而るに有罪の藥を求む、是れ愚の甚だしきものなり。人命保ち難し、病なうして死するもの多し、何に況や抱病の人をや。謂ふこと莫れ、先づ病を療じ後に道を行ぜんと。古人云く、「苦樂逆順其の中に在り」と。須らく知るべし、病惱の時節、乃ち是れ道の所在而已。

　近來の叢林諸寮、各小庫裏を構ふ、其の意樂殊に理に順はず、火事も亦怕るべきなり。一向に之を制す、僧家は宜しく枯淡を甘んずべし。鬧熱を愛することなかれ、縱ひ來客ありとも、氷雪相看も也た得たり。

　今此の伽藍は、偏に㋭都督親王の大願力に依つて興成す。因つて寺後をトして、報恩の塔を奉安す。其の傍に又卵塔を構へて、以て開山の儀を表す。中に彌勒堂を立てゝ、兩塔の昭堂に充つ。因つて三會院と號す、此れ皆公界の有るべき所の者なり。此の外伽藍の郭內、及び菜園の裏、私庵を卓つること莫れ、予三會院の東に於て、假山水を構へ、其の常住の菜園を犯用することを恐る。乃ち隣地

㊁寧死不犯。梵網經不生自要戒等の文意。

㋭都督親王。世良親王なり、後醍醐天皇第二皇子、河端宮とも申す、上野太守太宰帥、元德二年九月十七日薨ず。

を買つて以て之に代ふ。

㋪口を守り意を攝して、鬪諍を致すこと勿れ。僧伽はこれ梵語、此には衆和合と云ふ。苟も我慢㋲貢高を以て、懷に介み、穢語諍論衆を亂らば、其れ豈之を僧伽と謂はん耶。既にこれ道を以て頭を聚む、縱ひこれ法譚なりとも、如し諍論に及ばゞ則ち不可なり、矧や㋝閒事の爲に無明を長ぜん乎。然れども彼此同じくこれ凡夫なり、瞥喜瞥嗔、得て禁じ難し。如し少しの紛爭あらば、則ち住持及び首座維那、勸めて和合せしむべし。相罵り相打つに及ばゞ、則ち理非を論ぜず、兩つながら倶に院を出すべし。

犯重の僧、實と不實と、未だ分明ならず、若し衆人ありて、一同に㋜指目するときは、則ち共に住することを許すこと莫れ。長老密に其の人を誘ひ、起單し去らしむべし、罰牓を出すこと莫れ。

寮舍の資具、一切宜しく儉約に從ふべし、僧衆の衣服、華奢を得ざれ、翅道を障ふるのみにあらず、亦恐らくは賊を招かん。

今時の僧舍、賊難を防がんが爲め、㋑諸の兵器を蓄ふ、乃ちこれ法滅の因緣なり。愼まざるべけん乎。近來惡賊、僧物を偸むのみに匪ず、閒僧の命を奪ふものあり、此れ乃ち僧兵器を蓄ふるの致

㋪守口攝意。これは法句經にある、佛が朱利般特といふもの覺えのあしき弟子、五百の羅漢をして日々之に敎へしめ給ふも、三年の中に一偈をさへおぼえず、佛之を愍みて一偈を授與し給ふ、守口云云。

㋲貢高。自ら高ぶり、物を凌ぐの意。

㋝閒事。今時ならば碁將棊などのあらそびごと。

㋜指目。大學にある、曾子曰く、十目の視るところ、十手の指すところ、其れ嚴なる乎。

㋑畜諸兵器。梵網經の畜殺生具戒に詳なり。

す所耳。苟も佛制を守つて㊀財寶を貯へざる、即ち是れ賊を防ぐの器杖なり。只須らく佛祖の玄樞を把つて務と爲すべし、世間の厄難を以て懷に介むこと莫れ。倘し能く此くの如くならば、諸天善神之が爲に擁護せん、何ぞ自ら器杖を畜ふことを勞せん。如し其れ放逸無慚にして、禍を招いて身に上せば、百千の兵器も亦用ふる所なけん矣。

末寺の住持も、亦其の人を擇ぶべし、本寺の長老、三會院の塔主、幷に門弟の老僧、相共に和會して之を請ずべし。門弟の中其の器なくんば、則ち他門の人を請ずべし。其の寺の規矩宜しく本寺に準ずべし、一朝の長老、自ら恣にして行ふべからず焉。古者の云く、「千年の常住、一朝の僧之を思ふべし。」(末寺者甲州慧林、播州瑞光、阿州補陀等是也。)

㊀不貯財寶。これには八種の不淨財と云ふことあり、佛制なり。

本末寺、勝劣の想を作すこと莫れ、互に相資助して、以て祖燈を續がんことを要須す、これ則ち予が祝する所なり。諸方間末寺を以て、本寺の莊園に充て、其の土貢を受用することあり、茲に因つて末寺は衰落の弊を致し、本寺は互用の尤を招く、彼此益なし、愼まずんばあるべからず。

本寺及び末寺の契券等の正文は、並に宜しく三會院に在るべし、其の紛失せんことを恐るる耳。

庫裏の法式、別紙に書す、故に此に載せず。

入院の一切、宜しく略儀に從ふべし、古人入院の法、其の儀則るべし。今時古法に準ぜず、只華

耆を以て式と爲して、檀越を煩はし、常住を費すの弊、此れ從り起れり、顧みざるべけんや。入院の時、隣峰の尊宿を請じて、證明を爲すことは是れ日本樣耳。大唐の法式、人を請せずと雖も、或は新命の知己ありて、義の爲に來つて座下に在つて證明を作す、就いて其の中の宿老を請じて、白槌の人と爲す、其の式尤も以あるなり。本寺の入院、既に法堂の儀を略す、故に(ハ)白槌の人を請ずべからず、況んや復た其の餘を乎。（佛事之式。）

先づ山門に入り燒香、（法語あるべし。）次に佛殿に到つて、燒香禮拜、（(ニ)法語あるべし。）次に土地堂、祖師堂に到り、（法語之を略す。）次に僧堂に到り挂搭、（古法は挂搭の後、佛殿に至り、今の式は順次を以て先佛殿に至る。）然うして後に方丈に入り據室、（法語あるべし。）次に再び佛殿に到り、佛前に於て當に祝聖の香及び嗣法の香を爇くべし。曠昔百丈禪師、創めて規繩を立て、備陳せずといふこと靡し。若し也た遵守するときは則ち叢林の行事、奚ぞ濟はざることあらん乎。然れども近來の尊宿、別に規矩を立つるもの多し、蓋しこれ時に隨つて、範を垂れ、格を變じて人を導くの故ならく耳。予今略して法度を設けて、以て小院の家訓と作すも、復た何ぞ怪しまん哉。客は須らく主裁を聽くべし、依つて行ずることを辭すること毋れ。其れ或は然らずんば、君が別に如意の處を求めて、止住し去るに任す。榑桑震旦世界廣濶なり、何ぞ必ずしも此に在つて(ホ)蠅頭を勞

(ハ)白槌。本錄に注せし如く、證明の語の諦觀法王法などなふるなり。
(ニ)法語。本錄にあるとほり一々法語あり。
(ホ)蠅頭。かほをしかめてうれふること。
(ヘ)祀。年也。四時祭祀一たび訖はるに取る、書伊訓に注す。
(ト)澣。衣の垢をすゝぐ也、俗上澣、中澣、下澣を以て上旬、中旬、下旬となす、本と唐の制に十日に一休沐す、今之を襲用す、或は省して浣に作る。

せん乎。

暦應二（ヘ）祀、仲夏下（ト）澣

夢窓老拙書于三會院詢軒

偈頌

賀臨川新建藏殿偈 幷引

（イ）修多羅の教は月を標する指の如し、此れ乃ち金口の說なり、西天に（ロ）結集し東土に流轉す、寧ろ典籍として指に非ざる者あらん乎。然れども此の指能く人の（ハ）瞙を擇び、亦能く人の（ニ）睛を瞎す、利と害と人に在つて指に在らず、若しこれ指に因つて月を見ば、則ち其の指以て貴しと爲るに足れり。今時只指上に於て大小を論じ、長短を較ぶるもの多し矣、蓋し此の指の貴しと爲る所以を知らざるに由る耳。玆者臨川蘭若、新に經藏を建つ。堂頭無極和尚、特に佳篇を作り、以て慶讃を伸ぶ、其の意人をして此の指

（イ）修多羅。總じて諸教を指す、此には契經と譯す、契は機に契ひ理に契ふを云ふ。

（ロ）結集。如來入涅槃後七日を經て大迦葉五百の羅漢とともに三藏を集む、阿難發聲唱言す、我聞如是一時と佛の居處する所を說く云云。

（ハ）瞙。目翳を云ふ。

（ニ）睛。ひとみ。

の貴しとする所以を知らしめんと欲してなり。山中の清衆も亦各唱和して以て同志を表す。老拙因に厥の軸を見て、感懷に溢る、聊か四句を綴り、其の尾に書すと云ふ。

「竺(ホ)墳故紙積成レ重。　三國流轉費二幾功一。
不レ要競レ頭開二藏殿一。　人人幸有二一靈宮一。」

時に客あり、余が之を書するを看て問うて曰く、「滿藏の金文、一軸の玉(ヘ)什、都べてこれ月を標する底の指、畢竟月何れの處にか在る。」余乃ち聲に應じて云く、(ト)「今夜一輪滿。清光何處無。」

康永癸未仲秋望

木訥叟疎石書二于天龍方丈南軒一

祭文

祭二(イ)高峰禪師一文

維に(ロ)正和五年歳丙辰に次る、(ハ)古溪に寓居する參學の小師疎石、謹んで(ニ)菲薄の奠を備へて、以

(ホ)墳。支那では伏犧、神農、黃帝の書を三墳と曰ふ、大道を言ふ也。
(ヘ)什。篇什也、たゞ成數をあぐるのみ。
(ト)今夜一輪滿。禪月大師貫休の句。

て高峰禪師の尊靈に(ホ)叩いて曰く、

「恭惟吾師。亞二聖榑桑一。叢林翹楚。禪門棟梁。
清操爽拔。尊儀堂堂。機峻辯捷。口有二雌黃一。
五臣二名刹一。利濟無方。雨露普潤。瓜瓞綿芳。
疎石ム賦性暗鈍。偸二隣壁光一。恭稟二庭訓一。漫得レ證レ羊。
拜二辭席下一。久闕二星霜一。無議爲レ義。絕二世禮望一。
山遙水遠。意非二參商一。奄聞二訃音一。心緒恍恍。
巴陵三語。不レ能二擧揚一。隨レ分報謝。禮拜燒香。
仰賴尊靈。垂二鑑非常一。(ヘ)尙(ト)享。」

祭二清拙禪師一文

前住瑞龍山太平興國南禪禪寺清拙大和尙示二寂於(チ)今月十七日一。臨川禪寺東堂比丘疎石。

今辰忽得二遺書一。攀慕不レ已。虔設二薄具一。作レ文祭曰。

「嗚呼師乎。智超二溟渤一。德蓋二蒼穹一。峻機卓邁。宗說倶通。(リ)齊揩軒豁。
不レ例二闒茸一。化門廣大。無レ殼無レ封。震旦榑桑。兩處成レ龍。慈雲法雨。

(イ)高峰。顯日、佛國禪師なり。
(ロ)正和。花園天皇時代の年號。
(ハ)古溪。美濃國可兒郡、今虎溪に作る。
(ニ)非。滯也、おそまつのごちそうなそなへしてなり。
(ホ)叩。稽顙を叩首と云ふ、ぬかづく也。
(ヘ)尙。心に希望する所也。
(ト)享。受くる也。
(チ)今月十七日。曆應二年正月十七日寂、六十六歲、塔は筑前博多聖福寺に在り。
(リ)齊揩軒豁。萬機休罷也。

利濟何窮。　貴賤緇白。　發レ蔀撃レ蒙。　師之與レ我。　緣遇相融。　其派雖レ異。
其源是同。　處處住山。　多ト二隣峰一。　托レ庇得レ宴。　偸レ光補レ宗。　訃音俄至。
吾思ヌ恫恫。　大人隱顯。　月印二水中一。　不レ別而別。　焉間二眞容一。　且順レ世辭。
薄奠伸レ供。　大寂場裏。　幸照二卑悰一。　尙享。」

祭二雙峰禪師一文

前住慧日山東福禪寺　特賜雙峰禪師大和尙奄爾示寂。隣峰南禪禪寺比丘疎石。今晨忽得二遺書一。攀慕不レ已。虔設二薄具一。爲レ文昭告曰。

「維師の道德、滄海渺瀰、迅機銳を挫く、孰か藩籬を窺はん。緣に應じて、俯仰磷かず緇まず、圭角匿し難し。世に口碑あり、屢巨刹に遷つて、住持を忝めす。四來の英儁、皆ル指麾に伏す。龍淵の一脈、萬派千枝、其の流長き者は、師を外にして是れ誰ぞ。老拙多幸、緣遇時を得たり。瓜葛好ありて、隣を擇んで相宜し。只愛顧に賴つて、我をして危きを扶けしむ。師已に往きぬ矣、之を挽くに由なし。吾が望齟齬す、喜を以て悲に轉ず。嗟しい哉法運、又一たび衰ふことを見る、更に羨はくは尊靈、廣大の慈を發して、寂滅場裏、化儀を失はざらんことを。ヲ譊譊として告ぐ、禱る所茲に在り、冰花地に滿ち、林巒奇を獻ず、特に此に奠に當つ。言ふこと莫れワ饌徵なりと。尙はくは饗けよ。」

ヌ恫々。痛む也。
ル指麾。さいはひに。
ヲ譊々。いかりさけぶのこゑ。
ワ饌。具食也。

靈庇廟鎭座疏

竊かに以れば、法の世を濟ふこと神力に匪ざれば行はれず、神の威を播す法緣に藉つて增旺なり。是を以て此界他邦の敎庠禪院、皆神廟を置いて以て精藍を保つ。玆者今上皇帝後醍醐院に奉爲して、新に梵苑を創したまふ。某恭しく叡旨を奉じて、叨に開基に膺る、神靈の冥資に非ずんば、爭か祖道の興盛を得ん。去年元正夢中恍惚として此の地に遊び、便ち八幡の靈廟、嚴飾嶄新なるを見る、覺めて後忻然として、以謂らく此れ乃ち神の我に示すなり、宜しく靈祠を構へて神馭を延め奉るべし。願望未だ果さず、居諸屢遷る、幸に今冬緣遇時至つて、近日營功已に成するを見る、云々。恭しく惟れば、(イ)護國靈驗、威力神通、大自在菩薩、聖祚を榑桑に亞いで、第十六代に當る、神武を(ロ)宇佐に顯はして、已に八百年に垂んとす。(ハ)和光同塵、寔に(ニ)不請の友たり。本を匿し跡を彰はすこと、無緣の慈より出づ。善應無方之を窺ふもの、其の際を視ること莫し。

(イ)護國云云。欽明天皇の時神託に云く、吾は是れ譽田の天皇廣幡八幡也、我を護國靈驗威力神通大自在菩薩と名づく。

(ロ)宇佐。欽明天皇三十一年冬鎭座、豐前國宇佐宮。

(ハ)和光同塵。老子の知者不言の章に出づるに取る。

(ニ)不請友。維摩佛國品に、衆人不請友而安レ之。

(ホ)行敎。武內大臣の裔、この因緣は元亨釋書行敎傳に出づ。

(ヘ)弘法。神社考に出づ、弘法大師高雄山に於て密乘を唱和す、この御影今、高雄山神護寺にあり。

(ト)紘。維也。

㋠男山。山城の男山、石清水神宮。

靈機常に轉ず、之を仰ぐ者、其の高きを窮むること莫し。人々歸崇するときは則ち人々益を得、處々影現ずるときは則ち處々皆眞なり。㋭行敎和尙勸請の時、三尊の光彩三衣の上に耀く。㋬弘法大師對談の後、八幡の嘉聲、八㋣紘の間に喧し。祭禮の彝儀、專ら浮世無常の相を表す、放生の法會殊に大悲拔苦の忱を旌す。冥化既に感に赴くの私なきを見る。屢生胡爲れぞ愚を顧みて自ら屈せん。月千江に印す、水の深淺を擇ばず、春萬國に行く寧ろ地の高低を分たんや、廟宇太だ窄きも、無邊の境含せり焉。吾儕卑しと雖も、懇請の誠馨せり矣。靈明の誓を說くを見るに、正直の人を護せんことを要す。禪宗これ迂曲の談にあらず、衲子安ぞ虛妄の見に墮せん。苟も我が祈る所に應じ、必ず神の期する所に協はん。伏して願はくは、大菩薩㋠男山を動ぜず、靈跡を龜山に垂れ、神道を改めずして、護持を祖道に加へんことを。謹疏。

㋑法語

示㆓性輝道友㆒

甚麽の道理ぞ、忽若ち忘念起る時、急々に箇の無の字を提げて、便ち利刀の如くに相似て、一切に

切斷し、提し來り提し去つて、久々工夫做して一如と成す、絲毫も間斷なく、淨躶躶赤洒々の處に到つて、忽然として時節因緣偶合して、築著磕著、桶底子の脫するが如くに相似たらば、一回自然に箇の歡喜安樂の處あらん。但無の字を透得過せば、方に是れ參禪、此に到つて自然に七通八達、一切疑礙なかるべし。但恐らくは身心專一ならずして、聲色に隨逐し、世緣に擾々として、其の爲に障へられん耳。性輝道友、身心純一往來多載、孜々として此の事を以て懷と爲す、家に在つて一室自ら居して常に禪寂を樂み、時來つて扣問、其の意を口陳す、亦自ら嘉すべし。故に(ロ)老漢時中上堂(ハ)□披の衣を以て、之に授く、其れをして此の道に力め進み通徹の地に到しむ。(ニ)

(イ)この法語は前に二行ばかりの文章ありしも、いつのまにか欠けしものならんか。
(ロ)老漢。佛國禪師ならん。
(ハ)上堂の下に一の欠字あり、わからざるまゝのせたるなり。
(ニ)この終りにも未だ語のありしならんも、欠けたまゝにのせたるなり。

發願文

生々世々恩あるものは、我れ今悉く其の恩德を報じ、生々世々怨を結ぶものは、我れ今悉く其の冤讎を謝し、生々世々緣なき者は、我れ今悉く其の善緣を結んで、各々邪を飜して正路に歸し、互に相資助して、菩提を證せん。願はくは我れ慈悲觀音の如く、行願普賢の如く、智慧文殊の如く、

辯説維摩の如くならんことを。願はくは我れ難なく災なく、道念堅固智慧聰明、生死あることなく、應に所住なうして而も其の心を生ずべし。直に無上菩提に趣き、一切衆生を利益せん。我が此の行願念々相續して間斷あることなけん。

上來修する所の諸の功德、先づ世々生々父母師長親類眷屬乃至十方世界一切衆に回向す。皆六道四生の苦を遁れて、同じく五智三密の德を顯はさん。次に冀はくは、某甲、無始より以來、今に至るまで造る所の諸罪、皆速かに消し、生死無常の迷を飜して、早く色身實相の理を悟らん。縱ひ今生に開悟せずとも、道心彌堅く、修行の志怠ることなく、智見漸く開いて魔外障起らず、願望皆叶ひ身心共に安うして、臨命終の時、身苦みなく心亂れず、直に觀音の淨土に生じ、親しく大悲の尊容を拜して、則ち六種の神通を得、普く十方佛土に遊んで、無邊の賢聖に供養して、無盡の行願を成就せん。若し又淨土に生ぜずんば、善人の家に生じ、聖流の形を受けて、諸の災殃に逢はず、諸の禁戒を破らず、善知識に親近し、無上法を解了して、三生を出でずして、早く學道を成じ、四攝を捨つることなうして長く迷輪を救はん。仰ぎ願はくは三寶哀愍を垂れ、諸天擁護を加へたまへ、十方三世一切の諸佛、至尊菩薩摩訶薩、摩訶般若波羅蜜。

國譯夢窓正覺心宗普濟國師語錄附錄　終

天下之至大者道也、至公者理也、人能公正宏大、合乎道理者、莫不尊且敬焉、予自南國東來扶桑、惟見

夢窓國師一人而已、師之道、如春行大地、師之德如皎日當空、師之戒、凜若氷霜、師之行、見於行事、八提鋤斧、六處開山、三朝加敬、一國咸尊、所謂合乎大公之道理、自然人皆得而尊敬之、若曰、師之語言滿天下、而無口過者也。

國師祖佛光、而師佛國、發揚宗旨、警訓後學、如珠走盤、有自來矣、其嗣子龍湫澤首座、出師語錄、以示余、命予爲序引、予曰、國師乃佛鑑下子孫、卻用翳睛法、觀此錄者、自宜着眼、嗣師之法者衆、皆叢林之麟鳳也、必又有大其家世者焉。

旹文和三禩孟夏佛誕生之日　　四明東陵叟　永璵　序

此是老僧一生寐語也、切莫求添削於他人、刻乎刊版印施矣哉。

夢窻正覺心宗普濟國師語錄　上

住山城州瑞龍山南禪禪寺語錄

侍者　本元　慧逸　等編

正中二年八月二十九日入院。

指山門云、溪澗潺潺、峰巒岌岌、公門曾無內外、誰言拽而不入、顧視左右云、莫恠不相揖。

佛殿郝老聞名也不喜、我儂今日特來參、良久、黑蜜太苦、黃連太甘。

土地堂、靈鑑無遺、賞罰不遲、敢問、即今覷我麼、洎乎更下一分飯。

祖師堂、聯芳續燄、地無朱砂、恐人道以訐爲直、一炷兜樓、且賞他。

據室、橫按主丈云、不師摩竭迹、不傚少林蹤、召大衆云、只要當頭薦取、切忌溫故知新、喝一喝。

勅黃、以此革弊持危、以此索隱致遠、印文已露、見也無、碧落之碑無贋本。

山門疏、全褒全貶、海闊山幽、知我罪我、不在春秋。

拈衣、大庾嶺頭通線路、鷄足山裏藏針鋒、新南禪、通也不得、藏也不得、提起衣云、等閒提起覆盧空。

法座、應身坐菲艸、法佛坐空裏、且道、衲僧以甚麼爲座、指法座云、我無隱乎爾。

陞座、拈香云、此一瓣香、爇向爐中、恭爲祝延
今上皇帝、聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下、恭願
皇圖斬新、永符山呼之祝、民物康阜、咸賴天賦之恩、
此香、奉爲　諸位尊官、文武百寮、資陪祿算、伏願輔弼樹全功、權威旌美德、
此香、山南海北、到處埋藏、未嘗容易衒賣、定價還他大商、爇向爐中、供養　前住相州建長
勅謚佛國禪師高峯大和尙、用酬法乳之恩。
索話、淸平時節、風物一新、恢開東閣、誰是高賓、僧問、一佛出世、地湧金蓮、和尙出世、有何祥瑞、答云、露柱燈籠、手舞足踏、進云、人天交接、兩得相見、師云、三臺須是大家催、進云、詔旆臨筵、寵恩動地、祝　聖一句、願垂指示、師云、九天擎玉印、四海服金輪、進云、恁麼則龍峯高處君恩重、答云、須知海嶽歸明主、進云、記得大慧禪師、住徑山時、馮侍郎問云、和尙曾道、不作這蟲豸、今日爲甚麼住此山、問頭還具眼也否、答云、六隻骰子滿盤紅、大都只是見頭彩、進云、大慧曰、盡大地是一箇、杲上座、爾向什甚處看我、意在那裏、答云、筲箒畫蛾眉、進云、今日若有人向和尙恁麼問、未審如何祇對、答云、莫來攔我毬門路、進云、與古人相去多少、答云、要知山上路、須是往來人、進云、可謂法隨法行、法幢隨處建立、答云、天津橋上晝打官吏、僧禮拜、　師乃云、法毋固必、道絕方偶、雙放雙收、卽默卽說、嘯月眠雲處、不離古渡頭邊、和泥合水時、常坐孤峯頂上、少林花開果結、達磨未肯救迷情、南嶽烟晴霧深、思大何曾做豹變、現成法席、誰卷誰舒、廣大施門、非闢非闔、便見物物同揚皇道不言之化、頭頭咸表祖宗絕唱之猷、石上座恁麼舉唱、

此是建化門中、私通車馬、也只如官不容針底、又且如何、低聲低聲、一字入公門、九牛車不出、
復舉、世尊曰、佛法付屬國王大臣、有力檀那、拈云、釋迦老子、量才補職、不失其宜、二千餘年、遺
風未墜、要知他付屬底佛法麼、以拂擊床云、道泰不傳天子令、行人盡唱太平歌。
當晚小參、僧問、欲隱彌露、遠離東關之舊隱、至化難逃、來爲南禪之主盟、如何是不動尊、答云、
天台普請、南嶽遊山、進云、恁麼則一點水墨兩處爲龍、答云、靈蹤更在猿啼處、進云、記得、德山
云、今夜小參不答話、問話者三十棒、未審意在那裏、答云、此地無金二兩、進云、時有僧出禮拜、
山便打、遠的當也無、答云、長鞭不搆馬腹、進云、今夜小參有問有答、與德山是一是二、答云、一
有多種、二無兩般、進云、古今無異路、達者自同歸、答云、峯轉疑無路、隔溪別有村、僧禮拜。
師乃云、山野未入此保社已前、諸仁者、曾在者裏、各自盤桓、殿柱閣梁、人人具見、鐘聲鼓響、箇
箇親聞、同一見聞、同一受用、直得耳裏開圓通戶牖、眼中放本分光輝、不是逐旋揑合、亦非法
爾如然、直饒佛祖出興、也須拱默、誰肯一點相謾、忽有箇漢出來道、此現前大衆、既能如是、爾
有甚長處、主玆法席、卓主丈一下云、有意氣時添意氣、不風流處也風流、
復舉、法燈和尚示衆云、我本欲深隱巖壑養病過時、奈緣先師有未了底公案、出來與他了卻、
時有僧出問、如何是先師未了底公案、法燈便打云、祖禰不了殃及兒孫、拈云、法燈將謂、陳年
滯貨販賣得時、可笑累世家私、自揚向外、石上座溪山藏醜拙、雲月入膏肓、只因先師無未了
底公案、所以出來與他謝恩、且道與古人有優劣也無、良久云、不是任公子徒勞話釣竿、次日。
奉爲　龜山聖廟看讀藏經上堂、瞿曇不說一字、諸人看閱箇什麼、趙州只轉半藏、爲甚不得

全功課、龍山試向者裏通消息去、擧起拂子云、諦觀法王法、法王法如是。

菊節、謝兩班上堂、大功不宰、大化不言、東西自然合轍、左右靡不逢原、大衆還會麼、如會採菊東籬下、不會悠然見南山。

上堂、水肅山寒秋已老、現成公案沒人知、沒人知、睦州主丈又生枝、喝一喝、下座。

開爐上堂、秋光一變小春回、寒暑何曾屬往來、不奈潙山千古錯、今朝又撥舊爐灰。

上堂、拈主丈云、此箇事絕度量、豎起云、豎窮三際、横按云、横徧十方、大衆要見横豎總不相干處麼、卓一下云、曙色未分人盡望、至于天曉也尋常。

上堂、擧五祖演和尚云、如今禪和家、擧話也不會、如何是祖師西來意、庭前柏樹子、恁麼會便不是、如何是祖師西來意、庭前柏樹子、恁麼會便是、拈云、五祖老師、夜半捉烏鷄、驚起隣家睡、未免賺誤後人、向頭頂處承當、龍山則不然、如何是祖師西來意、庭前柏樹子、恁麼會始得。

冬至小參、雞頭吹葦籥、則人人恰似懷氷、律管颺葭灰、則物物皆如挾纊、偉哉玄樞、不可鑽仰、德之攸覃無偏無黨、諸仁者、於此薦得、皓老布裩價千金、若也不薦、洞山果子甘而爽、有底聞與麼道、便道爾說許多閒事、作什麼、今年冬至在月頭、早須賣被而買牛、良久云、嗚呼覆水難收。

復擧、芭蕉和尚示衆云、儞有主丈子、與儞拄杖子、儞無拄杖子、奪儞拄杖子、拈云、芭蕉誦出此一行大神咒、古今未有人飜譯得、龍山今夜對衆分明飜譯去、卓主丈一下云、唵蘇嚕蘇嚕娑婆訶。

多節諸官至、上堂、一陽纔發生、徧界無硬地、龍山法鼓鳴雷、萬像森羅側耳、雲堂淸衆作證明、朝廷貴冑垂光賁、今日風雲已際會、來年氣候不勞記、是是不是不是、維摩掌裏搏大千、老胡口中無兩齒。

臘八上堂、瞿曇喫盡氷霜苦、說向夏蟲都不知、後二千年屈堪述、寒梅初綻兩三枝、卓主丈、下座。

上堂、居諸易移、歲序云暮、或作無常迅速商量、或向物不遷處領取、且道那箇是正見、良久云、鷸蚌諍不休、終入漁人手。

除夜小參、索話、臘月三十日、參玄得便宜、花須連夜發、莫待曉風吹、僧問、爆竹聲中年已盡、東村王老夜篩錢、覩面一句、請師直指、師云、分明記取、進云、路不拾遺眞古道、民皆樂業見豐年、師云、堯舜之君、猶稽于化、進云、舊歲今宵去、新年明日來、底事還有遷變也無、師云、有利無利不離行市、進云、與麼則舊歲即新歲、新年即舊年、師云、米中雜犀角、鷄驚而不啄、進云、抹過七十二候、亂卻六十甲子、更乞一句、師云、乾三連坤六斷、進云、三世諸佛摸索不著、歷代祖師近傍無門、聻、師云、劒閣雖途險、夜行人更多、進云、萬物獻敷榮之態、元樞忘煦育之功、如何是一老一不老、師云、只許老胡知、不許老胡會、進云、老在這裏、不老底在什麼處、師云、相隨來也、進云、物以終爲始、人從故得新、師云、到江吳地盡、隔岸越山多、僧禮拜。

乃云、一年三百餘日、今宵是結交頭、一生參學事已畢、自是時人不肯休、西屋東家、品藻否泰來去、人人箇箇、論量日月周流、引得古人將臘雪供大衆、烹白牛作活計、只知嚼飯餧兒、不覺

好肉生贅、龍山與麼告報、大衆還甘麼、若也不甘、今夜分歲、彼此得便。

復舉、僧問香林、如何是衲衣下事、林云、臘月火燒山、頌云、峯巒幽邃罕游人、傳說壺中天地新、洞口風過雲忽散、閒時富貴見時貧。

歲節上堂、僧問、曆以寅爲正、風從艮位來、正與麼時、請師祝聖、師云、四塞狼烟絕、九天鳳瑞新、進云、記得、僧問鏡清、新年頭還有佛法也無、清云、有、僧云、如何是新年頭佛法、清云、元正啓祚、萬物咸新、意在那裏、師云、明修棧道、暗度陳倉、進云、僧又問明教、新年頭還有佛法也無、教云、無、僧云、年年是好年、日日是好日、因甚麼卻無、教云、張公喫酒李公醉、又作麼生、師云、懸羊頭賣狗肉、進云、鏡清道有、明教爲甚道無、師云、江南地暖、塞北天寒、進云、學人卽今問和尙、新年頭還有佛法也無、師云、舊年曾答了也、進云、恁麼祇對與二大老相去多少、師云、一任傍人度量、進云、上來一一指示分明、向上一句、又作麼生、師云、彭八刺札、進云、應時容裕、無慶不宜、師云、君子不介視、僧禮拜、師乃拈主丈云、天得一以清、地得一以寧、君王得一以安國撫民、歲月得一以送舊迎新、衲僧得一時又且如何、靠主丈云、止止放過一著、落在第二。

元宵上堂、有照有用、牛頭沒馬頭回、或明或暗、雪中粉、墨中煤、龍山吐箇閒言語、燈籠聽得笑滿腮、笑到三更勿人會、徐徐沿壁上天台。

因雪謝兩堂首座維那典座上堂、雪花亂墜、空無一翳、人天眼目、元來豁爾、前後一照、不起紛飛心、賓主歷然、寧居明白裏、且以何爲驗、克賓嗣興化、潙山參大智。

佛涅槃上堂、僧問、娑羅樹下、跋提河邊、有則公案、年年今朝現成呈露、學人上來、請師剖判師

云、我今不再三。進云、開口則喪、閉口則背、如何通而不犯。師云、一把柳絲收不得、和風搭在玉欄干。進云、人間月半天上月圓、與麼時節、喚作唱乃道則是、喚作轉法輪則是。師云、一字不著畫、八字無兩丿。進云、摩胸告衆、行計忽忽、擲示雙趺、著甚死急。師云、喪車後懸藥袋。進云、若謂我滅度、非我弟子、若謂我不滅度、亦非我弟子。畢竟作麼生折合去。師云、作賊慎關。進云、與麼則只箇死屍無著處。至今紅爛百花叢。師云、人天衆前何不蓋卻。進云、五天霧慘雙樹煙愁、人天當日盡悲號、因甚波旬舞袖長。師云、船上無散工。進云、涅槃後有大人相、如何是大人相。師云、尺二眉毛頷下生。進云、上來一一指示、其奈釋迦老子藏身無路。師云、臨坑不推人。進云、三尺一丈六、且同携手歸。師云、春色無高下、花枝自短長。僧禮拜。 乃云、二千年前萬化千變、二千年後乞無再面、好箇太平時節、波旬卻具一隻眼。以拂擊床、下座。

上堂、花柳呈豔、燕鶯闘聲、東參西扣、太無厭生。卓主丈云、自是不歸、歸便得五湖風月、有誰爭。

上堂、德山棒、臨濟喝、雲門一字關、洞山五位訣、古人各擅韜略、殺活擒縱、可謂水銀墜地、良久云、三十六路不如走。

四月八上堂、瞿曇不曾生、因甚賞今日。毗藍園裏、一犬吠虛、西天此土、千猱啀實、韶陽徒張意氣、藥山將錯就錯、龍山今日盡力、變格通途去也。卓主丈、下座。

結夏小參、僧問、荷錢鑄綠、梅彈垂金、時節因緣、願聞提唱。師云、早被上座答了也。進云、時節既到、其理自彰、如何是其理。師云、鬧市裏颺碌塼。進云、佛性義又如何。師云、賣扇老婆手遮日。進云、與麼則鏡分金殿燭、山答月樓鐘。師云、須知三島外、別有一乾坤。進云、九旬禁足魚游網、物

外安身鳥入籠、去此二途、如何是衲僧行履處、師云、虛空走馬、陸地行船、進云、覿面全彰解脫門、一踏牢關百雜碎、師云、怪力亂神、進云、記得、龐居士云、十方同聚會、箇箇學無爲、此是選佛場、心空及第歸、意在那裏、師云、紫羅帳裏撒眞珠、進云、心如工伎兒、意如和伎者、如何學無爲、師云、覓火和煙得、擔泉帶月歸、進云、此是選佛場、那箇是及第底心、師云、蹉口道著、進云、上來已蒙指歸、向上宗乘事如何、師云、羅頭艸鞋、僧禮拜、　乃云、以大圓覺爲我伽藍、結也由我、解也由我、結則遍界盡結、若凡若聖、艸木昆蟲、同時禁足安居、遂不見有違我所制者、解則偏界盡解、萬象縱橫無礙、更無規繩可拘、便見嘉州大像、緊峭艸鞋、優遊妙喜世界、陜府鐵牛、橫肩楖栗巡歷榑桑國中、只如不結不解時、至竟作甚舉措、良久云、山前麥熟也未、

復舉、百丈和尚、每上堂訖召大衆、大衆回首、丈云、是什麼、拈云、君子言不浪發、發必中度、且道、百丈恁麼道、意在於何、吽吽、喚回枕上三更夢、惹動江南萬斛愁。

次日上堂、格外玄機、不勞行思、論甚克期取證、茄子瓠子、雖然如是、未免今日依西天樣、謾畫葫蘆、何故、朝四暮三、便歡喜、咄。

上堂、拈主丈云、汾陽和尚云、識得主丈子、一生參學事畢、龍山卽不然、識得主丈子、更須行脚去、靠丈、下座。

上堂、阿剌剌、橫該抹、鬼面神頭、二九十八、善財失脚百城南、笑倒無邊身菩薩、卓主丈。

半夏上堂、前四十五日、既往不咎、後四十五日、道不預諾、正當今日、拈起拂子云、龍山手裏拂子、踍跳上三十三天、在歡喜園裏、對帝釋說深妙法、諸天圍繞、默然肅聽、且道、說箇什麼法、今

朔是六月朔。

上堂、火雲蒸、太虛、太虛不熱、薰風拂、太虛、太虛不涼、若能恁麼領略、不妨應縁倘佯、雖然如是、更須知有向上行履始得、噫、偸佛錢而買佛香。

上堂、清商告候、法歲將周、敢問諸仁者所作已辨不、若也未辨得、龍山須向諸人背後展拜、何也、手臂終不向外曲。

解夏小參、僧問、布袋頭開天地寬、金風翻葉墜階前、正與麼時、請師提唱、師云、太無厭生、進云、恁麼則溪聲長在耳、山色不離門、師云、飽病難醫、進云、翠巖夏末示衆云、一夏以來爲兄弟說話、看翠巖眉毛在麼、是何心行、師云、三更過孟津、進云、後來保福云、作賊人心虛、意在那裏、師云、品藻人即得、進云、長慶云、生也、如何領略、師云、葫蘆棚上掛猪頭、進云、雲門云、關、又作麼生、師云、崑崙著鐵袴、進云、四大老、與麼敲唱還有出身分也無、師云、艸本天下同、進云、可謂卞氏場中多巨璞、孟嘗門下足高賓、師云、從貧入富易、從富入貧難、進云、龍山今夏還有爲人不惜眉毛底麼、師云、青山不擧足、日下不挑燈、進云、未審與古人是一耶是二耶、師云、莫來掩采我、進云、上來一一蒙指示、曲終人不見、江上數峯青、師云、切莫向別人擧、僧禮拜、　師乃拈拄杖云、這木上座、今夏在者裏、體上不掛寸絲、口中不費一粒、不肯隨衆禁足、亦不向外遊山、鼻笑西院兩錯商量、平欺文殊三處度夏、結也不管、解也不知、只麼黑粼皴地、過了九旬光陰、且道、賞他便是、罰他便是、諸人若不能斷、直教木上座自斷去也、卓主丈。

復擧、洞山云、初秋夏末、兄弟東去西去、直須向萬里無寸艸處去、石霜聞得云、出門便是艸、拈

云、作法於涼、其弊猶貪、作法於貪、弊將若何。

解夏上堂、僧問、解開布袋、七縱八橫、無尾胡孫、有甚快活、師云、只可自怡悅、不堪持送君、進云、不吞栗棘蓬、作箇什麼、師云、鐵牛不喫欄邊艸、進云、點胸點肋、聻、師云、登科任佗登科、拔萃任佗拔萃、進云、極則事又如何、師云、十字街頭吹尺八、進云、人天交接如何相見、師云、兩眼對兩眼、進云、與麼則愁思偏於蟬外覺、歸心更向鴈邊多、師云、事無一向、進云、者裏若有性燥漢、直下山去、和尙還肯佗也無、師云、腦後見腮、莫與往來、進云、忽有人問夏在何處、未審如何祇對、師云、私事不得官酬、僧禮拜、　師乃云、消散蠟人氷、擘開鐵彈子、兩顆鼠糞變成金、翠巖眉毛長尺二、囉囉哩、秋風誰謂從西起、驀拂、下座。

退院上堂、一片閒雲多變態、從龍暫寄此山頭、釘釘懸挂沒交涉、又逐秋風過別州、擲下拂子、下座。

相州鎌倉縣金寶山淨智禪寺語錄

侍者　曇　林　編

師、於嘉曆二年二月十二日入院。

佛殿、三人行時、必得一師、三佛並坐、有何所爲、休休六耳不同謀。

拈帖、傳箚令暗號子、喚作靈山囑、都是不相似、付與維那、且舉例、
指法座、者一座子、不假建立、尀耐須彌燈王安著幾多階級、新寶山一時坐斷去也、便登座。
拈香云、此一瓣香、爇向爐中、恭爲祝延
今上皇帝、聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下恭願
聖謨恢恢、寶祚永踐、玄扆之高躅、淳化蕩蕩、世樞咸復丹陵之古風、次拈香云、此香奉爲　征
夷大將軍、資陪祿算、伏願營門無槃刀斗、三軍止戈、官路不見烽烟、四塞衡璧、又拈香云、此香
奉爲　相州太守都元帥、伏願壽基福基、俱堅佐　聖明於萬世、信力智力、兼具護正法於無
窮、又次拈香云、此香奉爲　本寺大檀那親衛校尉大禪定門、伏願命府運數、盡芥城而有餘、
身宮德儀、如藥樹而長茂、又拈香云、此香貞實絕枝葉、逢春不著芬、只有天然些子氣、許佗無
鼻孔人聞、爇以供養　前住建長再住本山　敕諡佛國禪師高峰大和尚、用酬法乳之恩。
就座、問答罷乃云、大哉箇事、覆天載地、勦絕諸相、而不留勦絕之跡、字育萬靈、而不宰字育之
功、拈起也吒吒沙沙、放下也綿綿密密、乃佛乃祖、皆悉承他恩力、以接踵躡武、利濟不失時、賢
王賢臣、亦是承他恩力、以護法安邦、至今無問斷、直得盡大地卉木叢林、人畜艸芥箇箇承他
恩力、今日聚會金寶山裏、共唱萬年歡、諸仁者、還得分明聽取也無、倘或未然、更須側耳、卓主
丈一下。
復舉、世尊一日陞座、文殊白槌云、諦觀法王法、法王法如是、拈云、釋迦老子、等閒吹無孔笛、文
殊謾把甑拍版擊節、且道、畢竟成得什麼曲調、噁、鄭衞之門、須掩耳。

佛涅槃上堂、僧問、摩胸告衆、強誣癡獃、大聖本無出沒、什麼處有去來、答云、須知三代禮樂、乃是五覇兵器、進云、可謂平地起骨堆、答云、彩氣夜常動、精靈日少逢、進云、二千餘年屈、和尚還雪得麼、答云、野火燒不盡、春風吹又生、進云、今日卽有、明日卽無、畢竟如何定當、答云、管佗閒事作麼、進云、直得諸天悲泣、波旬鼓舞、答云、一家有事百家忙、進云、春色無高下、花枝自短長、答云、仲脚元在縮脚裏、僧禮拜下、　乃云、若謂吾滅度不是吾弟子、欲人不知、不如不爲、若謂不滅度、亦非吾弟子、改頭換面、東倒西擂、大衆、要識釋迦老子舌頭落處麼、一從事郤潘郎後、也解人前不識羞。

三月旦上堂、桃蕚呈紅李花獻白、春光不敢拒人、只是無人領略、良久云、積代簪纓暫時落魄。謝受昭二首座上堂、薄福住山肚皮欠箋、引得舊知訪來、彼此同嚼氷雪、未話海月山雲、先鬪百醜千拙、因甚如此、多子塔前曾落節。

四月旦、謝直歲上堂、汾陽囑慈明云、修造自有人、且與佛法爲主、拈云、大小汾陽話成兩橛、金峯門下修造已得人、別無佛法可說、召大衆云、於此薦得、僧堂對厨庫、佛殿對山門、若也未薦、只因連夜雨、又過一年春。

佛誕生上堂、瞿曇降生、大驚小怪、自誇淨躶躶地、脫體寸絲不掛、金峯普請洗滌佗、只要赤肉也不存、直待他骨節毛竅心肝五臟一時換郤、方許開大口、道天上天下唯我獨尊、雖然如是、明眼看來、浣盆浣盆、喝一喝。

結夏小參、統微塵剎界、以爲我伽藍、領無邊含靈、以爲我大衆、括十世古今、而立刻期之限、用

一切事業、而做取證之行、直得穢土淨邦、處處綠楊堪繫馬、六凡四聖、家家門底透長安、結時解、解時結、長期非延、短期非促、金寶山中、鋤畬下種、占波國外梗游萍跡、更論甚麼禁足、不禁足、前安居後安居、忽有伶利漢、出來道、我也別有生涯、不居僧伽藍、不入僧衆數、十世古今一切事業、都來不于我事、且道、他向什麼處行履、良久云、觀大海者難爲水。

復舉、僧問趙州、萬法歸一、一歸何處、州云、我在青州、作一領布衫重七斤、拈云、者僧要將澀紙裹大蟲、趙州針鋒頭上翻筋斗、奇則太奇、只是歸處未分明、令人轉入迷魂寨、今夜有人、問萬法歸一、一歸何處、只向他道、半入露柱、半上燈籠。

次日上堂、東山家宴盡美盡善、西院商量亦心片片、金寶今日結夏、不敢管顧諸人、亦不論兩錯、何故、重賞之下必有勇夫。

謝秉拂上堂、一喝分賓主底法門、兩堂首座已說了也、向虛空裏寫五字底法門、書記已說了也、一代藏教詮注不及底法門、藏主已說了也、更有緊要一句、佛佛祖祖久默斯要、我四頭首也各緘默、金峯久日權來唇、不免今日擊鼓爲諸人吐露、良久、下座。

上堂、一二三四五六七、七六五四三二一、幼婦舒眉笑臉開、夜叉屈膝眼睛出、構得構不得、當門書大吉、卓主丈、下座。

上堂、塵塵爾、剎剎爾、以拂擊床云、老鼠齩床頭、猫兒正憨睡。

半夏上堂、法歲已過半、過去心不可得、解制未屆期、未來心不可得、正當今日、現在心不可得、三世之心既不可得、豎起拂子云、且道、者箇從何處得來、良久云、自攜瓶去買村酒、卻著衫來

作主人。

夏中謝藏主上堂。擧、古有僧在經堂中坐、藏主云、如何不看經、僧云、不識字、主云、何不問人、僧叉手云、是什麼字、藏主無語、拈云、者僧問字、將謂坐斷藏主舌頭、爭奈烏焉成馬、藏主無語、堪與者僧爲師、會麼、六月賣清風、人間恐無價。

上堂、拈主丈卓一下云、休休、好語不可說盡。

解夏小參、彌滿清淨、不容一物、就中立限立期、總是魯般繩墨、金峰今夏與現前大衆、眉相結、鼻相拄、全賓是主、全主是賓、諸公三昧、金峯不知、金峯三昧、諸公不知、便見日中一滴、人人落得盞盂無柄、夜後一寢[illegible]、未曾開眼尿床只麼騰騰過了一夏、畢竟功歸阿誰、擊拂云、蟣人跳上梵天、鐵彈走過東海。

復擧、僧問雲門、初秋夏末前途忽有人問、作麼生對、門云、退後退後、僧云、某甲有甚麼過、門云、還我九十日飯錢來、拈云、輕輕躡足龍門過、惹得腥風動地來。

次日上堂、大火西流、涼飈報秋、九旬功課一時罷休、好箇快活時節、去底去留底留、雖然如是、金峯不肯點頭、何也如今馬上看山色、不似騎牛得自由。

相州鎌倉縣瑞鹿山圓覺興聖禪寺語錄

侍者紹榮編

師、於元德元年八月二十九日入院。

山門。盡大地是圓覺伽藍、且道、門限在什麼處、彈指一下云、看看、宿霧初收天已曙。

佛殿。殿裏底、佗是誰、咦、我早知儞、門貼鍾馗、展坐具云、人天大衆前、且放一頭低。

土地堂。法無隆替、人無可否、儼然列坐護什麼、良久云、良哉、不謬爲土地。

祖師堂。祖祖密付、天知地知、今日敗缺、咎歸阿誰、據室。拈主丈云、烹佛煆祖、還佗古德、便是渾鋼能有幾鐵、新瑞寧耀、靠丈云、幾乎墮獲轍。

拈帖。營門樞機、法城渠答、半幅全封、千重百匝、要知裏許消息麼、凜凜威風生六合。

山門疏。褒也屋裏話、貶也屋裏話、因甚如此、呈起疏云、莫謂大家納敗。

諸山疏。衆口一舌、字義炳然、諸人還會麼、東山樹對西山樹、上澗泉流下澗泉。

法座。燈王三萬二千座、指座云、盡是從此一座出、且道、此座何處得來、喝一喝。

拈香。此一瓣香、爇向爐中、恭爲

今上皇帝、祝延聖躬萬歲萬歲萬萬歲、陛下恭願、永揭文明、齊德化於宣光之中興、毋墜禖命、竝覆燾於大禹之高蹤、此香、奉爲　征夷大將軍及文武官僚、同增祿算、伏願、膺一人簡在副四海具瞻、益懋輔佐之功、驟布安撫之德、此香、奉爲　本寺大檀那、資倍祿算、伏願、壽山高

於百億須彌之高、福海廣於十重香水之廣、權澤長覃華夷、而綏皇極、誠明普被緇白、以耀法門、　此香、久在窮谷埋之而不腐、屢向人前燒之而不燼、今復拈出、供養　前住巨福名山建長興國禪寺　勅謚佛國禪師高峰大和尚、用酬法乳之恩。

遂就座、問答罷乃云、二六時中、四威儀內、新羅夜半十日並照、名之爲大光明藏三昧、二千年前、薄伽世尊、一時入此三昧、與一切諸佛菩薩、主伴同會、光嚴住持、自爾以降、圓覺伽藍、巨闢戸牖、西天此土各立門庭、或居僻洞深巖、嘯雲吟月、或據名山望刹、領衆匡徒、隱顯行藏、千途萬轍、竝是具足圓覺、住持圓覺底樣子也、石上座、今日又居此伽藍、與無邊刹海凡聖含靈主伴同會、光嚴住持、古今恁麼住持、更無絲毫異相、畢竟濟得什麼事、以拂擊牀云、野老不知堯舜力、鼕鼕打鼓祭江神、謝不錄。

復擧、宜春太守、請慈明和尚住南源、明固辭不赴、後日特謁太守願行、太守問其故、明云、始不欲之、今偶欲之耳、遂請住山、拈云、慈明和尚、瞻之在前忽焉在後、擬見蹤跡山遙水長、雖然如是、爭奈令人墮在是非海裏、即今若有人、問新瑞峯去年固辭鈞命不住當山、今日何故、敢來領席、便向他道、竹有上下節、松無古今色。

當晚小參、釘一琢二、本分鉗鎚、捏聚放開、作家受用、不是世間韜略、亦非出世機鋒、直得扭定文殊鼻頭、不能出氣、塞卻觀音耳朶、無由返聞、電激星馳、誰敢摩壘、便恁麼去、鬧熱門庭即得、若以正眼觀之、未免將頭不猛、帶累三軍、山野乍住此精藍、不論本分鉗鎚作家受用、只要與現前大衆同作息去也、何故、天津橋上不賣私鹽、問答不錄。

復擧、張無盡相公、請皓禪師住玉泉、皓陞座、顧視大衆云、君不見、良久又云、君不見、無盡在座下、操蜀音云、見、皓云、但得相公見便了、便下座、拈云、玉泉唱出太古淸音、無盡和以絕聽希聲、直至而今餘韻未已、諸仁者還聞麼、卓主丈一下云、此曲只應天上有、人間能得幾回聞。

九月旦上堂、秋雲截雨過、淸颷攪林藪、構得構不得、一擧四十九、卓丈、下座。

菊節上堂、陶潛短吟、只是世俗活計、汾陽一句、未免法眼著沙、鹿峯門下、世法佛法都是拈向一邊、且如何應箇時節去、良久云、爲憐處處籬邊菊、一度秋風一度花。

謝都寺上堂、入得世間出世無餘、觸事應緣、都非外料、折旋俯仰有甚掠虛、雖然如是、切須玉是昆吾。

上堂、恁麼恁麼、畫無中邊、不恁麼不恁麼、覿面猶隔三千、驀拈主丈卓一下云、昨夜雨師値風伯、觀音耳裏打鞦韆。

上堂、擧雲門大師云、直得山河大地無纖毫過患、猶是轉句、不見一色、始是半提、更須知有全提時節、拈云、雲門和尚三更過孟津、白日行官路、若人覷透佗手脚、便好高挑鉢囊獨步丹霄、其倘未然、鹿峯更下箇注脚、林垌曳杖嘗淸興、又入空濛紫翠中、脚力盡時山更好、莫將有限趁無窮。

上堂、拈主丈卓一下云、諸人還會麼、靠丈云、一枝付鷦鷯、萬里付鴻鵠。

冬夜小參、問答罷乃云、天地未分已前、有箇無字曆日、不記氣候節序、論甚吉凶悔吝、及乎天地已分、妄見寒來暑往、眞曆從此漫滅、艸本天下流行、擧世咸言、冬至時節、綉紋添線、葭管飄

灰、引得洞山退、卓、自許家私、霜華揭牓、還成露布、雖然如是、瑞峯不敢欲救此弊、只要依而行之、且道意在那裏、良久云、攻乎異端斯害也已矣。

復擧、僧問古德、如何是冬來事、德云、京師出大黃、拈云、古人恁麼答話、自謂横身宇宙、舌覆大千、殊不知、虎豹之文來田、猿狙之便來籍。

冬節上堂、昨夜雞頭吹葦、森羅萬象悉盧胡、今朝打鼓報此事、借問諸人信也無、信底不信底、瑞峯倶歡喜、何故陽氣發時無硬地、卓主丈一下。

謝東堂東明和尚兼四頭首秉拂上堂、昔日洞山和尚、冬夜掇退菓卓、致令泰首座喫菓子不得、千載之下、風俗易慣、人人鬭湊、處處安排、也未有人喫得、鹿山今年又迎冬夜、隨分作宴、無有新奇底、只將洞山陳年菓子、剝皮去核、送在我四頭首口邊、而皆不甘、遂向人天大衆前、各自吐卻了也、驀拈主丈云、主丈子聽與麼說、出來便道、低聲低聲、這裏有東堂和尚、不須讃說洞下事、鹿山覆水難收、且憑主丈子、謝其輕觸去也、卓主丈一下。

臘八上堂、六載寒酸猶自可、一朝濁富不如貧、明星迸散三千界、悉作瞿曇眼裏塵。

上堂、世界恁麼廣闊、爲什麼聽鐘聲披七條、雲門大師與麼垂示、依俙越國、彷彿揚州、諸人還會麼、擊拂云、識得山川無限意、目前瀟灑不須多。

除夜小參、問答罷乃云、玄樞運轉旋磨之蟻、其步稍移、歳序推遷赴壑之蛇、其尾難繫、若能於此識得不遷底句、烹白牛炊黍飯、可謂惠而不費、其倘未然、駈疫癘賣癡獃、都是勞而無功、鹿山今夜與諸人分歳、不要依樣畫猫、別有箇施設、卓主丈一下云、莫嫌冷淡沒滋味、一飽能消

萬劫飢

復舉、僧問浮山遠和尙、新歲已臨舊歲何往、遠云、目前無異怪、不用貼鍾馗、拈云、這僧在大洋海底、問尾閭、浮山向須彌頂上指路頭、還有針芥相投分麼、良久云、夜深珍重、

元正上堂、竪起拂子云、看看、吾道一以貫之、會得城上已吹新歲角、不然窻前猶點舊年燈、

元宵上堂、家家有一盞燈、三人證龜作鼈、瞎眼波斯入鬧市、撞著然燈受記莂、且道受什麼記莂、孟春白月終、定是上元節、

二月旦、謝新舊兩班上堂、竺土大仙心、東西密相付、密相付無差互、庭梅未謝舊年花、岸柳旋舒新歲絮、以拂擊牀、下座。

佛涅槃上堂、一出一沒、半合半開、諸人向什麼處見釋迦老子、卓主丈一下云、湘潭雲盡暮山出、巴蜀雪消春水來。

三月望上堂、處處眞處處眞、何處園林不領春、塵塵爾塵塵爾、遊客都無白踏人、雖然如是、諸人還見鹿峯主丈生花麼、靠丈云、幾乎使西施負薪、

上堂、古德云、我有一句子、待虛空墮地時、便向儞道、鹿山卽不然、我有一句子、虛空未生以前、已曾說破了也、良久云、三十年後、莫道川僧打鐃鈸、

佛生日上堂、佛身無爲不墮諸數、雲門一棒誇屠龍、月明豈在珊瑚樹、噁、瑞峯恁麼說話、早是汙卻淸淨法身了也、急須詣大佛殿、普請浴佗去、便下座。

結夏小參、德山小參不答話、南人不夢駝、趙州小參要答話、北人不夢船、若能覷透二大老手

脚、何妨大蟲舌上打鞦韆、直得脫略千古坏模、掣斷諸方抑勒、立期限論修證、都是魯般繩墨、雖然如是、鹿峰未點頭在、須知圓覺伽藍裏、今夏百二十日、別有條令可遵行始得、且道是什麼條令、日中一飡夜後一寢。

復擧、南泉和尚坐次、有僧叉手立、泉云、太俗生、僧便合掌、泉云、太僧生、僧無語、頌云、塵外靈區不易尋、青山九瑣洞門深、神仙將謂卜斯地、鷲聽空中操梵音。

次日上堂、護生須是殺、八字無兩丿、殺盡始安居、山上有鯉魚、要知箇中意、鐵船水上浮、休休、有萬里之智、有萬里之憂、卓主丈。

謝秉拂上堂、聲前通信息、句後絕安排、一挨一拶佛祖望崖、拈起拂子云、只箇拂子無思算、須彌頂上舞三臺、擊拂下座。

端午上堂、事不過三、月不過五、若能直下換雙眸、善財到處是藥圃、其或未然、一任帶蒲人戴艾虎。

上堂、擧僧問雲門禪師、如何是諸佛出身處、門云、東山水上行、後來圜悟和尚拈云、天寧即不然、如何是諸佛出身處、薰風自南來、殿閣生微凉、二大老、一人笤箒畫蛾眉、一人官路賣私鹽、瑞峰與麼批判、不覺失笑、且道笑箇什麼、就地拾得麗水金、拈起卻是新羅鐵。

中夏上堂、烏飛兎走、碧落無蹤、一齊乘楚、法歲告中。

上堂、拈拄杖卓一下云、大衆會麼、若不會更下注脚去也、又卓一下。

上堂、火雲蒸天暑威烈烈、嘉州大像通身汗流、陝府鐵牛喘而苦熱、別別富士山頭長有雪、擊

拂下座。
夏中東福和尚至、上堂、擧雪峯領衆到浮江、乃問云、欲寄二百僧過夏得否、浮江以拄杖劃一劃云、著不得、拈云、浮江和尚、只知大禮不辭讓、未知禮之用和爲貴、東福和尚自京師來、要寄一兩員僧過夏、鹿峯不敢傚古人態度、只是順命而已、何故、衡鑑在前、難容奸娋。

上堂、殘陽未收爽氣潛起、無位眞人赤骨歷地、喝一喝。

上堂、擧潙山問懶安、汝十二時中當何所務、安云、牧牛、山云、汝作麼生牧、安云、一回入艸去、驀鼻拽將回、山云、汝眞牧牛也、拈云、懶安金殿撒塵沙、潙山艸庵安鴟吻、瑞峯若見佗道一回入艸去、驀鼻拽將回、便向佗道、盡大地一頭水牯牛、更向什麼處拽將回、佗若擬開口、便與一掌道、莫犯國王水艸。

解夏小參、眞際元來廓落絕封絕疆、情域瞥爾區分、有凡有聖、所以釋迦如來二千年前、曲垂方便、立期立限、鎔凡成聖、殊不知模子既不正、脫出來底、七凹八凸、便見聲聞精勤證得擇滅無爲、菩薩克期安居平等性智、都是銅鑞得底、未得脫體完全、我此現前大衆、今夏一百二十日、不入者般鑪鞴、不受佗人鉗鎚、飢飡困寢、各自烹鍛、瑞峯今夜撾鼓作自恣佛事、只要驗過諸人各各所成底、顧視大衆云、元來只箇鐵彈子。
復擧、雲門問僧、初秋夏末、不觸平常道、將一句來、僧無對、自代云、初三、十一、中九、下七、拈云、雲門大師明中贏得一著、暗中輸了一籌。

次日上堂、法歲已終人人策功、卓主丈一下云、寒山拈卻蓋面帛、元是東家李大翁。

八月旦、謝㆓兩班㆒上堂、卓㆓主丈㆒一下云、建化門開、千足萬足、自㆑東自㆑西、無㆓思不㆒㆑服、以㆑何爲㆑驗、靠㆑丈云、燠涼次序弗㆑紊、秋來天氣已肅。

再住山城州瑞龍山太平興國南禪禪寺語錄

侍者　紹榮　懷澄　士永　等編

師、於㆓建武元年十月十日㆒入院。

山門、天下瑞龍山、門無㆓第二義㆒、若也衝㆑蘆來、那裏是那裏。

佛殿、合掌云、希有世尊、希有世尊、且道讃㆓歎箇什麼㆒、看佗鼻下有㆓口門㆒。

土地堂、恍兮惚兮、神在㆓其中㆒、莫㆑怪昔日見㆓南泉㆒不㆑得、王老師也未㆑見㆓他形容㆒。

祖師堂、四七二三、家風未㆑墜、東西的的相承、流㆓落榑桑國裏㆒、良久云、好事不㆑出門、惡事行㆓千里㆒。

據室、古來宗師叱㆑佛呵㆑祖、南禪好采接㆑人、丈室恢㆓開門戶㆒、何故大瞋不㆑怒。

敕黃、　皇祚一統也由㆓此印子㆒、祖宗中興也由㆓此印子㆒、將謂今日始流行、捧㆓起敕黃㆒云、威音王前只這是。

山門疏、屋裏竪四橫三、盡㆑情一一說破、諸人好心山僧罪過。

法座、指㆑座云、十年兩度登㆓斯座㆒、無㆓等級㆒中成㆓等級㆒、一回進㆑步一回高、燈王也在㆓階下㆒立。

拈香云、此一瓣香、恭爲祝嚴
今上皇帝、聖躬萬歲萬歲萬萬歲、　陛下、恭願建武揚文、播駿功於萬世而不拔、與禪輔教、傳
鴻業於未來之無窮、此香、仰祝
皇太子尊躬、伏願離明內瑩、嚴威震驚百里、副德深殖、景運保綏千秋、此香、奉爲　闔朝貴官、
文武百僚、同資祿算、伏願長沐天澤中孚、久爲法城外護。
此香、多年抛在窮谷、贏得枝葉自除、錯向人前賣弄、聲價徧墮掠虛、早知今日事、悔不愼當初、
已展不縮、爇向爐中、供養　前住相州巨福名山建長禪寺　敕諡佛國禪師高峰大和尙、用
謝負　恩之罪。
就座、問答不錄、乃云、向上一著子、祕在宇宙間、佛祖出興皆默斯要、靈山曾不付迦葉、少室誰
嘗授神光、西竺乾、東震旦、繩繩繼繼、接響承虛、或放或收、賓主互換、一挨一撥、拳踢相酬、便見
五家抗行、通途變格、敲唱彌峻、號令益嚴、雖然如是、終未擧揚此一著子。
石上座、今晨陞于此座、亦只緘默有分、莫是失卻開堂祝　聖之儀麼、良久云、好是無私大法
輪、蓋天蓋地助　皇化、敘詞不錄。
復擧、大唐肅宗皇帝、問忠國師、如何是無諍三昧、國師奏云、檀越踏毘盧頂上行、拈云、肅宗綸
言不虛出、言中自有仙陀響、忠國師高談闊論卽得、只是未辨鹽水器馬在、山野今日不勞恁
麼奏對、坐見無諍三昧自然現前、以何爲驗、擊拂子云、九垓歸鼎祚、四塞絕烽烟。
當晚小參、問答不錄、乃云、空劫那邊一大機、古今歷落不遷移、騎聲蓋色獨旋斡、佛祖當頭眼

似眉、山僧當年據此精藍、山門朝佛殿、厨庫對僧堂、翠竹青松、左圍右列、烟嵐雲嶂、後峙前横、今日看來、皆悉仍舊更不移易一絲毫許、且喜、與現前大衆、同游此不變不異之域、驀拈主丈云、主丈子冷地不甘、出來便道、新南禪爾只具一隻眼、殊不知近日　皇風一變、佛法也斬新、山僧伏聽處分、即今拄杖子說其斬新底法門一上、卓一下云、諸仁者還會麼、其或未會、更下注脚去也、又卓一下。

復擧、僧問曹山、佛未出世時如何、山云、曹山不如、僧云、出世後如何、山云、不如曹山、拈云、這僧向虚空裏釘兩橛、曹山奠奠奠奠、亦例闒茸、南禪今夜不敢論他出與未出、且道畢竟何者是佛、喝一喝。

上堂、佛法無多子、只要自知羞、昨日晴兮今日雨、不妨騎鶴下揚州。

聖節上堂、千載間出、一朝誕彌、景運從此日而延、日日是好日、洪基得其時以建、時時是好時、祥開慶布、塵沙界萬象森羅齊展眉

謝無極無德二首座、昭書記玄藏主上堂、羣形生於無極、誰辨端倪、大用現乎無德、焉存軌則、金章玉章、著述難成、大藏小藏、詮注不得、太光生墨漆黑、人天眼目沒通塞。

冬節小參、問答罷乃云、陰化極時、青松翠柏尚變色、陽威發處、凍木寒叢也生芽、燠凉相凌都無朕迹、泯其所以、寧容識情到者裏、沒量大人、口似磔盤、明眼衲僧、只見頭彩、惹得皓老不洗布裩、汗臭難掩、鏡清不展臥單、開眼尿床、雖然如是、冬夜斯臨、不可空過、別作家宴、管顧我此現前大衆去也、拱手云、仲冬嚴寒、伏惟珍重。

復舉、南華德禪師、新遷寶壽、恰値新冬、示衆云、新冬新寶壽、言是舊時言、若會西來意、波斯上舶船、拈云、寶壽示此四句、依俙梵語彷彿唐言、山僧住院未幾、忽逢冬節、也有一偈、是梵語耶、是唐言耶、諸人試請聽取、新冬新南禪言、也是新言、喚作西來意、北人不夢船。

次日上堂、陽從陰處生、陰向陽中極、竪起拂子云、且道這箇從那裏得來、擲下拂子云、九九元來八十一。

建武元年十一月二十八日、

龍駕臨幸本寺一宿、次早命師爲衆入室、齋罷上堂、拈香、祝　聖罷趺座、問答罷乃云、一顆靈光輝騰今古、明暗通塞不奪其相、長短方圓不狀其形、蕩蕩恢恢煒煒燁燁、天地得此以覆載、日月得此以照臨、謂之佛祖向上法輪、亦名君王中原大寶、非是四輪之類、寧將七寶而齊、此寶現時、貴賤賢愚咸荷德、此輪轉處妖邪魔外盡潛蹤、今日　龍馭光幸山中、林樾峯巒爭呈吉祥色、齋鐘粥鼓亦作歡喜聲、直得向上法輪、不勞推轉、脫體斯彰、　君王大寶無所希求自然而至、正與麼時、感　天報國一句、如何道著、卓主丈一下云、將此深心奉塵刹、是則名爲報

聖恩、叙謝不錄。

復舉、大宋孝宗皇帝、問佛照禪師、世尊六年居雪山、所成者何事、佛照奏云、將謂陛下忘卻、拈云、佛照對御談玄、一時大過、檢點將來、未免汙瀆聖聽、今日忽有人問再住此山所成者何事、只對他道、低聲低聲、天子殿前不容閒話。

十二月初三日、恭奉　聖旨、特賜莊田、鳴鼓陞堂、拈香、祝　聖罷據座、說偈云、公憑端自日

邊鑒、乃祖田園界畔明、九穗嘉禾今已熟、荷恩何必待秋成。

謝頭首對御秉拂上堂、一喝分賓主、一句辨敎禪、峻機顯脫舌有瀑泉、且道賓主敎禪、一筆勾下時又如何、擲下拂子云、龜毛拂子飜筋斗、驚起鳳鸞翔碧天。

臘八上堂、六年癡坐莫由攀、寒心酸鼻徹骨貧窮、窮則變變則通、驀地翻身下山去、襤褸袖裏褭春風。

上堂、卓主丈一下云、諦聽諦聽、唯此一事實、餘二則非眞。

歲夜小參、問答罷乃云、歲籥運轉除夜斯臨、西巷東村燒錢爆竹、張公李老驅儺送窮、一等是大丈夫、惜乎被十二時辰使七顛八倒、衲僧家翛然游乎象外、論甚月之晦朔年之舊新、卽今不是臘月三十夜、誰言來日定是大年朝、直饒到得恁麼田地、也未免墮在解脫深坑、擡脚不起、畢竟如何折合去、良久云、不是桃源客、徒勞話洞中。

復擧、香林因僧問、萬頃荒田是誰爲主、林云、看看臘月盡、頌云、萬頃荒田主是誰、答道看看臘月盡、昨日有人天台來、卻得江西一封信。

元正上堂、歲華云一變、曆運告三陽、試把腰間曆日看、何日何時不吉祥。

元宵謝新舊兩班上堂、進而不違宗、退而不失旨、左顧右眄都無暗地、佛法世法照歸一致、以何爲驗、以拂打圓相云、我見燈明佛、本光瑞如此。

上堂、今朝二月一、人人誰不識、二非雙一非隻、聰明大王擲算筒、雨餘春水漾虛碧。

壽福石梁和尚遺訃至上堂、丙寅生、囉囉哩、甲戌滅、囉囉哩、滅不滅、生不生、囉囉哩、長空萬里

一圓月、囉囉哩、壽福和尙唱此還源歌、南禪甚麼擊節、且道是什麼曲調、以拂擊床云、囉囉哩、囉囉哩。

佛涅槃上堂、鹿苑中鶴林下、左出右沒、千變萬化、而今滅後二千年、花柳依依春偏野、伏惟、釋迦如來和贓捉敗了也。

三月旦上堂、睦州和尙云、現成公案放儞三十棒、敢問大衆、如何是現成公案、莫是輕烟遮柳眼、微雨溼花腮底麼、莫是三通鼓鳴、四衆雲集處麼、莫是南禪不說而說、諸人無聽而聽處麼、阿呵呵、就地拾得麗水金、拈起卻是新羅鐵。

謝浴主上堂、水不洗水、妙觸宣明、十六開士、夢裏惺惺、卓主丈。

謝果首座忻藏主至上堂、千經萬論不如一默、直示單傳也非奇特、仰山錯上率陀天、觀音院內有彌勒。

浴佛上堂、天上天下唯我獨尊、莫恠渠儂無思算、新生孩子擲金盆。

天岸和尙訃音至、上堂、相結眉毛、山川萬里永絕音容、方見道義、如是如是、不是不是、誰知一路涅槃門、同條生不同條死。

結夏小參、九旬克期抱橋柱澡洗、三處度夏答箒畫蛾眉、祖師門下不管這般曹底、只要出格機、不受抑勒於規繩、不混威儀於茆曠、窈窈窕窕別有生涯、若能恁地、西天蠟人氷、東土鐵彈子、也是閒家潑具、諸仁者要知他出格生涯麼、逢茶喫茶、逢飯喫飯。

復擧、僧問古德、如何是定乾坤句、德云、十日一雨、五日一風、拈云、不施寸刃坐致太平、不無古

德、只是未在、何也堯舜之君猶稽於化。

次日上堂、十五日已前、盞盂口向天、十五日已後、鞔卻紫茸氈、正當今日聻、卓主丈云、寒山不管安居事、須彌頂上打鞦韆。

謝五頭首秉拂上堂、鷲嶺以一音演法、衆生隨類各得解、龍山借五音談玄、絕唱古曲無人會、且道鷲嶺底是、龍山底是、良久云、牡丹一日紅、松柏千年翠。

上堂、卓主丈一下云、會則途中受用、不會世諦流布、又卓一下。

謝鏡空首座、兼謝大衆普請钁地般土上堂、革淨土院爲延壽堂、眉間劒肘後符、鏡裏空日中斗、大人境界超格量、普請諸人自看取、凡地佛地沒高低、淨土穢土非異趣、龍山恁麼舉唱、也未免平地起骨堆、以拂擊牀云、山前麥熟桑麻綠、颺下钁頭歸去來。

上堂、舉雲門大師云、佛法太殺有、只是舌頭短、良久云、長也、拈云、雲門舌頭短則上拄梵天、長則不出口中、諸仁者要知他舌頭落處麼、噁、鞏縣茶瓶。

上堂、寒時普天寒、熱時普天熱、飢逢王饍不能餐、剛言甕裏走卻鼈、咄。

上堂、一葉才落天下知秋、祖意教意、好肉贅疣、喝一喝。

解夏小參、靈機活脫、大用現前、揑聚放開、不存軌則、滯殼迷封底、莫知其體裁、大覺世尊、二千年前、向虛空裏著長短劃、謂之法歲期限、結時有解、三脚蝦蟇飛上天、解時有結、無角鐵牛眠少室、倘能於此薦得、便見釋迦老子、七手八脚便露了也、其或未然、山中九十日、雲外幾千年。

復舉、僧問古德、九旬禁足事如何、德云、不墜蠟人機、拈云、古德恁麼答話、只有照壁月、且無吹

葉風。
次日上堂、拈主丈云、聖制已周畢、人人圓精勤、惟有木上座、依舊黑黜皴、爲是虛度一夏耶、別有長處耶、卓主丈一下云、白日行官路、三更過孟津、
謝新舊兩班上堂、一進一退、水銀墜地、左之右之、盡善盡美、莫謂南禪口門窄、山河大地齊懽喜、以拂擊牀、下座。
上堂、人人自有光明在、看時不見暗昏昏、雲門大師和沙買黃金、只得貪小利、龍山未嘗說著這般事、何故、良久云、一擧四十九。
中秋上堂、呑却三四、吐却七八、呑吐機前眼似眉、廣寒宮裏乾坤闊。
上堂、大道本平夷、愚人自佇立、良久云、鮎魚上竹竿、駟馬追不及。
上堂、拈主丈云、聲前露容、卓丈一下云、句後削跡、畢竟如何、卓丈云、三雙六隻。
開爐謝愿書記上堂、燠涼交替彼此相知、風頭暖處商量得時、以拂擊牀云、三箇柴頭成品字、無賓主話絕繁詞。
謝後堂首座上堂、一不成二不是、放過一著落在第二、苟能識得第二去、摩訶衍法無別事、卓主丈。
南山和尙遺書至上堂、化緣已盡撥轉一機、十虛消殞萬象號悲、當頭突出大人相、舜若多神笑展眉。
冬節小參、覩一瓶凍知天下寒、覩一管灰知天下暖、造化公憑全昭著、己靈神用自現前、海豎

山童悉有其分、寒梅瘦竹靡不發機、於此薦得、許他聲色叢中通活路、聖凡魔外把手遊、雖然如是、明眼看來、也是客作漢、何故、未透祖師關棙子、徒認山河作眼睛。

復擧、僧問趙州、如何是不遷義、州以手作流水勢、拈云、明中放開官路、暗裏把斷封疆、諸人向什麼處見趙州、良久云、陽氣發時無硬地。

至節上堂、以拂打圓相云、陰向這裏剝盡不減分毫、陽從這裏生來不添一線、也不減也不添、泥人突出黄金面。

聖節上堂、威音王前、地不黄天不玄、威音王後、坤六斷乾三連、正當今日又且如何、端拱云、今上皇帝聖壽萬年。

謝四頭首秉拂、及靜山首座至上堂、我有一句子、徧界不曾藏、人天眼目藉此豁開、摩訶衍法因此宣揚、建化門中是謂十二分敎、翰墨場裏喚作四六文章、龍山與麼説話、莫是好肉生瘡麼、良久云、居山方始知山靜、處世誰能忘世忙。

謝大歇首座上堂、道人相見時、彼此呈漆桶、無主無賓、非照非用、盤礴大歇場中、不要驚羣動衆。

臘八上堂、昨夜虚空迸裂星斗、失卻光芒、大地衆生都不識、唯有瞿曇自著忙、且道著忙底是、不識底是、以拂擊牀云、梅須遜雪三分白、雪亦輸梅一段香。

東福雙峰禪師遺書至、上堂、一株大樹忽凋零、慧日山顚絶楚新、將謂後昆無覆蔭、昌昌嫩桂又逢春、葬于桂昌庵後。

上堂、三通鼓罷簇簇上來、佛法人事一時周畢、法眼禪師與麼垂示、只知陪金賣鐵、不覺見利忘義、龍山卽不然、三通鼓罷四衆雲臻、不會作客勞煩主人、喝一喝。

除夜小參、曠劫已來暨于今日、烏飛兎走、暑往寒來、其蹤迹不可追尋、並是收歸舊曆日、從明朝去至未來際、劫波成壞、晷運改遷、其紀極不可考究、畢竟付在夢幻中、歲夜斯臨元正未至、乃是交頭結尾底時節、不屬過去亦非未來、喚作現在也不得、到者裏說甚舊歲今宵去新年明日來、須知萬物不爲氣候所遷、諸人元與虛空同壽、倘能恁麼、今夜分歲、大家相聚喫冰霜、樂在其中、其或未然、來年更有新條在、惱亂春風卒未休。

復擧、僧問雲門、如何是雲門一曲、門云、臘月二十五、拈云、太音希聲該括今古、卽今臘月三十日、莫謂又被風吹別調中。

元正上堂、月建丁今日歲君新制律、物物獻祥符頭頭擎玉曆、因甚如此、不見道一吉一切吉、

山城州靈龜山天龍資聖禪寺語錄

侍者　宏遠　智光　彌浩　等編

曆應二年十月、降　勅奉爲　後醍醐上皇、革離宮作梵苑、乃命師開基。

康永四年四月初八、新開法堂、此日武將兩殿下光臨法筵。

上堂、先仲佛誕儀、龍乃云、三世諸佛出現於世、唯爲說法濟度衆生、是以四辯八音並爲說法軌範、鹿苑鷲嶺亦是度生道場、祖師門下、單提獨弄、直示本分、不同敎門、然鞠其旨歸亦只爲傳法救迷也、以故西天四七、東土二三、各各相承以傳法偈、達磨大師云、吾本來茲土傳法救迷情、便見少室雪中斷臂、黃梅夜半傳衣、正法流通接踵躡武、樹下石上幽洞深巖、無處不建法幢、有機必傳心印、百丈大智禪師創興叢林以來、震旦榑桑列刹相望、大小雖異、皆構法堂擧唱宗乘、玆者本寺開基、歲序未幾、厨庫僧堂三門兩廊、雖未畢其功、佛殿落成之後、先立法堂、此所以其表佛祖本意、在說法利生者也、今當如來降誕日、已得法堂周備、時節因緣偶諧如合符契、又辱

朝廷賜額、扁曰法雷、宸翰奎畫、鳳舞龍翔、直得法雨將降、天旌瑞兆、仁澤普被世仰洪恩、如來以法付囑國王大臣、慈鑑之効昭著于此、懿哉斯法布益無窮、所謂法者何耶、乃是衆生圓具本法也、在聖不增在凡不減、大之則彌於宇宙、細之則攝於毫釐、亘古亘今不變不異、諸佛所說大小權實、半滿偏圓、皆悉此法之名義、世間所有艸木瓦礫、一切衆生動作施爲、無非此法之相用、所以道森羅及萬象一法之所印、倘能恁麼會得、如來未出世度人已周畢、此堂未營造法門自現成、山僧今日陞于此座、別無吏私底法門爲人可說、只與本師釋迦如來及盡虛空界諸佛菩薩、諸賢聖衆、現前大衆、外護尊官、堂中欏梁、燈籠露柱、無邊刹海人畜艸芥、各出廣長舌同轉大法輪而已、正當恁麼時、且道成得什麼邊事、拈主丈云、看看、釋迦如來今日在天龍主丈頭上、周行七步指天指地、普告大衆言、我今再降誕、此堂新落成、賢聖沓臻、人天交

拔、人人箇箇、都是獨尊、牌扁奎畫、梁柱方圓、物物頭頭、靡不演法、奇哉奇哉、正法聯綿未嘗滅、靈山付囑自有人、婆伽至尊與麽垂示、是則是矣、只是降生應物底法門也、諸仁者、要知如來未借胞胎已前消息麽、卓主丈一下云、諦聽諦聽。

結制小參、問答罷乃云、向上玄關機路絕、四維上下一團鐵、此關不是拒行人、自是行人透不得、從上諸大宗師、各據一方扶立宗乘、皆設此關以接方來、千載之下儼然未散、天龍門下、營功未畢、結制斯臨、山僧別無作略可施、只要諸人在此玄關裏、禁足安居、莫謂此寺未有僧堂、向什麽處廻期修證、今夏苟能透得此關、還許諸人朝踊高穹以到上方香積廚中喫飯、暮縮厚地而歸下界天龍寺裏打眠、其或未然、一任更立長期以待彌勒下生時、何故、有利無利不離行市、以拂擊牀。

復擧、僧問雲門大師、如何是諸佛出身處、門云、東山水上行、後來圓悟禪師、拈云、天寧卽不然、如何是諸佛出身處、薰風自南來、殿閣生微涼、拈云、雲門古曲纔堪聽、又被風吹別調中。

次日上堂、西天蠟人冰、東土鐵彈子、伶利衲僧、不敢介視、大衆會麽、膝下黃金不博鍮、八九元來七十二。

謝四頭首秉拂上堂、天龍有一柄拂子、一日分付我此四頭首、以作結制佛事、便見橫拈倒用、點開人天眼目、左擧右揮、演暢摩訶衍法、微妙章句從此出生、一代藏教不勞詮注、偉哉一柄龜毛拂、轉得無邊大法輪、今日仍舊還歸天龍手裏、亦要此拂子代山僧說法一上以謝頭首道誼、擧拂良久云、休休、太褒卻成貶。

上堂、無量妙義百千法門、斬新日月特地乾坤、驀拈主丈、天龍主丈沒人情、今日竭底盡掀翻、敢問諸仁者、向什麼處得出氣去、卓主丈一下云、峯轉疑無路、谿斜別有村。

端午上堂、護身法、肘後符、辟邪自辟、百福克孚、咄、好事不如無。

上堂、梅雨珊珊、林煙簇簇、谿東溪西、艸肥水足、召大衆云、水牯牛如何牧、隨分納些即不問、且道即今牛在什麼處、莫是佛殿裏燒香、法堂上聽法底麼、喝一喝。

半夏上堂、僧問南泉和尚、祖祖相傳傳箇什麼、泉云、一二三四五、天龍即不然、今日若有人問祖祖相傳傳箇什麼、便對他道、今朝是六月朔、且道誵訛在什麼處、良久云、不是神仙客徒勞話洞中。

上堂、拈主丈召大衆云、會麼、今年六月行冬令、炎帝權威未一新、將謂乾坤乖大信、烏藤仍舊黑黝皴、卓主丈。

上堂、剜卻文殊眼塞卻觀音耳、盤礴聲色叢中、贏得干戈自止、不是不是、勇士那肯家中死。

解夏小參、問答罷乃云、佛祖頂𩕳一著子、輝騰今古無差異、迷流日用而不知、坐飯籮邊自餓死、釋迦如來、見機而作開方便門、年年一夏九旬、敎人剋期取證、制約嚴厲有結有解、結則普天帀地一時結、漫天網子百千重、鐵額銅頭跳不出、解則普天帀地一時解、君向瀟湘我向秦、四海五湖皇化裏、忽有箇伶利漢出來道、丈夫自有衝天氣、不向如來行處行、天龍不肯點頭在、何故從貧入富則易、從富入貧則難。

復擧、僧問趙州和尚、如何是不遷義、州以手作流水勢、拈云、大衆會麼、會則途中受用其或未然、

山僧更下注脚去也、九夏推移又告秋、不遷之義不曾虚、觀音菩薩買胡餅、放下元來是饅頭。
次日上堂、西天以蠟人為驗、東土以鐵彈為驗、天龍門下今夏只以無驗為驗、因甚如此、不見道、官馬不用印。
中秋謝宋船綱司上堂、普天帀地一秋光、不動扶桑見大唐、明月團團離海嶠、滿船官貨孰私商。
重陽、謝新舊兩班上堂、一進一退不動纖塵、左之右之立處即眞、欲識箇中消息子、重陽九日菊花新。
上堂、拈主丈云、一徑直二周遮、放下也綿綿密密、拈起也吒吒沙沙、劃一劃云、本店賣買分文不賒。
冬至小參、烏飛兎走届仲冬、風逼離頭吹篳篥、徹骨寒來能幾人、剛言一物黑如漆、諸仁者還會麼、苟能會得、許他使得十二時辰不為陰陽所轉、七十二候二十四氣、咸歸掌握之中、離不自家戲具、何妨以萬象森羅為伴侶、以四相遷變作佛事、雖然如是、更須知衲僧家別有生涯始得、且道知有底人、向什麼處行履、良久云、曙色未分人盡望、至于天曉只尋常。
復舉、僧問首山、如何是學人親切處、山云、五九盡日又逢春、僧云、畢竟如何、山云、冬至寒食一百五、拈云、首山和尚屋裏開金玉舖、當頭賣與此僧了也、可謂善賈之家不留死貨、子細檢點未免貪小利失大利。
次日上堂、看卻一日風雲、驗取一年氣候、此是世俗底、能觀時節因緣、識得佛性深義、謂之出

世底、且道世俗底是、出世底是、咄、祖師門下不管者般閒事。

謝四頭首秉拂上堂、諸佛出廣長舌、皆具四無礙辯、演暢大法、天龍不動舌頭、別有四無礙辯、舉揚宗猷、珍重三世諸佛、灼然輸我一籌、卓主丈。

上堂、世尊一日陞座、衆纔集、迦葉白槌云、世尊説法竟、世尊便下座、召大衆云、會麼、其或未然、山僧爲衆分疎去也、朴涼風度弊猶多、作法於貪將若何、遂見二千餘載後、三尺杖子攪黃河。

臘八上堂、六載辛酸世妄傳、誰言悟道出人前、吠虛啀實至今日、雪在山兮星在天。

上堂、擲劒揮于太虛、不論及與不及、英靈點兒猶自佇立、喝一喝。

除夜小參、問答罷乃云、燠涼晦朔、春夏秋冬、終而復始、始而復終、始中有終、終中有始、空索索赤條條、曠劫前莫見其太初、未來際罕知其紀極、到這裏主歲神將罔所措、聰明大王擲算筒、古人不獲已、剛言十世古今始終不離當念、且道當念未生時、十世古今何處得來、驀拈主丈云、我此主丈子、忍俊不禁、出來道、今歲今宵去、明年明日來、知者般事便休、更弄鞏縣茶瓶作麼、山僧唯唯、伏聽處分、何故不見道、當局者迷、傍觀有眼。

復舉、僧問佛日弼禪師、如何是毗盧印、日云、艸鞋踏雪、僧云、學人不會、日云、步步成蹤、拈云、佛日和尚、開口見膽、不妨赤心片片、若是天龍又且不然、如何是毗盧印、印文已露了也、學人不會、幸是不會、會即冬瓜印。

歲節上堂、豎起拂子云、舊歲向這裏去、新年從這裏來、試向者裏高著眼、元正啓祚太奇哉、以何爲驗、以拂擊牀云、春信潛通雪裏梅。

元宵謝新舊兩班上堂、擧雪峯一日陞座、召大衆云、看看東邊底、看看西邊底、儞若要會、拈主丈擲下云、向者裏會取、拈云、雪峯和尚一擧兩得、更無剩法、山僧別無伎倆、只要諸人溫故知新、召大衆云、看看東邊底、看看西邊底、會麽、良久云、我見燈明佛、本光瑞如此。

上堂、拈拄杖云、見麽、卓一下云、聞麽、知我罪我其惟主丈乎、靠丈下座。

佛涅槃上堂、二千年前野火燒不盡、二千年後春風吹又生、柳堤花塢芳艸岸、一任波旬舞袖輕。

三月旦上堂、奉謝檀那光臨、花腮含露媚、柳眼帶烟眠、將謂東皇行此令、看來都是舊青氈、以何爲驗、看看三世如來歷代祖、毘耶室裏打鞦韆、卓主丈。

太上天皇臨幸、上堂、春光與祥光相映、和氣與瑞氣糅浮、奇哉斯吉兆、諸人會也不、中原大寶自然至、遼天高價有誰酬、會不會酬不酬、卓主丈云、塞北安南一道收。

退院上堂、不効汾陽付屬誠、七年業債董修營、今朝始有爲人處、三下鼕鼕退鼓聲。

再住天龍資聖禪寺語錄

侍者　周澤　編

師觀應二年辛卯七月二十日陞座、拈香云、此一瓣香、恭爲

今上皇帝
太上天皇、祝延　睿算萬歲萬歲萬萬歲、恭願　聖德不渝、永膺神符之籙、　皇謨不變、久受天授之圖。
次拈香云、此香奉爲　征夷大將軍及兩副將軍、資倍祿算、伏願　身宮久保不失、輔上撫下之洪勳、智海彌深、永乘崇教興禪之大願。
又拈香云、此香未歸掌握、徧界都是眞熏、纔插爐中、一會只成假弄、今日拈出供養前住巨福名山　勅謚佛國禪師高峯大和尙、聊表世俗禮儀。
師就座問答罷乃云、竺土大仙心、東西密相付、體量廣大機用靈明、法界凡聖、含靈咸受他恩力、世間興亡治亂、不擾此封疆、謂之大解脫門、亦號正法眼藏、三世諸佛、證此以震大法雷、降澍一味平等之甘雨、歷代祖師、悟此以開大鑪鞴、鍛鍊鐵額銅頭之俊流、便見五家七宗、煒煒乎續祖燈於萬世、顯演密說、恢恢焉張敎網於羣機、偉哉此箇大仙心、能成如是大佛事、雖然與麽、只是成得權化門中事、天龍今日爲諸仁者、指出佛祖頂顙一著子去也、卓丈一下云、還會麽、其或未會更下箇注脚、又卓一下、敍謝不錄。
復擧、障蔽魔王與諸眷屬、一千年隨金剛齊菩薩、求其起處不得、一日因忽得見、問曰、汝當於何住、求汝起處不得、菩薩曰、我不依有住而住、不依無住而住、如是而住、拈云、金剛齊菩薩是則固是、要且只入佛界未入魔界、山僧在此山中十餘年、有時依有住而住、有時依無住而住、與諸魔外不相離何、何故、豈不見、毘耶大士道、一切衆魔及諸外道、皆是我侍也、山僧與麽體

哉、與金剛齊菩薩行履、還有優劣也無、良久云、但見皇風成一片、不知何處是封疆

新開僧堂安奉聖僧、云、識心滅盡現威儀、內外圓明發了知、好是天眞三昧力、無邊利濟適機宜、恭惟　西天鼻祖摩訶迦葉尊者、形容長耀金色爲稱、鬚髮自除衲衣著體、分半座處、十二頭陀悉放眞光、拈一枝時、百萬大衆同推微笑、正法眼藏八字打開、教外宗風十方流布、謝其祖宗繁興之來歷、偏托尊者廣大之庇庥、其德至矣、感而遂通、其慈浩然、請則必應、將謂鷄足山中、遐俟慈氏下生、且喜天龍寺裏、正現聖僧全體、大坐不動、覆蔭後昆於億萬年、眞儀常存紹隆玄旨於未來際、畢竟如何保任此事去、休言選佛難及第、那箇衆生心不空。

八月旦、啓建御忌上堂、雨灑林丘秋色入細、顥氣領天涼颸掠地、於此薦得、法爾玄談、歷劫未墜、其或未然、御忌看經今日爲始、是是不是不是、拈杖云、天龍不合口吧吧、無端笑殺拄杖子、靠杖下座。

中秋上堂、靈山話月、權實偏圓分區域、曹溪指月、體裁手段不同途、指話機先消息子、佛祖也不敢名模、只如恭爲　先皇、從月旦至今日、看閱大藏眞詮、法界含情亦同受此洪因也無、以拂打圓相云、　今夜一輪滿、清光何處無。

八月十六日、就多寶院陞座、拈香云、此香本來寥廓絕名相、攝化門中喚作香、三世諸佛不知其價、歷代祖師只傳其芳、今日拈出爇向寶爐、供養閻浮攝化盧舍那如來、千百億化身釋迦牟尼大覺至尊云云、所冀善利、併用回嚴　後醍醐天皇覺位、恭願　神儀與法界含情、同受此眞熏頓成其妙果。

就座問答罷乃云、法身師毘盧主、大包方所細入無間、赤條條空索索、非凡非聖、求形名於何邊、亘古亘今、絕朕迹於當處、佛佛出世顯演密談、只此說得他光影邊事、祖祖相承、單提直示、未免賣弄他天眞靈機、儻能與麼會得、上無攀仰下絕己躬、獨脫無依不借伴侶、更無一法作障礙、直得以萬象爲戲具、成就也由我、破亂也由我、乃知聖凡昇降、世界轉變、皆悉從一妄生、一妄亦無起處、迷之則幻化輪回、甘自沈溺、悟之則本有妙用自然現前、所以道夢中明明有六趣、覺後空空無大千、若是吾家眞種艸、夢中覺後俱不坐在、且道他向什麼處行履、以拂擊床云、須知海嶽歸明主、莫謂干戈致太平、

散說、夫以、眞淨界中無他無自、豈容怨親於其間哉、一迷纔生萬境隨現、世界治亂人倫怨親、虛妄相酬、虛妄相奪、若有靈根者、直下知非一念不生、前後際斷、若是淺識之流、被此幻妄所縛、無有休歇、或有似怨而親者、或有似親而怨者、怨之與親都無定相、此所以其怨親俱是幻妄也、元弘大亂之時、征夷將軍特奉　敕命、速亡國敵、因茲官位日日遷喬、名望人人改觀、忽因讒虎長威獰、遂得逆鱗難回避、繹其由來、併是疾成功業、甚愜　叡襟之所致也、古者道、親是爲怨媒、其此之謂歟、于茲祥瑞雲散、龍馭不虞幸南山、簫韶聲消鳳輦不復還北闕、武家大息以謂、悲哉、臣遂墮讒訣陳謝不及、永沈逆臣之謬而已、以故武家愁歎切於常流、不敢以恨緒介懷、自遜丹悰特修白業、專欲奉祈於覺果、遂見建大伽藍作大佛事、暑往涼來又逢南呂、一十三回、御忌忽爾斯臨、五千餘卷眞詮、仍舊看閱、加之新開僧堂以安淸衆、不翅今日一會佛事、盡未來欲奉資薦　神儀、謝其追修懇切之志、偏出君臣不和之中、以此思之、可謂怨是

為親媒也、然末運變移、三寶諸天亦不奈何、世復騷亂、人民不穩、是以今日佛事不如武家願望、雖然懇志之所之、聊表供佛齋僧之儀、仍命小比丘某、陞于此座、擧揚宗旨、某內無蘊藉之德、外欠穎脫之才、只因宿世緣遇使然、忝沐 先皇仁顧久矣、已迨八旬暮齡、自揚再住家醜、此亦前緣之所使然也、寔非聊爾苟且之事、縱雖不受台命、卑情寧忍守安閒乎、所以不敢固辭、出來納敗、伏乞衆慈各垂亮察、恭惟 後醍醐天皇、德化冥符天選、聖明不辱古風、皇運時至再建一統之洪基、鳳曆新開重踐萬乘之寶祚、四夷斂衽萬品披襟、將謂堯風永扇而無窮、豈度舜日暫出而忽隱、熟思其態度、寧謂偶然而然乎、料知 神儀假償濁世業緣、早預淨邦嘉會、非是聖運短祚之因由、只是衆人不幸之標幟者也、果然登霞之後、至今世未靜謐、緇白之流多是失所、衆心攀慕難得而止矣、上來所伸皆是夢中夢事也、縱雖實有既往不咎、況是夢事耶、人間第一輪王亦是夢中之寶位、梵世最高天王亦是夢中之快樂、是故釋迦如來棄輪王位、入山苦行、其意何也、蓋爲敎人各知無上覺王超越世間尊貴故耳、四部雖異既稱佛弟子、其豈不效其行藏哉、恭願 上皇頓轉塵機不拘妄宰、速繇業識證得靈知、超越怨親差別之昏衢、優游迷悟一如之靈域、無忘鷲嶺付囑、生生保護法門、不動龜山寂場、刹刹利濟羣類、武家奉祈願望、既爾如斯、 上皇叡念寧不爲之消融哉、所修善根固非輕尠、諸佛大慈必嘗冥垂感應矣、若爾則干戈永止四海清平、災厄咸消萬民康泰、武運綿綿永傳奕世、願心浩浩普及含情、

復說偈曰、人人有箇無盡藏、聖賢凡庸無增減、河沙德用盡包容、謂之不思議實相、或現重重

樓閣雲、或出種種音聲海、大千經卷攝一塵、一塵徧在經卷中、一一文字現樓閣、一一樓閣演法門、如是法門不于舌、如是樓閣非造作、今此伽藍亦如是、大衆於中轉大藏、伽藍經卷互融攝、明明彌滿虛空界、偉哉出格大佛事、神儀直入如來地、普導法界迷倒類、怨親平等成覺果、佛法王法不下衰、百千萬劫莫窮盡、三寶證明不可疑、更爲後昆立公憑、卓主丈一下。

夢窓正覺心宗普濟國師語錄上　終

夢窓正覺心宗普濟國師語錄 下

住持天龍禪寺小師 妙葩 編

陞座

慶讃法華懺摩 香詞不錄

靈光獨耀、非暗非明、淸家家白滴滴、罪雲素來絕點、懺雪何勞積功、不可以解脫貴乎諸佛、不可以淪溺賤乎衆生、釋迦老子、不知事從丁寧起、四十二年、東街西媚、逗到法華會上不奈、栓索倶露、卻言正直捨方便、但說無上道、上是天下是地、喚甚作無上道、七論玄談都是太虛黼黻、三周妙悟靡不好肉瘡疣、龍女脫鱗未足爲奇、慢者退席卻較些子、只如今日諸仁者修習法華三昧、懺滌愆尤、是方便門耶、是無上道耶、顧視左右云、露地白牛弄蹄行、雪山步步無閒草、復說偈云、人人有箇一卷經、古今歷落常現前、不是靈山所說底、亦非葱嶺帶將來、蕩蕩迴出思議表、是名妙法蓮華經、都無文字可書寫、更向何處讀此經、忽有宿殖深厚人、當頭能信有此經、不可書處下得筆、不可讀處鼓得脣、如是書寫如是讀無功之功成大利、玆功至竟歸何處、黃頭碧眼也不知、卓主丈一下。

太平和尚小祥忌請 香詞不錄

諸佛未出世、是處山凸谷凹、祖師未西來、諸人頂天踏地、木鏡照素面、幸自可憐生、諸佛已出世、橫說豎說也是白日點燈、達磨已西來、以心傳心大似河頭賣水、一家有事百家亦忙、便見行棒下喝、豎拂擊牀、簧鼓多少人去、將錯就錯、有甚了期、驀拈主丈、看看太平和尚、今日在瑞峯主丈頭上、掀翻先賢窠窟、直教諸人知生死禍福、總是太平無事時節、諸人還知麼、卓一下云、太平元是將軍致、不許將軍見太平。

復擧、白水仁和尚、因設洞山忌齋、有僧問曰、先師還來也無、仁云、更下一分供養著、拈云、白水和尚、可謂報恩太過卻成怨、卽今若有人、問今日設此忌齋、太平和尚還來也無、便以一絕古詩呈似他、少小離家老大囘、齒黃面皺鬢鬅鬙、兒童相見不相識、卻問客從何處來。

性喜禪定尼小祥忌請

普天匝地恁麼熱、富士山頭猶有雪、寒中暑也暑中寒、都無一定底時節、倘能於此著得頂門眼、方信法無定相、逢緣卽宗、便見生死去來、安危得喪、是自家遊戲三昧、有時東倒西擂、四海五湖皇化裏、有時騎聲蓋色、毒龍行處草不生、成就也由我、破亂也由我、權柄在掌握、塵塵建法幢、雖然如是、更須知有向上眞歸處始得、諸仁者要知眞歸處麼、擊拂子、漢不收兮秦不管、又騎驢子下揚州、敍謝不錄

復說偈云、一段精明絕名相、古今寥廓獨光輝、乃是諸佛出身處、含生以此爲所歸、非男非女非神鬼、左轉右轉露眞儀、謂之摩訶般若力、亦曰廣大無緣慈、迥然超過言象外、大人境界沒人知、爲君今日盡情說、日出東方夜落西、卓主丈一下。

上杉法禪禪尼小祥忌請

拈香云、此香不是人間所有、亦非龍宮出來、信手才拈起、眞熏滿九垓、茲者奉三寶弟子侍中藤某人、今晨伏値先妣法禪禪尼小祥忌辰、借手爇此妙香、供養本師釋迦如來十方三世婆伽至尊、圓覺、楞嚴、維摩、法華一切妙典、迦葉阿難、四向四果、諸賢聖衆、文殊普賢三賢十聖諸大菩薩、所鳩善利、併用資薦先妣禪尼覺路、伏願覺靈與法界含情、同受眞熏共成道果、就座問答罷乃云、妙性圓明、離諸名相、切忌白日挑燈經行、靈光獨耀迥脫根塵、可憐特地揑目見月、不揑目不挑燈、生死禍福何處得來、所以道、夢裏明明有六趣、覺後空空無大千、倘能於此薦得、西施拈卻蓋面帛、元是隣家老母嫫、寶蓮未嘗陷泥犂、龍女誰言成正覺、玉樓金殿、劒樹刀山、任意逍遙都無忻厭、謂之無爲無事大人境界、更論甚麼五障三從、正當恁麼時、修善報恩、還有功不浪施分也無、卓主丈一下云、換骨洗腸投紫塞、洪門切忌更銜蘆、贊經敍謝不錄。

復說偈云、十方薄伽梵、一路涅槃門、去來非別處、縛脫共同源、徧界不曾藏、覓則暗昏昏、大而入纖芥細而蓋乾坤、與麼照破者謂之大覺尊、與麼受用去乃是大善根、以此資三有、以此報四恩、功德沒涯量、贊歎難爲言、我今自話墮、笑倒鐵崑崙。

法海禪師忌請

拈香云、此香、其根廣大、豎窮三際、橫亘十方、其蔭洪荒、上覆高穹、下載厚地、茲者平安城佛心禪寺住持比丘某、今晨伏値先師法海禪師大和尚三十三回之遠忌、借手山僧爇此寶香、供養　現座道場、當來導師彌勒慈尊、現在應迹、釋迦牟尼如來等、微塵法界、十方三世、諸薄伽

梵、華嚴般若、法華涅槃等、龍宮海藏、諸部眞詮、文殊普賢地藏觀音等諸大薩埵、西天四七、東土二三、繼踵傳宗、歷代祖師、先師法海禪師大和尙、所冀香雲徧布、無邊含情咸霑龍華三會之慈雨、法海彌深、未來永劫遐通天池一派之正流、就座問答罷乃云、威音以前也與麽、不添一絲毫、威音以後也與麽、不減一絲毫、也不添也不減、空索索赤條條、洗滌而匪淸、塗糊而匪汙、離樣離模、迥出心識機括、至淵至奧、寧借言詮梯媒、雖然如是、苟能透過荊棘林、處處綠楊堪繫馬、深玄法門、刹說衆生說、廣大佛事、一成一切成、不藉漚和、刹刹度羣動、毋勞號令、塵塵建法幢、山野恁麼告報、諸仁者還知法海禪師冷地聽得橫點頭麽、若也知得、山僧今日不失利、其或未然、眞淨界中纔一念、閻浮早是八千年、卓主丈一下。

復擧、耽源和尙、忠國師忌日設齋、有僧問、國師還來不、源云、未具佗心、僧云、又用設齋作麽、源云、不斷世諦、師拈云、耽源和尙、不斷世諦、卽得、若是佛法遠之遠矣、今日丁法海禪師遠忌、門下高弟同設齋會、且道是佛法耶、是世諦耶、以拂擊牀云、三千界外放光明、雙六盤中休喝彩。

康永改元壬午仲秋初五日、欽奉

聖旨、慶讃京城東山八坂寶塔 塔中圖繪兩界諸尊

拈香云、此香徹塵刹界求難得、大願海中流出來、爇向爐中、恭爲　今上皇帝　太上天皇、供養本地法身、法界塔婆、釋迦如來、眞身舍利、胎金兩部、無邊諸尊、三世出興諸佛如來、十方常住諸賢聖衆、次伸祝貢　梵天帝釋四大天王云云、榑桑顯化伊勢太神宮、八幡大菩薩等大

小福德、一切神祇、伏願洪慈保持、增長彼大願力、諸障消殞、圓成此勝善根、

就座索話、無縫塔裏不通一線、佛事門中且容相見、莫有袖中藏漫刺底麼、有僧出衆問云、修塔止斧、供養擇良辰、朝旆臨筵、山川生瑞靄、人天側耳、請師提綱、答云、日月添光天不老、山川布瑞地無秋、進云、佛事門中還有西來祖意麼、答云、鐵牛擎出黃金角、進云、與麼則但見皇風成一片、不知何處是封疆、答云、切忌管裏見蒼穹、進云、記得、僧問石門聰禪師、如何是無縫塔、門云、直下看、的當也無、答云、白日打官吏、進云、僧云、如何是塔中人、門云、退後退後意在那裏、答云、半開半合、進云、學人卽今咨和尚、如何是無縫塔、答云、大家在這裏、進云、如何是塔中人、答云、當面蹉過、進云、和尚恁麼答話、與古人是同耶是別耶、答云、拈卻蓋面帛看、進云、只如今日慶贊浮圖、莫便是無縫塔麼、答云、就地拾得麗水金、拈起卻是新羅鐵、進云、莊嚴旣盡善美、供養亦致勤渠、畢竟成得什麼邊事、答云、萬象隨喜、虛空證明、進云、不翅學人開瞢昧、普令含識結良因、答云、大商不見小利、又有僧出問云、浮圖壯麗、周畢慶讚、法筵儼然、好是時節、願聞提唱、答云、旣自能如此、我今不再三、進云、一句全提、萬機寢削、學人猶遲疑、更請垂慈誨、答云、左眄千生、右顧萬劫、進云、昔年雙林傅大士、旋繞靈塔、七佛前引、維摩接後、未審是什麼標格、答云、彩氣夜常動、精靈晝少逢、進云、今日八坂勝伽藍、慶贊靈塔、王臣歸崇、人天感動、還有功不浪施分也無、答云、大功不宰、進云、鄉談相似州縣不同、昔年底便是、今日底便是、答云、六隻骰子滿盤紅、大都只是見頭彩、進云、與麼則古今無異路、達者自同歸、答云、君向瀟湘我向秦、進云、上來蒙指示猶墮功勳邊、如何是向上事、答云、八角磨盤空裏走、進云、不因夜來鴈爭見

海門秋、答云、君子不介視、　乃云、群生大本諸聖眞源、亘古亘今、獨露獨耀、不借伴侶於萬法、不昧靈明於諸緣、恢恢焉彌綸十虛、蕩蕩乎通貫三際、不可以識識、凡庸爭得梯航、不可以智知、聖賢亦難鑽仰、絕梯航時、機路自活、離鑽仰處車馬潛通、倘能於此承當、觸向都無適莫、便見本分地上全開佛事門、佛事門中直示本分事、淨穢元非異域、處處擧揚祖宗、聖凡同發一音、時時演暢玄旨、正當與麼時、且道功歸何處、豎起拂子云、天高羣象正、海濶百川朝、散說井附于後

今日法會旨趣無佗、只爲慶讃此塔婆、成就其善利而已、夫塔婆者梵語、此云高顯處、亦名功德聚、或就外相以立名、或約內蘊以明義、蓋是標幟高顯遠望近瞻俱得益、體性融通大功至德悉周圓故耳、諸佛菩薩、各各三摩耶形、以此爲本形、一切衆生、種種五取蘊體、以此爲總體、匪啻凡聖含靈能具斯體相、至于草木瓦礫、亦受其形容、所以謂之法界塔婆、十方世界、弘法利生處、靡不建立之、諸聖數演眞詮祕典中、皆以讃歎矣、祖師門下別無模樣、當頭指出箇無縫塔、通上徹下間不容髮、橫徧豎窮、杳無見形、性具德用既絕思議、修飾功勳那有限劑、端由叵逃梗槩在旃、伏惟　　征夷大將軍、左武衞將軍兩殿下、禀英傑於天賦、不玷武門遺風、殖善本於夙生、相符鷲嶺付囑、左武右文堪爲王室機括、內眞外俗寔是法城金湯、茲者元弘以來國家大亂、想料賢懷爰有介惡、祇是天災起於不虞、傷害人民不尠、焚燒舍宅幾何、因此惡緣翻發善願、其善願者所謂欲於六十餘州內、每州建于一基塔者也、其旨趣不敢爲私家、欲祈佛法王法同時盛興、其回向亦非爲自利、欲濟此方佗方一切含識、具陳精悃上達、　聖聞、其志協、　叡襟、亦同發大願、乃命主幹於武將、以成締構於諸州、或新樹營功、或重補廢址、今此

當山靈塔是其一也、因茲數年漸補頽落之積弊、今日特旌供養之彝儀、朝旆臨筵爲法作證、梵苑添彩令人觀光、龍象沓來、人天交接、伶倫奏樂、足以表世俗諦中有眞諦、淸衆諷經、亦堪示眞空門裏開化門、法會九成、　叡願萬足、此乃冥顯感應之所致也、豈非君臣道合而使然乎、本寺堂頭高山和尙、發願修營此塔已迨四十餘回、累年興隆大功併歸高德也、今日慶贊唱導辜于別人乎、雖然老師自伸謙讓之忱、遂擧山野以代焉、是以叨膺　詔命、難爲固辭、不遑揆愚蠢、出來納敗闕、伏乞衆慈各垂亮察、繹夫七百年前、靈塔草創之時節、乃是六十餘州佛法流布之最初、　上宮太子之建此塔也、大悲願力、深熏羣品心、淨藏上人之祈此塔也、靈驗嘉聲普落諸人耳、偉哉斯塔、迥出常標、外構五重層級、內納三粒馱都、內外相稱、全露法身之靈場、輪圓具德宏闡祕藏之玄閫、又見奉安兩界覺皇四佛尊像、各具五智之深理、宛爾斯彰、互爲主伴之化儀、儼然可見中心一柱、圖三千諸佛、邊隅四柱繪三十七尊、過現相在、彼彼含攝猶如鏡燈、橫豎無礙、重重互融不異帝網、八祖列坐四壁、八天圍繞四方、當知諸聖諸賢、同會常恒談祕談玄、何疑善神善祇降臨、日夜護人護法、奇瑞殊特、自是集而大成焉、褒美稱揚其豈言之所及哉、治承正應此塔屢罹回祿、　太子願力堅固不成燼灰、累朝尊崇至今相續、　叡信彌篤嚴飾轉新、建久年中、鎌倉右幕下深生信心、特伸供養、自爾以降武家渴仰亦相繼、靈塔紹興未嘗休、於戲如來、以佛法付囑國王大臣有力檀那、金言不虛可得而驗焉、昔本朝伽藍興建、此地是爲權輿、今諸國塔婆供養、此地亦作先鋒、由其感應冥符、知此緣遇際會、佛法流布既始從此精舍、佛法再興亦資于此精舍者歟、阿育王曾造八萬四千塔廟、皆擇

八䄻之靈地、以爲址基、榑桑國新立六十六箇之浮圖、先於八坂之精藍而修供養、乃知此地元蘊八䄻之德、故自得八坂之名者也、想厥來歷、固非苟然、敎中云、正法住正法滅、須以塔婆興廢觀焉、既是塔婆興隆得時、應知如來正法住世、彼法勝寺寶塔、去春罹火災而壞滅、貴賤皆同悲歎、此法觀寺寶塔、今日遂供養而再興、緇素靡不隨喜、兩塔壞滅與再興、示相雖異、諸人悲歎與隨喜得益是同、以此思之、可謂塔婆興廢、俱是佛法流通、所以道、乃至童子戲聚沙爲佛塔、漸漸積功德、皆以成佛道、童子之戲尚成覺因、何況朝廷　叡願武門精誠乎、聚沙之功亦熏善種、何況須賜田園、割施財產乎、然則不用備慶贊於多言、偏是仰證知於三寶而已、莫謂塔婆唯與六十六州、須知周徧法界、塵塵廣開建化門、誰言供養聊期一時一會、亦當窮盡未來、世世常作大佛事、以此鴻因祝延　皇祚、金輪統御踵三代之嘉猷、寶曆綿洪享萬年之景運、憑茲善利保裕武門、久佐　帝道、榮耀傳家永歸祖風、智才出格仗其威力、護持法門、伽藍齋靜魔孽潛蹤、僧侶安寧宗猷接踵、散厥餘熏賑濟國土、干戈永止朝野樂清平、災禍咸消黎庶得康阜、併斯功德回向羣生、怨類親類齊出塵勞、有緣無緣同圓種智。

復說偈曰、人人有箇無縫塔、八面玲瓏不覆藏、廓落虛通無內外、湘南潭北絕封疆、卓然獨立乾坤外、塵塵剎剎放靈光、著眼看來沒形段、沒形段處露堂堂、大而非大入纖芥、小而非小褁十方、羣生托庇未嘗識、今日分明爲擧揚、一塔出生無量塔、諸塵擎出古佛場、好是洪庥莫窮盡、佛運皇基共久長、卓主丈下座。

覺皇寶殿、慶讃陞座、康永四年八月晦日、此日太上天皇臨幸。

拈香云、此一瓣香、根蟠實際、蔭覆高穹、無邊德用集在其中、爇向爐中、恭爲
今上皇帝　太上天皇、祝嚴聖壽無疆、洎文武百僚、增福增壽。

次拈香云、此香、應時變化、沒蹤由、信手拈來歸掌握、爇向寶爐、供養　現座道場、毘盧遮那如來、千百億化身釋迦牟尼、大覺世尊普賢菩薩、文殊菩薩等諸大薩埵、迦葉尊者、達磨大師等歷代祖師、及微塵刹界一切三寶、所鳩善利、恭爲　後醍醐上皇、莊嚴覺果、次伸祝貢　大梵尊天帝釋尊天四大天王、日月星宿、火德星君、天界列位、諸天仙衆、地界所屬、一切靈祇、水界所屬、諸大龍王、榑桑顯化、　伊勢太神宮、八幡大菩薩等大小神祇、普用資薰、同垂保護、遂趺坐索話、祖令當行、千聖結舌、唱和門中、且容擊節、莫有同聲相應底麼、問答罷乃云、玄機透脫融萬象於目前、至德高明會千差於物表、一透一切透、一明一切明、豎抹橫該無適不可、左顧右眄克逢其原、不費纖毫廣修沙量佛事、不動一念普度法界衆生、直饒恁地違得去、若入祖師門下也是階下漢、直得淨裸裸絕承當、亦洒洒難近傍、世間樞要總不相干、出格風流亦無交涉、更說甚麼廣修佛事、普度衆生、好是無爲無事大解脫門、倘能入得此門、　皇家也無爲無事、佛家也無爲無事、一切災厄不禳自消、萬古徽猷不求自備、三世如來共默斯要、歷代諸祖亦只端拱、小比丘某甲、今日奉　詔陞于此座、難容拱默、且通一線路、開闡此大解脫門去也、以拂擊牀云、鵰弓已掛狼煙息、萬國歌謠賀太平、宣讀御願文并諷誦文。

復云、妙性圓明離諸名相、本來無有世界衆生、此是如來不欺之語也、既無世界、安有興亡治亂之爲變乎、亦無衆生、寧容彼我寃親於其間哉、雖然如是、一翳在眼千花亂墜、此性隨緣而

現諸名相、名相轉變昧卻圓明、若是悟達之人、安住寂滅性中、而起恒沙妙用、隨順世間幻相、而利濟顛倒衆生、不以虛妄轉變擾乎其懷、蓋其國土安危、自佗逆順、皆爲吾家之戲具耳、迷妄之類不肯信及、蔽無相而爲有相、枉妙用而爲妄用、是故世間否泰相奪、衆生業債相酬、曠劫輪廻因循至于今日、未來沈溺出脫待於何時、然其流轉之相無有實體、如夢幻似空花、若究其本則禍之與福同源、寃之與親一體、佛祖出興於世不爲別事、唯爲令衆生悟入此同源一體之域而已、爰元弘以來天下大亂、不翅戰場兵卒多殞軀命、至于山野飛走亦罹其餘殃、神廟佛堂、朱門白屋、或爲兵火所焚、或爲賊徒所壞、嗚呼災之害物莫加於此矣、繹其天災之來歷、出乎世運之否屯、所謂否屯不從外來、此乃積劫業債之使然也、業債因由亦非佗作、只是一念無明之所感也、自非夙植深厚之人莫能知之、或有知而故犯者、佛祖亦未如之何也已矣、茲者征夷大將軍源朝臣、左武衛將軍源朝臣、眞智內熏、靈機外發、自懷慙愧欲謝愆尤、具陳丹悃上達　叡聞、所伸懇志深協　叡襟、乃奉　聖旨於榑桑國中、每州建立一寺一塔、普爲元弘以來戰死傷亡一切魂儀、資薦覺路、又曆應年中、特立　叡願革此皇宮以作梵苑、奉爲　先皇嚴飾寂場、又命武家董其營造、經年未幾、不日成功、寔是君臣道合、天龍保持之所致耳、便見物不終否、惡事轉成善事、法無定相、逆緣卻爲順緣、此所以其禍福同源、寃親一體者也、兵革之亂於世非適今也、上古亦夥矣、原其端緒、或爭國祚或誅叛逆、其中一負一勝、只是增業增寃而已、未聞轉惡緣而爲善緣如今日也、宓以佛化之行、未有出乎苟且之中、其必得處待時而興焉、疇昔　嵯峨天皇御宇、有慧萼上人、奉敕渡于大唐、流通佛法於本朝、

參鹽官安國師、信有敎外玄旨、仍請其會下上首義空和尚來于本朝、勅以東寺西院爲安下處、時時召對鳳闕、于時　皇后宿植開發一面契悟、乃建精舍於此嵯峨、以號檀林、請彼禪師住持、檀林寺內有十二院、　皇后居其一院、因稱檀林皇后、其事具載石碑而在東寺、其碑表題云、日本首傳禪宗記、然禪宗興行未得其時、　皇后登霞之後、檀林精舍漸漸荒零或爲郊蕪、或爲民居、嵯峨聖代已後迄于四百載、禪院聿興、謂洛之建仁東福相之壽福建長是也、自爾以降、大小禪刹徧於天下、七十年前、　後嵯峨院卜皇居於此地、乃是檀林寺一院之故基也、　龜山法皇亦相繼以爲行宮、其內有壽量院、分南禪寺僧二十員而安此院、今之法堂所在、便是壽量院之舊趾也、是知、此地將與大叢林、而豫有斯兆矣、遂見又革此行宮作大伽藍、禪宗首傳本朝、則此地爲先鋒、禪宗旺化於世、則此地亦爲殿後、此乃得處得時以興佛法之驗也、理自昭著、其誰疑諸、本寺修營已及太半、朝廷　叡願必當圓成、山名寺號未揭牌扁、

今上皇帝先染宸筆、佛殿法堂署額、左梁右欐誌文、以至聯芳洞鑒之表題、並是　太上天皇之奎翰也、聖志懇誠斯彰、祖宗光幸可見、熟思此伽藍之興建、偏起乎大亂之因緣、其豈非明王賢臣、外逆內順、相爲表裏扶竪宗猷者、恭惟　太上天皇善因冥熏、聖德顯布膺神符之籙、受天授之圖、以理考之則非先皇之貴裔、以義思之則猶繼體之副君、因玆今月伏値　先皇七周御忌、今日儼然　臨幸當山、特命小比丘某甲、陞于此座慶讚精藍、奉爲　尊靈莊嚴覺果、某既爾叨膺開山、不敢自揆鄙野、擧揚正法上答　洪庥、復請諸龍象同作證明、供佛施僧及乎諸山、看經誦咒轉於全藏、大赦囚虜出囹圄、免苦楚、特命伶倫翮霓羽、奏簫韶、豈止

一獄囚者乎、法界含情同出樊籠、等限四部倫乎、山河草木齊起鼓舞、眞俗互融事理相攝、以此供養　三寶、供養中之最上也、以此慶贊伽藍、慶贊中之純眞也、加之　龍馭入山法筵添彩、台旆列砌衆會觀光、顯而所見尙非言可陳也、冥之感應奚有不然者哉、天龍雲集、賢聖光降證明今日佛事、不言而可諭焉、法會彝儀既是盡善盡美、所裒鴻業、當知無量無邊、曠劫業根亦應拔出、矧是元弘以來僣尤乎、無始積妄尙可消融、何況一旦介爾情執乎、恭惟　後醍醐上皇、天選鳳質、物外神標、德蓋二儀明並兩曜、或臧或否、隨緣玄化難知、是聖是凡、出格高行莫辨、祇因叡運不得於時、遂見仁風欲扇而止、嗚呼喬嶽之仙長逝茂陵之駕不還、尊儀已入大乘之法社、勝趣何拘小節之幻緣、假令在輪王位七寶豐饒、爭似證極聖身萬德圓備、恭願　神儀徑登覺殿、開業障本空之門、常棹慈舟游冤親平等之海、無忘鷲嶺付囑、建法幢於塵區、不動龜山寂場、濟羣類於沙界、戰陣傷亡幽魂、親疎齊蒙巨益、昏衢迷倒含識、貴賤同入圓明、更冀履茲以往、至于未來、兵戈偃息寰宇康寧、　皇祚延洪錫天下之大慶、營門繁衍護法城而永隆、上來所伸情旨、並是詣實供通、萬象證明太虛保任。

復說偈云、一莖草上現梵刹、一處纔現處處現、一梁一柱遍河沙、片瓦根椽含法界、法界諸塵亦相攝、無壞無雜無罣礙、帝網交羅互莊嚴、微妙壯麗自圓備、一多大小泯其量、廣狹中邊誰敢論、偉哉此箇勝伽藍、永劫儼然不可廢、無邊諸佛諸聖賢、光嚴住持在裏許、人天鬼畜諸羣品、貴賤冤親共一家、寂滅性中無對待、安有業債互相酬、人人同入光明藏、刹刹恢開無礙門、

卓主丈。

拈香

達磨忌

說破六宗、水不洗水、主張堅白理論、剛道單傳玄旨、嵩山冷坐九年之弓、引得兒孫奕世之累、我今只謝其無恩、不敢望其得髓、拈香云、古柏一炷價千金、莫比神光斷隻臂。

壁觀九年、露拙呈醜、隻履西歸賊無空手、改頭換面伎已窮、三十六路不如走、葱嶺塵塵現前、少林處處繁茂、惡跡卒未消、累及千載後、拈香云、兜樓一炷分恩怨、半是香兮半是臭。

鯨波萬里冒嶮西來、意趣難解、擧世疑猜、震旦河頭擔水賣、榑桑平地起骨堆、千變萬化滿面塵埃、隻履歸西竺、全身現九垓、少室峰前兮月明雪白、片岡山下兮葉落花開、慈蔭恢恢亘今古、後昆往往自張乖、拈香云、我此瓣香是官貨、莫謂今晨設忌齋。

圓覺開山忌

攪動龍淵水、榑桑震雷霆、電收四十年、遺風轉更腥、這般惡迹掩不得、咸言圓照有寧馨、拈香云、是怨是恩、吾不識兜樓一瓣寄玄冥。

一山國師忌大雲庵請

鬪成砌下一池水、飣出簷頭數朶峰、好箇天眞法供養、今晨何事大家忽、恭惟、前住當山　勅謚一山國師大和尚、其智自游及、其辯孰攖鋒、內之與外相應、宗之與說兼通、峻機踏玉山之頂、妙用移頑極之風、震旦扶桑兩處成龍、國師名翼翱十方空、曩時命我侍巾瓶、三喚聲裏虛

睡困、三十年來未消、此恨遠忌斯臨、誰分恩怨、高弟相共借他手而拈自香、南禪也是納公稅、以當私獻、且道如斯供養、還有酬慈蔭分也無、拈香云、莫怪香煙一縷微、大雲元起於膚寸、提起香云、此箇一物先地先天、都無今古之相、豈爲陰陽所遷、前住當山　勅謚一山國師大和尙、昔在大唐求此物、得之於玉几峰前、一生受用毋固必、千變萬化只隨緣七處住山去、以此作鉏斧、萬里渡海來、以此作鐵船、對　君王談玄、則是爲廣長舌、與衲子垂手、則是爲惡辣拳、歸寂之後十三回、祕在家中作青氈、今日遠忌斯臨、門下高弟又拈出之、用作一瓣香、爇向爐中上酬慈蔭、還有爲先師報恩分也無、拈香云、不用巴陵三轉語、借婆裙子拜婆年、就玉雲庵。

佛國禪師忌

荊棘滿地吾也未窺師之藩籬、白浪滔天吾也未見師之靈骨、曾無慈訓啓蒙、只遭怒罵呵咄、打初一步已錯、開眼墮佗窠窟、今朝既往不咎、隨例設箇忌齋、拈香云、從前怨恨百千緒、和此瓣香當下灰。

先師三昧南禪不知、南禪三昧先師不知、平白一條路、東西各背馳、盡謂養子不及父、以致家門一世衰、諸人苟能恁麼批判去、拈香云、我此一炷香、功不浪施、債有主寃有頭、先師好采接我、無端結得怨仇、切齒悔責覆水難收、一不做二不休、今朝又爇此兜樓。

元翁和尙盡七請

此香生育不藉二儀、根苗自壓羣卉、失之則昧卻五分法身、得之則熏成一切種智、伏惟前席南禪元翁和尙、既得此香夙熏、平生志操拔萃、遂見德馨日新、乃爲　王臣所貴、扶起先師門

庭、嘉聲浩浩不墜、慧林亦得此香些子熏力、與元翁受用底連枝同氣、有時藏之丘壑共守寂寥、有時賣之街衢各求小利、此老奄然戢化權中陰已迎、盡七忌謹爇茲妙香、供養現座道場圓通大士、及無邊塵刹常住三寶、果海賢聖、所鳩殊勳資薦尊靈、增崇品位、且道寂滅性中增崇什麼位次、挿香云、樹凋葉落天地秋、誰見春花開碓觜。

爲耕雲和尚

胸次汪洋、舉措超軼、稟風度於松源之的流、喪塵機於大通之密室、一時名望山嶽凌空、兩處化權雷霆驚蟄、此是耕雲和尚平生受用三昧也、只如末後道一失人身萬劫不復、諸人向什麼處與此老相見、挿香云、相見不相見、只消一炷香。

爲師叔孤雲西堂和尚

大方無外大圓無內、出格舉措寧有對待、平生蘊奇智圭角不彰、滅後喪全機靈光何昧、生處示滅、仰山當年致寂寥、滅時有生、臨川今日自慶快、慶快與寂寥大虛著五彩、轉換句子如何話會、挿香云、碧天萬里一孤雲、變作香雲覆沙界。

恭爲　龜山聖廟

聖駕去後、山幽洞深、舊日祥雲猶未散、今朝甘雨灑寒林、恩澤滂流及纖芥、柏根一片價千金。

爲全璧首座罹難而卒

生涯喪盡始爲自便、轉身一路東邊西邊、眉間掛劍時節、直得血濺梵天、莫謂是償宿債、須知全璧而還、挿香云、今日與佗添意氣、薰風吹散博山烟。

上杉道果禪門盡七請

此香無根之根、深盤金輪際、也非其限、無蔭之蔭、廣覆太虛空、也推其包、以一切功德爲枝條、以無邊法門爲花果、淨穢刹土藉此爲基本、凡聖含靈誰不托庇麻、價直不用貴賤之商量、馨香豈干沈檀之品藻、于茲日本國相州鎌倉縣居住某人、今月今日、伏値先考某人盡七之忌辰、特爇此寶香、以供養十方常住一切三寶、所鳩功勳、併用莊嚴某人報地、伏惟某人氣韻溫和、風采冲淡、混俗而抱道、可謂雪後松操、在欲而行禪、固是火中蓮華、其德可人、遍觀遐聽皆稱善、其行超格出生入死如優遊、處世五十三年、釘雲繫風、歸泉四十九日、幻收夢破、且道某人即今在何處、拈起香云、於此看取、體露金風、其或未然樹凋葉落。

冷泉黃門月巖居士、夢作一首歌、告舊友、願爲我作善、因數輩相率設齋會請

此香無住爲根本、夢幻作枝條、將謂不牢固、刧火莫能燒、茲者某等借手爇此寶香、以供養云云、伏惟某人曾寄夢形於貴胄、歌仙名望屬南柯、滅後靑黃已三周、夢裏恍乎呈素面、灼然夢中夢、又作夢中吟、舊知遺誓聞而悵焉、今日夢中成于嘉會、乃修夢中佛事、救佗夢中沈冥、特命夢窓野人謾說此寐語、正當恁麼時、還有寤底消息也無、拈起香云、由來斯義甚幽深、彌勒大士也不會。

前讚州太守觀公大禪定門忌請

此香無根分得活、離地分不倒、臭中香香中臭、佛祖也難品藻、于茲云云、所冀覺靈與法界含識同受斯妙熏、翻業根而作善根、轉惡果而成覺果、伏惟某人翳花結果五十餘年、太虛相貌

絶今古、水月掩光一千箇日、本分精明無變通、生從何處來、木人托出日中斗、死向何處去、玉象踏翻鏡裏容、福祿災殃皆爲戲具、四生三有不是樊籠、盡謂長逝沒蹤跡、誰知徧界露眞容、將此陰德付賢裔、高門豈肯倣于公。

上杉武庫禪門忌請

此香大包太虛、細入纖芥、臭則臭於蕕草、馥則馥於沈檀、諸佛以此爲道樹成正覺於其下、列祖以此作心華流宗芳於無窮、偉哉此香鑽仰不及、若凡若聖、誰不受恩、今日所資覺靈、某人平生遊心乎祖苑、能順者箇而深信根、末後殞命乎戰場、亦藉者箇以增聲價、死生旣自如此、罪福那有差殊、于茲令子中書某人、受此熏力不失孝行、今日丁某人一周之辰、謹爇云云、所冀覺靈無邊業種、一時焦枯、本地風光當處成現、乃子乃孫榮昌不絶、或親或怨利濟無休。

野州禪門逆修請

春至百花開拆、者箇不改素容、秋來萬卉凋零、者箇亦無變色、淨穢器界以此爲基、佛祖化儀悉承其力、失之則二利俱失、得之則一擧兩得、玆者云云某人、獲報緣於濁惡之時、積罪業於迷昏之域、自懼當來苦果、預修滅後善根、特借山野手、虔爇云云、所冀仗聖力而資凡力、拔業根而爲善根、眞熏通實際、彌天愆尤頓爾消除、妙利答洪庥、出世資粮儼然備足、現當相續餘裕無窮、寃親平等濟度普及、插香云、卽今已是立公憑、永劫何妨成巨益。

爲覺照禪尼請

者箇爛木柴、能爲萬象主、價直無定度、熏成只隨緣、在僧家則爲解脫之香、在世俗則爲資生

之具、於男子則謂之乾德、於女人則名爲坤儀、茲者云云、某人雖赴戰場抽汗血之忠、特就本寺旌灑心之孝、遙借山野手虔爇云云、伏願懿靈以此爲器仗、永截積劫業根、以此爲資糧、早登無生覺路、餘裕綽綽乎祉後裔、洪熏綿綿賑濟含情、且道只箇一瓣香、爲甚成得大佛事、揷香云、六月賣清風、人間恐無價。

爲妙印禪人請

此香能爲萬物本根、不干四序靑落、人人曾無欠餘、只是受用不得、今日拈出奉獻　三世如來十方賢聖、沒量供養絶能供之相、眞箇納受無所受之心、好是善根出思議、須知熏力亦廣大、以此資妙印禪人覺路、資也非資、以此濟塵沙法界迷流、濟也非濟、正當恁麼時、且道成得什麼邊事、揷香云、大功至德無人識、只見爐中一穗煙。

爲上杉中書禪門請

某處今晨伏値某人捐館以來、百日斯臨、特爇五分法身之香、以灰多生染愛之業、伏願此香本有衆德云彰、無限眞熏不墜、出生無盡廣大之妙供、奉獻虛空法界三寶境界、演暢最勝甚深之法句、啓迪微塵刹土一切含生、憑茲善利資覺靈、曠劫業債一時滅、不翅餘熏庇家眷、法界迷流同得益、莫言此事難保任、萬象森羅齊證明

淸拙和尙遺書至

四七二三傳此香、遼天高價絶商量、既是一花開五葉、東西何處不聯芳、伏惟前住龍山淸拙大和尙、祖業相承傳此香、馥郁家風滿大唐、化導緣兮母固必、懷此香兮到扶桑、普天凝瑞氣、

四衆沐恩光、莫言滅後無消息、遺薫餘烈徧十方、老拙亦有此香、拈出以獻寂場、莫是河頭賣水麼、揷香云、已展不縮、家醜外揚。

奉為征夷大將軍預修

此香先天先地離名相、不為榮枯變素容、信手拈來歸掌握、無邊功德在其中、玆者征夷大將軍源君某甲、預懼當來苦報、逆修滅後善根、始從中陰終追遠忌、逐一作佛事、至誠自回嚴、乃以今日當于一十三回之忌辰、特借山野手、謹爇此寶香、供養　周徧法界、摩訶毘盧遮那如來云云、所冀七分全得之功、便見速効、萬德本圓之理亦自現前、此世福壽保安固藩垣於營門、來生願望圓成播賑濟於法界、伏惟殿下乘大願力、秉軸榑桑、現宰官身頓嚮祖域、既遊祖域奚入迷鄉、幻妄無實、任佗片雲點太清、靈光獨耀、不妨一月印衆水、過現罪性求不可得、未來業債有何所酬、赤條條空索索、虛空突出那吒面、萬象全提活脫機、機先一著無標準、佛祖當頭眼似眉、正當與麼時、向來修善功歸何處、擧香云、三千界外放毫光、雙六盤中休喝彩。

小佛事

慧林寺釋迦佛安座 拈華微笑像

大法元無可不可、圓明門戶絕關鎖、三賢十聖競遷喬、也是空花重結果、恭惟　本師釋迦如

來大和尚、其慈也至矣、法界含識、咸受庇庥、其德也大哉、無邊虛空莫能包裹、不動寂場赴鹿苑、天魔外道自負墮、東倒西擂五十年、到處稱尊、橫說豎說三百會終無口過、末後拈起一枝花、百萬大衆看不破、與麼體裁可謂事起丁寧、沒量大人不敢爲之陳賀、諸仁者還知我世尊別有箇本分底三昧麼、當軒大坐峭巍巍、迦葉亦只得半座。

臨川寺普賢安座開光明

一椽才動大千收、片瓦包容靡不周、當下圓成華藏界、莫將金屑著雙眸、恭惟　三曼跋陀菩薩摩訶薩埵、證入不假修持、住處不依國土、一毛區域浩曠、善財未見封疆、十種願海汪洋、諸聖咸讓廣大、分身如月不知多少影、玄辯瀉餠豈止二千酬、誠哉普賢之稱、所稱匪謬、偉哉大士之德、衆德攸寘、玆者揑聚微塵露現淸淨尊像、插卻一草落成圓融道場、弄假象眞、全具天然態度、卽事顯理、寔非世諦戲論、須知藉此小場、以莊嚴恒沙之梵苑、何妨散此一像而隨順萬品之衆生、諸天諸神皆悉承威、內外冥資土地堂額人法、乃佛乃祖互相戮力、東西密付祖師堂額宗猷、慈風蕩蕩扇無時、鴻業恢恢播累劫、上來特地慶讃都是化門苴餘、諸仁者還知大士頂門別有正法眼麼、卽今分明點開去也、以筆點空云、毫頭點出大光明、凡聖含靈同一眼。

天龍寺三聖安座

玅性圓明絕變通、恢恢包裹十方空、無邊德用無邊智、盡在衆生方寸中、恭惟　摩訶毘盧遮那無上世尊、三曼跋陀大士、文殊師利菩薩、從無相中現不共相、如然大智非暗非明、法爾

慈無適無莫、互爲主伴以表事理圓融之儀、權示中邊寧隳昇降差別之域、懿哉如來境界、超乎淺識商量、萬象森羅靡不三聖、羣生倫類皆具十身、赤條條明歷歷、昔年掩室於摩竭、今日開門於本山、古今無兩般、隱顯同一座、諸仁者還見此一座子麼、薰風自南來、殿閣生微涼。

三會院彌勒安座

大功元不藉安排、一戶才開萬戶開、刹刹塵塵是覩率、下生莫謂在當來、恭惟　彌勒菩薩摩訶薩埵、千尺尊軀、光豔法爾圓備、萬德妙相、秀媚集乎大成、垂慈出於無緣、梅哆唎耶之稱、盤瞭也悅耳、布德偏于法界、阿鞞跋致之用、闡提倘傾心、受補處記、且約一生、轉不退輪焉限三會、傳聞、因地觀樓閣壞而發大心、不知今日見宮殿成而生何想、曲船深揖云、良哉大士處此中、指示人人同一座。

南禪爲大光國師入祖堂

去來不見蹤、出沒作何象、一段大光明古今無兩樣、伏惟、前住當山　勅謚普照大光國師、去就軒昂、操履清爽、匪以光華介懷、只將韜晦爲望、一時應世利錐出囊、兩處住山鈯斧在掌、大應室中曾登選佛魁科、　皇帝陛下敕謚國師金牓、便見少室燈光、增熾增聯、虛堂門戶愈高愈廣、盡謂去年攝化權、誰知今日露眞相、眞相既露、還見此老安身處麼、舉起牌云、公憑皎然勿生疑謗。

太平和尚正統庵入祖堂

祖林翹楚結果、不待霜露天產精金致柔、豈假煆烹、可謂越格俊流寔是克家正統、平生歷遷

數剎緇素競托庇庥、末後踏破十虛、佛祖罔見蹤跡、畢竟那裏是此老安身處、擧起牌云、太平無象無不象、地獄天堂建法幢。（辭世頌云、末後一句、向下文長、處處無蹤跡、地獄與天堂。）

南禪爲雙峰禪師入祖堂

慧日分輝照瑞龍、雙峰春色壓衆峰、流芳千載至今日、五葉花開又一重、恭惟前住當山　勅謚雙峰禪師大和尙、智游象外、玅契環中、續圓照之燈燄、躡聖一之高蹤、遐邇歸德、彩魔外怖機鋒、脫略先輩坏模、單提獨弄掀飜、今時窠宅、發蔀擊蒙、此是雙峰禪師平生操履底、諸仁者卽今還見其眞相麼、拈牌云、回機轉位無人識、寂滅場中振祖風。

孤雲和尙正脈庵入祖堂

是凡是聖本來空、出沒何曾有影蹤、若也撥開蓋面帛、色聲叢裏見眞容、伏惟前住乾明山萬壽禪寺孤雲和尙大禪師、胸次無棘語言藏鋒、其才定爲翹楚、其智亦非闒茸、嘉名飛四遠、秀氣薄蒼穹、佛光餘輝燦燦乎續燄、龍淵正脈滔滔乎流通、可與先輩並德、堪爲後昆啓蒙、建化門中且作此說、老師分上未足爲崇、諸仁者還見佗眞實安身處麼、拈牌云、只箇公憑沒囊蓋、不妨奕世繼宗風。

多寶院欽遇　後醍醐院聖忌奉安御座

萬法從來在寂場、寃親榮辱絕封疆、良哉斯理自昭著、佛運皇圖共久長、恭惟　後醍醐上皇、世表風采、天選儼姿、明並兩曜、德動二儀、致否致臧、人毋測、是凡是聖誰敢窺、莫怪仁風欲扇而止、須知帝運不得于時、仙夢已破何拘小節、妄緣御忌斯臨、忽屆大祥歷數、遺臣各攄懇誠、

勝善奉資覺路、假令在輪王位七寶豐饒、爭似證覺皇身萬德圓具、從前毒藥變作醍醐、曠劫無明飜成正悟、諸仁者卽今還見。　上皇眞實登極處麽、捧御牌云、是法住法位、世間相常住。

無量壽院爲佛國禪師入塔

出沒隨緣卽是宗、大人到處有靈蹤、良哉徧界無私句、萬象森羅不患聾、伏惟前住建長　勅謚佛國禪師大和尙、智超物外、妙契環中、大用難量、橫該豎抹、峻機圓轉、八脫七通、未示寂前、處處露靈骨、已歸眞後、塵塵現眞容、隱顯無空手、說默藏利鋒、好是一著子化權莫有窮、諸仁者還見先師眞相麽、合掌低頭云、今日豁開無縫塔、未來塵劫扇門風。

挂額　御書佛燈國師

佛佛傳燈至此時、歷生自昧不曾知、宸毫點出本光瑞、萬象忻然齊展眉、天眞八體固非鳥跡所比、奎畫一爻寧以龍圖爲基、燦然無字之字、珠玉也須讓彩、焯爾無明之明、日月猶似有私、便見刹刹皆皇化、塵塵是國師、其或未證據、切忌向外窺、指額云、無縫塔前高揭示、分輝續燄莫窮期。

爲從上座火　溺水而死

衲僧行履都無顧藉、直投萬丈深淵、吸盡曹源一滴、莫是佗安身立命處麽、擲下火把云、從來死水不藏龍、又擊火雲轟霹靂。

爲調上座火

無識馬可調、無妄塵可拂、生死涅槃只消一咄、若是伶俐衲僧、焉戀舊時窠窟、擲下火把云、火

把跨跳上天、徧界臭烟蓬焞。

爲呆藏主火 辭世頌云、生前死後、自西自東、一回轉步、八面清風

日昇木上、則謂之杲、日沈木下、則謂之杳、一輪纔現明昧亦兆、便見東西南北區分、生死去來紛擾、一回轉步起清風、也是外邊打之遶、大衆還見衲僧眞歸處也無、擲下火把云、焦尾大蟲睡火中、木鷄夜半報天曉。

爲遠上座火 夏中

護生須是殺、殺盡始安居、殺佗也要還自殺、自殺方堪賦歸歟、遠上座、欲會箇中意、鐵船焰上浮。

爲自防藏主火 夏中

德黜訝人禮防君子、衲僧坐斷十方空、佛祖也不能摩壘、安居限內離位轉機、生死關中誰問可否、如是如是、不是不是、螂蟟火裏鳴、驚起大蟲睡。

爲萬壽玉峰火 本居律家

動靜不妨遊物外、去來都是付環中、有時獨唱還鄉曲、桂轂推秋碾碧空、恭惟　前住萬壽玉峰和尙、神機卓邁、氣韻粹和、不顧螢火自耀之光、直續祖燈廣照之燄、喜得正統門庭、有棟有櫰乃見乾明山裏、爲雷爲霆、此是玉峰和尙平生行李處、盡情說破了也、還見此老今日爲諸人示大人相麼、打圓相云、擘破太虛呈面目、丙丁童子笑柴崖。

爲妙鏡監寺火

妙中鎚鎚中妙、兩頭俱劃除、破鏡不重照、世間出世間、一了一切了、左之右之迥出物表、直饒恁麼違得行、也是外邊打之透、且作麼生折合去、擲下火把云、三脚驢子弄蹄行、丙丁童子拍手笑。

爲海禪人火 夏中

殺盡衆生始安居、勘來猶有已躬在、直饒喪卻己躬未免墮在毒海、某人不拘法歳制禁、暫爾超昇象外、莫是佗眞實安居處麼、擲下火把云、火星迸散三千界。

爲眼都寺火

五十九歳、蝶夢悠悠、一朝忽打筋斗、更無蹤迹可求、好箇快活時節、知是般事便休、且道休後又如何、擲下火把云、赤眼撞著火柴頭。

爲智德侍者火

機智忘于內、德用彰于外、死袴生衫、著脱無礙、直饒與麼薦取、未免坐在陰界、呼兩聲云、兩度三回呼不應、乃知入火生三昧。

爲助侍者火 夏中

衲僧行藏都無標據、左出右沒不借資助、一段精明到處昭著、禁足安居、棘林壞絮、助侍者那裏去、擲下火把云、三喚機前出夢鄉、大火聚中堪避暑。

爲普要禪人火

梅霖乍晴普天催熱、要徑消息分明漏泄、寒暑迭移、一字不著劃、生死交謝八字無兩丿、別別、

木人火裏嚼氷雪。

為不二禪人火

透出生死窟宅、入得不二法門、若是伶俐衲子、不向這裏染跟、天堂地獄到處稱尊、卽今向那裏與佗相見、擲下火把云、大火西流去、爽氣滿乾坤。

為上杉法禪禪尼火

生也如是、死也如是、夜壑舟移未嘗變異、伏惟新圓寂、某人寄生於塵世而信活祖之禪、受形於女流而負丈夫之氣、今日奄爾旣歸元、平日嘉聲也非美、眞實落著處、畢竟在那裏、擲下火把云、火官頭上風車子。

為忍浴主火

妙觸宣明悟水因、雖然證忍未為親、若也祖師門下客、更須火裏浴全身。

為攝津洒掃禪門火

風清月皓秋光好、霧斂天晴爽氣浮、寂滅道場只這是、何須向外覓歸休、伏惟某人禀業文士、輔政武門、寄身宰官、醉心祖道、可謂一擧兩得、乃是末運上流、五十三年幻夢已破、四生九有業緣何拘、玉象踏翻鏡裏空、新羅夜半日頭出、如是快活底時節、火裏蓮花徧界香。

為寂監寺火

諸法從本來、常自寂滅相、春到百花開、黃鶯啼枝上、寂監寺還會麼、會則左眼半斤、不會右眼八兩、畢竟如何折合去、三脚驢子弄蹄行、丙丁童子笑拊掌。

爲解副寺火 夏中

不待解制脫禪行脚、幸有自己庫藏、何妨到處開卻、直饒恁麼去也是路途樂、畢竟作麼生、擲下火把云、紅爐焰裏重烹鍛、鐵牛擘出黃金角。

爲鏡監寺入骨 夏中收在壺中

鏡像生涯都喪盡、赤骨歷地露天眞、曾無佛法氣息、寧染世間埃塵、正當與麼時何處著渾身、壺中日月與常異、何必安居限九旬。

佛祖贊

出山相

入山出山、獸心人面、五十年開貨鋪、只解和麩糶麪。

用禪人書一圓相求贊上有雲下有水

毘盧主法身師、離名離相、匪尊匪卑、逆浪洄漩、而未嘗沒溺、癡雲靉靆、而轉見光輝、釋迦彌勒是佗奴、畢竟知佗是阿誰、放一頭低示此相、桀犬吠堯一任伊。

釋迦

西天老比丘、只做此面背、特地出世欲何謀、解道未嘗說一字、如是如是、不是不是、普賢跨象

王、文殊騎師子。

觀音

巖崖岌岌、滄海悠悠、圓通不會圓通境、靈禽啼在樹梢頭。

石涯波縠皺、瓶裏柳絲柔、被人喚作圓通境、可悔當初誤入流。

達磨

三十二應、墨突孔席、慈力不及處、獨聞瀑聲激。

少室峰前、九年瞎睡、開卻眼來猶寐語、亂道神光得吾髓。

維摩

丈室恢開不二門、無端惹得鑠金論、雖然一默塞衆口、彼上人名今古喧。

無準和尚 虛堂偃溪入室

龍淵無風起瀾、青天雷轟電掣、惹得雨滴虛堂、簷溜蕭蕭、又聞水激偃溪、湍流沏沏、從此凌霄峰頂路、多少行人墮覆轍。

又 半身

祖門間出、泯迹迷津、無德之德、聳動天人、不說而說、雷霆在脣、龍淵火發分文武、躍者靡非燒尾鱗、五十世中大知識、未嘗容易現全身。

佛光禪師 三

機用雄毅、菸菟有翼、支那一天、無地收化、扶桑闔國、擯佗不得、榮之而匪忭、辱之而匪慍、致柔

則魔外也弗相誰何、致剛則佛祖也難爲抑勒、好采接人、磅心奚匿、自灌龍淵水、到處滋荊棘、拈起龜毛意在何、不是河南便河北。

河目山眉、木舌鐵觜、接佛國而破家、攪龍淵爲惡水、平生擧措沒人知、剛道舍利包天地、稽首這般不唧嚠、堪與兒孫添意氣。

厲而太濕、坦而太嶮、披襟也、嶽蓄海涵、垂手也、星飛雷閃、不可以賢褒、不可以愚貶、放打無味之談、焉顧斯言之玷、大元三尺劍、謾斬劫外春風、榑桑一掬灰、再輝文武火餤、沒蹤迹處現半身、腳跟汗臭難遮掩。

佛國禪師 九

者老漢太孤峻、鑽仰無門、不緇不磷、脣吻中藏蠱毒鄉、竹篦下設長蛇陣、家法無恕容、佛魔俱斥擯、高門陰德不爭多、自有青山傳後胤、元翁請

火鼠匪燒、氷蠶匪溼、物有天產德、不是借修習、老師蘊什麼德、只解隨時坐立、善魍薩魎、毀贊不及、哂之笑之、百步五十、祖庭祖庭、德已遺兮不可拾、祖庭道人請

盡大地擘出箇高峰、仰之無見頂、塵沙界都盧一佛國、描之不似伊、即今圖畫得底、不知是甚麼姿、咦、留與人間且證龜。

這老古錐、無翹楚姿、口中惟一舌、眼上有雙眉、云何聲價播天下、路上行人口便碑。

逢彊即弱、逢卑即尊、是凡是聖、叵得而論、佛光錯做瓜瓞夢、惹得時人胡亂原。

此老無定姿、偏界爲胸次、瞋時與萬象俱瞋、喜時與萬象俱喜、是聖是凡、不可品量、在前在後、

莫能瞻睎、當年錯見老佛光、大鵬飛入醋甕裏、從茲名翼落人間、描邈多論似不似、我今爲贊不覺顙泚。

狠毒介懷、龍泉在舌、五據名藍、人天寃結、滅却圓照正續宗、漏逗佛光鎖口訣、末後打筋斗、風雷動塵刹、更有一德贊不及、分付太虛橫豎說。

圓照正續孫、佛光寧馨子、唇有雌黃、胸無城市、三尺竹篦不打癡獃、五處陷穽只擒虎兕、我今蹉口揚家私、恐是人窺蜂桶裏。

仁山大居士請

精神可掬、眼蓋乾坤、橫揮竹篦、佛祖不敢摩壘、曲垂隻手、縮白競而趨門者般風度難爲隱、分付仁山蔭子孫。

中峰和尚

勢儼氣柔、神清貌古、生機迅捷、旋嵐過空、騂慧高明、杲日亭午、不向人前賣青氈、天目山巔打毒鼓、棲遲知足一庵、嘉聲自喧寰宇、顯而匪混世塵、隱而匪閉門戶、德覃于異邦、聞名猶會晤、矧乎大元國裏、王臣也服風度、非是僥倖而然、道香生於煨芋、敕號佛慈圓照廣慧禪師、其誰誣以鐵鑑步。

太平和尚

才智翹楚、風度軒昂、行己則毋固毋必、爲人則有柔有剛、法乘覩軏、祖門棟梁、革佛光之轍、證佛國之芊、蓋謂此老匡徒止于三兩刹而已、不見道處處無蹤迹、地獄與天堂。二句乃辭世頌

天目高峯禪師

震旦裏生、此魁、仰山化育更換骨來、心肝渾是鐵、操履不混埃、内祕廣大慈悲、賢愚咸皆托庇、外現忿怒相貌、佛祖亦須望崖、踞師子巖三十歲、哮吼之聲徧九垓。

靈山和尙

胸無畦畛、眼蓋虛空、浮華不介視、枯淡爲家風、仰山山下、一點水墨、榑桑震旦、兩處成龍、易地震雷霆、龍淵通海東、沒量化權戢不戢、滅後舍利露靈蹤。

兀菴和尙

此老氣韻、軒昂智才、秀出羣彙、或幽谷或叢林、與我相從久矣、隔生三四年、顏貌猶如視、今對玆像也太相似、異中同同中異、莫言圖畫非眞儀、本來面目只這是。

見乎德人容貌、自然令人意消、試對此像子細看、稱賛不用舌頭饒。

前住理智光院月樓律師 禮師受衣盋

標致爽邁、蘊藉汪洋、學敎而不墮兎罘、護戒而不執螢光、匪啻舌頭飜巨浪、自知言外有玄綱、律虎之名飛于遠、莫謂無翅可翺翔。

土岐伯州禪門

稟天賦於勇士、氣韻不可凌侵、本地靈根匪朽、祖門信種甚深、外逞汗馬勢、内絕敗人心、布其陰德庇家裔、箇箇膝下有黃金。

良哉這老居士、武德不辱先宗、更有潛行密用處、不離俗體現僧容。

備州卓然禪門

卓然氣宇混塵鄉、豎起娘生鐵脊梁、是俗是僧沒人辨、火中蓮蘂吐馨香、

妙空大姉 普恩寺殿母

賦性貞白、脫得世塵、左轉右轉、非鬼非神、坤儀表出普恩力、後裔流芳億萬春。

覺雄禪師

胸次容羣象、眼皮蓋大清、風采質朴、無將無迎、五據名刹、匪沽嘉聲、不設陷穽而陷虎兕、不把釣竿而釣鯤鯨、垂手接人、令證大覺之覺、續燈照世、乃是無明之明、吾曾受業於會下、只恨機緣欠圓成、今日拜慈像、倩毫投寸誠、更有贊不及處、付在彌勒下生。

自讚

南禪元翁和尚請

獸心人面、智薄行麤、頂門不亞眼、肘後不懸符、好箇娘生三昧、落得天選一愚、長老長老、莫訝吾無跨釜之作、先師折腳鐺子、須相共扶。

滿翁庵主請

渠似吾而非吾、吾非渠而相似、不要打殺老僧、何須燒卻橙子、景與罔兩、一馬一指、滿翁滿翁

佗時有人、若問我眞形、報道頷下眉毛長尺二。

一谿居士請

這田庫奴、形醜心愚、其醜也者、畫得太似、其愚也者、固匪可圖、莫謂丹青無妙手、佛祖亦難以名摸、借問一谿居士、擬向何處見吾、咦、

大刋事請

咄這沒刁刁漢、稟賦性於愚魯、舉措信彩不拘規矩、坐曲彔牀無所成、剛道市中田貎虎、只將此破生涯、扶起潑天門戶。

禪人請九

這國賊無面目、有時把纜放船、有時騎牛上屋、提鈯斧而不解住山、握竹篦而不知背觸、呵呵呵、苟不自賛誰賛我。

全假全眞、水銀阿魏、品藻在傍觀、都不干吾事。

眉底有眼、鼻下有唇、好是娘生三昧力、因睡飢餐不倩人。

通身無影像、圖箇什麼來、若能覷得破、碓觜放花開。

這骨律錐、老而益癡、百醜千拙、甘分過時、莫謂無儀可則、堪與善人爲資。

我無影像、繪箇什麼、一時風流、萬世懡㦬。

本質倘如幻、影像是何容、欲見我眞相、擘破太虛空。

脚跟下事、難可指陳、建化門裏、且露半身。半身

眉底有眼、鼻下有唇、娘生面目、分明莫言、唯現半身。

賛都寺夢與師相見圖其所見像求賛

坐盤石倚古松、不是凡相、不是聖容、都寺都寺、莫見吾於寤寐中。

圓相中

元是一精明、分爲六和合、不是混融、亦非駁雜、全體現成、千重百帀、畢竟如何分疎、一任傍人諸諸。

偈頌

客中偶作

蕩子生涯無貯畜、山雲溪月是青氈、東西白踏一條路、不在途中家舍邊。

寓居聚落

寓舍囂塵晝掩關、市中買得沃州山、娘生口裏不含血、掛在乾坤宇宙間。

佛成道

冷坐六年蛇入筒、剛將氷雪當家風、昨宵覷得虛空破、驀起明星藏眼中。

太平和尚來訪不値翌日惠偈次韻以謝

不容佛祖入門來、白眼青眸豈肯開、仁義道中通線路、山川齊起舞三臺。

謝圓覺靈山和尚見訪三浦庵居

世上浮榮屬貴家、篛栖贏得飽煙霞、春光今日添和氣、海岸枯椿也放花。

豎拳消息我罔措、不累瑞峰牙齒寒、庵外潮平門限濶、莫言水淺泊船難。

靈山和尚夏末寄偈次韻爲答

禁足不離三浦境、無邊刹海偏經過、意通方外山川絕、情隔目前雲霧多、一榻蕭條忘歲月、四簷鬱密蓋藤蘿、少林妙旨非干我、誰管如之與若何。

善福大川和尚相訪有偈倚韻以謝

包桑計足世波外、衆口從他能鑠金、淡薄情同輕霧色、黑甜夢破暮潮音、隈山卻自忘山險、臨海未曾窮海深、不是要津剛把斷、門前巨浪涌千尋。

鷇食鶉居沙渚邊、釣磯漁舍地相連、更無東閣接高客、一點漚涵萬里天。

巨壑雷聲過僻地、蟄居寂寞一時空、贊歎莫謂口門窄、庭際寒梅春信通。

謝雲巖太平和尚來訪

殘生懶癖療難痊、醜拙深藏海嶼邊、今日被雲巖覷破、風前把手笑忻然。

和韻諸友寄偈于三浦菴居。

天南地北不留蹤、又入月江烟嶼中、退水藏鱗有餘裕、不希化作禹門龍。

山市江村堪擇鄰、行藏多混釣漁人、只因手裏無香餌、免得欺謾負命鱗。

樛木元非大厦材、那堪叨屬貴門來、而今抛在江村外、付與漁翁撐釣臺。
一庵釣寂海門東、聖域凡邦信不通、莫怪私鹽成滯貨、天津橋上叵欺公。
一把茆茨天宇濶、山爲籬落海爲庭、庵中消息無囊蓋、來者猶言掩竹扃。
壺中風物獨沈吟、相伴唯容藤一尋、昨夜無端打談笑、虛空聽得也寒心。

天峰　相摸左近將監殿

絕頂蒼蒼雲霧外、虛空背上勢崢嶸、人間仰望不爲少、只見衆山從地擎。

璧山

元來峭峻無瑕纇、雨琢風磨光轉生、雲霧不埋峰頂路、相如失脚入秦城。

春山

和氣靄然藏嶮巇、峰巒花木自逢時、登臨須具登臨眼、莫向青青黯黯覰。

別峯

孤峻不同羣嶺勢、幾人望見換雙眸、德雲賺殺善財後、翠靄紅霞卒未收。

竹庭

三曲兩斜排砌下、年年添得一叢林、香嚴擊碎大千界、此地依前鎖翠陰。

天使到山留偈　次韻以贈

世路悠悠懶往還、一庵甘分卜殘山、地爐灰冷無黃獨、雪涕工夫也不閒。

古潭

曠劫已來清皎潔、月穿風攪水無痕、今時不敢窮淵底、剛道蒼龍這裏蟠。

先覺

威音劫外自開悟、正眼看來是後生、借問從前佛祖、幾多閒語爲誰呈。

雪溪

片片紛飛非別處、氷花影裏水光清、寒流激出廣長舌、喚得石烏龜睡驚。

枯木

獨倚寒巖無暖氣、皮膚脫落未爲奇、有時花發乾坤外、不識春風何處吹。

癡庵

直將天下爲門戶、天下從來在裏頭、不是家風剛葢卻、銜花百鳥自然休。

休翁

萬機罷卻自騰騰、暮請朝參也不曾、問著老來成底事、笑言雙鬢白鬅鬙。

奇峰

終古巍巍勢不凡、木靈石怪呈祥瑞、一回登陟換雙眸、只在尋常煙霧裏。

假山水韻

纖塵不立峰巒峙、涓滴無存澗瀑流、一再風前明月夜、箇中人作箇中遊。

題那智觀音堂

天河激出人間瀑、澌澌寒聲響碧空、珍重大悲觀自在、我儂幸是耳無聰。

春巖

融風喣日旺和氣、枯木陰崖也著花、欲問空生坐何處、煙霞影裏路千差。

嘉曆丙寅退南禪赴關東元翁分袂而寓居叡山有偈見寄和韻

君踏雲梯登叡嶺、我呼藤杖出京師、箕南斗北一千里、正是眉毛厮結時。

次韻悼僧 違官事而死

患難雖然爲橐籥、爭如直入涅槃城、春風已唱還源曲、佛手不應遮此行。

衆口鑠金金已空、咎休盡屬夢鄉中、從前窟宅莫回顧、碧落元無飛鳥蹤。

圓覺險崖和尚來訪不値留偈次日依韻以謝

郝翁疇昔訪庵主、惡迹難藏宇宙間、昨日瑞峯枉光駕、我儂幸不在斯山。

淸拙和尚韻

剩水殘山是我鄉、小窻落得飽秋光、善財休說南詢去、去者須知不至方。

月山

光境忘時光境現、巍巍聳出廣寒宮、一回親到最高頂、物外何妨有路通。

古巖

孤危峭絕先天地、木老苔深不記年、莫對空生問來歷、怕看花雨更紛然。

放翁

家風弗廣無拘束、酒肆魚行建法幢、聖不收兮凡不管、老來只見兩眉厖。

德叟

胸中蘊藉無人識、幸有皇天輔弼他、不把聲名自簧鼓、恢恢風化徧河沙。

暮春遊橫洲舊隱 二首

當年久住此洲濱、今日優遊來作賓、庵畔林巒不忘我、替花新綠獻殘春。

日映蒼波輕霧收、回洲疊嶂鬪奇尤、滿船載得暮春興、與點爭如此勝遊。

笑山

由來未喫馬師踏、歷劫柴崖直至今、將謂平夷無險處、烟雲影裏有刀林。

賀福山衆寮落成

聖凡元是一家舍、大匠垂慈始闢門、休問此中多少衆、椽片瓦蓋乾坤。

賀雲山越首座住奥州護國 時居嵩山傳芳菴、菴在建長、覺雄禪師無隱創之

高臥嵩山絕頂雲、擧揚奥旨任天眞、眉間霜及忽歸掌、塞外從茲祖令新。

泰山 秋田別駕

險處深藏安靜境、東方羣嶂讓崔嵬、誰知五十餘盤外、別有天門石扇開。

贈玄侍者南遊

忼慨棄繻離瑞峯、百城春色屬孤笻、一回改卻生涯後、更挂古帆歸海東。

贈咸知客南遊

江外橫趨早是遲、迢迢航海又奚爲、脚跟且放三十棒、更待他時衣錦歸。

贈郁侍者南遊

萬里鯨波天一涯、無邊風月勿張乖、草鞋跟斷底時節、跳出南陽陷穽來。

悼雲峰居士

老來頓罷遊方外、不宰從前汗馬功、夜壑舟移無覓處、塵塵擎出碧雲峯。

祖峯

四七二三呈峻機、高高勢壓五須彌、躋攀自有兒孫在、絕頂宗風未下衰。

東峯

岱嶽高名今古傳、日昇月出勢穹然、青黃不墮衆山色、永領春光億萬年。

古庵

把茆歷劫盡頭來、多少後生門外隈、莫謂都無斬新底、年年庭樹放花開。

爲月巖居士講金剛經

諸賢命我談波若、滿座盧胡咸瀆聽、好箇一場閒打鬨、堪令居士夢魂惺。

和韻天岸和尙謝事見贈

慈到無緣稱法幢、月涵萬水不昇降、大人到處乾坤濶、休謂閒雲分半窗。

天岸和尙相訪於甲之慧林、有偈次韻爲謝

凌空金錫枉降臨、數日清談味德音、鏤彩殿堂成壯麗、蓄幽林樾轉陰森、淡交喜得懷無礙、浮世從他氈有針、盛事定應傳永劫、山門不翅幸于今。

和韻謝天岸和尙送初祖頂相

隻履西歸似不曾、更留惡跡最堪憎、魚投臭水有來歷、且爲渠儂打葛藤、

和韻慧林圓通閣

翼然幻出一樓臺、廣大慈門關鍵開、天籟奏奇非苟且、土毛獻勝有由來、東園西護水千派、後擁前朝山萬堆、直下入流是南海、纔移寸步路迂回。

東白

金雞三唱至熹微、未是蒼天全曙時、夜半明明太陽出、榑桑鬪額弗波提、

山居韻十首 贈古航和尙

小庵含大千、獨處伴無數、德化已圓成、至功何所樹

深山巖壑中、佛法無興廢、勘破老黃龍、牀脚下種菜、

山高罕客登、唯有白雲騰、獨照空寰宇、寧同日下燈、

胸次辟魔撓、浩然游世表、大人沒限量、碧落暫其小、

雲幕垂牀畔、氷輪輾檻前、莫言能晦跡、背後有人天、

莫怪蕭然獨閉扉、韜光乃是放光時、雷聲常震沒人聽、卻道溪深龍出遲。

黑甜夢破午陰遷、古栢烟消對博山、三十年前塵累事、一時休罷付幽閒、

青山幾度變黃山、浮世紛紜總不干、眼裏有塵三界窄、心頭無事一床寬。

物外逍遙自得時、家風放曠不求奇、客來無物可供養、白石清泉當土宜、

佛祖垂慈務救迷、誰知罪過與天彌、爭如盤礴幽巖下、坐看閒雲洞裏歸。

松隱

千株寒操列成牆、翠靄深深堪葆光、莫責閉門圖自了、後人標榜不曾藏。

梅窓

一樹花開六戸香、家風襲得嶺南芳、從茲萬國通春信、那箇獼猴在夢鄉。

送榮藏主省親

陳老鞋中藏五逆、洞山胸次蘊眞慈、者回別有報親句、滿袖春風撩亂吹。

玉田

耕翻一片閒荒地、泥土粲然光自生、更有秋成時節在、收來顆粒價連城。

義堂

第一門兮第二門、高低闇奥絕談論、大家領略幽深旨、珍重當來彌勒尊。

無範 光嚴法皇

世間樞要沒交涉、佛祖楷模也浪施、孤迴迴兮空索索、鳳栖不在碧梧枝。

的翁

眞正相承無等倫、傍宗別派有誰爭、老來更驗實頭處、尺二眉毛頷下生。

進叟

水窮山盡更移步、寶所元來在脚跟、將謂從茲甘靖退、家中牀席未曾溫。

立山

旋嵐假嶽不曾搖、峭峻孤危勢似翹、只許躋攀窮頂者、經行坐臥自逍遙。

雪庭

六花滿地冷氷氷、一色明邊萬象沈、砌下猶存松柏操、神光自失丈夫心。

一庵

抌取大千爲小屋、四維上下更無隣、含靈凡聖在這裏、郝老何方訪別人。

桂巖 細川頼之

昌昌嫩綠潑雲瑞、密葉高枝不可攀、善吉長年放憨坐、罔知月窟在其間。

玉淵 頼之夫人

靈源不涸自瑩徹、兩岸中流一片光、業業臨深知幾箇、咸言瑞璧在崑崗。

默庵

睞口長年懸壁上、柴門深掩放疎慵、就中密說如雷震、露柱燈籠不患聾。

古山 武衛將軍

不墮青黃獨岌然、千峰萬嶺遜陳年、絕巔雲斂無遮障、劫外風光在目前。

無極

十方寥廓絕邊中、子細看來亦有窮、倒駕大鵬遊象外、藕絲竅裏是鴻濛。

北叟

七星影裏獨藏身、未肯南詢歷百城、莫怪老來無思算、從前得喪不關情。

仁山將軍

慈德高高非貴功、平寬孤峻在其中、此峯不望衆人仰、只是衆人仰此峯。

嵩山和尙見訪次韻

山圍水繞絕行蹤、龍象來時路自通、一刻淸談無折合、大家混入是非中。

和韻嵩山和尙雪中見寄

冰花一夜滿林皐、露出嵩山千古標、明白裏頭無活路、神光徒爾立齊腰。

題臨川梵音閣 嵩山韻

水月道場天地濶、一樓影現百千樓、圓通不洗圓通耳、門外洪川日夜流。

建武乙亥予住南禪、明極和尙退居淨土院、以偈寄之

境致元非淨穢殊、大人所在是靈區、凝然藏密機彌峻、老矣休交德不孤、坐斷十虛爲丈室、指呼萬象作參徒、毋勞特地鑿隣壁、焰慧光明何處無。

明極和尙見和再韻以謝

仙凡咫尺有差殊、纔到壺中見別區、獨樹花開羣卉麗、衆山雲暗一峰孤、趨門咸是爪牙客、入室寧容糠粃徒、靖退也知非小節、說禪誰謂默時無。

又見和書懷以答

行藏只信報緣殊、再入龍峰卜舊區、飯罷與來吟力健、禪餘睡足夢魂孤、見聞一一非他物、前

後三三是我徒、莫謂住持欠機巧、灼然好事不如無。

清拙和尚起來行韻賀少林院明極和尚病起。

起來行起來行、徐徐擡脚鴻毛輕、萬象忻然齊鼓舞、腦後圓光又重生、未有長行而不住、當頭坐斷千差路、佛祖莫由窺藩籬、懷　何曾介喜怒、未有長住而不行、放蕩漫遊乾闥城、捏聚大千作戲具、無意驚人人自驚、起來行起來行、不可形兮不可名、東倒西擂和泥水、峻機壁立終弗傾、衆生病則菩薩病、大悲寧墮愛見情、篋中四蛇養得穩、日面月面鎮長明、世醫拱手罔所措、少林祕術有公憑、將此一方除萬累、塵刹何處非昇平、起來行起來行、喜見宇宙全身橫。

送果首座

出入同門無楚越、休將情謂屬參商、山黃水肅秋强半、兜率誰言在夢鄉。

送元首座住慧林

天宮夢裏不停機、出格風流惟自知、古錫凌空霜露冷、慧林果熟在斯時。

送明首座赴防州安禪 建武年

祖苑光華混陣煙、江湖雲衲坐針氈、此行協得安禪瑞、一錫霜風價大千。

送明首座赴聖福

正人一出萬邪消、祖道何愁致寂寥、鎚斧這回生羽翼、待看佗日更遷喬。

送哲首座住慧林

世迫澆漓歲月深、祖門日廢莫由禁、良哉宗匠不懷手、鎚斧高提入慧林。

送以首座赴阿州補陀

龍淵通徹白花崖、南海潮音震法雷、莫把烏藤輕靠壁、他時必有善財來。

送昭首座住甲之慧林

化門隆替有因緣、一髮千斤要保全、法雨毋慳澍邊鄙、慧林榮茂蔭人天。

題徧界一覽亭

天封尺地許歸休、致遠鈎深得自由、到此人人眼皮綻、河沙風物我焉廋。

題擊蒙軒　三條殿

明牕發蔀對東山、勝槩推排在几前、到者都無蓋面帛、多生愚昧一時蠲。

雪中下山

庵內不知庵外雪、休將三等衲僧論、有時移步千山上、踢倒孤峯在脚跟。

臘八値雪

寒窓睡足夢魂回、不見明星眼自開、帀地普天擊雪嶺、瞿曇何處出頭來。

佛成道

六載忍寒吾不如、覩星成道不如吾、出山忘卻來時路、直至于今在半途。

佛涅槃

放光動地逗羣機、可惜小慈妨大慈、否去泰來二千載、年年春至百花披。

即事

秋色辭柯落葉多、寒雲載雨過山阿、人人自有娘生眼、爭奈現成公案何。

秀峯

天然擢出羣山上、莫謂微塵聚作堆、曉霧暮雲遮不斷、四方望見碧崔嵬。

雲樹

天然浩氣生方寸、片片重重覆碧層、鬅鬙倍增孤峻勢、只堪仰望不堪登。

佛光禪師題清見詔

南江

追思乃祖昔年遊、自愧逢時不若鷗、幸有古今該括句、海門明月照沙頭。

明正爲源流不盡、百城烟水此中收、達磨失脚過魏北、閒卻蘆花兩岸秋。

送在首座赴長保

久遊震旦換雙眸、向外馳求已自休、衣錦歸來不袖手、肚皮東簸下西州。

貞和改元臘月九日夜半雷鳴次日大雪

昨夜震雷誰不怪、今朝瑞雪世皆懽、道人盤礴乾坤外、落得生涯吟境寬。

因雪

氷蘂翳天無碧落、玉塵埋地沒青山、太陽一出孤峯頂、徹骨寒來也是閒。

玉林

布影交光無雜樹、栴檀薝蔔亦非倫、風磨雨琢絕瑕纇、葉葉枝枝渾是珍。

枯禪

聖智凡情俱罷休、不將榮耀挂心頭、莫言墮在石霜窟、胸有三千活馬騮。

曇芳

希有瑞花時一現、西天此土競相傳、遺薰餘烈今猶在、不混千叢萬卉邊。

春屋

百花本是一枝花、遂見衆芳聯我家、驀地開門出和氣、韶光從此徧河沙。

無得

道德慈威集大成、從門入者匪家珍、胷中蘊藉盡拋卻、空手垂來賑濟人。

海岸

渺渺瀰瀰納百川、煙波萬里水連天、古帆掛得底時節、到此方知有那邊。

古首座南遊有年而歸國寓居陬方以三偈見寄因和其韻

頃刻相逢如百年、寒溫舒盡口皮禪、莫言愚智異區域、震旦扶桑無兩天。

徧參海外究幽深、晝錦鮮鮮輝祖林、續得龍湖千載躅、靈神廟裏振雷音。

這回換卻舊時顏、不識胷中幾海山、名翼高飛有時在、待看朝旆入雲間。

天龍寺十境

普明閣

廣大慈光照世間、善財當面隔重關、眼皮橫蓋虛空界、彈指開門匹似閒。

絶唱谿

灘聲激出廣長舌、莫レ謂深談在二口邊一、日夜流傳八萬偈、灼然一字未二嘗宣一。

靈庇廟

精藍分レ地建二靈宮一、專冀神風助二祖風一、莫レ怪庭前松屈曲、天眞正直在二其中一。

曹源池

曹源不レ涸直臻レ今、一滴流通廣且深、曲岸回塘休レ著レ眼、夜闌有三月落二波心一。

拈華嶺

靈山拈起一枝蕚、分作二千株一在二此峯一、只見聯芳至二今日一、不レ知劫外幾春風。

度月橋

虹勢截レ流横二兩岸一、一條活路透二清波一、度レ驢度レ馬未レ爲レ足、玉兎三更推レ轂過。

三級巖

分レ危布レ險作二三重一、水激雲遮路不レ通、無レ限金鱗遭二點額一、誰知偏界起二腥風一。

萬松洞

萬株松下一乾坤、翠靄氛氳鎖二洞門一、仙境由來屬二仙客一、莫レ言此地匪二桃源一。

龍門亭

不レ借二巨靈分破拳一、兩山放出一洪川、三更夜半無二來客一、數片歸雲宿二檻前一。

龜頂塔

松生背上綠毛長、頂戴浮圖萬劫祥、戸牖恢開不藏六、重重法界目前彰。

題三塔

雲居古語協眞風、三塔該收萬塔功、落落團團無縫罅、龍蛇混雜在其中。

虎谿

山險澗深人不到、菸菟作隊鬪威獰、三賢攜手過橋後、錯聽水聲爲笑聲。

投機頌

多年掘地覓青天、添得重重礙膺物、一夜暗中颺碌塼、等閑擊碎虛空骨。

將軍府有山林泉流之樂以偈美之

蓬瀛勝槩聚營中、石峙流洄與不窮、好箇優遊嬉戲處、曹溪正脈自流通。

題常在光院（上下兩庵今作一院）

山巒水石獻奇珍、勝地方知屬傑人、下界上方同一境、妙莊嚴外更無塵。

臨川無極和尚雪韻

人人只見不香花、未會紛飛落在何、上等禪和坐堂裏、識神依舊屬陀那。

高山和尚訪西山庵居

幾片白雲橫谷口、不遮道友扣扉來、從前惡跡莫由晦、把手徜徉三兩回。

題友雲庵壁

洞僻巖深晝若曛、一間竹屋半容雲、單丁自有單丁樂、不羨聖賢來作羣。

有僧掘地得佛舍利因索師偈

地中湧出赴機緣、一顆圓光含大千、難測難量奇特事、明明只在钁頭邊。

璞翁西堂見寄韻

彼此隨緣卜別山、同風千里固爲難、楚雲越水無遮障、日夜相逢話老殘。

放牛

鞭繩抛卻任天眞、欄外遨遊不顧人、將謂無由討蹤跡、塵沙刹界現全身、

清溪

攪不渾時無淺深、水天得一碧沈沈、要窮眞箇曹源脈、休向中流兩岸尋、

閒叟

凡聖行儀都不干、騰騰任運似癡頑、這般活計無人識、一箇老翁天地間。

古源

曹溪一滴先威音、流遠方知出處深、可惜今時未還客、外求竺土大仙心。

默翁

默翁求我默翁頌、自語相違笑倒人、不二門中重撿點、維摩也是樺來脣。

中巖

不墮兩邊呈嶮峻、更無差路與人行、空生未解談般若、幸有孤猿叫月明。

玉巖鎌倉殿

峻機光潔非瑚琏、八面玲瓏絕點埃、好是現成般若體、諸天日夜雨花來。

瑞山 三條副將軍

草木呈奇禧氣浮、祥雲靉靆覆峰頭、千巒萬阜推高德、那箇蒼生不受庥。

送榮首座赴長保

親炙多年緣自熟、一朝告別下西州、住山祕訣休求覓、鎡斧元來在手頭。

平山

坦夷寬廣絕高低、七凸八凹歸一齊、最頂不知在何處、元來無路與人躋。

方外

一片閒田無四至、中心樹子也難看、回頭南北東西表、始信從前被眼瞞。

鐵舟

徹頭徹尾自渾鋼、不入洪爐泛大洋、盡謂尋常船舫類、是非海裏錯商量。

絕照

明鏡和臺打破來、瞎驢眼裏不生埃、暗昏昏地家風別、一任燈籠笑口開。

適庵

主人自若展眉峰、椽柱欐梁呈笑容、更有一般和悅處、半窻明月半窻風。

因亂書懷

世途今古幾窮通、萬否千臧歸一空、傀儡棚頭論彼我、蝸牛角上鬪英雄、須知鷸蚌相持處、終

喚閻魔考鞠中、放馬華山待何日、不如頓轡覺城東。

夢窗正覺心宗普濟國師語錄　下　終

我宗無語句、亦無法與人、佛國道漏逗不少。

夢窓國師、夢中驚覺起來便見、三世諸佛無夢說夢、六代祖師無夢說夢、天下老和尚無夢說夢、還知夢窓落處麽、一國之師、三朝所敬、南禪初步、淨智後遷、圓覺重臨、天龍再住、直得炎天飛白雪、陸地產紅蓮、樹頭驚起雙雙魚、石上迸出長長筍、如斯機用豈可測量、設使疎山石頭、也須退身三步始得。

至正二十六年八月

前嘉興天寧楚石道人梵琦謹跋

先國師語要、嘗不許傳于世、故吾徒多藏之而未敢違囑矣、然藤原公德叟居士、乃英烈丈夫、而既身爲門弟子、其機鋒與所存、雖預禪會古之名士輩、未必過也、輙取語本以命梓、且不依所誡亦不令吾徒議之、吾則謂、先師見之尙不過焉、諸方亦必爲勘驗之、但妙葩勉從紀以歲月云。

貞治之四年歲在乙巳五月二十二日

天龍住山門人　春屋妙葩謹書

夢窓正覺心宗普濟國師語錄附錄

西山夜話

師住南禪時、元翁和尚(佛德禪師)謂師云、和尚出叢林來二十餘年、其間動止不定、既迨于十餘箇處、我心中以謂、此豈非勞身障道之因緣乎、近看像法決疑經、佛言、比丘止住莫過三月、若人謗言此比丘動止不定者、必當墮泥犂、從此僻情已破了也、師曰、我不必守其佛制、故爾直以大圓覺爲我伽藍、東去西留、未曾暫離其中、世有多年止住一處者、未必坐一牀上、有時趨東司、有時到後架、有時庭前徘徊、有時山頂眺望、此豈非動止不定乎、然其動止未嘗離此一處故、不謂我身在別處、若轉其有限情以遊無邊境、則何怪之有乎。

有僧謂師、和尚是臨濟下兒孫、而不以本分接人、常講經典者何也、師曰、夫善知識者須是解行相應始得、縱雖相應、若也不得時機、則無益於世矣、余羽毛未具、力量未充、不得其機、不逢其時、寧怪得我乎、今時己眼未明、妙用未備、只以識情學得古人標格、一挨一拶轉轆轆地、乃謂舉揚宗風、看來只是一時風流、學古人體裁則易、得古人利益則難、若夫不顧無其利益徒誇得其體裁者、固非吾所期耳、僧云、若爾則和尚胡爲出主法社談錄講經耶、師曰、造惡業者、寧爲墮泥犂乎、而墮泥犂者只爲業力所牽、故爾、吾未肯求長老之名、而出主法社者、只爲前

生片善所驅故也、然吾亦不必圖閉門自活、且要因行掉臂、是以講經談錄、或令未知因果者知有昇沈、或令未解大乘者解有玄譚、或令未信祖宗者信有此事而已、古人或在路口、施茶湯於旅客、斯乃結衆緣也、吾亦如是、只談佛祖言敎以結衆緣耳、僧云、今時僧俗亦信禪者多、何言不得其機乎、師曰、不道世無禪機、只無與吾針芥相投之機耳、僧曰、鈍根之人、縱雖不悟、直以本分接之、則結緣之分亦可以深、何故弃之乎、師曰、不見道、千鈞之弩不為鼷鼠發機、如來出世間、言長語滿于海藏、何不直示耶、儞宜思之、圓悟禪師曰、先奪其所偏墜、然後示以本分鉗鎚、大慧禪師曰、宗師須備衆生機說法、如擊石火閃電光一著子、是這般根器、方承當得、根器不是處用之、則揠苗矣、僧云、若爾則如來所說、皆是虛語乎、師曰、如是所問、皆非正問、故我前所答、亦非正答、只徇儞情、且弄泥團爾、有人以書呈大慧云、請示公案、慧答曰、聞儞常讀圓覺經、吾所示公案、亦在其中、大慧平生所示公案者、須彌山乾屎橛趙州無字等是也、請看經文、如是公案、在於何處、倘能於此會得、匪啻圓覺、至于千經萬論及世間麤言細語、靡非祖師公案、如來所說、豈謂之虛語也哉、恁麼則寧以講經敎、誘吾而言失于宗師體裁乎、古人云、馬祖百丈以前、多示理致、少示機關、馬祖百丈以來機關多理致少、此亦何之謂乎、謂上古知識無眼故、多示理致耶、謂後來知識無眼故、背先輩以機關接入耶、當知祖師門下、不似座主家法門一尺終一尺、二尺終二尺、只是見機而作通途、變格謂之破家散宅、今時或貴機關、或崇理致、並是不出座主家法門也、世尊言、始從鹿野苑、終至䟦提河、未嘗說一字、且道、是理致耶、是機關耶、若也於此薦得、讚吾也得、毀吾也得。

師每謂徒曰、余年二十受業於建仁、不出堂裏、孜孜參究此事、明年冬下關東、掛錫巨山、有耆宿、諭余云、古人機緣語句、刊之於版、以流通者、無佗只欲令後生勉學因此悟入、而今承虛接響、以爲名韁利鎖之資者多矣、或有自稱道人、不參知識、不看語錄、只管濛濛閒坐者、並是失于禪錄流通之所由者也、世迨澆季、罕有眞知識、苟勵向道志以看禪錄、則古人機緣卽是今人機緣也、安有古今之異哉、余甘其言禪餘歸寮看閱語錄、于茲一山國師、兼住建長圓覺、在其會下、數年晨昏親炙、參決吾家宗脈、自謂、禪門宗旨無所不明也、時復自顧胸中、依前未穩、乃知、從門入者不是家珍、古人云、靈光不昧萬古徽猷、入此門來、莫存知解、我出教門入禪門、所學雖異、知解是同、只麼過時、其豈非昧卻靈光者哉、便以年來所貯骨董袋、悉付丙丁童子、于時佛國禪師住萬壽、余初詣函丈、先伸其所志、佛國歎之乃云、我年十六受業於東福、依止一耆舊、他令我讀禪錄、讀之一行、就問此意如何、他云、宗門語話不似教家所談、故不敢解說、我云、苟不解說、云何知其旨趣、佗云、須是自悟始得、我又問、讀錄積功自然得悟否、佗云、若要悟去、直須自究、我聞斯言、不復讀錄、便歸堂裏打坐、僧侶多來勸我云、少年之人先須學問、一旦道心鮮克有終、老後必有所悔、我不敢動、彌好坐禪、今年已逾六旬、未有所悔也、言已一笑、余聞其激勵、志操彌堅不憚風雨、連日去參、粗有趣向而未有徹底分、深欲晦跡丘壑以究此事、遂出瑞鹿下奧州、卜居於深山、自誓、若不明此事、須與草木俱腐、圓悟心要、大慧書林間錄、置之机上、以爲警策、其外無所蓄也、閒居已閱三霜、見地未成一片、一日忽憶佛國禪師臨別垂誨云、道人若於世出世毫釐有所挾、則不能悟入也、自惟我於世諦曾無所希、然未免挾佛

法以作悟入之障、既知此非、馳求之心自歇、只麼兀爾過時而已、一夜驀地踏翻從前妄想窠窟、方知、佛國所示非虛語也、從此比來、所蓄三部語錄、亦皆付人眼不看書、脇不著席、只守閒閒地經於二十年、老來力衰不耐常坐、又被業風吹、至于住院匡徒、西擂東倒、雖然操履負初志末混塵緣昧本明、斯乃從前常坐不臥之力也、或陞法堂、胡說亂道、或應衆請談錄講經、言雖欠奇、心無所畏、亦是從前弃捐學解之效耳、到此方信、古人道、愈悔愈明若也、悔之又悔、以至無悔、則自家大機大用、不求自得現前、不可得而疑焉。

師又曰、佛光禪師謂佛國云、我見日本兄弟、一生得悟者不可多矣、此國之爲風也、只貴智才不求悟解、是故設有靈根者、博覽內外典籍、深嗜巧僞文章、不遑自究此事、迷中過了一生、固爲可憫、或有一類稱道人者、多是其器量不堪博學强記、故以閒坐爲功業、而不辨眞實向道之心、此類亦非、今生可開悟者、佛國先師爲余說之、余乃問云、若具靈根直下參究者、且置不論、前所謂二類之中、何輩爲優、先師曰、直饒鈍根今生不悟、倘能孜孜捱到臘月三十日、不爲業力所牽、來生出頭來、必當一聞千悟也、若以博學爲業者、不翅虛來閻浮打一遭、亦恐招得來生不如意處。

有僧問師、多積學功以資談柄者、固不足言焉、博覽古語而發智光者、何過之有乎、師曰、中下機根不能直下到家、千聖憫此、且設蘧廬以接之、其蘧廬者儞所謂古語也、若論其益、則經有經師、律有律師、論有論師、何怪禪師乎、古人云、達磨西來不立文字、直指人心、見性成佛、又云、此事若在言句上、一大藏敎豈無言句乎、用祖師西來作什麼、黃檗禪師云、學者若欲成佛、一

切佛法總不用學、唯學無求無著、無求即心不生、無著即心不滅、不生不滅即是佛、八萬四千法門、祇是接引門、不超祖師門下獨作此說、了義大乘亦皆合轍、法華云、我與阿難於空王佛所、同時發菩提心、阿難常樂多聞、我常勤精進、是故我已得成菩提、楞嚴云、阿難見佛悲泣、恨無始來、一向多聞未全道力、圓覺云、末世衆生希望成道、無令求悟、惟益多聞増長我見、縱覽羣籍而發智光、豈得與阿難齊肩哉、與夫學阿難得多聞、曷若學世尊成菩提、余事不獲已、談錄講經、只要令人知佛祖玄旨、不在文字言句之中耳、僧又詰云、宗門雖接最上機、而亦立意句、其中以意句俱到爲勝、爾則有伶利漢、意句並參、有何不可乎、師曰、古人云、未得底人、參句不如參意、到得底人、參意不如參句、爾只知立意句、未知所以立意句、古人又云、句能剗意、意能剗句、意句交馳、爲之可畏、爾還會此語麼、須知本分田地、意句俱不相干、雖然如是、建化門中且論意句、初心學者於情識中、欲參宗師話脈、則自塞路頭、莫由悟入、故云、未得底人參句不如參意、已得悟入者、若未達句、則失卻宗師體裁、不能接人、其貴意句俱到者、豈令初機意句並參之謂者哉、僧云、近來宗師令人看公案、此豈非教初心學者參句耶、師曰、不然、圓悟禪師云、初機乍學爾要參、無捫摸處、先德垂慈、令人看公案、蓋設法繫住其狂思横計、令沈識慮到專一之地、驀然發明、心非外得、向來公案乃敲門瓦子矣、圓悟與麼說話豈欺人哉、當知、先德令人看公案、只要入得自家大解脫門耳、大慧禪師每爲學者、擧似古人話頭、云、莫向意根下卜度、莫向擧起處承當、莫颺在無事甲裏、大慧恁麼擧似、老婆心亦在其中、醫睛術亦在其中、若能與麼提撕、不可謂之參句也、縱坐蒲團上、冥心寂默、苟於語路上作活計、則不是參

意之人也、圓悟云、卽心卽佛已是八字打開、非心非佛重向當陽點破、不尋其言、一直便透方見古人赤心片片、更入佗語言中、則永不透脫、又云、若具大根器、不必看古人言句公案、但只從朝起正卻念、靜卻心、凡所指呼、作爲一番、作爲一番、再更提起審詳看、是箇甚物作爲得如許多、當塵緣中一透、則淸淨無爲道場也、二大老所示、寔是參禪樣子也、今時學人多是於冊子中探得古人話脈、蘊在胸中、代語別語無所滯、一挨一拶得自由、自謂祖師玄旨止如此矣、此乃圓悟所謂狂思橫計之類也。

僧又問云、承虛接響、而自謂悟達者、寔是狂思橫計之人也、若有伶利漢、實得句中眼、寧謂之非悟達者乎、師曰、直饒得句中眼、若未得見地明白者、名曰句到意不到之人、若是承虛接響之流、不足評之、古人云、但得本則莫愁末、見處明白是本也、機鋒穎脫是末也、譬如種樹其根得活、則枝葉花果靡不榮茂、大慧禪師曰、大凡參禪不必有機鋒便言、我是、昔雲蓋智和尚道眼明白、因太守入山、憩談空亭、問、如何是談空亭、智云、只是箇談空亭、太守不喜、遂擧問本慕顒、本云、只將亭說法、何用口談空、太守乃喜遷本住雲蓋、若以本較智則大遠、乃知眞實事不可以機鋒取、寶峰元首座亦有道之士、答話機鋒鈍、覺範號爲元五斗、蓋閉口取氣、炊得五斗米熟方答得一轉語。

僧又問云、文字言句若於學者爲害、何故古來尊宿、各有代語別語拈古頌古而行于世耶、師曰、明眼宗師東語西話以接學者、所示雖異、皆是呼小玉之手段也、若有吾家種草、言外領旨、則宗師言句何害之有乎、然事久成弊、守株刻舟者多矣、因茲宗匠間出而救其弊、謂之通途

變格、亦爲破家散宅、昔圓悟老師住夾山時、爲學者評唱雪竇頌古、名曰碧巖集、佛鑑禪師以書責之、其略云、某昔奉祖峰老師左右、嘗聞其語、儞輩佗後忽爲人天師範者、切宜以此事自勉、某遂銘於心不敢忘、玆聞老兄邇來爲兄弟請益雪竇頌古、有許多擊節、某聞之、不覺洒涕、自謂、高踏之士何至此矣、老兄何不激揚達磨未來時因緣、誘接學者云云、大慧普說中云、先師見佛鑑書、遂已、然有好事者鋟梓行于世矣、後來大慧炬於其版、此乃破家散宅之手段也、一炬之後二百餘年、迨于大元大德年中、有嵎中張明遠、復重刊版以行于世、有號三教老人者、爲之序矣、其始云、或問、碧巖集之成毀孰是乎、曰、皆是也、云云、其序中只陳圓悟成之、大慧毀之、皆有其以而已、此官人亦未知宗師手段不在成毀處、馬祖百丈以前、多示理致、少示機關、馬祖百丈以後、機關多理致少、至于風穴興化、唱彌高和彌峻、亦是通途變格之體裁也、當知、祖師宗旨畢竟、不在理致機關之中、都是呼小玉之手段耳、所以道、會則途中受用、不會則世諦流布、又云、看佛祖言教、如生寃家、始有少分相應、僧云、苟爾則都不看言教、默然過時者可乎、師曰、古云、不可以語言到、不可以寂默通、祖師門下不立文字、其豈喜默惡語哉、只要令人知此事不在語默處耳、倘能透明此事、佛祖言教咸是我屋裏事也、然則要知佛祖言教、切宜放下從前學解機智、就放下處猛烈提撕一則公案、若也有靈根者、不必看公案、亦不墮寂默處、一切時中直下參究、如此之類、並是吾家道人也、向來所說偏爲吾家道人論之、其若宿植浮淺都無道念、只管好於博學者、不是余之所論也、然若於其中、或知因果可怖、以愼行儀、或窺禪門藩籬、以補宗教、則可以流通相似禪、此亦不可弃焉、布袋和尚十無益中云、行學都

絕、僧形無益、蓋是此之謂歟、邇來叢林復有一類、專學外典爲業、不是參意、亦非參句、喚作禪僧則可乎、經論之中處處呵之、既爲佛子而不拘佛制者何也、僧又問、參得句者亦自謂透得西來意旨、如何驗其非參得意者耶、師曰、古人云、達磨西來別無一法傳人、祇是指出人人具足箇箇圓成、與佛祖不移易一絲毫而已、既言人人箇箇與佛祖不移易一絲毫、何容自佗勝劣於其間哉、若有人謂我已悟他未悟、而生慢心、則可以驗知是人未曾參得西來意旨、倘能參得西來意旨者、乃知教門性相事理、禪家理致機關盡是標月指敲門瓦也、今時學人、到處聚頭計較指頭短長、論量瓦子大小而作實法會、此乃語話禪也、寧謂之參得西來意旨者哉、大慧禪師自少行腳、參得語話禪、自謂參禪徹底、三十六歲始知其非、遂逢圓悟老師打破業識團、後來爲衆垂誨、每說其錯以誡學者、可以爲今時學者之針艾矣、若是明眼宗匠垂手爲人、把住放行擒縱殺活如擊石火、似閃電光、謂之活祖手段、亦名翳睛術、永嘉大師云、或是或非人不識、逆行順行天難測、未到這田地、而學其體裁者、匪啻自錯、惹得多少人、以成魔業、不可不愼。

夢窓正覺心宗普濟國師語錄　拾遺

臨川家訓

本寺住持、不可妄請三會院塔主、與門弟宿老相共商量、選其器以任之、門弟之中無其器、則請佗門名勝亦可也、莫傚尋常度弟院之式矣、

其住僧衆須擇其人、莫問自佗門派、安衆多寡宜隨莊園土貢、近來長老或徇人情、或憐弟子不顧常住煩費、安衆過分以致山門衰耗、甚不宜也、古人云、安僧不必多、日用齋粥常敎後手有餘、自然不費力、良哉斯訓、不可不循。

沙彌喝食掛搭莫過五人、十七歲已前、不許做僧。

客僧若非常住僧知己者、不可接之、所接客僧、莫過一宿、或阻風雨、或有事緣而淹留者、當稟住持、不爾則典座不可爲之打飯、古來叢林皆開旦過以接方來、今也宜倣之、雖然世迨澆季、似僧而非僧者多矣、不翅費常住、亦有濫清衆、此乃所以予之接客不敢倣古者也。

兩班莫過十八人、侍者宜請四人、受請之人、固辭若有其謂則可免、無理而辭者、須起單去、居位須經一回、不得容易告退、大刹尙得人不多、矧是小刹乎、雖滿一回、如無交代、則住持懇請而留之、若也固辭及再三則可免、須虛其位以待後來、寮元堂主淨頭聖僧侍者、不可缺人、寮元須係二十臘以上之人、半月半月代而主之、堂主須請寬心耐事哀憐病僧之人、淨頭聖僧侍

者、若無自欲之人、則可係十臘以下之僧、一月爲限輪番而勤焉、若有戒臘少而行年老者、宜免之。十臘以下如不足、則十五臘以下可勸之。

本寺佗山耆舊不論大小、並宜堂裏掛單、禪誦作息與衆無異、或東堂西堂、或老衰不堪起居者、宜隨其意也。

衆僧位次不論耆舊堂僧、宜依戒臘行年之次第也、其中若有東堂西堂及大耆舊、宜在衆僧之上也、梵網經云、先受戒者在前坐、後受戒者在後坐、如來意欲令人尊重戒法、故作此說、然看今時禪流受戒之儀、多是有名無實、少年僧道我是戒臘已經年序、便在老僧上而坐、其言則似梵網之說、其理則失敬老之儀、如來制律、開遮隨時不可堅執、是以予不必用受戒先後、爲位次也、同年之人以戒爲上、同戒之人以年爲上、同年同戒者、宜依掛搭後先、若有十年老於他者、宜在佗上、若其戒十臘先於佗者、其年雖老不可怨焉、予於建化門中且作此說、眞如法界無自無佗、更有何位次也、只要諸人各入無諍三昧、識得無位眞人而已。

遠國莊園公務、須是莊主掌之、於寺邊田地則都寺（或監寺副寺）相共掌之、莊主不可妄請、宜選其人、或請或改、並宜住持與兩班大耆舊及老僧、相共評定不得輕忽、莊園土貢收納時、亦須諸人評定、細計來年齋料及修造之公用、勿令常住致衰弊、住持及知事、不可信意支用、恐招大衆疑怪矣。

山門規矩、須取要而行之、不必倣大叢林矣、今時叢林事于禮數、廢于道行、豈得不失古人立規繩、設禮數之意耶、如其於事上通無事、則禮數繁多、也有何妨、後生勉進不能如此、要須省

萬事而專一行矣、日用勤行法式、具在年中行事。

四時坐禪、唯除浴日坐參、其餘極寒極熱、修正蘭盆時節、亦不可開、若於坐禪時有事可作、則可開之。趙州和尙云、我在南方三十年、除粥飯二時、是雜用心處、趙州寧謂粥飯二時不是正用心處耶、只是言其除粥飯外更不雜餘事耳、此老生而知之人也、然其履踐工夫、猶以如此、矧是自己未明者乎、古德又云、大事未明、當如喪考妣、大事已明、亦當如喪考妣、古人苦口叮嚀、其意豈在令人限日約時、工夫不純乎、上古道人、皆是卜僻洞深巖、居樹下石上、更有何事可作、廢寢忘飡一味存道、百丈建立叢林以來、普請作務其事不少、雖然人人以道聚頭、故辨道工夫、不曾爲事緣所奪、百丈滅後迨于三百年、叢林規繩漸衰、緇流少有慚愧、始有擊版坐禪之儀、謂之四時坐禪、蓋是主法尊宿、曲設方便以誘懈怠者耳、今時後生猶嫌四時坐禪、動則欲令省略、無慚無愧莫甚於此。

臨時祈禱、或順　敕命、或依武命、諸寺院一同勤行、則本寺亦當掛祈禱牌、而致精誠也、其餘或爲寺家、或爲檀越、別作祈禱則不可、每日三時看經誦呪、併爲天下康寧伽藍鎭靜、每日祈禱若無効驗、一時勤行豈有感應乎、祈禱有二、所謂俗塵執心深重故欲祈佛禱神、以持壽福攘災厄、此是世間之祈也、身心道器、不可虛弃、故求三寶諸天之哀憐、以要進道無障、是爲出世之禱也、今見時人信佛法崇神祇、多是世間祈禱耳、僧家又徇世情、爲之祈禱以貪名利、其豈理之所宜哉、師檀俱違道理、佛神奚有哀憐、縱有小利、卻爲失大利之因由、可不愼乎、禪家只須省萬事守本分、乃是報四恩資三有之祈禱也。

法堂不要構之、何則古之叢林、以宗說俱通之人、爲主法者、會下龍象居頭首位、以助住持之化、以故上堂秉拂所益尤多、今時叢林道不及古、大刹長老頭首、尚以難得其人、何況小院乎、若是智眼不明、機辨不具、勞心於相似之閒語、紛念於滑稽之浮華、可謂自欺亦欺人矣、不如住持頭首與衆作息、同參涅槃堂裏禪、若也住持具古人體裁者、不妨端居丈室以接方來、寧謂無法堂乎。

或放曠閒遊、或故往觀聽、或晩出門外、或夜宿佗所、並皆可制、若有要緊之事、當稟住持及維那而去。

不許獨入比丘尼庵及嫠婦家、但除爲佛事受請、直饒赴請、不可無伴而去。

比丘尼及女人、不許非聽法時而入寺來、直饒齋會時節、亦不許於寮舍內令喫茶飯等。

方丈及諸寮緇白、集會喫點心、作茶宴、游談終日、而去甚不宜也、唯除特爲佛事、縱爲佛事設大齋會、點心無過一兩種。

若葷若酒莫使入門、縱爲調藥、亦不可用、縱有俗客、日午以後莫令佗食、寮暇僧亦莫過中而食、若爲療病、要非時食、宜歸延壽堂、僧有二種、謂菩薩僧、聲聞僧、圓頂方袍皆是聲聞僧耳、教中云、釋迦法中無別菩薩僧、蓋由釋迦如來出于濁世、宜以聲聞形而續慧命耳、是故佛赴鹿苑、現比丘形、文殊等大乘菩薩、亦皆剃染、同其形體、一其威儀、法華云、內祕菩薩行外現是聲聞、乃此之謂也、今時禪流、多言大乘行者寧以禁戒束身乎、嗚呼作此說者、大違如來所以令諸弟子同作聲聞形之意也、百丈規繩、豈爲小乘學者設耶、然佛運暨于澆季、具三千威儀、守

八萬細行、誠以爲難、些子敬誡、誰不能守之、若是不能者、宜棄僧形在俗行禪、復有何妨乎。

請暇以五十日爲限、若有遠行不能早歸、則後日歸來、更求挂搭、免與不免、須任住持之意。

寮暇莫過七日、七日以後猶未得安、則可爲病暇、宜在寮將息、不得在佗處。

病暇之人宜在延壽堂、不可在他處、若欲在他處療養、宜請暇去、請暇若過日限、須抽其單、輕安之後更求挂搭、或免或不免、宜任住持意、病中只許非時食、不許喫葷酒等、律院之式、療病不制食五辛、而制非時食、其制意尤有以也、予所制反此、亦有所思、不得怪焉、或服藥用酒噉下、或煎藥少入葱根、則不禁之、其餘宜遵如來寧死不犯之誡、莫謂酒肉五辛、能令人養身延命、俗家長時食之者、未見長生不死之人、僧家爲道養身、非是古聖所制、幸有餘藥可用、而求有罪之藥、是愚之甚者也、人命難保、無病而死者多矣、何況抱病之人乎、莫謂先療病後行道、古人云、苦樂逆順道在其中、須知病惱時節、乃是道之所在而已。

近來叢林諸寮各構小庫裏、其意樂殊不順理、火事亦可怕也、一向制之、僧家宜甘枯淡、無愛鬧熱、縱有來客、氷雪相看也得。

今此伽藍偏依　都督親王大願力、而興成矣、因卜寺後、奉安報恩之塔、其傍又構卵塔、以表開山之儀、中立彌勒堂、充兩塔之昭堂、因號三會院、此皆公界所宜有者也、此外伽藍郭內及菜園裏、莫卓私庵、予於三會院東、構假山水、恐其犯用常住菜園、乃買隣地以代之

守口攝意、勿致鬪諍、僧伽是梵語、此云衆和合、苟以我慢貢高、介懷穢語諍論亂衆、其豈謂之僧伽耶、既是以道聚頭、縱是法譚、如及諍論、則不可翻爲閒事、長無明乎、然彼此同是凡夫、暫

喜瞥嗔難得而禁、如有少紛爭、則住持及首座維那、勸令和合、及于相罵相打、則不論理非兩俱出院。

犯重之僧實與不實未分明、若有衆人一同指目、則莫許共住、長老密誘其人、令起單去、莫出罰牓。

寮舍資具、一切宜從儉約、僧衆衣服、不得華奢、不翅障道、亦恐招賊。

今時僧舍爲防賊難、畜諸兵器、乃是法滅之因緣也、可不愼乎、近來惡賊、匪啻偸僧物、間有奪僧命者、此乃僧畜兵器之所致耳、苟守佛制不貯財寶、卽是防賊之器杖也、只須把佛祖玄樞爲務、莫以世間厄難介懷、倘能如此、諸天善神爲之擁護、何勞自畜器杖、如其放逸無慚、招禍上身、百千兵器、亦無所用矣。

末寺住持亦宜擇其人、本寺長老三會院塔主、幷門弟老僧相共和會而請之、門弟之中無其器、則可請佗門之人、其寺規矩宜準本寺、一朝長老不可自恣而行焉、古者云、千年常住一朝僧思之。末寺者甲州慧林、播州瑞光、阿州補陀等是也。

本寺末寺莫作勝劣之想、要須互相資助以續祖燈、是則予之所祝也、諸方間有以末寺充于本寺莊園、而受用其土貢、因玆末寺致衰落之弊、本寺招互用之尤、彼此無益、不可不愼。

本寺及末寺契券等正文、並宜在三會院、恐其紛失耳。

庫裏法式、書于別紙、故不載于此。

入院之一切宜從略儀、古人入院之法、其儀可則矣、今時不準古法、只以華奢爲式、頻檀越費

常住之弊、從此起也、可不顧乎、入院之時請隣峰尊宿、爲證明是日本樣耳、大唐法式、雖不請人、或有新命知己、爲義來在座下作證明、就請其中宿老、爲白槌之人、其式尤有以也、本寺入院既略法堂之儀、故不可請白槌之人、況復其餘乎。　佛事之式。

先入山門燒香、（可有法語、）次到佛殿燒香禮拜、（可有法語、）次到土地堂祖師堂、（法語略之）次至僧堂掛搭、（古法掛搭之後、至佛殿、今式以順次先至佛殿、）然後入方丈據室、（可有法語、）次再到佛殿、於佛前當爇祝聖香及嗣法香、疇昔百丈禪師創立規繩、雖不備陳、若也遵守、則叢林行事奚有不濟乎、然近來尊宿、別立規矩者多、蓋是隨時垂範、變格導人之故耳、予今略設法度、以作小院之家訓、復何怪哉、客須聽主裁、毋辭依而行焉、其或不然、任君別求如意處而止住去、榑桑震旦世界廣濶、何必在此勞于顰頞乎。

曆應二祀仲夏下澣

夢窓老拙書于三會院詢軒。

發願文

生生世世有恩者、我今悉其報恩德、生生世世結怨者、我今悉其謝寃讎、生生世世無緣者、我今悉其結善緣、各各飜邪歸正路、互相資助證菩提、願我慈悲如觀音、行願如普賢、智慧如文殊、辯說如維摩、願我無難無災、道念堅固、智慧聰明、無有生死、應無所住而生其心、直趣無上菩提、利益一切衆生、我此行願念念相續、無有間斷。

上來所修諸功德、先回向世世生生父母師長親類眷屬、乃至十方世界一切衆、皆遍六道四生苦、同顯五智三密德、次冀某甲從無始以來至今所造諸罪、皆速消、飜生死無常迷、早悟色身實相理、縱今生不開悟、道心彌堅、修行志無怠、智見漸開、魔外障不起、願望皆叶身心共安、臨命終時身無苦、心不亂、直生觀音淨土、親拜大悲尊容、則得六種神通、普遊十方佛土、供養無邊賢聖、成就無盡行願、若又不生淨土、生善人家、受聖流之形、諸不逢災殃、諸不破禁戒、親近善知識、解了無上法、不出三生、早成學道、無捨四攝、長救迷輪、仰願、三寶垂哀愍、諸天加擁護、十方三世一切諸佛至尊菩薩摩訶薩摩訶般若波羅蜜。

夢窓正覺心宗普濟國師語錄附錄　終

國譯禪學大成奥付

昭和五年十月十五日印刷
昭和五年十月廿五日發行

編者　國譯禪學大成編輯所
代表者　宮裡祖泰

發行者　宮下軍平
東京市神田區錦町一丁目十六番地

印刷者　藤本茂人
東京市神田區猿樂町二丁目五番地

印刷所　藤本印刷所
東京市神田區猿樂町二丁目五番地

發行所　二松堂書店
東京市神田區錦町一ノ十六
振替口座東京三四〇九番